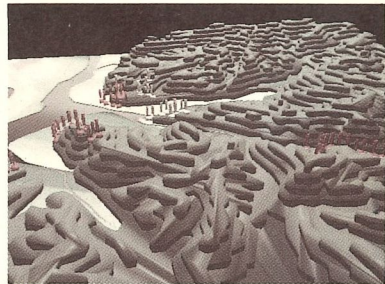
●ビッグマン・スペシャル●歴史人物シリーズ●1
織田信長
●新説検証
桶狭間の奇襲／長篠の決戦
コンピュータ・
グラフィクスによる
戦場再現
●特別対談
信長は二人いたのか?
津本 陽・
小和田哲男
●人間信長
「尾張統一までが
信長の試練」
遠藤周作
その独創と奇行の謎
●徹底解明
「奇行」を推理する

●ビッグマン・スペシャル●歴史人物シリーズ●1
織田信長
●新説検証
桶狭間の奇襲／長篠の決戦
コンピュータ・
グラフィクスによる
戦場再現
●特別対談
信長は二人いたのか?
津本 陽・
小和田哲男
●人間信長
「尾張統一までが
信長の試練」
遠藤周作
その独創と奇行の謎
●徹底解明
「奇行」を推理する
織田信長
その独創と奇行の謎
世界文化社
織田信長　その独創と奇行の謎　ビッグマンスペシャル　歴史人物シリーズ①　一九九一年十二月二十五日発行　〒一〇二東京都千代田区九段北四－二－二九　㈱世界文化社
定価一二〇〇円（本体一一六五円）
雑誌 67681-28 Printed in Japan
KOEI
戦国時代が、ここにある。
織田信長の激動の生涯を、今、ゲームで体験する!!
不朽の名作と名高い「信長の野望」シリーズ。
四作目『武将風雲録』は、安土・桃山の絢爛な文化を取り入れ、
七〇〇名もの武将が全四十八か国を駆ける鮮やかな戦国絵巻。
天下統一の夢は、あなたがその手でかなえる。
信長の野望
武将風雲録
PC-9801VM/UV以降：9,800円/withサウンドウェア（CD付）：12,200円
ファミコン・スーパーファミコン・メガドライブ版 12月21日 発売！
株式会社光栄

織田信長 その独創と奇行の謎

目次

表紙イラスト 横山 明

図説 これが戦国を終わらせた 信長の独創 その才と技術を探る

戦乱の世をまとめあげ、近世の扉をあけた武将・織田信長。彼の戦いはあらゆる面でオリジナルの工夫と発明によって行われたように見える。その独創に着目して、戦国を終わらせた戦いを見直してみた。

ストーリー 波乱万丈！ **信長の戦人生** 三五年の激闘

一四歳の初陣より四九歳で本能寺で没するまで信長の人生はすべてが戦争のために使い果たされたといって過言ではない。苛烈な、しかし、ひたすらな生き方を、味わい深い筆致で生き生きと再現する。

推理 **狂気か天才か** 信長のミステリーを解明する

信長ほど謎の多い武将はいない。ひとつひとつの行動が、まるで暗号のようにみえる。あたかも、後世の人間に挑戦するかのように、謎かけをしているようだ。気鋭の推理作家の筆がその秘密をあかす。

図説 "非常の人"信長の時代探訪 **「奇行」の背景を読む**

信長の「奇行」には、時代を人よりも早く見抜いた人間の刻印がある。世界の動き、日本の動向が、彼には読めていたのだろう。この偉大な英雄の行動を、時代の深層にわけ入り、解明する研究の最前線。

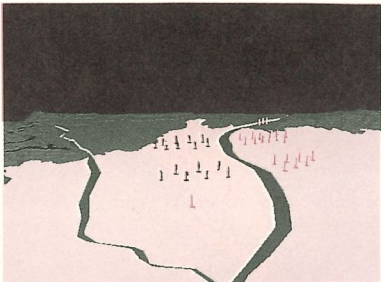
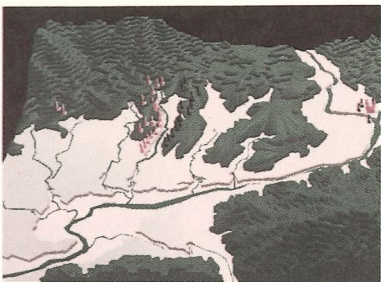
人物物語 織田ルネッサンスの人々

信長・乱世の構図

本文監修 小和田哲男　構成・ヒューマン・プレス

巨大な人物の周囲にいた人々は、その天才を理解できないままに運命を変えられ、あるいは僥倖に浴した。大きな歴史の曲がり角に生まれて、不世出の天才・信長と時代をともにした人々のヒューマン・ヒストリー。

本文中イラスト 木田安彦・谷井建三・小野貴志・綿谷 寛／立体イラスト 福地利治／コンピュータグラフィクス Lilica

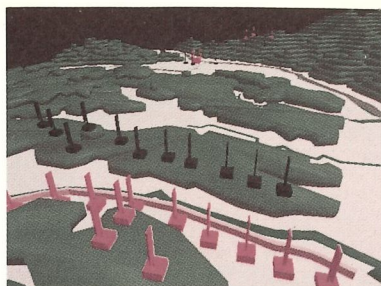
●記事中の写真・図版のキャプションは文責編集部です。

これが戦国を終わらせた！

信長の独創

その才と技術を探る

名だたる武将がひしめく
群雄割拠の戦国を終焉させた
織田信長──。
その"怪人"には、
類まれな戦のセンスと
旧来の価値観を果敢に否定し
新しい秩序を構築する
強い意志が備わっていた。
信長の独創（＝独走）を支えた
新しい「技術」の数々……。

- 情報戦の先駆者
- 専業軍団の創始
- 先進武器のノウハウ
- 最新技術導入の早業
- エコノミック武将の誕生
- 地球人ルネッサンス

独創 1

これが戦国を終わらせた―桶狭間の奇跡を解明する

偶然の勝利ではない! 情報を駆使した「正面奇襲」の成功だ

これまでの常識「迂回奇襲説」の徹底検討を通じて
歴史の闇に隠されていた信長の戦略を
いま生き生きと、鮮やかによみがえらせる注目の新説提示

文・小和田哲男
（静岡大学教授）

■桶狭間"正面奇襲"の布陣

永禄3（1560）年5月12日に駿府を発った今川義元の本隊は19日昼ころ、沓掛城を出て大高城へ向かっていた。すでに善照寺砦にいた信長は義元の本隊を討つために出発した。従来の「迂回奇襲説」では、ここから間道を通り迂回することになっている。しかし、迂回説には充分な根拠がなく、信長本隊は中島砦に向かったと考えるのが正しいようだ。左の状況はその時点のもの。信長が中島砦にいたとき義元は桶狭間の近くを進軍中であったはずである。このとき、おそらく信長は簗田政綱らに命じて敵の情報網を切断していた。そのため義元らへ信長本隊の動きは伝えられず、義元は桶狭間山に陣をすえる。まさに運命の一瞬であった。（左の図は、明治21年の地形図〔小和田氏蔵〕の等高線をトレースし、コンピュータに読みこませ、起伏をつけさせて彩色したもの。このコンピュータ・グラフィクスは、土地の起伏を強調してある）。

■情報戦にたけていた信長

若いころより信長はあちらこちらに出かけていっては商人たちと話をするのが好きだったという。そのため「うつけ」の風評もたった。しかし、それは信長流の情報収集だったのだ。情報重視の態度は、信長の一生を通じて変わらない。「奇襲」とされる桶狭間の戦いも、情報収集と操作による、計算された大胆な試みであった。

信長は迂回してはいない 正面から襲撃した

永禄三（一五六〇）年五月十九日の桶狭間の戦いのとき、今川義元は二万五〇〇〇人の大軍を率いていたといわれる。それに対し、織田信長のその時点における最大動員兵力は、いかに多く見積もったとしても四〇〇〇であった。「兵多きが勝つ」という兵法の大原則からいっても、信長に勝ち目はほとんどなかったといえる。

二万五〇〇〇の敵に四〇〇〇の兵が向かう場合、野戦では絶対に勝ち目はない。籠城するか、奇襲かということになる。ところが、籠城は、後詰といって、味方の兵なり同盟軍が駆けつけてくれるという条件があってはじめて可能な戦法であった。このとき、信長が籠城しても、後詰をしてくれる武将は一人もいなかったのである。

そうなると、道は一つ。奇襲しかなかった。ただ、奇襲は奇襲でも、従来の通説とされている迂回奇襲説には疑問をもっている。迂回奇襲説というのは、信長率いる奇襲部隊が、まず熱田社に集結し、そのあと善照寺砦に入り、そこから相原の北を迂回し、太子ケ根という小高い丘に上り、そこから号令一下、目の下の桶狭間の窪地で昼食休

■計算づくの"賭け"は中島砦から始まった

「義元が桶狭間で休憩中」との情報は、信長が中島砦にいたときに入ってきた。義元が桶狭間にいたとすれば、信長と義元との距離はほんの4～5キロメートル。中島砦で分流する川の上流に義元はいたことになる。左の状況では、信長と義元とは指呼の間にあるように見える。

憩をとっていた今川義元に奇襲をかけ、ついにその首を取ることに成功したというものである。

迂回をして義元側の警戒網をくぐったというわけで、奇襲が成功した要因として、この迂回という行動がかなりのウエートを占めていたということになる。参謀本部編『大日本戦史』以来の通説として、桶狭間の戦いについての記述は、この迂回奇襲説によって書かれてきた。

ところが、実は、桶狭間の戦いに関する史料を丹念に追っていくと、意外なことに、迂回奇襲説は否定されるのである。そのかわり、言葉としてはやや矛盾が感じられないでもないが、正面奇襲という考え方がクローズ・アップされてくる。「正面から攻めたのでは、奇襲とはいえないではないか」という声が聞こえてきそうであるが、史料としての信憑性が高いことで定評のある『信長公記』を忠実に読むかぎり、どうしても、正面からの奇襲だったと断定せざるをえないのである。

『信長公記』から読みとることのできる重要なポイントは二つある。一つは、善照寺砦に入った信長率いる奇襲部隊が、迂回せず、そのまま前進して中島砦に入ったという事実である。『信長公記』には、太子ヶ根という小高い丘に上ったということも、そこから窪地に駆け下りて義元を討ったということもでてこない。これはどうやら、〝狭間〟という地名からうける印象が強烈で、今川義元が、桶狭間という窪地を進み、一列縦隊で山あいの低いところを進軍せざるをえなかったという思いこみから生まれたもののようである。

そして、このことと関係するが、二つめのポイントは、義元の昼食休憩の場所、すなわち、信長に奇襲をかけられた場所が、『信長公記』では「おけはざま山に人馬の息を休めこれあり」となっている点である。つまり、義元は低い窪地で休憩していたのではなく、「おけはざま山」という山の上で休憩していたということが明らかとなってきた。

■正面奇襲か？迂回奇襲か？

これまで桶狭間の戦いにおける信長の行動は、「迂回奇襲」であるとされてきた。すなわち、善照寺砦から信長は迂回し、間道を通って桶狭間の本陣近くにある太子ヶ根に着く。ここから義元の本隊に襲いかかったとされている（模型の赤丸で示された経路）。しかし、この説は『信長公記』にはなく、後の小瀬甫庵の『信長記』になってはじめて「奇襲」であったことが述べられているので、信頼性が薄い。明治時代になって参謀本部が桶狭間の戦いを研究する際、この奇襲説を採用し、迂回路を示したことから「迂回奇襲」は定着したともいう。むしろ、『信長公記』を忠実に読むなら、迂回せずに正面から義元の本隊に近づき、桶狭間山で休息中の本陣を襲ったとみるほうが妥当であろう（模型の白丸で示された経路）。この際には、今川側の情報を混乱させることが必要であったと思われる。

■無念の死——義元のエリート意識

今川義元（1519〜1560）は、今川氏親の五男（三男との説もあり）として生まれた。今川家は駿河の守護の家系であり、足利家の血をひく。戦国時代には、室町時代の守護大名は残り少なくなっていたが、今川家は充分な勢力を東海地方に保っていた。

独創

1 桶狭間の奇跡を解明する

今川義元は小高い丘の上で休息していた

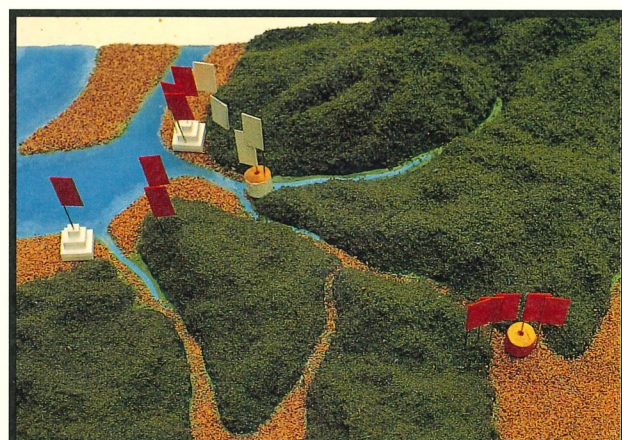
さて、そうなると、問題は「おけはざま山」とはどこかということになる。『信長公記』が「おけはざま山」としているのは桶狭間山であろうが、現在、該当しそうな地域には、桶狭間山という名前をもった山は存在しないのである。桶狭間山という固有名詞をもった山がない以上、当日の義元軍の行動から類推していくしかない。

この日、すなわち永禄三年五月十九日、朝、沓掛城を出発した義元がどこに向かおうとしていたかである。鳴海城に向かおうとしていたとする説もあるが、前日、松平元康（のちの徳川家康）が兵糧などを入れていたことから考えると、大高城だったとみるのが自然だろう。そうなると、沓掛城と大高城の中間点近く、しかも、桶狭間とよばれるあたりで桶狭間山に該当しそうな山をさがせばよいことになる。

豊明市栄町南館の「桶狭間古戦場」の少し南に、標高六四・七メートルの小高い丘がある。現在、そこを桶狭間山とはよんでいないが、桶狭間の戦いのあったころは桶狭間山とよんでいたのではなかろうか。

『信長公記』を忠実に読めば、善照寺砦からまっすぐ中島砦に進んだ奇襲部隊は、そのまま山すそを通って桶狭間山の麓に到着し、一気に山を駆け上って義元軍に奇襲をかけたことになる。太子ヶ根から窪地の義元に攻め下ったのではなく、山すそから桶狭間山の義元めがけて攻め上ったのである。したがってこれは迂回奇襲ではなく、正面奇襲というしかない。

■雨中、駆け上る信長軍

奇襲となれば源義経のひよどり越えのように、上から下に駆け下るのが相場と言いたくなる。しかし、桶狭間のような土地で今川義元が休息をするというのは、軍事の常識からして考えられない。『信長公記』の記述では「おけはざま山に人馬の息を休めこれあり」とあるから、低地ではなく丘の上で休んだことになって、このほうが妥当性が高い。信長は駆け下りたのではなく、駆け上ったのである。

情報が何より大切だと考えていた信長の評価規準

ただ、正面からの奇襲が本当に可能だったか疑問視するむきもあろうかと思われる。「信長は義元の警戒網をいかにしてくぐりぬけたのか」という声が上がってこよう。

実は、この点こそが、信長による奇襲成功のもう一つの重要なカギであった。信長は、沓掛の豪族簗田政綱に諜報活動を行わせていたのである。簗田政綱はこのあたりの地理にくわしく、信長率いる奇襲部隊を巧みに誘導していた。

しかも、義元側の斥候を捕殺して、信長側の行動が義元側にもれないよう、十分の配慮をしていたのである。まさに、信長の情報戦の勝利であった。

戦いが終わったあとの論功行賞で、信長がまっさきに義元に槍をつけた服部小平太でもなく、義元の首を取った毛利新介でもなく、この簗田政綱を一番目に賞したことにも、政綱の役割が決定的な意味をもっていたことを物語っている。

なお、義元休憩地を桶狭間山（標高六四・七メートルの地点）とみることによって、二つある古戦場伝承地の謎も解けるように思われる。奇襲をうけ、大高城に逃げ込もうとした部隊との間に戦いがあったのが田楽坪古戦場（名古屋市緑区有松町大字桶狭間）のほうであり、沓掛城に逃げ戻ろうとした部隊との間に戦いがあったのが桶狭間の古戦場（豊明市栄町南館）であったと考えられるのである。

これが戦国を終わらせた　独創 2　負けない織田軍団の秘密

専業軍隊と独裁が支えた新興勢力・織田10万の帝国

文・二木謙一(国学院大学教授)

農繁期にも戦える集団は負けない軍隊になれる

信長の軍隊はそれまでの戦国武将のものとは違うといわれる。その違いは武器や戦術にももちろん現れているが、見逃せないのが軍隊の構造・組織そのものが違っていたということである。

それまでの戦国大名の軍隊というのは、一般的には武将の一族の者や、譜代の家臣たち、さらに外様衆といわれるような勢力からなっていたが、基本となる兵力は半兵半農のような地侍からなっていた。彼らは戦にもでかけるが、農繁期には農業に従事する人々であった。したがって、武将の多くは農繁期を避け、農閑期に戦をするのが普通であった。

もともと武士は、農村を基盤にしており、土地を耕し耕作を指導しながら、いざ戦争となると武器をとって戦うというのが、それまでの姿だといってよい。それは、平将門の時代からであり、いわゆる武士団というものが発生するころになっても、この性格はなかなか抜けなかったのである。

兵農分離がいっきに加速されるのは、秀吉の時代、刀狩り令や身分統制令が出されてからであるが、戦国時代の末ころにはその兆候がみえだした。信長、秀吉、家康の時代はそれまでの兵農的性格がうすれて、軍隊が専業化していく時代だったといえるのである。

半農半兵の騎馬軍団から、歩兵中心の長槍・鉄砲の軍隊へ
時代は急速に変わりつつあるなか、信長は先駆けとなって
新しい軍隊、新しい兵士、新しい戦法を創り出していった

■武田信玄率いる無敵の騎馬軍団

武田信玄のつくりあげた軍隊は「最強」と称された。その中核は騎兵であり、武田の騎馬隊は無敵であるといわれていた。しかし、組織的には中世的な性格を色濃く残し、その強さが長篠の戦いやその後の戦いでは逆にアダになったといえる。武田にかぎらず、長い間武士は土地とは切りはなせない存在であった。武士は農村に住み、農業の指導にあたり農民たちと暮らしてきた。したがって、戦は農閑期に行うものであり、農繁期には村に帰るのがふつうであった。武田の軍団も農村に立脚し、領地こそが彼らの生きがいであった。武田の領地、甲州・信州はいずれも牧場の多い土地であり、そこで育てられた馬は、武田の騎馬隊を支えていた。

イラスト・小野貴志

■合戦のヌーベルバーグ・織田軍団

織田信長が、いかにして歩兵中心の軍隊組織を思いついたのかは謎である。もちろん信長が天才であったことは確かであろうが、それだけではない。まず、信長のかかえていた軍隊が少なく、どうしても新規採用によって規模を拡大しなくてはならなかったこと。そして、このリクルートによって採用した兵隊は、古いタイプの戦争をさせるにはあまりにも質が低かったことである。もうひとつは、尾張や近畿の兵隊が、東国の武士に比べて弱かったこと。当時も、東国の武士は、西国の武士の３人分などといわれていた。信長が、自分の軍隊を構成してゆくときに、どうしても技術革新に頼る方法に傾いていったのは、素人で弱い軍隊をかかえていたからなのだ。

信長の軍隊は、そうした時代の先駆けであったといえる。この分離の過程は信長が居城を次々と移してゆくことで加速化した。信長は最初、清洲に城を築いたが、尾張を平定し美濃を攻略する段になると居城を小牧に移した。

さらに美濃の国をとると、今度は岐阜に移り、さらに中国地方経略のころには安土に城を築いて、家臣たちもここに住まわせた。

信長の家臣は、信長の居城が移るたびについていったが、もし彼らが土地に縛りつけられた中世的な武士であったらこれは不可能であった。信長が移動するたびに、家臣団の兵農分離はすすんでいったことであろう。

このことによって、信長の軍隊は一年中戦える専業の軍隊となっていった。それまで戦争というものは、耕作の時期はさけるのが普通であった。武田信玄でも上杉謙信でも、かなり頻繁にはげしく戦っているけれども、出兵するのは主として農閑期に限られていた。農繁期に出兵しても、ついてくる豪族たちは農事が気になって、どうしても浮き足立つ。全力を出し切った戦闘はできないであろう。

これに比べて信長の軍隊は、農繁期でも後顧の憂いなく戦うことができた。これは信長の軍隊が戦略上きわめて優位に立つことを意味した。いつでも戦えるとなれば、不利な戦いはさけ、有利に展開する時期を待てばよいからである。

もうひとつ、信長が次々と居城を移すさいに行ったことは、そこに家臣の家族を住まわせたことである。これにともなって城の周辺には城下町が形成された。信長の城の考え方というのは、それまでの武将と異なっていた。たとえば安土城というのは、たんなる城砦ではなく、信長とその家族が住むところであり、城壁をめぐらした軍事要塞であるだけでなく、織田政権の政治組織、いまでいう役所が中に収まっていた。さらに城下町には商業を発展させるために庶民を呼び、そして家臣の家族をも住まわせた。

このことがわかるのは、信長が家族を呼ばない家臣を叱りつけたという記録が残っているからである。福田与一という城下に住む弓衆頭がいたが、この男が天正六(一五七八)年に安土で火事をだした。すると、信長は福田与一を呼んで怒る。お前が妻を岐阜から呼び寄せていないから、不始末をおこしたのだというのである。信長は家族もろとも成敗するぞと脅す。すると、弓衆や御馬廻りなど、一二〇人ほどの家臣が、みな家族を安土に移したと『信長公記』にある。

日本国中で戦う武将たちは今でいえば地方の支社長

信長はこのようにして、常に家臣を戦争に動員できる体制をつくった。そしてそれは、家臣の人質をも手元に置いておくという意味も、あったと思わ

れる。当時ほかの大名たちも配下の部将たちの謀反には神経を尖らせていた。たとえば、上杉謙信などは、戦争で遠征するたびに地侍、家臣から人質をとっていた。
特に冬の長期にわたる出兵のときなどは、人質を城に集めて監視した。天守閣というのは、こうした時に人質を閉じ込めるために使われたといわれる。信長の場合は、城下に家臣と家族を住まわせているので、人質を最初からとっているようなものであったろう。
安土のころになると織田の軍団というのは一〇万ほどにふくれあがっていた。したがって、このころになると一口に織田軍団といっても、いくつかの種類があったことに注意したい。
まずひとつには、柴田勝家、明智光秀、羽柴秀吉、のちには滝川一益など師団長クラスの司令官。たとえば勝家は北陸の支配を命じられて北陸方面の司令官になっている。秀吉は中国方面の司令官。一益は武田を滅ぼしたあとは関東に入る。光秀は畿内周辺にいる師団長といったところであろう。それぞれは、自分の配下の兵をもって駐屯している。いまでいえば、会社の支社長のようなものであろう。

■ここまで考えていた長槍戦術

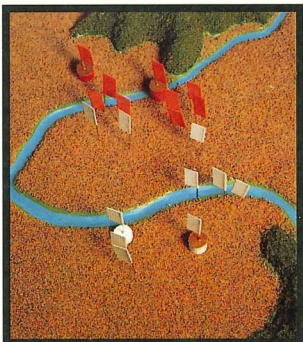
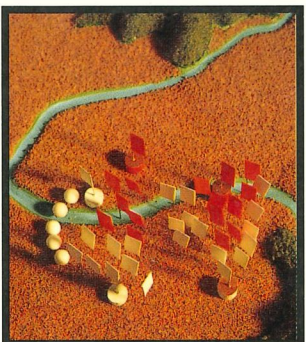
素人集団をすぐにでも実戦に使える兵隊に仕立て上げる必要が信長にはあった。そのためには訓練が短くてすみ、破壊力が大きい武器をもたせることである。信長が採用したのは、五メートルとか六メートルもあるような長い槍の軍隊をつくることである。もし、騎馬隊を育成しようとしたなら、乗馬術からはじまって弓や刀の訓練に五年はかかったことだろう。しかし、長槍なら数か月ですみ、その破壊力も絶大なものがあった。

信長の独裁を支えたのは命令に従わせた与力たち

いっぽう、安土にいるのは信長の直臣団である。
彼らは信長が直接動かせる軍隊組織であるが、じつは行政官でもあった。つまり役人でもあり軍人でもあるような人々が、安土を守っていたわけである。
かつて、信長が清洲にいるころならば、信長を補佐するのは林通勝や平手政秀など家老の役目であった。つまり、後見人として、若い主君を助けたのである。
しかし、安土のころには後見人的な人は必要なくなっていた。信長が社長であるとするなら、安土にいるのはみな本社の社員のようなものであるが、しかも取締役はいなかった。
判断はすべて信長が行い、行政官としては奉行や祐筆すなわち書記官、あとは馬廻りの者、ようするに親衛隊を構成する者たちであった。残るは足軽、中間などで、彼らが八割以上を占めていたようである。
ときおり重役会議が招集され、信長の独裁が師団長が呼びつけられたが、信長の独裁がすべてで、会議といっても命令を伝達するだけのものだったらしい。
また母衣衆といわれる人々もいて、彼らは伝令将校のような役割を担ったようである。
信長の命令を、安土からそれぞれの師団長に伝え、その命令によって各地にいる師団長たちが動いた。興味深いのは、師団長の下には与力とよばれる人々が置かれていたことである。たとえば、柴田勝家には前田利家、金森長近、不破光治、佐々成政などの与力がつけられていた。
与力らは勝家の家来ではない。彼らは信長の命をうけて師団長に配属されているが、師団長は与力の生殺与奪の権まではもっていないのである。軍事行動では一応師団長の命令に従うことになっているが、軍事行動はすべて信長が出しているのであるから、むしろ与力は師団長を監視していたわけである。
この与力だが、たとえば利家、成政、長近などは、母衣衆の出身であった。信長直属の出身であり、だからこそ与力として配属されたのである。もし、司令官たちに裏切り行為や何かがあったなら、たちどころに直接信長に通報される。
これでは裏切りどころか、目茶苦茶に働いてみせて、与力の好印象を得て勤務評定をよくしておかなくてはならなかったであろう。
この与力たちの動きが、一番はっきり出たのが本能寺の変すなわち明智光秀の謀反のときであった。光秀についていた与力は高山右近、筒井順慶、中川清秀、細川藤孝たちであったが、彼らは光秀の命令には従っていない。与力は信長の命令でない限り、師団長には従わないのである。
こうした与力の制度は、後の日本陸軍の参謀に似ている。参謀本部から送られてきた参謀は、本部の意をうけて、軍隊にもついていけば戦艦にも乗っていた。そして作戦の一切を司令官を押さえて行ったわけである。与力も、あらゆる戦場に配属され、信長の意向を実現しようとしたのである。
もうひとつ例をあげておこう。長篠の合戦のさいに、織田・徳川軍は密かに背後の鳶ヶ巣山砦に奇襲をかける作戦を実行に移した。このとき奇襲を行ったのは徳川の部将の酒井忠次であったが、信長は酒井の兵にも軍監として金森長近をつけた。徳川は信長に援軍を頼んでいるが、あくまで関係は同盟者であった。しかし、信長はこの同盟者の軍隊にも自らの参謀をつけることを強要したのであったろう。
信長のつくりあげた組織は、まさに強固な軍事組織であった。それは、直属の将校がすみずみまで派遣され監視されている独裁のための構造である。しかし、それゆえに、織田軍団は一〇万の兵を日本国中に展開することができたのである。

独創 2

負けない織田軍団の秘密

元亀元（1570）年４月20日、信長は３万の軍隊を率いて越前・朝倉攻めに出発した。しかしこの出兵は、４月28日浅井の裏切りにより頓挫する。ただちに岐阜に戻り、信長は６月には再び浅井・朝倉攻めの兵をおこした。６月28日、織田・徳川の連合軍は、姉川の南側の分流をはさんで浅井・朝倉連合軍と対峙した。早朝４時であった。このとき、織田軍は２万5000、徳川は6000。対する浅井軍8000、朝倉１万。戦いは徳川軍の酒井忠次、笠原長忠の隊が朝倉軍に突入して開始された。徳川―朝倉、織田―浅井の戦線が形成されたが、初めのうちは浅井・朝倉の側が優勢だった。織田軍などは、浅井に押しまくられ、窮地におちいっていた。

午後二時ころ　徳川―朝倉戦線での好転を見た織田軍は力づく。徳川に援軍にいっていた稲葉一鉄が浅井戦線に戻ったこともあり、しだいに挽回してゆき、午後二時ころには、織田・徳川の勝利に終わった。

午前一〇時ころ　形勢が変化したのは、徳川―朝倉の戦線からだった。朝倉軍がひるんだのを見るや、家康は榊原康政に側面攻撃を命じた。この側面攻撃が功を奏し、朝倉軍はたちまち総崩れの状態になってゆく。

これが戦国を終わらせた―長篠の戦いの必勝計画

情報・作戦・兵器すべてに優位を保って信長は設楽原に勝頼を誘い込んだ

文・二木謙一
（国学院大学教授）

鮮やかともいえる勝ち方で武田を圧した信長の率いる鉄砲隊の威力。しかし、この時に至るまでの織田軍団の育成には思いもよらない苦労があったのだ。

■天正三（一五七五）年 織田・武田は設楽原に対峙した

長篠の合戦は、設楽原で行われた。きわめて狭隘な地形であり、ここに誘いこんだのは信長の戦略であった。天正三（一五七五）年五月二十一日午前六時、合戦の開始される直前の布陣が下に示されている。織田・徳川連合軍は左方、連子川の手前に馬防柵を設けて並び、対する武田軍は設楽原をはさんで反対側の丘陵に布陣した。そして、じつは前日の夜のうちに、織田・徳川側は、武田側のはるか後方、長篠城の近くに布陣する武田軍に奇襲をかけるべく準備をしていたのである（右手の赤色の旗）。夜中まで降り続いていた雨もやみ、鉄砲の火縄が濡れることを心配していた信長はホッとしたことだろう。前日まで後方の極楽寺にいた信長は、このときにはすでに弾正山の北部まで進んできていた。一方武田軍が設楽原にくつわを並べたのは午前五時ころ。設楽原に入った武田軍は順に横隊の形をとった。午前六時ころ、武田軍の左翼にあった山県昌景の隊が陣太鼓を打ち鳴らし一斉に突進し、戦いははじまった。

長篠城
武田勝頼
織田信長
連子川
豊川
酒井忠次ら

赤：織田・徳川軍
青：武田軍

©Lilica

武田軍より織田側を望む

武田勝頼

徳川家康

織田軍より武田側を望む（上方中央、長篠城）

強くなかったからこそ織田軍は新兵器にたよった

中世の戦闘と近世の戦闘との違いとしてよく指摘されるのは、騎馬による個人戦法から歩兵による集団戦法に変わったということである。

つまり弓矢を主とした騎馬武者による戦いから、数百数千の徒歩の足軽が弓隊・鉄砲隊・槍隊などの集団に編成されて戦うようになる。軍記物にもそれまでは「三百騎」とか「五百騎」とか、騎馬の数で軍隊の規模を表していたのに、戦国時代の末になると「二万」「三万」とかの、総兵力を表す数字が記載されるようになるのである。

この時代、他に先駆けて戦法を変えていったのが織田信長であった。信長の軍隊の基本は早くから歩兵となっていた。中心は長柄の槍を持つ槍隊と鉄砲隊である。織田の軍隊も初めは譜代家臣団が中心であったが、その数は多くても五〇〇〇くらいなもの。どうしても兵を新しく雇って、軍団を強化していく必要に迫られていたと思われる。

武田信玄や上杉謙信の場合には、一門衆、一族衆の、千軍万馬を往来した戦のベテランが部隊を仕切っていた。武田や上杉には、代々の譜代の伝統的な軍隊がいて、しかもそれほど軍隊を拡大していないので、彼らを核にしてゆけば軍団は構成できたのである。

ところが、織田の場合を見てみると、急成長をとげたため、初めの四、五千の軍隊も、十数年で一〇万にもふくれあがっている。この間に次々と補足してゆかなくてはならないのは、武将よりは足軽であった。信長は、木下藤吉郎に見られるように元農民で侍になりたい者や浮浪人、ときには無頼まがいの者も採用したことであろう。

こうしたにわか作りの軍隊が、それだけで強いはずはなく、兵の質はきわめて低かった。しかし、信長の軍隊の戦法というのは、こうした強くない兵を十分に使いこなすものであった。すでに触れたように、信長の軍隊の中心は長槍隊と鉄砲隊である。古い戦をやるなら馬の乗り方から刀、弓の使い方まで、かなりの熟練が必要とされたことだろう。武田のように騎馬戦を得意とするところでは、人並みに使えるようになるまでに五年や一〇年はかかったであろう。だが、長槍や鉄砲はわずかの訓練で使えるようになる。

信長が長槍、鉄砲の戦術を採用したのは、こうした急速な膨張をとげた織田軍団の構造に根ざしていたわけだが、理由として、もうひとつ付け加えることができるかもしれない。それは、信長の基盤とした尾張や近畿の兵が、東国の武士に比べて、最初から弱かったということである。

それまでの歴史を見れば、東国の武士には豪勇の気風があった。古代の防人や衛士のほとんどは東国の兵であっ

たし、中世においても、坂東武士の武勇のほまれは高かった。この点からすれば、信長がにわか仕立ての弱兵を指揮して戦わせるには、長柄の槍と鉄砲という飛び道具しかなかったであろう。

高価で威力に疑問の兵器にとびつく人間は少なかった

さて、信長の新戦術のひとつである長柄の槍は、にわか作りの軍隊にはもってこいだったようだ。三間半槍というから、長さは五、六メートルにもおよぶ。短い槍では、たとえば武田の部将たちならば、それを使いこなして戦えるが、初心者には難しい。ところが、このような長い槍ならば、ただ叩いて、足を払って、突くだけでかなりの破壊力をもたせることができるのである。

木下藤吉郎のエピソードに、藤吉郎が槍の長短の議論から、試合をすることになったというものがある。短い槍を使う者が試合を控えて練習をしているときに、長槍を使う藤吉郎たちは酒を飲んで遊んでいたのに勝ったというのである。これは、藤吉郎の出世譚につきものの作り話だが、事実はこの通りであったろうと思われる。

もうひとつ、鉄砲のほうだが、これに関しては少し説明がいるだろう。

鉄砲が種子島に伝来したというのは天文十二(一五四三)年、信長は天文三年の生まれであるから、一〇歳のころであった。それが、信長が二〇歳のとき、斎藤道三と初めて対面したさいには五〇〇挺の鉄砲を所持していたというのだから、いかに信長が早くから鉄砲に力をいれていたかがわかる。

いっぽう、武田信玄に関して鉄砲の記録がでてくるのは弘治元(一五五五)年になってから。上杉謙信となるとさらに遅い。

信玄は弘治元年に、川中島で三〇〇挺の鉄砲を使ったとされる。当時の鉄砲は、非常に高価なものであるから、そう手に入らなかった。ましてや、大量に買いこみ、それを組織的に使用することに踏み切った者はほとんどいなかったのである。

■7年後、武田氏は滅亡する
武田信勝。天正10(1582)年父とともに自刃する。父の武田勝頼(1546～82)は信玄の四男。母は諏訪頼重の女。よく言われるよう、自信過剰な面もあったが、武将としての力もあった。

■鉄砲の威力を引き出すための馬防柵が工夫された
「馬防柵」は連子川に沿って、20町。およそ二千数百メートルにわたって設置された。5月18日から19日にかけて夜を徹して行われ完成している。前後数百メートルの距離をとり、50メートルほどの長さの柵をいくつも作った。用いた木材は、設楽原にくる前に兵にもたせ運んでいる。写真は復元された馬防柵(新城市役所提供)。

数少ない例外は、根来や雑賀であって、彼らは信長が本願寺と戦ったときに本願寺側につき、二、三千挺の鉄砲でさんざん信長を苦しめたとされている。

しかし、この当時の鉄砲は当然のことながら火縄銃であり、玉込めに二〇秒以上かかった。この欠点を克服して鉄砲の真価を引き出したとされるのが長篠の合戦であった。

長篠の合戦は、天正三(一五七五)年、武田信玄なきあと武田家をついだ子の勝頼と対峙していた徳川家康が、長篠城を包囲されたさいに、盟友・信長に援軍をもとめたことから開始された。

武田軍は一万五〇〇〇。対する織田・徳川連合軍は織田三万、徳川八〇〇〇の合計三万八〇〇〇。戦場になった長篠城西方の設楽原というところは非常に狭隘な地形をもつ。この地に、合計五万余の軍が展開されたのである。このとき織田・徳川は連子川に沿って柵をめぐらした。いわゆる馬防柵と呼ばれるものである。

五月十九日、武田軍は勝頼が強硬に織田・徳川の柵を目がけて突入することを決定した。このとき武田の武将のなかには、勝頼を諫めて攻撃を思い止まるよういった者がいたが、とりあげられなかったという。勝頼は、一年前の天正二年五月には、父・信玄すらも落とせなかった徳川の堅城・高天神城を陥落させていたこともあり、勇みたっていた。

そして五月二十一日、両軍は設楽原で対峙することになった。狭隘な地に丘陵を背景にして作られた柵は、武田側には柵をめぐらして砦を築いたように見えたことであろう。これが、鉄砲を撃つために作られたものと考えるよりは、当時の常識からして、砦の柵であると見るのが普通だった。私はしたがって柵が作られたからといって、武田側に警戒心が生まれなかったのも当然であろうと考える。

だから勝頼は、敵は手段に窮してちぢこまっている有様であるから、一気にかの陣へ突撃して信長・家康を撃破しようと考えた。いっぽう、信長にしてみれば、この馬防柵の前に、なんとかして武田の軍勢をおびき寄せたいと考えたことだろう。『信長公記』によれば、このとき信長が考えたのは、味方の損害を最小限度に食い止めたかったのだという。そこで、鉄砲が使われることになったわけである。

しかし、あの狭隘な土地で鉄砲を使うとなれば、陣地をかまえたらズラッと横に並ぶしかない。いっぽう、反対側に陣取る武田側も横に並ぶしかないのである。火縄銃の有効射程は約二〇〇メートル。この距離は、馬で走れば一二秒ほどであろう。鉄砲の玉の装填には二〇秒以上かかるから、一発撃ったら、次を撃つまでに武田の騎馬は押し寄せて来てしまう。それでは鉄砲の真価は発揮できないことになってしまう。

信長は本願寺攻めのさい、雑賀の鉄砲隊にさんざん苦しめられ、しかも自ら鉄砲で負傷していた。若いころから親し

白:織田・徳川軍 赤:武田軍
昼
本武田勝頼
本織田信長
長篠城

■合戦の前日20日昼ごろの布陣
長篠城を包囲していた武田軍は19日の軍議で決められた部署につくため動きはじめた。設楽原に待つ織田・徳川軍との決戦に向けられる兵は1万2000。右翼に穴山・馬場・真田・土屋・一条、中央に武田信康・内藤・安中ほか、左翼は武田信豊・山県・小笠原・松岡・菅沼・小山田・跡部・甘利・小幡など。武田勝頼はこの時点ではまだ後方(右側)の「有海ノ西方」に陣をしいた。残り3000の兵を長篠城と鳶ヶ巣山砦の守備にあてた。

■織田・徳川軍は密かに奇襲を計画
信長は武田軍の後方を攪乱すべく、鳶ヶ巣山砦を襲う計画を立てた。奇襲するのは徳川の酒井忠次・松平家忠・奥平貞能・菅沼定盈。信長はこれに自らの母衣衆である金森長近をつけた。酒井らは連子川が豊川へ注ぐあたりを通過し、吉川村から松山越えに、そして更に鳶ヶ巣山の篝火のみをたよりに前進した(白い丸の経路)。雨の中の山道は険しく難航をきわめたが、21日午前8時、合戦開始間もないころに砦を急襲した。

んできたこともあり、鉄砲の威力はこのとき、誰にも負けないくらいわかっていたものと思われる。それをさらに効果的に使うことを考え、わざわざ狭い土地を選んで布陣したのは、信長に、策がすでにあったからであろう。

信長考案の鉄砲三段撃ちは柵を三段に設置して実行

信長は、よくいわれるように、鉄砲隊を柵にそって三列に並べ武田の騎馬隊に備えた。玉込めに二〇秒かかっても、三人一組とすると一〇秒ごとに一発の玉を発射することができるから武田の騎馬がやってくる一二秒に、十分対応できる。武田側は馬が設楽原を駆け抜ける間に三回以上も敵の玉に見舞われることになる。命中率も三〇パーセント以上となるから、ほぼ充分な対応ができた。この方法は、おそらく信長自身の考案によるものであろう。

ただし、鉄砲隊が三列になったのは事実にしても、その詳しい方法にしては、実はよくわかっていない。巷間に伝えられているように、三列を順次前後に移動させて一斉射撃を行ったという説に対しては、戦史研究家の間では疑問視する人が多い。つまり、号令によって銃隊を前後に入れ替える西洋式の調練は幕末の高島秋帆が行うまで存在せず、また、もし仮に信長がこうした方法をとっていたら、当然以後の戦争でも利用されたはずだというのである。したがって、この説に従えば、「三段」というのは、柵を三段にしたとも考えられる。馬防柵を三段にして、一段目が突破されたら後ろに引く。さらにそこが突破されたら、また後ろにと移動したのかもしれない。また、あるいは、三人を並ばせ、しゃがんだ格好で玉を装塡し、順次、立ち上がって鉄砲を撃ったのかもしれない。

いずれにせよ、この戦いで武田軍の騎馬軍団一万五〇〇〇は壊滅に近い打撃をうけ、勝頼はほうほうの体で甲府に逃げかえることになるのである。

信長と鉄砲について、さらに付け加えるなら、その入手方法についても触れておくべきであろう。信長はきわめて早い時期に堺をおさえた。はじめは津島の商人を通じて堺の商人から鉄砲を手に入れていたようである。

しかし足利義昭を奉じて上洛したさいに、副将軍の地位をけって、そのかわりに堺を直轄地にする許可を取りつけた。当時の堺は、鉄砲の生産地でもあり、商人たちが盛んに活動していたから、信長は鉄砲のメーカーと商社の両方を手に入れたようなものであった。

■武田の騎馬隊めがけて鉄砲がうなる

次々と押し寄せる武田の騎馬隊に対して、織田・徳川の鉄砲が発射される。有効射程距離は200メートル。武田の騎馬がこの間を駆け抜けるとき、鉄砲は2～3回発射された。当時の戦闘を再現（新城市役所）。

鉄砲の威力の前に、武田家の勇将・山県昌景をはじめとして、武将たちが次々と戦死していった。その様子を目撃した武田勝頼は狼狽（新城市役所）。

■攻め寄せる武田軍は柵の前で倒された

独創 3
長篠の戦いの必勝計画

■長篠の戦いは新旧勢力交替を鮮やかに示す

かつて「最強」と謳われた武田の騎馬軍団は、織田の鉄砲を主体とした歩兵に壊滅的打撃をうけた。信長の作戦の勝利であったが、その帰趨はあまりにも鮮やかであった。柵にそって鉄砲を撃ちはなつ兵士たちは、戦争も新しい時代に入ったことを告げていた。一方、騎馬の武田軍は、じつに生彩がない（大阪城天守閣蔵）。

■時代を変えたニュー・ウェポン

長篠の合戦で使用されたと伝えられる火縄銃。信長は、鉄砲の産地である堺と国友村を支配することで、鉄砲の需給を独占した。それまでは、二次的な武器とみられていたこの新兵器は、長篠の合戦を境に主力武器となってゆく。時代の流れは押しとどめるべくもなかった（長篠城趾史跡保存館）。

のちに堺は、今井宗久の政治的判断もあって、信長に肩入れし、完全にこの町は信長のものになるわけである。

さらに、浅井長政を滅ぼしたあとは近江の国友村も支配下に置くことになる。国友村は、鉄砲鍛冶のもうひとつの中心地であり、この時点で信長は鉄砲生産地のほぼすべてを手中にしたことになる。以後は、ほかの大名が鉄砲を手に入れようとしても、なかなか難しくなる。鍛冶と秘密に交渉するにしても、大量には注文できず、また値段もつり上げられてずいぶんと値の張るものになっていたであろう。

ほかの大名たちが、大量の鉄砲を所持するようになるのは、もうすこし時代がくだって、自分の領地でも鉄砲の生産ができるようになってからである。一六〇〇年の関ヶ原の戦いのころには上杉軍も数千挺の鉄砲をもっていたと伝えられている。このころには、平均して一万の軍隊があれば五〇〇〇挺の鉄砲は備えていたという。長篠の合戦から二五年後のことである。

これが戦国を終わらせた　独創4　鉄甲船が瀬戸内海を制覇

大敗北を生かして建造し不動だった毛利水軍撃破

文・石井謙治（日本海事史学会会長）

天正四（一五七六）年に味わった大敗北を二年後には、まったく新しい発想で逆転する。信長には、限界がないと思わせるほどしなやかで自由な技術革新への意志があった。

戦国の乱世がうながした軍船・安宅船の誕生

水軍というと日本人は勇壮なロマンを感じるようだが、上代から中世を通じて海上戦闘を目的とした近代海軍のような常備軍はなかった。実態はいざという時に平時の輸送船を楫取・水手諸共徴発し、これに武士が乗ったもので、それも兵力移動を目的とし（壇の浦合戦は例外）、軍船技術は未発達のままであった。

したがって水軍が軍船技術を発達させ、組織的な態勢ができたのは一六世紀に入ってからだが、それでも兵力移動の船団護衛が主務であった。しかし戦国の世は数次の海戦の経験で急速に軍船技術を発達させ、戦闘目的に応じた各種の軍船形式が出現して日本水軍史上に大きな画期をもたらした。

こうして出現した各種軍船のうち、最強力で近代海軍の戦艦に相当するものを安宅船と呼び、これを中心に多数の関船・小早など中小の軍船で構成するのが戦国水軍の典型となった。安宅船の語源はほとんどが憶説で、古い史料では「阿武船」と書いているので、暴れ回るという意味の「あたける」からきたとする『嬉遊笑覧』の説あたりが妥当なところであろう。

ところで、安宅船は有力な水軍をもつ戦国大名、たとえば北条・武田・織田・毛利・長曾我部・島津ほかの諸侯が所有した。一般に知られるのは『北条五代記』に「艪五十挺立ノ船、十五間先ヨリ鉄砲ニテ打テドモ貫ケヌ様ニ拵へ、艫舳ヲ椋ノ木ニテ囲ヒ、下ニ水手五十人、上ノ櫓ニ侍五十人居テ、矢狭間ヨリ弓・鉄砲ヲ放ツ様ニ作リ、舳先ニ大鉄砲ヲ仕懸……」とある記述だろう。一応安宅船の概要を描写しているけれど、櫓五〇挺立では五百石積程度なので、千石・二千石積の大安宅船からすれば小安宅と称するものでしかない。

大安宅の出現として明白なのは、天正元（一五七三）年七月織田信長が琵琶湖畔で新造した大船で、『信長公記』には長さ三〇間、幅七間、櫓一〇〇挺立、舳艫に矢蔵を設け、建造は岡部又右衛門が担当したとある。岡部は安土城の天守を造った城大工だから、むしろ船大工が造った船体に矢蔵などの上部艤装の責任者であって、この船大工との分業は近世を通じて軍船建造のパターンとなった。この大安宅船は完成直後に将軍足利義昭の反信長挙兵があり、信長の電撃的な上京作戦に使われたが、当時最大級の安宅船だったとみられる以外技術面はまったく不明である。

なお信長は、天正二（一五七四）年の長嶋の一向宗徒攻めにも九鬼・滝川ら麾下の安宅船を中心とする水軍を使って勝利するなど、陸海の軍事力を随意に使う先見性をもっていた。

■鉄板を張った大安宅船で制海権を奪取

天正6（1578）年11月6日、織田信長は鉄板張りの大安宅船6艘を主力にして毛利水軍に戦いを挑み、撃破した。この大安宅船には防弾用に鉄板が張ってあったといわれ、毛利軍の炮碌・火矢は役に立たなかった。この戦いによって石山本願寺への補給ルートは断たれ、その後の和睦へと急速に進展してゆく。

〔イラスト・谷井建三、考証・石井謙治〕

織田水軍も歯が立たない毛利水軍の海戦術

天正四年七月十三日、織田水軍は大坂木津川口で毛利水軍と戦い、徹底的な敗北を喫した。当時信長は大坂の石山城に拠る一向宗徒を攻めあぐんでいたが、それは反信長派の毛利ら西国大名の海上からの支援のせいでもあった。この海戦は、石山城へ兵糧や兵を補給するための大量の荷船と能島・来島ほかの護衛水軍合わせて、七、八百艘からなる毛利軍と、それを阻止しようとする織田水軍三百余艘のあいだで行われたもので、織田軍は大安宅船を中心とし、毛利軍の護衛水軍（隻数不明）と戦った。結果は毛利軍の村上元吉の注進状に、敵の警固太船（大安宅船）も残らず焼き崩したとある通り、織田軍は炮碌火矢という一種の焼夷弾を使う毛利軍の攻撃の前にあえなく壊滅、石山城救援を成功させてしまった。

しかし信長の偉さは、この敗戦の教訓をつぎの戦いに生かした点にある。いかに大安宅といっても所詮は木造、火には弱い。毛利軍は見事にその弱点をついて勝利した。恐らくつぎの補給作戦も同じ手を使うに違いない。とすれば、燃えない船で炮碌火矢攻撃を無効とさせ、当方は強力な大砲・大鉄砲で敵船を撃破しよう。と、まずはこんな風に考えたのだと思う。そこで九鬼嘉隆に新構想による大安宅船六艘の建造を命じた。もっともこの新構想は実際に戦った嘉隆の発案かもしれないが、そうだとしてもそれを採用した信長の先見性は少しも損なわれるものではない。

この大安宅船は『多聞院日記』に「横へ七間、堅へ十二、三間モ在之、鉄ノ船也。テツハウ（鉄砲）トヲラヌ用意事々敷儀也」とあって、防弾用に鉄板を張ったと伝えているが、これは先の戦訓による防火を兼ねた防弾用（厚さ一分の鉄板は竪木三寸の装甲に匹敵する）なのである。また長さ一二、三間はいかにも短すぎる。仮に横七間を総矢倉の最大幅と見ても伊勢船形式の船体寸法は大体全長一四〇尺、肩幅四〇尺、深さ一二尺程度だから、全長は二一間半（当時一間は六尺五寸）に達するので、誤伝か誤記でし

■毛利水軍の攻略を助けた九鬼嘉隆

九鬼嘉隆（1542〜1600）。もと伊勢国司北畠氏につかえたが、上洛した信長に謁し信長配下に入った。天正4年ころ、信長により鉄板を張った大安宅船の建造を命じられ、伊勢の大湊で試行を繰り返した。同6年には大坂湾に6艘を回航。石山本願寺に兵糧を搬入する毛利水軍を撃破した。のちには豊臣秀吉につかえて、小田原合戦や朝鮮出兵に参加（金剛證寺蔵）。

かない。

実見したヤソ会士オルガンチノの報告でも、日本最大と述べ、同時に多数の大鉄砲のほかに彼の情報を超えた大砲三門の装備には驚嘆、その入手法に首をひねっている。が、これは日本の青銅の鋳造技術からすれば容易な仕事で、鉄砲製作の苦労に比べれば、雲泥の差なのである。

こうして画期的な攻防力を持つ大安宅船は大阪口へ出動する途中で雑貨衆を軽く一蹴して堺に着いた。信長は堺に赴いて新大安宅船を見分し、その出来栄えに満足したのであろう、九鬼嘉隆以下に褒賞を与えている。

天正六年十一月六日、毛利軍は石山城への補給のため六百余艘で木津川口へ進攻した。待ち構えた織田軍は鉄板張り六艘の大安宅を主力に合戦、今度は毛利軍の炮碌火矢は役に立たず、逆に大安宅の大砲の前に完敗し、輸送船団は木津浦へ追い上げられて補給作戦は失敗した。これがその後の石山本願山寺との和睦という実質は信長の勝利に結び付いたが、ともあれ戦訓をすぐ生かす信長の鋭利な頭脳は、戦国武将中群を抜いていたことは確かだといってよいであろう。

独創 4 鉄甲船が瀬戸内海を制覇

■つねに技術革新に大きな関心を払っていた信長

鉄板張りの大安宅船にも示されるように、信長はつねに技術革新に注意を払っていた。まだ珍しかった鉄砲を20歳のときには500挺も買い揃えていたことに始まり、イエズス会の宣教師のもたらす情報を好んだのも技術が目あてだったともいわれる。イノベーターだったのだ。

■じつは信長の存亡をかけた死闘だった石山本願寺との抗争 海上での戦いが決め手だった

天正4（1576)年5月、信長は本願寺討伐のため京都を発ち、6月には石山本願寺包囲網を強化した。同年7月13日、毛利水軍は包囲網を突破しようとし織田水軍と対立。このときの戦いは毛利の圧倒的勝利に終わっている。こののち、信長は毛利の炮碌・火矢の攻撃に対抗するため鉄板付きの船を考案。その船を熊野浦から大坂に回航するさいに、紀州沖にきたとき本願寺側の小舟との戦いになった。が、船団を率いる九鬼嘉隆はこれを撃破。大敗より2年後の7月14日のことであった。同年11月6日、九鬼水軍は毛利水軍をも撃破（大阪城天守閣蔵)。

これが戦国を終わらせた　独創 5　信長の先進的な経済力

豊かな地域を支配した合理性が天下を取らせた

文・加来耕三（作家）

小国の一大名を、天下人に押し上げていったのは彼のもっていた領国の豊かさと合理的な経済センスだった。経済力の前には、どのような軍事国家もかなわなかった。

織田家を継いだ信長の課題は軍事力の強化

一世の風雲児——織田信長は、そう呼ばれるにふさわしい武将であった。

天文二十（一五五一）年、父信秀の急死で、信長が織田家を相続したとき、その所領は尾張国の一部にしか過ぎず、実質、四分の一程度もあったであろうか。それからほぼ三〇年、天正十（一五八二）年六月二日、信長が本能寺で四九年の短い生涯を終えたとき、その支配地は畿内をはじめ、北陸、東海、中部から中国地方の東半分、日本全土のおよそ半分にまで達していた。

信長は、それが己れに課せられた命運であるかのように、ただひたすら、天下統一をめざして邁進したわけだが、それには、強力な軍事力とそれを支える国力＝経済力が不可欠であったことはいうまでもない。

家督を継承した信長の当面の課題は、亡父の残した比較的豊かな地盤を維持し、従前からの軍事力の強化、わけても、その装備と戦闘様式の改良・改善を推進し、尾張一国を平定することであったろう。

信長が父から受け継いだ尾張中南部は、国内きっての商品流通の拠点であったことはよく知られている。父信秀が根拠地とした勝幡は木曽川の下流にあり、肥沃な農地に恵まれ、かつ、近くに伊勢湾交易の要衝・津島という優れた経済基盤を擁していた。

信秀在世のころから、織田家がどのくらい富が潤沢であったかを示す格好の例がある。天文十年、信秀は外宮仮殿造営費として、四〇〇〇貫もの大金を朝廷に献じたが、その二年後にも前関白太政大臣・近衛稙家の仲介で、再度、皇居修理費として同額を献上し世間を驚かせている。ちなみに四〇〇〇貫は、現在の貨幣価値に換算すると約二億円に相当した。

「不思議の大営か」

奈良興福寺塔頭・多聞院の僧英俊は、信秀のいく度にもわたる多額の献金をそう書き留めている。信秀の財力が京、大阪辺りにまで知られていた証左といえよう。

天文二十二年、すなわち、信秀が没して二年後、信長は二〇歳で岳父にあたる美濃国の斎藤道三と、尾張中島郡富田の正徳寺で初めて対面した。このおり信長は、五〇〇挺もの鉄砲を携行し、梟雄・道三をして、

「山城（道三）が子、たわけ（信長）が門外に馬を繋ぐべき事、案の内にて候」

と嘆いた話は有名である。これなど

■信長の発した楽市楽座札

信長の経済感覚はするどかった。彼は産業と流通を支配していた「座」の特権を解放し、また市を開くさいの役銭を撤廃した。さらにまた交通・流通をさかんにするため、関所をつぎつぎと廃していった。写真は永禄10（1567）年美濃・加納にあてて、信長の領内自由往来を認めた制札（岐阜市神田町6 円徳寺蔵)。

も、信秀の遺した富があったればこそ、可能であったといえよう。

副将軍の地位より堺・大津・草津が大事

信長は父の死後、

「銭で足軽を雇うこと」

をしきりとやった。そして尾張半国の制圧に当面の精力をつぎこむのだが、それはまた、とりもなおさず信長の富力を増やすことにつながり、豊かな資力はいつどこへでも出撃できる、新たな軍事組織の創設を容易にした。つまり、兵農未分離のままであった戦闘集団を、〝専属家臣団〟――農耕にかかわりなく長期に闘い続けられる、軍事組織――の編成を可能にしたわけだ。

こうして、天文二十三年に尾張半国を領有した信長は、以降、桶狭間において今川義元を破り、続いて念願の美濃を平定すると、永禄十（一五六七）年、同地の加納に〝楽市〟の令を発した。これはのちの安土築城後の城下町においても、その繁栄をはかるため、

「当所中、楽市として仰せ付けられるの上は、諸座諸役・諸公事等悉く免許の事」（「定　安土山下町中」）

とした楽市楽座の宣言にもつながるものであった。楽市楽座は所定の場所代さえ納入すれば、自由に営業のできる市場――寺社や公家などによる、独占的販売権の否定――は、当然のことながら商品経済をより活発化し、町の繁栄をもたらした。

信長はさらに美濃・近江・伊勢・北陸にも楽市楽座を設けたが、これらが織田家に莫大な収入をもたらしたことはいうまでもあるまい。

永禄十一年、信長は三五歳で足利義昭を奉じて上洛。恩義を感じた義昭が、副将軍か管領に任じようとしたが、信長はこれを辞退すると、

「それよりも、堺、大津、草津に代官を置かせていただきたい」

と願い出た。堺はいわずと知れた南蛮貿易の一大拠点。大津は琵琶湖の南の宿場で、湖港として栄える地である。草津は中山道と東海道の分岐点にあたる、商品流通の要衝の地であった。

信長はこの三大商業地を直轄領とすることで、〝金〟と〝情報〟の集中する場所を独占したのである。

形骸化してしまったにひとしい、副将軍や管領といった古い権威よりも、これら商業都市の支配権、課税権を掌握することのほうが、とりもなおさず、目標の天下布武達成に欠かせない、と信長は判断していた訳だ。

■南蛮との交流が大きな刺激だった

イエズス会の宣教師たちは布教のために日本にやってきたが、これは同時に貿易と結びついていた。信長は、宣教師たちと接触することによって多くのアイディアを彼らから得たことだろう。築城や都市計画のなかにも、それは反映されている。また、めずらしい文物をもたらす「南蛮貿易」にも、当然ながら強い関心を示した。当時世界は、大航海時代に入っており、信長の視界の拡大も、南蛮貿易による刺激が大きかった。

鉄砲を買い込んだ資金力はどこから出た

この時代、上杉謙信や武田信玄、あるいは北条氏政ら多くの戦国大名が、主として農業を経済基盤としていたにもかかわらず、信長は農業以上に〝利〟を生む〝商業〟の、新しい世界に、はやくも着目していたのであった。

信長は堺に代官を置くと、ただちに堺の南北両庄に二万貫の矢銭（軍事費）を課した。堺衆がこれを拒否すると「堺を焼き払う」と恫喝、堺を支配していた旧勢力を一掃し、新興の豪商たちを味方につけ、この貿易都市を完全にわがものとした。

当時の堺は、南蛮貿易により莫大な富を抱える日本屈指の商業都市。加えて、日本最大の鉄砲の生産地であり、

独創

5 信長の先進的な経済力

鉄砲には欠かせない火薬の原料の硝石を輸入する港でもあった。

堺を手中にした信長の経済力は、諸国のどの大名たちよりも強力となったに違いない。

さて、信長が天下統一をすすめる上で、戦闘集団の装備を重視したことは先にも少しふれた。この時代、最新の兵器といえば鉄砲であったが、信長はこの鉄砲をふんだんに使用して諸国での合戦に勝利し、天下制覇の道を驀進している。

わけても有名なのが、武田勝頼の騎馬軍団と戦った長篠の合戦だが、このおり信長は三〇〇〇挺もの鉄砲をもって、三段撃ちの新戦法で武田氏を滅亡へ追い込んだと喧伝されてきた。

ついでに話すと、鉄砲がポルトガル人によって種子島にもたらされたとき、ときの領主種子島時尭は、二〇〇〇両を費やしてポルトガル人から、二挺の鉄砲を買い求めたという。

このころ、一両は金四・四匁（一六・五グラム）、一グラムをかりに七〇〇円の相場として、二〇〇〇両は約三三キログラムとなり、ほぼ二三一〇万円。鉄砲一挺が一一五五万円であったことになる。

それが約三〇年を経た長篠の合戦（天正三年）のころは、国産化と大量生産がすすみ、一挺が約六〇万円から四〇万円くらいになったものの、それにしてもやはり高価であることに違いはなかった。

信長が三〇〇〇挺もの鉄砲を保有していた時分に、上杉謙信は三〇〇挺しかもっていない。この差はなによりも、明らかに信長の経済的優位性を物語っている。

経済力は合理性ゆえに生まれることを理解

いまひとつ、信長は堺を手中にしたとはいえ、自身が経営することはなかった。今井宗久をはじめとする豪商＝会合衆たちを巧みに使い、堺から多大の軍資金を引き出すとともに、堺の経済力を自身の背景にしようとした。

後に豊臣秀吉は堺の経済を破壊しつくすと、九州博多の豪商に乗りかえたが、信長はむしろ、堺衆と協調する姿勢をとり富を生み出すべき政策もおこなっている。

今井宗久を五か庄の代官に任じたり、生野銀山の開発にあたらせたのも、そうした政策のひとつであり、また、それによって尽きることなく富を手に入れ、あるいは、大量の鉄砲・弾薬なども調達可能としたのである。

戦国武将の中にあって、経済力＝力とする合理主義を見事に実践したからこそ、信長は天下人を目前にすることができたともいえる。

■信長のパワーの源泉は圧倒的な経済力

「最強」を誇った武田軍も、信長には勝てなかった。たとえ信玄が長生きしていても、武田軍が織田を押さえて日本国中に軍隊を送り出すことは不可能だった。経済力に差があったからである。この図は、太閤検地時代の石高をもとに、信長が治めた地域の経済力を比較したものだが、尾張・美濃・近江などの地域を早い時期に押さえた信長が、いかに経済力において勝っていたかがわかる。全国に兵力を送り続けるには、これほどの経済力が必要であったということにもなるだろうか。当時の日本の経済中心地を押さえた信長はすでにして無敵だったのだ。

803万石
織田信長統一支配 石高ベスト7
近江 78万石
伊勢 57万石
尾張 57万石
美濃 54万石
大和 45万石
越前 45万石
信濃 41万石
信長が治めた地域
167万石
67万石
53万石
50万石
42万石
39万石
39万石
38万石
陸奥
武蔵
常陸
上野
豊後
越後
下総
上総

独創 6

これが戦国を終わらせた―海外情報を貪欲につかむ

はるか遠くの国々のルネッサンスの息吹を信長は存分に吸収した

宣教師を通して、信長は南蛮文化を貪欲に取り入れた唯一の武将である。この時代、ひとり利益を得たものがあるとすれば、諸々の海外情報を詰め込んだ信長だけだった。

文・加来耕三（作家）

■信長所用の南蛮帽子

信長は南蛮帽子を好んだ。永禄12（1569）年、フロイスが献上品として持ってきた鏡など4品の中から、信長は黒いビロードの帽子だけを受け取っているほどだ（写真は中山千代『日本婦人洋装史』吉川弘文館より）。

信長がとくに好んだヨーロッパの話題

ヨーロッパの海外進出――一般にいわれる〝大航海時代〟は、そもそも、ベネチアの商人マルコ＝ポーロが、二五年にわたる海外旅行についてまとめた、『東方見聞録』に触発されるところが多かったといわれる。

「シナの沖合いにジパングと称する国があり、その国には黄金がふんだんに産出する」

といった言を、当時のヨーロッパ人は信じていたのである。

そしてジパングを求めてはじまった〝大航海〟は、多大の困難と犠牲を払いながら、天文十二（一五四三）年八月、ポルトガル人の種子島漂着となって実現した。

それから六年後に日本へやってきたのが、宣教師のフランシスコ＝ザビエルであった。天文十八年の夏、嬉々として日本へ上陸したザビエルは、京都まで足を運んだものの、戦乱の中、朝廷や将軍家に会うことができず、目的とした布教のための許可状も得られなかったようだ。約二か年半の日本滞在ののち、インドへ旅立っている。

この時期、織田信長はようやく一八歳。父信秀の病死後、家督を継いだばかりであった。

その信長が、イエズス会のルイス＝フロイスと初めて会うのが、永禄十二（一五六九）年四月――フロイスの『日本史』によると、以降記録にとどめただけで、信長とは一八回も会っている。よほど、フロイスを気に入ったのであろう。

フロイスはすでに入信していた高山飛騨守（右近の父）の協力を得て、信長の家臣和田惟政に近づいた。惟政の斡旋が効を奏し、フロイスは修道士ロレンソを伴うと、四月三日、京都へ入り、工事中の二条城で信長と言葉を交わしたのであった。

「齢はいくつか」

信長の第一声であった。実はこの前日、信長はフロイスを遠望しただけで、食事をとらせてから帰している。そのあとで佐久間信盛から、なぜ言葉をおかけにならなかったのですか、と問われて信長は、

「幾千里もの遠国から来た異国人を、どのように迎えればよいか判らなかったのだ」

と答えたという。さしもの信長も日本人に接するのと違い、些少の戸惑いがあったのだろう。二条城での会見で信長は、いくつかの質問をおこなったが、とくに、

「わが国でデウスの教えが広まらぬときは、インドへ戻るのか」

と聞き、フロイスの、

「ただ一人の信者しかいなくとも、いずれかの司祭がその者の世話のため、生涯をこの地に留めるでしょう」

との答えには、非常に感銘したという。信長はフロイスの言葉に、日本の僧侶にはない潔さを感じたようだ。のちにフロイスに保護状を何の見返りも求めずに与えているが、一方で、群衆のなかにいた仏僧を指さし、

「彼らは民衆を欺き、己れを偽り、虚言を好み傲慢、僭越である」

と大声で非難したという。

元亀元（一五七〇）年、イタリア人宣教師ニエッキ＝ソルド、オルガンチノが日本へやってきた。のちに荒木村重が信長に謀反したおり、高山右近を説得し、翻意させた人物である。

この頃になると信長はフロイスを再三、召し出してはヨーロッパやインドの国情、天然現象のこと、隆盛をきわめつつあったルネッサンスなどについて、地球儀や天体儀を手許に詳細に質問し、一回の接見が数時間に及ぶことも珍しくなかった。

この時代にただ一人ルネッサンスを知った男

天正四（一五七六）年二月、信長は安土に本拠を移した。それから間もなくフロイスは転勤で去ったが、信長は後任のオルガンチノにも、フロイスに変わらぬ好意を示し続け、翌年七月に

TYPVS ORBIS TERRARVM.

QVID EI POTEST VIDERI MAGNVM IN REBVS HVMANIS, CVI AETERNITAS OMNIS, TOTIVSQVE MVNDI NOTA SIT MAGNITVDO. CICERO:

■1587年当時の世界地図

15世紀から16世紀にかけて、ヨーロッパの人々は次々と未知の世界へ旅立ち、新たな発見を積み重ねている。そして未知の国としてジパングがあった。その日本の種子島にポルトガル人が漂着したのが1543年。そのとき信長は10歳。元服の3年前である。信長はその類まれなグローバル感覚で、その後、南蛮の文化を急速に吸収するのだ。

は堺で自身の建造した大型軍艦を見学させたり、天正八年八月、安土城完成後には城内を披露し、安土に教会を建てることも許可している。

日本巡察使として来日したサンドロ＝ヴァリニャーノは、このように高揚期を迎えた天正九年二月、京都の信長を訪問したが、信長の好意的態度はいぜんかわっていない。このおりである。信長ははじめて黒人なるものと接した。謁見の場所は、信長の宿舎であった本能寺。『信長公記』には、この黒人の第一報を、

「キリシタン国より黒坊主参り候」

と記している。むろん、黒人にたいする知識は、当時の日本人には皆無であった。

信長は黒人の肌の黒色を疑って洗わせたが、肌はかえって黒く輝いたという。

独創

海外情報を貪欲につかむ

■南蛮屛風（唐招提寺）

信長と南蛮文化との交流は、主にルイス・フロイスをはじめとする宣教師を通じて行われた。フロイスとはじめて会ったとき信長は、年齢はいくつか、ポルトガルとどれくらい離れているのか、日本に来てどれくらいたつのか……など、さまざまな質問を、まるで子供のような好奇心で投げかけている。

この黒人は千人力の持ち主で、芸も達者、片言ながら日本語も喋れたから、信長はすっかり気に入り、ヴァリニャーノに黒人を所望した。信長はこの黒人を「ヤスケ」と命名した。

フロイスの宣教師のために書いた日本ガイドブック『日欧文化比較』によれば、

「ヨーロッパでは従者が主人の衣服を着て随行することはない。日本の殿は威勢のために、衣服と鍍金した刀とを従者に貸与する」

とある。信長は「ヤスケ」を着飾らせ、武田勝頼を討つ甲州攻めにも伴った。

「ヤスケ」は半年後の本能寺ノ変で、光秀方の捕虜となりやがて解き放たれたようだが、その後の消息は杳として知れなかった。

ところで、『東方見聞録』が醸成した〝大航海時代〟は、他の国々と同様に肝心のジパング＝日本においては、布教という手段による侵略目的をもって結実するはずであったが、ついにそれは成功しなかった。

ヴァリニャーノにしても、日本国でのイエズス会内部、ポルトガル人宣教師とイタリア人宣教師との間で布教方針をめぐっての対立が起き、思うような成果を上げることができなかったようだ。

そればかりかイエズス会は、信長死後の秀吉に、為政者としてのかわらぬ好意を期待し、所期の目的を果たそうとするのだが、これもまた、突然のキリシタン追放令のもとで困惑する事態を繰り返して終わる。

ふと思うのだが、この時代、ひとり利益を得た者があるとすれば、それはルネッサンスに接し世界の新風を感得し、諸々の海外知識＝情報をつめ込んだ信長のみであったかも知れない。その意味で信長は、本能寺で横死したとはいえ、幸せ者であったといえる。

残念なことに、秀吉はこのルネッサンスの息吹にふれることはなかった。

信長の戦人生

波乱万丈!

詳細ストーリー

織田信長の合戦は、
奇襲といわれる〝意外性〟と
数の力によって必勝を期した〝正統性〟が
うまくミックスして成り立っている。
新戦略、新技術を駆使し
つねに天下統一への局面を打開してきた
信長の戦人生をたどる。

尾張国の運命は情報収集のすえの決断にかかっていた

尾張の那古野城に織田信秀の嫡男として生まれた信長は、一族のものとの骨肉の争いを繰り返し、ついに尾張国内の統一を成し遂げる。永禄二（一五五九）年ころのことであった。しかし、翌年には東海の雄・今川義元が上洛を目指して動きはじめ、尾張を危機に落とし入れた。大国に併呑されるか否かの瀬戸際で、信長は勝負に出た。

光瀬龍
（作家）

戦国大名のなかでも超一流の家柄を誇る今川がついに動き出した

永禄三年。一五六〇年。五月十二日。駿河、遠江、三河を領する戦国大名の雄、今川義元は二万五〇〇〇の大軍をひきいて駿府を発った。目的は上洛である。

今川氏は、八幡太郎義家の孫、足利義康を祖とする。義康の兄義重は新田氏の祖である。

義康から義兼、義氏と続き、義氏の長子である長氏は吉良氏を名乗ったが、この長氏の次子国氏は今川氏を名乗り、これが直接の祖となる。九代目が義元である。

長氏の弟の泰氏には斯波氏の祖である家氏、渋川氏の祖である義顕。石堂氏の祖の頼茂、一色氏の祖、公深。そして足利宗家を継ぐ頼氏らの子があった。

これでわかるように、今川氏は数有る戦国大名の中でも超一流の名門であり、相模の北条氏康や美濃の斎藤道三、尾張の織田信長らはむろんのこと、甲斐の武田信玄、越前の朝倉義景らよりも一頭抜きん出た家柄であった。そして今川氏は南北朝の争乱期にはつねに幕府側にあって戦った。北朝方の武将として知られた今川了俊は同族である。歌人でもあり、『難太平記』や多くの歌論をあらわした文人了俊を輩出したように、今川氏は文化的にもつねに高い水準にあった。

今川氏は南北朝期に遠江、駿河の両守護職を得、さらに戦国期になって三河も加え、堂々たる戦国大名となった。尾張の国人、織田氏出身の信長や、岡崎の地侍出身の家康など歯牙にもかけないプライドや実力の所有者であった。

そもそも織田氏の尾張、斉藤氏の美濃、朝倉氏の越前、北条氏の相模といったところで、その農業生産物の収穫量は駿河、遠江、三河などの足元にも及ばない。農業技術の未発達な時代にあっては、自然環境のよし悪しが農業生産の絶対量の決定的条件となる。

気候が温暖であり、河川の多い大平野がひろがる東海地方は当時すでに全国一の米作地帯であった。加えて豊富な海産物や塩の生産は経済的にも比類のない力を今川氏にもたらしていた。

それゆえ、上洛にあたっての義元ひきいる軍勢は、『信長公記』によれば四万五〇〇〇。『徳川実紀』によれば四万。『治世元記』も同じく四万と記している。

当時は武士といい兵といってもありようは農民であり、旗本や側近といっても実際には多くの農民をかかえる大地主つまり農業経営者である。後代の専従武士ではない。

四万五〇〇〇の専従武士といえばこれは大変な兵力だが、戦国時代にあっては、兵とは農閑期を利用して鋤や鍬を刀や槍に持ちかえさせただけの武装農民である。戦国時代までは戦いはすべて農閑期に行なわれた。後年、信長によって専従武士団が生まれても、大兵力を必要とする大作戦は農繁期を避けなければならなかった。また専従武士団なるものが誕生しても、それは軍の中核や主君の親衛隊を形成する程度で、季節や作戦の規模と無関係に行動できるという力は持っていなかった。

このとき、今川義元は遠征に数万の兵力を動かす強大な力があった

駿河、遠江、三河を領する今川義元にとって、農民兵四万ないし四万五〇〇〇を動員することはさして難しいことではない。だが出兵の五月という時期は農繁期のただ中である。農村では一人でも労働力のほしい時期だ。加えて相模の北条氏、甲斐の武田氏に対する備えも必要である。北条氏や武田氏に対しては同盟を結んでいたが、いざとなれば同盟の破約など日常茶飯事の戦国時代である。この方面に対する備えは一万あるいは一万五〇〇〇は必要である。これは自分が国を留守にしている間に、北条氏や武田氏が侵入してきた場合、自分が大軍をひきいて反転、故国に帰ってくるまでの間、戦線を支えるのに必要な兵力である。

●織田・今川の勢力図（桶狭間の戦いの直前）●

東海地方要図

岩崎城　品野城　広瀬　清洲城　守山城　那古野城　寺部　尾張　大高城　桶狭間　足助川　三河　上野城　刈谷城　大樹寺　岡崎城　安祥城　小豆坂　大浜　矢作川　豊川　小坂井　吉田城　牟呂　塩見坂　田原城　遠江　天龍川　三方原　浜松城　掛川城　駿河　駿府城　大井川

今川義元は西上の軍を起こすに先だって、武田および北条との同盟を成立させ、後顧の憂いをなくした。そして永禄3（1560）年5月10日、先鋒隊が駿府（静岡市）にある今川館を出発。2日後の5月12日、義元本隊がいよいよ出陣、同日は藤枝、翌13日には掛川城に進んだ。旧暦の5月中旬といえば、梅雨の季節。義元の軍も、何度も雨にふられたはずである。5月16日には岡崎城に、18日には三河・尾張の国境である境川を越えて尾張に侵入。この日、織田信長は清洲城にいた。信長が「人間50年、下天のうちを……」と幸若舞を舞って出陣するのは5月19日午前4時ころとされる。決戦の時は、まさに間近に迫っていた……。

したがって筆者は義元がひきいて出発した兵力は二万五〇〇〇から三万強といったところであろうと思う。

上洛といったところで、ただ京都へ上って、これからは天下は自分のものだ。自分が日本国を統べるのだと声高に宣言したとて、それだけでは何の意味もない。他者がそれを認めてくれるならともかく、認めることは風下に立つことだから当然反発する。従わない者をすべて平定して否応なしに認めさせるのだから、有り様はサル山のボスの地位をめぐってのサル同士のけんかと変りないが、上洛した大名はただちに天皇を戴いて然るべき官位を得、諸国の大名に上洛を命じ、臣従を誓わせる。従わない者は賊となる。りくつはそうだが、当然「あいつがなるぐらいならこのおれが」とか、「あいつに頭など下げられるか」という者があらわれてくる。それらの者たちを片端から平らげてはじめてその地位が安定する。

今川義元の場合、上洛そのものを阻止しようとするのは、北条、武田、斎藤、浅井、朝倉、六角らの諸大名だが、恐ろしいのは背後の北条や武田で、正面では浅井、朝倉の連合軍ぐらいで、丹波の波多野や播磨の別所、大和の筒井などはたいした戦力は持っていない。また毛利や長宗我部、島津などは遠いので当面は考えなくともよい。

後の元亀三（一五七二）年、武田信玄が上洛を意図して甲州を進発した時、引き具した軍勢は三万五〇〇〇であり、別に先手として山県昌景が五千余を従えていた。合わせて四万である。また慶長五（一六〇〇）年の関ケ原合戦で、東西両軍がそれぞれ数万の兵を集めていることから考えると、義元の上洛軍

の兵力はさすがというべきであろう。上洛後、与力するであろう諸大名の兵力をも加えて考えると、天下を握るのに十分な軍勢であった。

義元には確たる成算があったことであろう。

武田、北条との和睦が成立 着々と準備を続けた今川勢は織田領に侵攻した

天文二十三（一五五四）年。甲州、相模、駿河の三国間の和睦が成立した。武田、北条、今川三氏のこの攻守同盟は三者にそれぞれ絶大な利益をもたらした。特に今川義元は後方の憂いが消え、上洛計画を実現することができた。

義元は上洛軍を起す数年前から、織田領へ小規模な侵攻をくり返していた。すなわち弘治元（一五五五）年には、義元は水軍をもって海上から蟹江城を襲い、占領した。永禄元（一五五八）年には今川方の部将松平勘四郎家次が旧織田領内の品野城を奪って立て籠り、奪還を図る信長勢を破って五十余人を討ち取った。また織田信長の家臣で鳴海城の城主である山口左馬助教継を味方に引き入れ、この地域を広く手に入れている。

このような尾張国に対する威力偵察的作戦や進路啓開的作戦は義元本隊発進前の数年間、間断なく続けられた。

一方で義元は、自軍に対して軍紀をきびしくするとともに、編成変えや奉行人の下知に関すること、つまり命令系統のチェックや兵糧、馬糧をはじめとする軍需品の調達、伝馬の整備や街道の管理などを命ずる各種文書が、永禄元年頃から集中的に発行されている。つまり義元は上洛のための大軍を動かす準備に二年あるいは三年を費やしたと考えられる。

今川義元（一五一九〜六〇）。幼名・芳菊丸。今川家は足利義康を祖とする名門。南北朝期に遠江、駿河の守護職を得た。幼少のころは寺に入り出家したが、家督を継いだ兄が急死。紆余曲折の末に義元が今川家を継いだ。

こうした動きが、信長の目にどのように映ったことであろうか。

信長も早い時期に、わが身の去就を決しなければならぬことを悟っていたに違いない。

信長は永禄元年から二年頃にかけて、丹下砦、善照寺砦、中島砦、丸根砦、鷲津砦などを築城し、それぞれ水野帯刀、佐久間右衛門、梶川左衛門、佐久間盛重、織田玄蕃らを守将として配した。これらの砦はその名のとおり城というようなものではなく、多少の石垣をめぐらせた「柵」であった。たしかに今川軍の進撃路をおさえているとはいえ、その南北にある沓掛城、鳴海城、大高城はすでに今川勢によって占領され、有力な部隊が入っているのだから、せっかく設けた砦もほとんど効果を発揮しなかった。

今川義元は本拠地駿府を出立した後、藤枝、掛川をへて十四日には浜松へ入った。翌日は三河の吉田に進んだ。現在の豊橋市である。翌十六日には岡崎城へ着陣した。この時、先鋒隊は池鯉鮒に進出している。義元は池鯉鮒から沓掛城に入城した。ここはすでに尾張国である。義元は沓掛城にて軍議を開いた。

その結果、丸根砦には先鋒を承る松平元康の家臣、酒井忠次、石川家成によって攻められ城将佐久間盛重は城とともに討死した。鷲津砦を攻めた朝比奈泰朝は城を守る副将飯尾近江守を討ち取り、城を陥した。それが十九日。十八日には大高城へ今川方の松平元康によって果敢に兵糧米の搬入が強行されている。まさに信長にとって足元に火がついたような危急である。

この時、織田信長は何をしていたのだろうか。

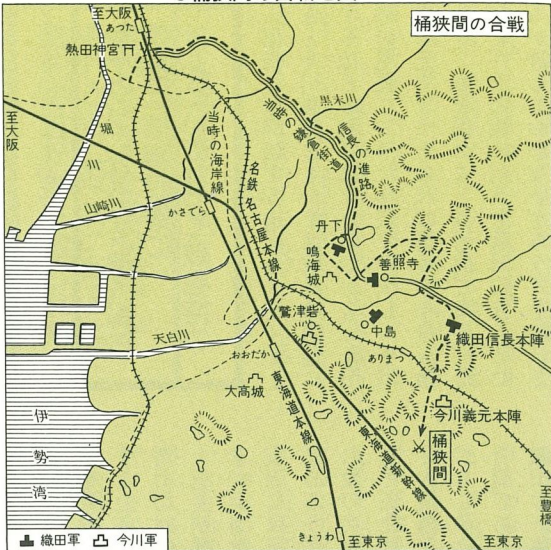
迎え撃つ織田の主は「うつけ」で有名な信長 得体の知れない男である

天文二十（一五五一）年三月。信長は父信秀を急な疫病によって失った。信秀四二歳。信長一八歳であった。信長は庶兄信広を越えて家督を継いだ。父の信秀は〝清須三奉行〟とよばれる織田藤左衛門、織田因幡守、織田弾正忠の中の弾正忠を世襲する家系であった。

応仁の乱の頃、室町将軍の下、尾張国の守護は斯波義敏だったが、その守

護代は織田大和守敏定であり、前記〝清須三奉行〟はこの大和守敏定の老臣である。応仁の乱に際してはどこでも同じようなことがあったが、尾張でも守護がもう一人あらわれた。これが斯波義廉でその守護代が織田伊勢守敏広であった。こんなところからも、信長の周囲では織田一族の間で勢力争いや小ぜり合いが絶えなかった。

もともとが守護代家の老臣というのだからたいした身分ではない。今川義元などから見れば、尾張の名もない土豪にすぎなかったであろう。まして当面の強敵は武田であり、浅井、朝倉であり、六角であり、はるかな毛利である。信長などほとんど考慮に入れていなかったであろう。それが自然だ。

●桶狭間の合戦地図

永禄3（1560）年5月18日夜、今川軍の動きがあわただしくなる。今川側の将・松平元康（のちの徳川家康）が大高城に兵糧を入れ、翌19日午前3時ころには織田側の丸根砦を攻撃しはじめたのである。午前4時ころ、信長は清洲城を単騎で出発、小姓衆がその後を追うのみであったが、熱田神社に着くころには2000とも3000ともいう数にふくれ上がっていた。ここで信長は戦勝を祈願、午前10時ころには善照寺砦に到着。いよいよ今川義元の本隊を衝くために奇襲をしかけるのである。

信長の若い頃のエピソードの数々はよく知られているとおりだが、例の、父信秀の葬式にあたって、正装で威儀を正している弟信行とは大違いで、袴も着けない短い小袖に、帯がわりの縄をぐるぐると巻きつけ、それに大小のひょうたんを結びつけ、髪は頭頂に高く結んだ茶筅髷。絵に描いたようなバカ殿様スタイルだが、この姿であらわれた信長は、焼香台の上の香を握ると、父信秀の位牌にぱっと投げつけたというのは事実らしい。それ以前にも、柿や桃を食いながら歩いたり、人の肩にもたれながら歩いたりで、譜代の家臣たちの間でも信長に対する失望感が深まっていた。

当時は異様な風態をしたり、奇矯な振舞をして人目を引くようなことを「かぶく」といって、人々の間におおいに流行していた。信長の異装も、生意気盛りのいわば流行に乗っただけの「突っ張り」だが、これで有能な家臣をずいぶん逃した。うつけ者とよばれた頃の信長に関して、さまざまに説明されているが、どうもそこに大器の片鱗を感じさせるというわけにはいかぬようだ。

平定して間もない尾張に今川の大軍をはね返す力があるとは思えなかった

その信長に対し東から今川義元が、北からは斎藤道三が、内からは同族たちが、豺狼の如く様子をうかがい、迫ってきていたのであった。父信秀も、信長よりも信行に織田家の将来を託したのであろう。本城と頼む末森城を、自分の遺産として佐久間信盛や柴田勝家ら重臣をつけて信行に与えてしまった。信長の守役である老臣の平手政秀は、信長の大うつけのありさまに、失望のあげく自害してしまった。

信秀恩顧の臣、山口左馬助教継は信秀が死ぬとたちまち息子ともども今川方へ寝返った。鳴海城、沓掛城、大高城などが今川方の手に渡ったのは山口父子の働きであった。

また一族の、清洲城主織田彦五郎の家臣である坂井甚助、坂井大膳は、松葉城城主で信長には母方の従弟にあたる織田伊賀守信氏、深田城城主織田右衛門尉達順らと共謀して反信長の兵を挙げた。父信秀の死んだ天文二十年から二十一年にかけては、信長の周囲は絶望的なまでに反信長の情勢が濃かった。

天文二十二年には一進一退で、信長にさして有利な展開は見られなかったところへ、二十三年になって東からの今川義元の攻勢が強まった。それと戦いつつ清洲城を収め、在地、同族の武士団と戦ってようやくその名を高めていた信長にとって、容易ならぬ事態が生じた。信長の弟、信行が信長の老臣林通勝、通勝の弟林美作守、柴田勝家らにかつがれて織田家の家督につこうとして信長に反旗をひるがえした。これには信長の母親も加わっていた。この争いは深刻なものがあったが、信長は何とか切り抜け、弟信行を倒すことができた。

永禄二年、父信秀の死から八年、ようやく尾張平定が成った信長は京へ上って室町将軍足利義輝に面会した。尾

張での成功を公認してもらったという ところである。京都から帰った信長は休む間もなく、岩倉城でなお抵抗を続ける織田伊勢守信賢を囲み、ついに開城させた。

その翌年が桶狭間の戦いである。

織田信長の置かれた状態がどのようなものであったか、ちょっと概観しただけで、ほとんど成算がないことがわかる。尾張一国を平定したといったところで安定勢力とはとうてい言い難い。結局尾張平定戦イコール同族間闘争という情況の下で、信長自身が、大きな経済力も戦闘力も育てることができず、かえって消耗を重ねつつサバイバルにすべてを賭けなければならぬ事態を迎えたということがいえよう。

ヤケクソになるかと思いきや信長は情報収集にけんめいになって敵を待つ

信長には降伏する道はあった。もともと今川義元にとっては信長は問題にするほどの敵ではないのだから、今川勢が尾張に入った時点で降伏し、今川勢の先導をつとめれば信長の一命も助かり、家を保つことは可能である。ただし、その後の信長を織田同族の者たちが許しておかないだろう。そのほとんどが早くから義元に意を通じている。家督を奪われて追放か、暗殺かあるいは罪を受けるか、いずれにせよ抹殺されるであろうことは間違いない。この時点で、信長は迫ってくる義元を相手に戦うしかなかった。同族間戦争に明け暮れた結果、他の大名たちと同盟を結んだり協力態勢を固めたりする外交活動などするひまもエネルギーもなかった。だから自分だけで、この難局を打開するほかはなかった。「一か八か」といえば通俗にすぎるが、信長に与えられているサバイバルのチャンスは唯一回、乾坤一擲の大勝負にでることだけだった。

もちろんそれはヤケクソになって前後の見境もなく突込んでゆくことではない。唯一回の大勝負を自分のものにするための必死の努力が必要だ。その努力の対象は情報である。

信長が桶狭間の戦いに使うことができた兵力は三〇〇〇といわれているが、実際には三〇〇〇を大きく割っていたであろう。信長は自分にはそのくらいの数の兵力しかないことは事前に承知していたはずである。

大規模な陣地戦や遭遇戦などは望むべくもないからねらいは待伏せによる奇襲である。それは時と場所をえらぶ。織田の一族や尾張の兵で今は敵方についている者も多いが、何といっても義元には不案内な土地であり、信長にとってはわが庭同然の地であった。

今川義元は進撃路を池鯉鮒から沓掛城に入り、それから田楽狭間、桶狭間を通って有松へ出、大高城へ入り、笠寺、山崎と通過して上知我麻神社に達するというコースを計画していた。

これだと善照寺砦に全軍を集中して必死の防御戦を行なうであろう織田勢の配置と戦意を空振りにさせ、浮き上がった存在になったところを一気にたたき、善照寺砦のみならず、清洲城をも奪うという明快にして雄大な作戦だった。善照寺砦に五〇〇〇。清洲城に五〇〇〇。鷲津や丸根の砦に五〇〇〇。戦場掃討に五〇〇〇。そして主力が五〇〇〇。その五〇〇〇をひきいて義元は沓掛城を出て有松へと南下した。

もちろん今川方の間者も尾張全域に散って織田方の動勢を知るのに懸命だったであろう。一方では信長も多数の間者を放って、今川本隊の動きを克明に追っていた。

この情報収集戦は明らかに信長の勝利だった。

十九日、早暁、仮眠から目覚めるや、「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり、ひとたび生を享け、滅せぬ者の有るべきか……」、日頃愛誦する幸若舞の「敦盛」の一節を、声高らかに唄いながら三度舞った。舞い納めるとたちまち馬上の人となり城外へ走り出た。従う者は近従六騎のみだったが、熱田神宮に入って戦勝を祈願するうちに、織田の軍兵はつぎつぎに到着して午前八時頃には総数三〇〇〇ほどになった。

タイム・テーブル❶

田楽狭間の決断

永禄3（1560）年5月	●今川義元、西上を決断し先鋒が駿府（静岡市）を発ったのが5月10日と伝えられる。
5月12日	●今川義元の本隊が駿府を出立した。義元の出陣に先だって、怪異現象のあったことを伝える記録あり。
5月16日	●義元、岡崎城に入る。このとき先鋒はすでに池鯉鮒（知立）に達している。
5月17日	●先鋒、尾張領に侵入する。本隊は池鯉鮒に入る。
5月18日	●義元、沓掛城に入り軍議を開く。
同日夜	●織田信長、清洲城にて評定を開いたと伝えられる。
同深夜	●今川側の将・松平元康、大高城に兵糧を入れる。
5月19日	●早朝3時ころ、松平元康、織田方の丸根砦を攻める。
同3時	●鷲津砦も攻撃される。
同4時	●2つの砦で戦いが始まったことが信長に知らせられる。信長出陣。
同8時	●熱田社に集結。戦勝祈願。
同10時	●信長は、善照寺砦に入る。このとき軍勢2000とも3000とも伝えられる。
同13時	●信長の本隊、義元の本陣近くに接近する。集中豪雨の中、本陣を急襲。
同14時	●義元、討たれる。

それから善照寺砦に入って待機した。

夜半に目覚めてからここまでの動きに実に無駄がない。おそらく義元本隊の動きについてかなり詳細な情報を得ていたのであろう。そうこうしているうちに、義元が沓掛城を出て大高城へ向ったという報告が飛びこんできた。信長はよしとばかりに三〇〇〇の兵を引き連れて太子ヶ根へと迂回急進した。目指すは桶狭間である。

勝敗を決めたのは「運」かそれとも「おごり」だったか義元の首が討ち取られた

名古屋市の東の郊外は、愛知高原国定公園の西方の、瀬戸市あたりから南へ下ってきた丘陵地帯が、長久手、日進としだいに高さを下げ、中京競馬場あたりまでのびてきている。現在では名古屋市のベッドタウンや、産業地帯として整備が進み、家やビルが丘の斜面をおおいかくしているので往古の風景を想像することも困難だが、標高四、五〇メートルの尾根と複雑に入り組んだ谷より成る原風景に気がつくであろう。当時は松柏の生い茂った深い森林におおわれていたという。つまり沓掛から有松方面へ向うには、この太子ヶ根とよばれる丘陵地帯を横断しなければならない。その横断路が田楽狭間、桶狭間とよばれる長大な隘路である。その隘路を見下ろす尾根には、信長のひきいる三〇〇〇の精兵が身をひそませていた。

今川義元はこの谷間で兵を休ませていたともいわれるし、土地の者たちが義元の戦勝を祝って酒食を供したので、義元と幕僚たちが酒宴を開いていたとの説もある。事実だとすれば、酒食を供した者たちは信長の命によって動いた乱破ということになろう。

義元にとって、決定的な不幸は、義元本隊が桶狭間にかかる少し前から、激しい雷雨がこの地域を広く襲ってきたことだった。季節に早い台風でもやって来ていたのだろうか。それとも局地的な旋風ででもあったのだろうか。このような土壇場で、これほど運のついた信長のような男も史上あまり例がない。この突然の雷雨暴風に関しては信長も計算の外だったであろう。この点については、義元はまことに運が悪かったというほかはないが、この長大な隘路に大軍を進める前に、なぜ付近一帯の山や尾根、谷や窪地に偵察部隊や哨戒部隊を配置しなかったのだろうか。それが不思議だ。兵力に不足はないのだから、鷲津や丸根砦などの奪取に夢中になる前に、五〇〇名も割いて、一〇名ずつの五〇隊も編成して諸方に配し、警戒に当らせれば、信長の奇襲は絶対に成功しなかった。義元の心の中に、信長に対する過小評価に基づく大きなおごりの気持ちがあったのだろう。命じられなくとも進んでそれを行なうだけの気のきいた部将もいなかったのであろう。

雷鳴や豪雨の中から、逆落しになって突撃してくる三〇〇〇の決死隊の前に、五〇〇〇の兵は何ら効果的な迎撃も行ない得ないまま、総大将今川義元の首は信長の家臣毛利新介の手によって討ち落されていた。

義元左文字（建勲神社蔵）。桶狭間の戦いの際に今川義元が所持していた刀。別名を「宗三左文字」ともいい、三好政長→武田信虎→義元と伝えられたもの。信長は戦勝記念に「義元討捕」「織田尾張守」と象嵌した。

信長初陣の図（柘植修氏蔵）。『信長公記』によれば、天文15（1546）年に元服。翌年に三河の吉良大浜を攻めたのが初陣である。

信長の憂うつは〝元亀〟の年号とともに長政の離反から始まる

戸部新十郎（作家）

浅井長政の裏切りで始まった、浅井・朝倉との凄絶な戦いは、元亀元年から天正元年まで、三年間も続いた。その間、石山本願寺の抵抗、比叡山の焼き打ち……と、信長は息をつくひまさえなかったのである。信長はこの〝元亀の危難〟を乗り越え、翌二年の正月には、長政と朝倉義景の薄濃で酒を飲み、積年の怨みを晴らすのであった。

威風堂々と出陣した信長を待っていたのは義兄弟・長政の裏切りだった

〝元亀〟という年号の両三年間は、信長にとって極めて不吉なものだった。改元は永禄十三（一五七〇）年四月のことだが、〝天正〟を望む信長の意向に反し、将軍足利義昭が〝元亀〟を推して容れられたものである。

改元の大権は天皇に属し、実質上の責任はたしかに将軍・幕府にある。が、そもそも義昭は信長によって擁立されたのだし、この年一月には天下の仕置を信長に委任する旨の五か条を示し、承認させている。つまり、将軍・幕府の権限を奪ったはずだった。

それなのに、思わぬところに古い権威が生きている。それは〝天下布武〟の勢いをもってしても、なお制圧できぬ諸勢力と組み、大敵として立ちはだかる不安を暗示していた。

事実、信長は元亀年間を通じ、反信長連合の敵に包囲され、まさに四面楚歌、生涯の危難におちいるのである。そして、終始その根元に存在したのは、北近江浅井氏と越前朝倉氏だった。

この年のはじめ、信長は将軍に代わり、

〈天下弥静謐〉

のため、諸大名に上洛令を発した。皇居修理という具体的役目もあったが、諸大名の信長に対する踏絵の意味合いがあり、ひそかに目標としたのは朝倉義景である。

元来、朝倉・織田両家とも、斯波氏が越前守護時代に被官だったが、朝倉氏は守護となり、織田氏は尾張へ移って守護代となった。信長の家は、その守護代が二家に分かれた一つの家老にすぎなかった。

朝倉方ではだから、頭角をあらわした信長のことを、かねて成り上がり者と軽んじていた。また、義昭は当初、義景を頼ってきた。いまとなれば、掌中にあった玉を逃がし、信長に握られたのも、癪の種だった。

果たして、義景はこず、なんの挨拶もない。

「陪臣の下知に従うものか」

とうそぶいているという。

信長のほうは、その反抗を待っていたとばかり、四月二十日、京の貴賤が総出で見送るなか、威風堂々と出陣した。観戦の公卿さえ引き連れ、数日のうちに、手筒山城（敦賀）を抜き、金ケ崎城を陥とし、朝倉氏の本拠一乗谷に攻め込むのも、時間の問題だと思われた。

ところがそこで、思いがけないことが起こる。浅井長政の離反、敵対である。

三年前の永禄十年、信長は長政と同盟を結び、同時に妹お市の方を嫁がせた。長政は義兄弟であり、同盟者である。

この男が寝返った。信長ははじめ、

「縁者であるうえ、北近江を与えてあるのに」

といって、なかなか本当にしなかった。が、この時代、縁者は必ずしもその言葉のもつ固いきずなを意味しない。また、北近江は信長から貰ったものでなく、家臣というわけでもなかった。

要するに、離反の余地はいくらでもあり、そんな出来事も、信長もいやほど見聞していたはずだが、かれが疑念をもたなかったのは、ひとえに長政が信義に厚い男だったからである。ただし、その信義は信長でなく、義景へ果たされた。

由来、浅井・朝倉の結びつきは古い。浅井氏が南近江の六角氏と争っていたころ、再三にわたり援助を受けた。信長と同盟するにあたっては、もし朝倉氏と戦うことがあれば、事前に通告するその一条を、とくに設けてあったくらいである。

信長は無視し、長政にことわりなく朝倉攻めをはじめた。思いあがりとも、油断ともいってよかっただろう。両家に同盟関係をもつ長政だが、このさい、朝倉方を選んだのは当然だった。しょせん、浅井・朝倉が一つになって、敵対することが確実になった。

信長は挟撃されるのを恐れ、殿軍にあとをまかせ、自分は一目散に朽木越えして、京都へ逃げ帰った。従う者わずか一〇人という惨めさだった。

そろそろ、いかに不利でも戦って死ぬいさぎよさが、武家の美学として尊ばれるようになっていた。が、大望などもつ信長には、そんな一片の美学など眼中になかった。恥も外聞もなく、

「死んでたまるか」

という思いだったに違いない。

浅井・朝倉を蹴散らした信長に立ち塞がるのは、難敵・本願寺と比叡山である

南近江では、すでに一揆が起こっていた。過年、打ち払った六角承禎（義賢）が再起し、かれらを煽動していたのである。

「近江国残る所なく、一揆蜂起せしむ」

（『当代記』）

というふうで、厄介このうえもない。

信長は岐阜へ帰るのにも中仙道は通れず、千種越えでようやく伊勢に出たほどだが、途中、承禎にそそのかされた甲賀衆の杉谷善住坊なる者に狙撃されている。運よく銃弾はそれたが、強運も名将が備える資質の一つでなければなるまい。

信長はしばらく、鉄砲を調達したり、浅井方への調略をすすめたりしていたが、六月、近江へ出陣した。ときに援軍として徳川家康が加わり、計三万四〇〇〇。対して浅井方は、越前から朝倉景健率いる援軍を合わせて、一万八〇〇〇である。

この両軍が六月二十八日、姉川をはさんで戦った。いわゆる〝姉川の合戦〟で、信長方の勝利に終わった。信長は早速、義昭に宛て、

「野も畠も死骸ばかりに候。誠に天下のため大慶これに過ぎず候……」

といい送った。

誇大に過ぎるようだが、浅井・朝倉反抗の裏で、糸を引いているのが義昭だとわかっている。一つには威力を示して畏怖させ、一つには天下の大慶と

タイム・テーブル②

浅井・朝倉との死闘

元亀元（1570）年4月	●朝倉氏の越前金ヶ崎城を攻略するが、浅井長政の離反に合い、急いで京に逃げ戻る。
5月21日	●岐阜に戻り態勢を立て直す。
6月19日	●近江の堀氏などの長政からの離反を聞き、早速出陣。美濃・尾張国境の砦を攻める。
6月21日	●長政の居城、小谷城まで攻め込む。
6月24日	●竜ヶ鼻砦に着陣。姉川をはさんで浅井・朝倉連合軍と対峙する。
6月28日 午前5時	●徳川軍の酒井忠次、小笠原長忠が攻め込み、戦闘開始。当初、浅井軍が優勢だったが、徳川軍の榊原康政に朝倉軍の右側面を攻撃させた作戦が功を奏し、形勢逆転。朝倉軍が敗走し、浅井軍も総崩れとなる。
午後2時	●浅井軍、小谷城を目指して敗走。決着がつく。
9月	●浅井・朝倉、石山本願寺の挙兵に応じる。
元亀2年9月	●信長、朝倉義景に与したとして比叡山延暦寺を焼き払う。
天正元（1573）年8月	●長政の家臣、阿閉淡路守が信長に寝返り、小谷城は完全に孤立。
同10日	●小谷城周辺で戦いが始まる。
同20日	●朝倉義景、自刃。朝倉家滅亡。
同28日	●浅井長政、自刃。浅井家も滅亡する。

浅井長政画像（高野山持明院蔵）。お市がありながら、長政は朝倉との義理を果たす。それが滅亡への道だった。

朝倉義景画像（心月寺蔵）。「守護代になぜ守護が従わねばならぬのか」。信長の隆盛に義景はいらだっていた。

皮肉ったわけだ。

このの ち信長は、浅井軍を本拠小谷城に追い上げると、押さえの向かい城を置いて、さっさと引き揚げた。ありようは、堅固な小谷一城だけを相手にする余裕がなかったのである。

案じた通り、摂津でしばらく鳴りをひそめていた三好党が反信長の旗揚げをした。かれらはどうやら、信長の帰陣を敗退したと勘違いしたらしく、阿波・讃岐・淡路の本国軍に、紀伊雑賀衆を加え、野田・福島に砦を築き、大いに気勢をあげた。

かれらは今日の争乱を、いまもって幕府内の奪権闘争としか考えない旧体制の残滓というべきものだが、難敵であるに違いない。

信長は八月末、出陣した。天王寺から天満宮の森、海老江、難波辺にかけて布陣したが、三好党を相手にするには、構えが大きい。ほかでもなく、まぢかに聳立する石山本願寺に対する備えだった。

そこは信仰上の本山であり、一向一揆の牙城である。門主はまた、門跡であり、日本一の富裕者である。朝廷はじめ公卿、大名らがこぞって好を通ずるほど巨大な勢威を誇る。

信長だけが遠慮しない。先年は五〇〇〇貫という膨大な矢銭をかけ、否応なく献じさせた。本願寺にとっては、快からざる仏敵である。信長のほうでも、三好党討伐に向かえば、本願寺が動き出すのがわかっている。衝突覚悟の布陣はやむを得ない。

門主顕如は肝を冷やした。野田・福島の砦が陥ちれば、直ちに本願寺に累が及ぶだろう。そこで、諸国全門徒に対し、

「各自身命を顧みず、忠節をぬきんぜらるべき事、ありがたく候。もし無沙汰の輩は、長く門徒たるべからず候……」

という檄文を発した。

顕如自身も、九月十二日の夜半にいたり、早鐘をつき鳴らし、挙兵に踏み切った。これより一〇年間にわたる石山合戦がはじまるのである。

信長は執念深い――僧俗男女三〇〇〇人を殺し比叡山との〝約束〟を果たす

これに呼応して、姉川敗戦から立ち直った浅井・朝倉軍三万が、坂本口から京都に迫った。かれらの出撃は予想できたが、あまりに素早い動きに、信長は慌てて摂津の陣所を引き払い、京都へ戻った。かれが京都を防御しなければならないというのは、はじめてのことである。

それでも反撃に出て、下坂本まで進んだところ、浅井・朝倉軍は戦わず、比叡山にのぼって籠った。長陣の構えをとりつつ諸方の旗揚げを待ち、信長を奔命に疲れさせようという策である。

この比叡山もまた、信長をうとんじ、浅井・朝倉びいきだった。信長は比叡山に対し、敵対すれば一山を焼く、と申し入れたが、態度を変える様子はなかった。

お市の方画像（高野町持明院蔵）。信長は永禄十（一五六七）年、美濃の斎藤龍興を討伐した直後、長政との同盟を結ぶため、「戦国一の美女」ともいわれるお市の方を嫁がせている。

そこへ伊勢長島の一向一揆が起こり、信長の弟信興の守る小木江城を攻め立てた。信長は身動きならない。結果、信興は死ぬが、見殺しにするよりなかった。はらわたは煮えくり返っていたことだろう。

信長はしかし、ただいらだっているだけではなかった。苦境を乗り切るべく、朝廷・将軍を動かし、講和の手をちゃんと打っていた。

かれは誇り高く、短気、激越な性と見られており、事実そうだが、一面では平気で頭を下げ、忍耐することができた。じつのところ、かれの忍耐は、執念深さと表裏をなすものである。およそ、出世する人物は、恩も恨みもしつこくしつこく忘れないものだが、信長がそうで、かれのエネルギーはその執念深さにあるといっていい。

いずれにせよ、工作が成功した。青蓮院門跡尊朝法親王が本願寺との、また義昭が浅井・朝倉との、それぞれ講和をもち込んできた。信長はしぶしぶ受け入れる体裁をとったが、内心ほっとしたに違いない。

明けて元亀二（一五七一）年、信長は敵対勢力に対し、各個撃破を開始する。まず長島一揆である。

そのため、近江戦線では兵を配置して、姉川の線で北国と上方の往来を遮断し、かたがた策動する一揆に備え、摂津戦線では本願寺や三好党の動きを封ずる程度に陣を固めた。

こうしておいて、何度か長島に出兵したが、一揆勢は強く、むしろ、信長方将領の死傷が相つぎ、そのたびに、退いた（大虐殺をもって伝えられる長島征伐は、なお三年ののちである）。

八月になって、信長は突然、近江に出馬し、小谷近辺の村々に放火して回った。が、この出陣の目的は比叡山焼き打ちにあった。先年申し入れたことの実行である。

古来、鎮護国家の大道場として勢威を誇った比叡山は、一宇も残さず焼亡し、僧俗男女三〇〇〇人が首を切られた。上下愕然となり、天魔の所為とののしったが、念を果たさずにはおかないのが信長だった。

●「姉川の戦い」の布陣●

朝倉景健4000
前波新八郎3000
朝倉景紀3000
浅井長政3500
新庄直頼1000
阿閉貞征1000
浅井政澄1000
磯野員昌1500
草野川
大依山より
姉川
坂井政尚3000
池田恒興3000
木下秀吉3000
柴田勝家3000
森可成3000
佐久間信盛3000
酒井忠次1000
小笠原長忠1000
石川数正1000
徳川家康2000
稲葉一鉄1000
織田信長5000

浅井長政の離反で窮地に追い込まれた信長は、秀吉に殿軍を任せ、たった10人ほどの部下に守られ、命からがら京都に逃げ帰ってきた。その後、岐阜城に戻った信長は態勢を立て直し、近江の堀氏、樋口氏が長政から離反したと聞くやただちに出陣し、砦を攻略、ついに姉川をはさんで浅井・朝倉軍と対峙した。家康の援軍を得た織田軍は、計3万4000、一方、浅井・朝倉軍は、援軍の朝倉景健率いる1万を加え、1万8000。数の上では圧倒的な優位を誇った織田・徳川の連合軍だが、背水の陣をひいた浅井軍の猛然とした攻めに一時あぶない場面もあった。しかし、徳川軍の活躍で事なきを得、勝利したのである。

大本命・信玄登場！迫り来る元亀・最大の危機を信長は強運で乗り切る

しかし、事態はなにも解決したわけではない。黒幕義昭は信長打倒のために、しきりに画策していたし、本願寺も諸方へ働きかけた。翌三年になると、甲州の武田信玄が動きはじめた。

反信長連合にとって、大本命の登場といってよく、かれらの意気は大いに昂揚した。たちまち離反して敵対しはじめた。信長麾下の松永弾正など、

浅井・朝倉軍の動きも活発になった。信長は何度も近江へ出兵したが、決定的打撃を与え得ぬまま、いよいよ十月、信玄が西上してきた。信長はひどく緊張し、盟友家康のもとへ援軍を送りながらも、不要の戦いは避けるよう指示した。

が、家康は打って出て大惨敗を喫する。〝三方ヶ原合戦〟である。たちまち、脅威が信長陣営を襲った。

最強の敵信玄の足取りはしかし、翌四年春からひたと止まる。病を得て落命したのである。

信長は強運だった。彼は秘報を直ちに知ったが、義昭は知らず、弾正や三好党と結んで、くるはずのない信玄の入洛を待った。

信長は冷然と義昭を攻め、七月、戦わずに槙島で旗揚げしたのを攻撃して、ついに追放する。すなわち幕府の滅亡である。

信長の早速やったことは、年号を〝天正〟に改めることだった。そして八月、浅井・朝倉攻めに、全軍をあげて近江へ出陣する。救援に出てきた義景を追って越前に進撃、本拠一乗谷から追い落とし、二十日これを討滅、ついで兵を近江に返し、同二十八日、小谷城を攻め陥として浅井一族を滅ぼすのである。

こうして、浅井・朝倉との抗争にはじまった〝元亀の危難〟は、かれらの滅亡とともに終わり、新たな信長の前途が展開することになる。その間の近江戦線を〝志賀御陣〟と称するが、苦闘の代名詞になった。

長浜市徳勝寺にある浅井家三代の墓。小谷城で追い詰められた長政は切腹し、果てた。そのとき長政はお市の方と3人の娘を信長に託したといわれる。その後お市は柴田勝家に嫁いでいる。

明けて天正二（一五七四）年正月、岐阜城では、〈古今承り及ばざる珍奇の御肴〉が出され、参賀の人の肝を奪った。

それは義景・長政・久政（長政の父）三人の頭蓋骨の薄濃（髑髏を漆塗りし、金粉をかけたもの）だった。非常なときの、非常の人だけができる勝利のしるしである。

比叡山の蛮行は「力」だけを信じる唯我独尊の行動だった!?

姉川の戦いで手痛い打撃を受けた浅井・朝倉が態勢を立て直し、京に迫ったのは、元亀元年九月のことである。それを迎え撃つために立った信長を見て、浅井・朝倉軍は比叡山にこもった。ここに翌年の比叡山焼き打ちの端緒がある。信長にとって比叡山は、畿内平定のためにも〝抹殺すべき〟対象だった。この時信長に何が起ったのか。

早乙女貢（作家）

天下統一のためには宗教の猛威は邪魔だいつか大掃除をしなければ！

世の中が乱れるほど新興宗教が隆盛になるのは一般人心の不安感、焦燥感などに由来するのは自明の理である。泰平は人心の満足度の証明でもあるから、世の乱れが人々をして、救いを求めて理性を失わせる。

いつの世でも一般大衆は弱い。その弱さが宗教にとって好餌であり、権威を伸長させる。殊に庶民大衆に基盤を置く一向宗の戦国時代における勢力の拡大は、瞠目すべきものがあった。

徳川家康や上杉謙信などは、一向宗に散々苦杯を舐めさせられ、〝最大の敵〟として討伐に腐心している。殊に三河の一向一揆との戦いに家康は腹臣だった本多正信までに裏切られるなど苦心のあげく、大量虐殺によって粛清することができたほどであった。

こうした宗教勢力の猛威は、天下を切り従えようとする織田信長にとって、いつかは必ず大掃除をしなければならない存在として、念頭にあったに違いない。

かれの矯激な性格は、おのれの上に君臨するもの、おのれの前に立ち塞がるもの、おのれの意に逆らうもの――それらのすべてが容赦できなかった。

あらゆる権威を認めず、旧来の陋習を破る新しい人間、という見方は浅薄で皮相的である。改革という言葉は、近来、鑽仰をもって使われることが多いが、信長という男にとっては、思想的な改革ではなく、ただ唯我独尊の行動にすぎなかったのではないか。

信長の狂気は、たとえば侍女たちが、かれの留守に勝手に物見遊山に出かけたといって七、八人いたのを手ずから斬殺してしまうという凄まじいものである。また、その侍女たちを弁明し、とりなそうとした老僧をも、

「おれに意見する気か、身のほど知らずめ」

と、烈火のように怒って、抜き打ちに斬り捨てるなどという、常人には考えられない衝動的な行為で一貫している。

このときの老僧の弁明の中には、物見遊山などではなく墓参りに来たのだから、勘弁してやってほしい、という趣旨がこめられていた。それが信長の火に油を注ぐ結果となったという解釈は、当を得ている。

信長のように神仏の存在を認めない男にしてみれば、墓参りだから許容されて然るべき、というような言い方や、その考え自体が頭にくるのだ。むしろ、愚かな女どもの戯れ心をお許し下され、と頼んだほうがよかったかもしれない。秀吉の出世ぶりがそのことを裏書きしている。

信長を刺激したのは連綿たる伝統の上に立つ宗教という権力だった

この常軌を逸した男にも、性欲だけは、当時の風潮からはみ出していないところが面白い。女色男色ともに、戦国の武将としては平均的なものだ。ちゃんと二人の子を女たちに生ませ、森蘭丸兄弟など稚児姓も慈しんでいる。ザビエルなどからソドミの蛮風と誹られた男色は、武士、公家、仏僧のみかは農商の間に浸透していた。徳川家康や豊臣秀吉などにその弊が見られないのは、むしろ珍しいくらいである。

いうまでもなく、女色男色ともに、宗派を問わず仏僧の間に蔓延していたのは、たしかに目を蔽うばかりの醜状であった。

だが、如何に権力者でも、おのれが色情を愉しんでいて、仏僧のみを責めるのは、いささか説得力に欠ける。もっとも、そのへんに拘泥しないのが信長ではあるが、ことが色情に関するかぎり、多少とも忸怩たるものがあろう。

信長の攻撃性を刺激したのは、あくまでも連綿たる伝統の上に立つ権力であった。信仰の力といっても、その源は理屈である。信長が天下人となる理論的基盤は何もない。ただ弱肉強食を肯定する力の自信だけである。

叡山は天台宗の総本山であり、平安京の皇城の東にあり、鎮護の一大道場として殷賑をきわめ、僧坊三〇〇〇、兵力二万を号して文字どおり天に届く台としての勢力を誇っていた。

叡山の僧兵といえば、後白河法皇をして、朕の意のままにならぬのは加茂の流れと叡山の僧兵じゃ、と歎かしめたほどの権威で天下に知られている。時代は移っても、その力は変らない。家康のように一向一揆の始末に手こずると、禍根を残す。

信長にしてみれば、方針は当初から決っていた。問題は時期だけであった。

それまで多くの大名たちが、叡山を手なずけ味方にしてようやく勢力を保つということをしてきたのだが、そしてそれは、歴代足利将軍もその例に洩れないことだったが、信長にはそんなまどろっこしいことは性に合わない。

邪魔者は威服させるか抹殺するしか知らない信長は、甘言を弄し腰を低くして、意を迎えるという謀略ができない。

坊主どもは金儲けと肉欲の喜びばかりを漁りおる

かれが叡山をほとんど憎悪するほど

血染めの阿弥陀如来画像（浄顕寺蔵）。当時、信長は“宗教”に振り回されていた。義昭と組んだ石山本願寺の顕如はその筆頭であった。顕如が企んだ一揆の中でも、凄絶な様相を呈したのが、元亀元年に起きた伊勢長島の一向一揆である。信長はこの戦いで、弟の信興を失ったが、当時、織田軍の主力は比叡山にこもった浅井・朝倉軍と対峙し動けず、結果的には信興を見殺しにすることになった。これは、翌年の凄まじい比叡山焼き打ちの遠因ともいえる出来事だ。（平凡社・国民百科事典より）

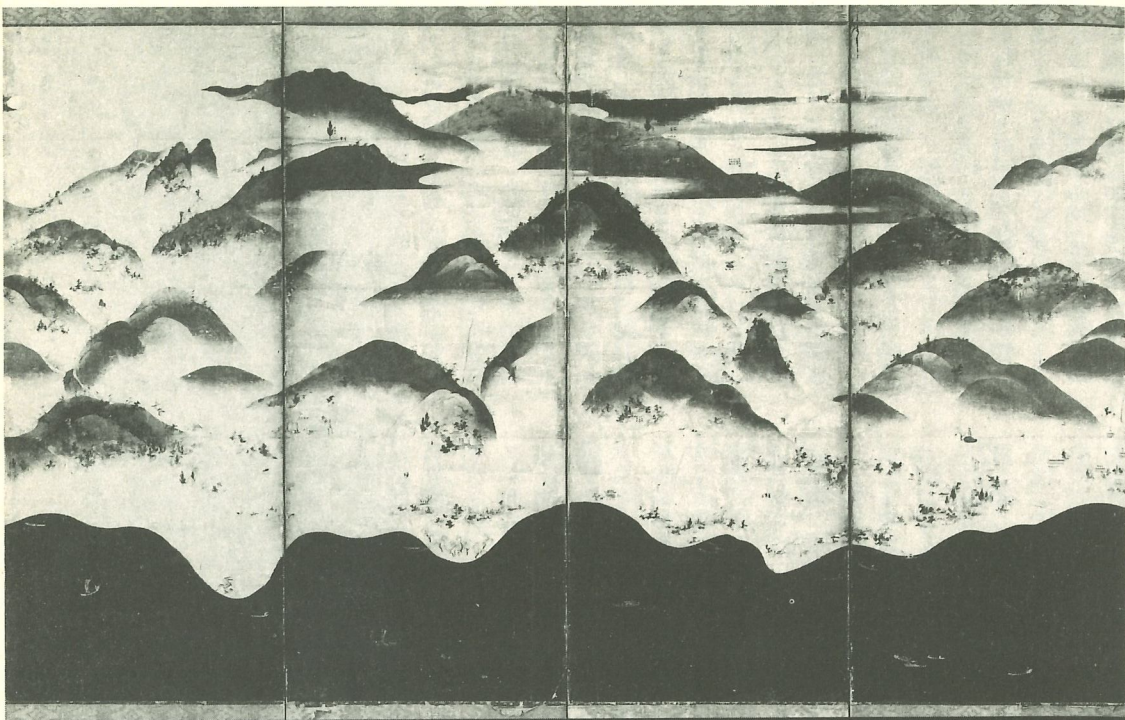
だったことは、宣教師のルイス・フロイスにさえ、悪しざまに僧侶たちの破戒ぶりとその醜状を語ったことでもわかる。かれらの「忌むべき生活と悪しき習慣」をくどくどと説いた上でこう毒吐いているのだ。

「坊主どもは、金儲けと、肉欲の喜びばかりを漁りおる」

フロイスの使命はこの仏教勢力のはびこる国に神の恩寵を説きキリスト教を広めることであり、そのためには、権力者にとり入ってその保護を得るのが近道であった。

周知のように、信長が南蛮寺の建立を許し、かれらに布教を許したのは、信長に先見の明があるように解されているが、信長は聖書に感動したのでもなければ、宣教師の熱意に動かされたのでもない。信長の行動のすべてにいえることだが、それが、かれにとって得策だったからにほかならない。

宗教を制するに宗教をもってする。仏僧の勢力をそぐために、この新来の異宗を利用したにすぎない。そして、その異宗は、新奇好みの信長の欲望を満足せしむる〝南蛮文明〟の輸入者でもあったのだ。

鉄砲や遠眼鏡や地球儀や、世界地図、煙草、珍陀酒など珍物を入手するために南蛮僧を優遇したのだと強調する者もいるが、新奇好みの信長に、その欲求が強かったとしても、それだけでは、ただの珍しがり屋の無意味な欲望ということになる。また古い日本の文化を否定して新しい文化と文明の輸入による日本及び日本人の意識改革や発展を希ったものでも、ない。信長には、そんな高邁な理想も、政治改革などの思想性は見出せない。旧来の陋習への反発と破壊は、思想や理想とは別のものだ。習慣や既存の権威やその象徴的建造物の破壊は楽しいものであり、自信の認識につながるのである。『にんじん』の作者ルナールは、人間は七歳で破壊の喜びをおぼえる、と書いているが、むしろ破壊の欲求は、人間の生理的なものだ。伸びようとする生命力の確認でもある。暴れん坊であった信長のその部分は、成長してなお、自制力を持たなかったところが、常人と違うだけだ。

信長の異常な出世は、その非人道性にも依拠している。かれにとって、人を利用することは、あたかも紙屑を利用し、捨てるのと同じだった。家臣を人質にやって城を奪う場合でも、その謀略を成功させることが大事であり、その人質が人間であることは念頭にない。

平然とそれができるところに、かれの天下人の素質があった。南蛮僧のほうでも信長をキリスト教に帰依させることは難しいとは知っていたが、仏僧退治にこれほど利用されるとは思っていなかっただろう。従者の黒人のからだを洗わせ、もし墨（黒い塗料）を塗っていることが判明したら、たちどころに斬首すると厳命し、結果が判然とすると、大いに呵笑したなどというエピソードからしても、信長のそうした陽光性の部分にうまく食い込んで改宗させることができるかもしれないと、一縷の望みは抱いていたかもしれない。その意味では、狐と狸の化かし合いだったといえる。

少なくとも、信長の叡山焼き打ちが実行されて、一番喜んだのは、かれら南蛮僧であったろう。

これは仏教の終焉だ、とほくそ笑んだに違いない。南蛮僧たちの保護は、舶載の珍物のタネが尽きるまでだったはずだ。かれらが保護によって、もしその勢力が強大になり、信長にとって邪魔だとなれば、焼き殺されるのはかれら宣教師と信徒だったはずである。そこまで、フロイスは気がついていたかどうか。

次の秀吉の時代になって、ピエール・パプチスタの策謀、フランシスカン派とジェスイット派の暗闘がもとで、自滅する結果になるのだが、はしなくも、秀吉は、信長の心の底にあった黒宗解体と壊滅を実行したともいえる。

無頼集団の〝法城〟比叡山をたたきつぶせば仏教界を畏怖させられる

天台宗が、その総本部を叡山に置き、王城鎮護の法灯を点して、一大法城の権力を誇示していることは、ひいては他山の宗派にも大いなる力でもあった。

信長は、

（こやつを叩き潰せば、仏教界すべてを畏怖させることになる）

と、思った。

その意味では、いわゆる、喬木として狙われたともいえる。大木ほど風当りが強いのである。傲然として聳立しているのが目ざわりであり、その倒壊によって他山もなびき伏すはず、と信長が思ったのは疑いない。一向宗の総本山東本願寺の石山寺（のちの大坂城）を攻める前段階の目標とされたのは、天台宗にとって不運であった。

比叡山延暦寺は天台宗の総本山にふさわしく、根本中堂を中心にして、七堂伽藍が鬱蒼たる樹林の間に、青光りする甍を点在させていた。その構図は東塔、西塔、横川の三塔から成り、その最盛時には山上山下に三〇〇〇の寺

比叡山古図（延暦寺滋賀院蔵）。当時の比叡山の僧侶たちは、武器を持ち、一揆を起こす、ある面では残忍の限りを尽くす“僧侶”でもあった。信長は元亀２年９月12日、突然、比叡山延暦寺を包囲する。昨年、浅井・朝倉と結んだ延暦寺のために苦境に陥った信長の“復讐”である。そのとき信長は、「自分に背けば、根本中堂をはじめ山王二十一社をことごとく焼き払う」と予告した。しかし、まさか比叡山に火を放つとは、さすがの信長でもできないだろうと、僧侶たちは油断していた。その隙をつく信長の急襲だったのである。

坊があったといわれる。この三〇〇〇という数字は、誇張ではなく、実数に近かったようである。

延暦寺の寺名からもわかるように、建立当初から、その権威は大きかった。由来、年号を寺名にすることなどこの国にあっては至難である。他にはのちに、天海僧正が開いた寛永寺があるくらいだ。その天海僧正も天台宗である。のちの話になるが、天海は、京の延暦寺に比すべき一大王城鎮護の道場として、上野に建てた家康を祀る寺として、寛永寺の寺号を要請して、許されたのだ。その心中には、江戸幕府の拠点江戸城を、京の王城に見立てるものであった。

それほど比叡山と延暦寺の存在は大きかったのだ。違っているのは、家康は東照大明神として神廟を必要としたことである。東照宮を守る寛永寺、という神仏混淆の形態がきわめて自然に行なわれて矛盾を生じなかったのは、政治的意図が背景にあったからにほかならない。

上野の忍ヶ岡は、小丘にすぎず、あくまでも、泰平の世の寺域だが、比叡山は乱世の山城にも比すべき一大法城をなしていたことは、時代の成り行きでもあり、宗教権力の扶殖の根源でもあった。

法難、とかれらはいうが、所詮は、宗教に名を借りた勢力争いにすぎない。延暦寺が僧兵の温床となり、戒律など屁とも思わず、女を山中に引きこみ、稚児の尻を愛で、般若湯に酔いしれて、山下に乱暴狼藉を働く無頼集団と化していたのも事実であった。

打ちつづく兵燹が、宗教界をも、乱倫で彩っていたのは、戦国の世の必然といえようか。比叡山が敵としたのは、信長のような武家ばかりではない。同じ仏教界でも、熾烈な勢力争いで、流血を日常としていたのである。

それはむしろ、骨肉の争いといえようし、そのもとは、近親憎悪だけに、根が深い。イデオロギー闘争が、近親憎悪的残忍性を帯びていて果てしないことは、現代でもよく見聞できることである。

いかに狂気の信長でもまさか延暦寺には手を出すまい――

延暦寺は長い間、お互に敵対していた相手としては、奈良の興福寺や紀州の高野山などがある。興福寺は北嶺と並び称せられた南都の名刹であり、高野山の金剛峯寺や根来寺など、その強固な団結と、戦闘力で近隣をふるえ上

がらせていたのだ。根来寺が鉄砲衆をもって名高いのを見ても、宗教と寺という範疇を超えた武装集団の弊がわかる。そこには、女色戒とともに殺生戒など、薬にしたくもなかった。殺人集団であることに、武家と変りがなかった。

（法灯を守る）

というのが、その弁明であり、お題目だった。

そして、酒池肉林の宴に酔っていたのだ。乱世は、武家と愚昧な公家のみが作り出したのではない。仏心を失った仏教界もまた、その責任を負わねばならない。いや、その最たるものかもしれないのだ。

なまじ仏法を説く身だけに、罪は大きいといわねばなるまい。山賊が悪事を犯しても、異とするに足らないが、仏の教えを説く僧侶が血ぬられた薙刀で殺戮し、聖なる衣を淫猥なふるまいで汚すとあっては、世も末の厭世観が蔓延して乱世を加速させるしかない。聖職者の罪は平人の一〇〇倍にも価するのである。

こうしたあるべからざる僧侶たちの乱れた行動と行為が、信長の叡山焼き打ちの自信と評価を予測させたことも疑いない。世間の評判など気にしないのが信長ではあるが、事がやはり叡山となると違っていたろう。

また叡山のほうでも、信長が、そこまで断行するとは夢にも思わなかった。

これが、大名同士なら、周辺の敵を気にしないのは、ただ暗愚の誹りを免れないだけだが、叡山が安心しきっていたことは、まったく

（あり得ないこと）

だったからである。

広大な寺領の上で、雲上の存在のように大胡坐していた延暦寺の怠慢もあろうが、それだけ稀有のことだったのだ。

（いかに狂気の信長じゃとて、叡山には一指もふれることはできまいて）

と、多寡をくくるだけの伝統と財力、兵力が、かれらにはあったのだ。万に一つの叡山攻撃があったとしても〝法力〟によって、不埒な〝天魔〟は破邪の剣による屍になるだけだ、と、甘く見ていた。

実際、蓮如によって急速に伸長発展した前記の一向一揆が、その武装蜂起による攻撃力や、そこらの大名国侍の比ではなく、流血その乾くところを知らず、足の踏むところなきまでの殺戮跳梁によって、武士たちを屠ってきている。たとえば、長享二（一四八八）年には、北陸の加賀において守護大名たる富樫政親を攻め、その首級をあげて、〝鳥の嘴の愉しみにまかせ〟ていたし、上杉謙信の上洛を阻んだのもかれらであった。

叡山の荒法師には、そのむかし西塔の弁慶のような前例がある。かれらの崇敬する大先達である。尾張の一小大名から興った織田信長など一指もふれることはできない、と思われていたのだ。

信長の叡山焼き打ちが、突発的な衝動的なものではなかったことは、その焼き打ちにより二万人の僧俗を、〝すべてなで斬り〟にしたことで、〝年来の胸朦を散〟じたことによっても知れる。前述したように、宿願だったのだ。

叡山と一向宗を打ち亡すことが信長の前進にとって是非とも必要だったが、叡山を攻める前、信長は、一向宗に手痛い敗北を喫している。

元亀二（一五七一）年五月、本願寺光佐は浅井長政と共謀して、信長の前面

現在の比叡山。当時、焼き打ちで唯一焼け残ったのは瑠璃堂だけだった。比叡山の門徒は、信長上洛以後、寺領押領問題で事あるごとに信長ともめていた。焼き打ちは、畿内平定のためにも成さねばならなかった。

に立ちはだかった。松永久秀が反旗を翻したことも、信長にとって敵陣営の強化となった。信長は、その翌日、一気に長島の一向宗徒を攻めた。これは勝利の自信があったのだが、信徒の抵抗は凄まじく、勝利を得るどころか頼みの部将氏家直元まで討死するという敗北に地団駄踏んだのである。

信長は、こうしたことから、伊勢方面はあとまわしにして、近江の攻略に転じたのだ。

近江の本願寺・浅井勢は琵琶湖の西に聳る比叡山によって、バックアップされていた。本願寺と延暦寺の間に敵の敵は味方、の意識が結びつきを固くしていることは予測できた。

信長の猛攻は、九月一日に、麾下の部将佐久間信盛、柴田勝家、丹羽長秀らに大軍を擁させて、近江新村城を攻めさせ、さらに進んで小川城を降し、常楽寺に進んだが、翌日には、金森城を降して、叡山攻略の準備を整えたのである。

信長が、

「坊主どもを山ごと丸焼きにせよ」

といったとき、明智光秀や秀吉は、さすがに顔色を変えた。光秀は当時としては、荒大名の中で、特に教養人として知られている。かれは進んで、その無謀をいさめ、信長の一喝を浴びたといわれる。それも、後年の本能寺の反逆の一因とされる。

その真偽は別として、信長の叡山攻撃を制止することは誰もできなかった。

まず信長は、湖南の勢多に陣を移して、ここを攻略本営として、大軍を放ったのだ。

東麓に信長軍の夥しい甲冑と湖風にはためく長旗馬印などの旗を眺めてもなお、

（まさか、この聖なる山へは干戈を進めまい）

と、おのれらの乱倫を棚にあげて、僧兵らは、多寡をくくっていた。

荒法師も虚を衝かれ叫喚は天地を揺るがし一大地獄絵巻が現出した

正確には、元亀二（一五七一）年九月十二日である。大軍は手に手に松明を持ち、刀槍を閃かせて山腹をえいえい押しに駆けのぼった。

名にし負う叡山の荒法師も、虚を衝かれ、周章狼狽、ほとんど抵抗もせずに殺戮されたという。

一万余の荒法師がいたとしても、数万の大軍で攻め上がれば、大薙刀をふるう力も失せてしまう。他に女子供が数千人いたといわれるから、たしかに浄土でも聖地でも何でもない、宗教色の濃い山城にすぎず、信長から見れば、〝叡山という山の山賊〟にすぎなかったろう。

松明の火をもって、山坊、塔頭、伽藍の数々、滅多矢鱈と点火してまわり、ために全山火の山と化し、その中を逃げまどう男女、叫喚は天地を揺がして、一大地獄絵巻を現出した。信長勢は、当るを幸い、薙倒し斬り倒して、さながら鹿狩りや熊狩りを楽しむにも似た殺戮をくりひろげた。

大名間の戦では一番槍、兜首いかんで出世もある。が、こういうなで斬りで焼き殺しが目的では、その面倒さがない。ただ殺せばいいのだから、将兵にとっては、遊びのような気持で、かえって、能率よく、山焼きができたものと思われる。

その凄まじさは、たちまち遠近に喧伝された。悪事千里を走るという。武田信玄はこのことを聞いて、愕然とし、盃をとり落とした。

「信長とは、天魔波旬の変化なるものか」

と、歎息とともに憤りを口にした。信玄もかなりな暴君だが、さすがにここまではしない。このときの恐れは、のちに勝頼の代になって現実になるのである。

信長は松永久秀が東大寺を焼いたことを、

「こやつは、おれもようせぬことを三つ、やりおった」

といって将軍義輝の暗殺や主殺しなどを含めて非難したが、東大寺を焼くより叡山を焼いたほうが罪が小さいと思っていたのだろうか。

タイム・テーブル③ 比叡山焼き打ちの遠謀

日付	出来事
元亀元（1570）年4月20日	●信長の再三の上洛催促にもかかわらず、応じない朝倉義景を討つため、越前へ向け出陣。
同25日	●信長越前へ入り、手筒山城、金ヶ崎城を落とす。
同27日	●浅井長政の離反が伝えられ、信長、急いで京都に戻る。
6月	●織田・徳川の連合軍が姉川で浅井・朝倉軍を破る。浅井・朝倉ともに敗走（姉川の戦い）
9月5日	●石山本願寺顕如、野田・福島で三好衆の砦を攻めていた織田軍に対し、紀州門徒を動員、攻めかかる。石山合戦の始まりである。
同16日	●浅井・朝倉連合軍が3万の兵を率い、坂本口まで進む。
同23日	●信長、野田・福島を引き払う。
同24日	●浅井・朝倉を討つため、下坂本に出陣。これを見た浅井・朝倉軍は比叡山にこもる。 ●信長、比叡山延暦寺に対し、味方につけば、分国中にあるすべての山門領をすべて還付すると通告。 ●比叡山はこの通告を無視し、浅井・朝倉方につく。
11月12日	●信長、石山本願寺と屈辱的な和議を結ぶ。
元亀2年9月	●信長、昨年、反抗した比叡山の焼き打ちを行なう。僧俗男女3000人が首を切られたという。

波乱万丈！
信長の戦人生 4
ストーリー

長篠の戦い 驚異の戦略

信長の"革新性"に無敵の騎馬軍団がもろくも崩れ去った

天下統一の仕上げに入った信長にとって、東の強敵、武田氏との対決は避けては通れないものとなりつつあった。信玄の遺志を継いだ勝頼が、三河に侵入したのが、天正三（一五七五）年四月のこと。京都にいた信長は、急いで岐阜に戻り、勝頼討伐のため軍を整え、東に向かう。信長最大の決戦、長篠の戦いはこのときから始まる。

志茂田景樹
（作家）

源義経は日本で唯一の戦術革命の「天才」だった

戦術の革命は、伝統やパターンにまったくとらわれることのない卓抜な発想から生まれる。

つまり、卓抜な発想ができる天才的武将が誕生して、はじめて可能になる。

それは、多くは、画期的な武器の開発、普及と時をおなじくしている。

画期的な武器の開発、普及期に関係なく起こる戦術の革命は、天才的武将ではなくて、まさに天才によってのみ可能である。

その天才による戦術革命は、定着することなく、その天才の一生とともに終るという運命をたどりがちである。

あとを継ぐ者がいないからである。

後者の例で、日本で探すとしたら、源義経以外、見あたらない。

平安末期に武士団が興隆して、馬に乗っての一騎討ちの戦いが、戦術の基本になった。

まず両軍、矢合わせを行う。

馬首を並べて、敵に矢を降り注ぐのである。

むろん、敵も矢を射返してくる。

そうして、本格的な矢戦になり、やがて、機を見て突撃に移る。

このときが、敵味方ともに、手ごろな相手を求め、名乗りあって一騎討ちの開始になる。

この一騎討ちも、騎射ではじまり、その矢がはずれると、太刀を使って討ちあうのである。

敵に見事、致命傷をあたえて、落馬させるか、馬上で組みあい、双方の乗馬のあいだにともに落ちて組み討ちになる。

組み伏せたほうが、小刀で敵の首をかき切り、勝ち名乗りをあげる。

そして、さらに、新たな敵を求めて、馬に乗る。

そういう武士の合戦で、東国武士が強かったのは、馬産が盛んで、子どものときから荒馬に乗り、騎射の訓練をしていたからである。

馬は、武士にとって、一騎討ちのためには欠かせない生きた武器だったのである。

平安末期から源平合戦期に、そうして定着した武士の戦法を、いとも簡単に砕いたのは、義経だった。

義経は、馬を一刻も早く敵地に乗りこむための機動力の源泉として使った。

さらに、名乗りも、一騎討ちも関係なく、一団となって敵陣に躍りこみ、矢を放ち、火を放ってまわる奇襲戦法の武器として使った。

一の谷の合戦でも、屋島の合戦でも、義経は、馬を機動力として最大限に活用し、さらに、奇襲の道具として最大効果を発揮させて、少数で敵をかく乱している。

つまり、速やかに移動し、敵に気づかれないうちに、その背後に進出して、一気に敵陣を突いて混乱させたのである。

その戦法は、近代騎兵の戦術とおそろしく似ている。

勝負どころでは、数十人の小勢だが、全員騎乗だった。

その義経の戦術は、義経しか用いることができず、義経の死後は、また武士の道として、名乗りをあげての一騎討ちにもどってしまった。

武田勝頼像（法泉寺蔵）。父信玄さえ落とせなかった遠江の高天神城を落城させるなど、勝頼にも勇将の血が濃く流れていた。しかしその結果か、あまりにも自信をもちすぎた勝頼は長篠での戦法を誤り、大敗北を喫するのである。

画期的武器を操る天才的武将・信長に挑んだ勇猛な武田の騎馬武者

織田信長がもたらした戦術革命は、義経戦術の一過性のものとちがって、正真正銘の革命だった。

それによって、革命的な戦術が、信長の死に関係なく、定着していったからである。

信長が出現した戦国後期は、戦国前期にまだ見られた鎌倉、室町時代の名乗りをあげての一騎討ちが、影をひそめ、かわって、槍を武器にした足軽の集団戦の結果が、勝敗を分ける時代になっている。

鉄砲は、足軽による槍隊が突撃する前の前哨戦で用いられた。鎌倉時代の矢戦の代用である。

勝負を決める戦いは、足軽集団の突撃による白兵戦だった。

騎馬武者は、その足軽にまぎれて突撃し、手槍を使って戦ったのである。

信長は、その足軽の使う槍を、おそろしく長くして、突撃に有利にするという工夫をしている。

双方の突撃による第一撃では、長柄の槍であればあるほど、有利になる。

そして足軽が、短い手槍を使っている騎馬武者を倒すことも多くなる。

信長が採用した常識を超えた長柄の槍は、その後、おもな戦国大名のまねるところとなった。

信長は、槍以上に、鉄砲に注目していた。石山本願寺との戦いでは、本願寺側に、雑賀党、根来衆などの鉄砲術に長じた者が多くて、大いに手こずらされたからである。

ようやく、日本も、歩兵戦、白兵戦の時代にたどりついたこの時期に、おそるべき騎馬軍団を擁する難敵がまだいた。

武田氏である。

信玄以来、武田軍団は、鎌倉期の東国武士の気風を残し、優秀な甲斐駒にまたがった精強な騎馬武者を多くかかえていた。

むろん、義経が奇襲戦に全員騎馬の少数精鋭の隊を駆使して成功した戦術とちがって、武田軍団は、正攻法による、足軽まじりの騎馬軍団の突撃で、敵を完膚なきまでにたたく戦術をとっていた。

勇猛な騎馬武者に続いて、その騎馬武者の家来である徒歩の兵が突撃するというパターンである。

武田軍団は、鉄砲、長槍で武装した足軽集団が、合戦の主役になってきた戦国末期において、いまだ中世の気風を残した合戦を行っていた。

それで一軍団として強力だったのは、鉄砲で勝敗を決める合戦の洗礼を受けていなかったためである。

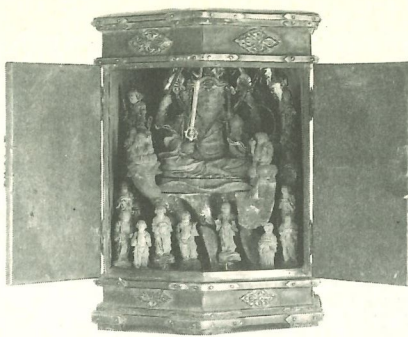
京都、近畿、東海方面といった先進地域の合戦は、しだいに鉄砲の威力を前面におしだしたものになってきていた。

タイム・テーブル❹

長篠の戦い 驚異の戦略

天正3(1575年)4月21日	●武田勝頼、約1万4000の兵を率いて三河へ侵入を開始。
5月6日	●二連木城を陥落させた武田軍、酒井忠次の居城・吉田城攻めに入る。
11日	●武田軍、長篠城を包囲する。
13日	●織田軍、武田を討伐すべく、岐阜城を出陣。一路東へ向かう。
14日	●岡崎城に到着。
15日	●信長と家康が岡崎城で軍評定。
16日	●信長、牛窪城へ入る。
18日	●信長、設楽の極楽寺山に陣をしく。
	●家康は高松山に着陣。
19日	●勝頼、軍評定を開く。
20日	●勝頼、長篠城の包囲を解いて、清井田付近に軍を移動させる。
同深夜	●徳川の武将・酒井忠次、雨中、3000ほどを率いて、鳶ヶ巣山砦に奇襲をかけるために向かう。
21日	●両陣とも設楽原に布陣。
午前6時	●武田の山県昌景隊が、徳川の大久保忠世隊に攻撃、戦闘始まる。
同8時	●酒井隊が鳶ヶ巣山砦を奇襲する。
同午後2時	●戦闘開始から、武田の馬場信春をはじめとする勇将たちが入れ替わり攻撃するが、次々と斃れる。武田の死者は1万といわれる。
	●勝頼、敗走。戦い終わる。
25日	●信長、岐阜に凱旋。

騎馬突撃至上主義に凝り固まった武田勝頼の弱点とは?

織田信長は、西上作戦をとった信玄が、その壮図なかばにして死に、数年来の重圧がとりのぞかれてみると、天下というボタ餅が目の前にぶらさがっていることに気づいた。舌なめずりして、浅井長政、朝倉義景を滅ぼし、喉にひっかかっていた骨をとり、武田氏を滅亡させる機を窺いだした。

武田信玄木像(高野山蔵)。信玄は、命からがら家康が浜松城へ逃げ帰った、元亀3(1572)年の三方ヶ原の戦いでの大勝利で、信長をいま一歩のところまで追いつめたが、非運の死を遂げている。父の遺志を継いだ勝頼だったが……。

信玄死後の武田氏は、あとを継いだ勝頼が勇将だったこともあって、あい変らず強敵であった。

だが、勝頼は、政治力にとぼしいうえに、信玄の遺産の騎馬武者の突撃を破壊力とする戦法を守り続けている。

鉄砲の数を増やすなどして、足軽の武装を強力にしていったが、やはり、ほんとうの鉄砲の用い方に気づかなかった。

それに、織田軍団が、足軽集団という歩兵を独立した戦力としてとらえていたのに対し、武田軍団の足軽は、騎馬武者の家子郎党だった。

つまり、武田の臣は、いざ合戦となると、一族で馬に乗り、家子郎党の徒歩の兵をひきつれて、馳せ参じる仕組みである。

合戦になって、主人が突撃すれば、いっしょに走ってあとに続く。鎌倉期の御家人と、本質的には、変りがない。

家子郎党に鉄砲を持たせても、それは自分が戦うときの援護や、突撃前の前哨戦に用いるためで、他の臣のために使う気はない。

そのような中世的戦術の殻から抜けきれていない武田軍団が、一〇〇〇人二〇〇〇人の独立した鉄砲足軽隊を持つことは、どだい無理だった。

それに、鉄砲は、一回撃てば、つぎに発砲するまで時間がかかる。その間に、騎馬で突撃すれば、一気にかたをつけられる、という騎馬突撃至上主義に凝り固まっていた。

武田軍の情報を徹底的に分析した信長はようやく兵をあげた

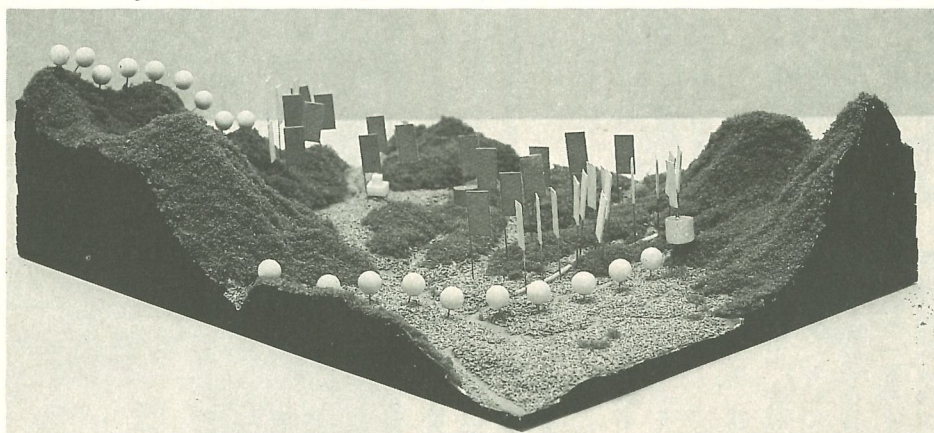
天正二(一五七四)年に入って、信長の武田氏を滅ぼすプログラムは、すでに具体的なスタートを切っていたと言える。

近江の長浜城に秀吉を入れて、国友村の鉄砲鍛冶を統轄させて、鉄砲の増産に力を入れた。

国際交易港の堺は、とっくに手中にしており、硝石、弾薬の入手ルートは、確保されている。

ただ、信長にとって頭の痛いことが、起こっている。

四月に、本願寺光佐が、石山本願寺に拠って、信長討滅の兵をあげたことである。雑賀党、根来衆の鉄砲衆も少なからず加担して、やっかいである。

とくに、各地の一向一揆に弾みをあたえることになる。その本願寺光佐と中国の毛利氏、甲斐の武田氏が呼応する気配を見せている。

信長は、鉄砲の三段撃ち、馬防柵と、長篠の戦いで革新的な戦術を駆使したが、お得意の〝奇襲〟も用意していた。その狙いは、武田軍の鳶ヶ巣砦を攻撃し、後方を攪乱し、味方の損害を少なくすることにあった。その作戦を任されたのが、徳川四天王のひとり、酒井忠次である。忠次は当時49歳。三河一向一揆の鎮圧などで活躍した歴戦の勇士である。3000ほどの兵を率いた忠次は、20日深夜、雨の中を鳶ヶ巣砦に向かった。その迂回コースは、広瀬の渡しから吉川村、そして松山越えという、険しい山道であった。そして翌21日午前8時ごろ、鳶ヶ巣砦を攻撃、落としている。その2時間あまり前設楽原では、武田軍の主力が無謀な戦いを挑み始めていた。

毛利氏は、水軍を使って、石山本願寺に、兵糧、武器弾薬の援助をできる立場にあった。

故信玄が、生前に、信長包囲網をしいたことがある。

本願寺光佐が挙兵して、信玄時代ほどではないが、信長包囲網の再現に近い状況が生まれている。

信長は、その大本で、摂津という信長の勢力圏の喉元で抵抗している本願寺光佐を、まず、討ちたかったが、石山本願寺は、難攻不落の大城なみの堅城であった。

鉄砲操作の図(種子島開発総合センター蔵)。鉄砲が日本に伝来したのが天文12(1543)年のことである。天文22年には、信長は数百挺の鉄砲を持っていたというから、鉄砲に対する信長の興味は相当なものであったはずだ。この使い方が長篠の勝敗を分けたのである。

なによりも、鉄砲衆が優勢である。

今回の挙兵前にも、石山本願寺には、手を焼いている。

信長は、先に武田氏を滅ぼすことを決意した。

五月になって、勝頼は、石山本願寺に呼応して、遠江に兵を出し、高天神城を攻めている。

信長は、光佐の挙兵にいきおいを得た伊勢長島の一向一揆を滅ぼす軍を起こした。七月のことである。

武田氏を滅ぼすためには、伊勢長島の一向一揆をそのままにしておいては、美濃、尾張を通過して、甲斐に兵を進めたあと、退路を断たれて、大事になるおそれがある。

その禍根を断つためなので、信長軍の気合は、じゅうぶんだった。九月中には、さしもの長島一揆も、みな殺し作戦により、終局を迎えた。

信長は、ひと息入れて、翌天正三年四月に、勝頼が一万五〇〇〇の大軍をひきいて、長篠城の周辺に陣をしくと、ようやく腰をあげた。

だが、すぐに、長篠城方面へ出陣したわけではない。

じっくりと兵を岐阜に集め、鉄砲、硝石、弾薬を蓄積し、武田騎馬軍団壊滅の作戦を練りあげていたのである。

長篠城を包囲する形で、布陣している武田軍の情報は、細大もらさず集積した。

信長が立てた作戦にとって、武田軍がどういう陣形をとったか、そして、どこへどう攻勢に出てくるかは、成否を分ける情報となる。

信長は、鉄砲隊で迎撃する作戦を胸に秘めていた。

その迎撃方法は、ツボにはまれば、画期的な戦果をあげ、革新的な戦法になるはずである。

正確な布陣と出方を知りたい。

武田軍の布陣が、多くの情報から手にとるように浮かびあがってきた。

本営は、医王寺に置いて、勝頼と旗本軍五〇〇〇が陣どった。

大通寺山に、武田信豊、同信廉が布陣し、箕原と岩代川畔に、穴山梅雪、一条信竜、小山田昌行といった一族、譜代の主力がひしめいた。

さらに、十数か所の要所に兵を配し、長篠城は、十重二十重にとり囲まれて、蟻の這い出るすき間もない状態になっている。

こうして、武田軍の長篠城攻略戦は、開始されたが、長篠城は、よく持ちこたえた。

信長は、徳川家康の救援の依頼を、再三、受けながら、言を左右にしていたが、五月十三日になって、大号令を発して、大軍をひきいて岐阜を出立した。

鉄砲隊による迎撃作戦のメドが立ったためである。

柵木と縄を携えた三万の異様な軍団が設楽原へ向かった

織田軍は、鉄砲隊以外の足軽雑兵や、騎馬兵の一部にまで、柵木と縄を携帯させていた。大部分の兵は、それをなんに使うか理解していなかった。

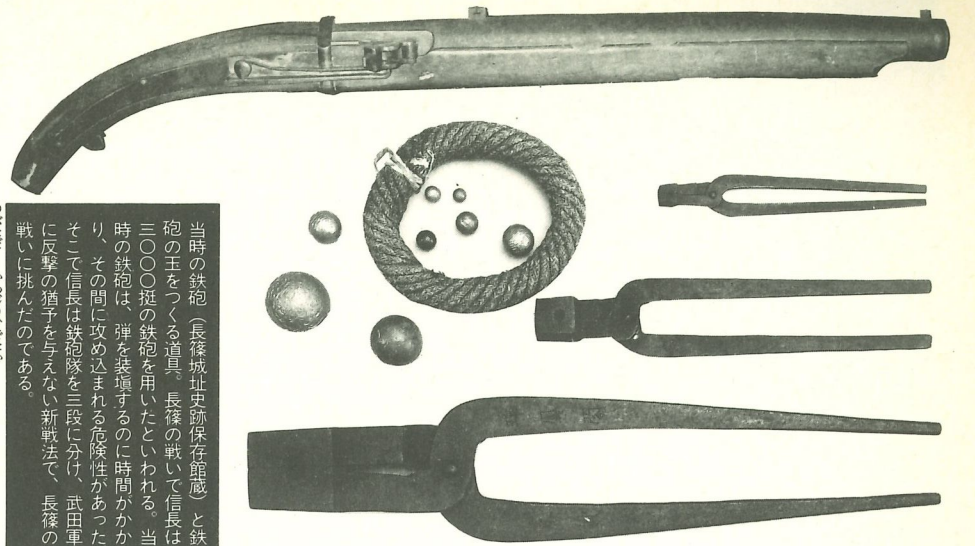
ただ、おもだった部将のほとんどは、織田軍の出動で、これほどおびただしい数の鉄砲が動員されたことは、前代未聞であることを認識していた。

古手の部将のなかには、

「鉄砲が多すぎて、かえって足手まといになろうぞ」と、不安がったり、ぐちをこぼす者もいた。

織田軍は、十七日、野田原に野営した。同盟軍の徳川軍団の到着を待ったのである。家康は、十七日に岡崎を発し、その夜のうちに野田城に入った。

翌十八日、野田原で合流した織田、徳川連合軍は、その日のうちに、設楽原に進出して、陣をしいた。

信長は、極楽寺山に本陣を置き、柴田勝家隊も本陣を固めた。

当時の鉄砲（長篠城址史跡保存館蔵）と鉄砲の玉をつくる道具。長篠の戦いで信長は三〇〇〇挺の鉄砲を用いたといわれる。当時の鉄砲は、弾を装塡するのに時間がかかり、その間に攻め込まれる危険性があった。そこで信長は鉄砲隊を三段に分け、武田軍に反撃の猶予を与えない新戦法で、長篠の戦いに挑んだのである。

天神山に、織田信忠、河尻秀隆が陣を張った。

御堂山に、北畠信雄、稲葉一鉄を配し、茶磨山に、佐久間信盛、池田信輝、丹羽長秀、滝川一益らが厚く陣をしいた。

その四高地の東面にあたる原野に、羽柴秀吉、蒲生氏郷、森長可、丹波長秀などが、横に長く奥行深く陣を張って、織田軍団は、あわせて三万あまりである。

家康は、織田軍に連なる形で弾正山に本陣を置いて、隣の松尾山に、長子の信康を配した。

そして弾正山の東面に、武田軍と対峙する形で、大久保忠世、石川数正、酒井忠次、鳥居元忠、本多忠勝、榊原康政など、譜代の猛将を中心に、びっしりと布陣した。

徳川軍は、あわせて約八〇〇〇である。

信長は、武田軍がすぐに動かないのを見ると、連子川沿いに、味方の陣の前に、長い長い空堀をうがった。

さらに、土塁を築いて、三段構えの柵を延々と張りめぐらせた。

ところどころに、出撃用の木戸をもうけた。

この三段構えの柵こそ、信長が鉄砲隊の威力を最大限に発揮できるよう、ひらめきとともに考案した迎撃用柵なのである。

武田の騎馬軍団の突進を防ぐ馬防柵だった。

信長は、布陣した直後に、武田軍が攻めてこず、馬防柵を築く余裕を与えてくれたがため、

（これで勝った）

と確信を持った。

勝頼が、もし、細かい情報を早くから収集することに意を注ぎ、その分析を慎重にやるタイプだったら馬防柵という驚異の戦法に気がついたかもしれない。

なにしろ、織田軍は、大量の柵木と縄と、おびただしい数の鉄砲を携帯して、長い道のりを行軍していたのである。

その行軍風景はかなり異様だった。設楽原に到着してからでも、おそくなかった。織田軍が、三段構えの柵を築きはじめたときに、旧来の武田軍団の戦法でいいから、強襲につぐ強襲をかけていたら、信長は馬防柵の構築をあきらめただろうし、武田軍団が勝利する可能性は、五分以上あった、とぼくは思う。

だが、勇将であっても、父信玄以上に武威を高めたいという野心に駆られるだけで、旧来の戦法から離れられないでいた勝頼は、織田、徳川連合軍の兵数の多さにこだわった。

うかつに攻められないぞ、とためらっているうちに、時を逸してしまったのである。

それでも、決戦を避け、甲斐に引き揚げれば、信長は深追いしてこなかっただろう。

ところが、勝頼は、馬防柵が完成したあとに、はやりにはやって、決戦を決意した。

馬防柵を防禦のためだと判断して、織田、徳川連合軍は、武田軍をおそれている、と早呑みこみしたのである。

勝頼は、騎馬軍団を馬防柵で迎撃して、徹底的にたたく、という、じつは、信長の積極果敢な作戦を読めずに、その罠にかかってしまった。

はやる武田勢は三段撃ちの鉄砲にしかばねの山を築いた

武田軍は、攻勢をかける陣形にするため、大挙して、寒狭川を渡り、清井田原一帯に陣形をしいた。

決戦を挑むためには、寒狭川を渡り、川に狭まれて、南北に細長い高原の設楽原に出なければならない。

織田、徳川連合軍は、馬防柵の内側にいて、討って出てこないからである。

いったん罠にかかった武田軍は、織田、徳川連合軍にとっては、もっとも迎撃しやすいところへ、ノコノコと出てきてしまったわけである。

勝頼は、本隊一万二〇〇〇を、四隊に分けた。穴山梅雪、馬場信春、土屋昌次ら右翼隊三〇〇〇、武田信豊、山県昌景、小山田信茂ら左翼隊三〇〇〇、内藤昌豊、小幡信貞、武田信廉ら中央隊三〇〇〇。

さらに、本陣に勝頼以下、武田信友、望月信雅ら三〇〇〇である。

ほかに長篠城のおさえとして、城の西方に、小山田昌行、高坂昌澄ら二〇〇〇を置いて、城方が側面を突いて討って出てくるのを防いだ。二十一日午前六時ごろ、山県昌景隊が、大久保忠世隊に突撃した。

昌景は、はじめ足軽隊を出し、鉄砲で前哨戦をやっていたが、徳川軍は、柵の外側に足軽を出して、撃ち返してくるばかりである。

武田軍の猛将としては、ものたりない。

「ひともみにもみつぶせ」

と、本備えの騎馬隊で襲いかかった。

信長の作戦は、徳川軍にも徹底されている。

いちばん外側の柵に出ていた足軽が、柵内に逃げこむと同時に、徳川軍の鉄砲隊が火蓋を切った。

騎馬武者が、ばたばたと落馬する。落馬しなかった者は、そのまま突撃する。第二段の鉄砲隊がいっせいに発砲し、山県隊は、またばたばたと落馬した。

だが、騎馬隊は、一度、突進すると、歯止めがきかない。そのまま、残った者たちは突撃した。

三段目の鉄砲隊が発砲し、さらに、犠牲者が出た。

それでも、いちばん外側の柵に達した騎馬武者は、なんとか柵を越えようとするが、そのときには、最初に発砲した鉄砲隊が、第二撃を行って落馬させた。

騎馬武者とともに突撃した足軽も、撃ち倒されて、草間に沈む。

小幡信貞隊は、第二陣として出撃したが、三段構えのいっせい射撃により、途中で、二〇〇〇のうちの半数が撃ち殺されて、残りは四散してしまった。

全戦線で同じようなことがくりかえされて、武田軍は、しかばねの山を築いた。

武田軍のなかでも、馬場信春隊は、信長の本陣前の柵を二段まで破ったが、柵に関係なく三段構えの射撃を行った佐々成政隊、前田利家らの三〇〇〇挺の鉄砲の餌食になり、退却を余儀なくされた。

信長の革新性に次々と斃れる戦国最強の勇将たち

こうして四時間前後の戦いで、武田軍は、昌景をはじめ、原昌胤、真田信綱、同昌輝、甘利信康、高坂昌澄などの歴戦の勇将を失ったのである。

信長は木戸を開いての総攻撃を命じた。こうなれば、殺戮しほうだいの追撃戦である。馬場信春、内藤昌豊も、討ち死した。

武田軍一万五〇〇〇のうち、それぞれの本国にたどりついた者は、三〇〇〇ていどだった。

こうして戦いの経過を見ると、武田軍は、結果的には壊滅しているが、部分部分の戦いを見ると、たかだか七、八〇〇の騎馬隊が、佐久間信盛を首将とする六〇〇〇の織田軍を崩したり、一〇〇〇の内藤昌豊隊が、約三〇〇〇の滝川一益隊を圧倒しており、武田氏の伝統を誇る騎馬軍団の強さは、じゅうぶんに発揮されている。

だからこそ、信長は、味方の半数に充たない武田軍をおそれたし、勝頼は、三万八〇〇〇の織田、徳川連合軍に対し、勝算を持っていたのである。

ちなみに、連合軍側も約六〇〇〇の死者を出している。武田軍は、この段階で、戦国最強の軍団だったとみていい。

信長は、馬防柵と三段構えのいっせい射撃の組みあわせで、危機を脱したのである。

天下無敵を誇った武田軍団を葬ったのは、鉄砲と足軽が勝負を決めることをいち早く悟った信長の革新思想と、発想の転換を生むひらめき型頭脳だった。

設楽原に復原された、馬防柵（写真提供・新城市役所）。鉄砲の「三段装塡法」とともに、百戦練磨の武田軍団を驚かせたのが、連子川沿いに築かれた、二千数百メートルにもわたる馬防柵であった。

波乱万丈！信長の戦人生 5 ストーリー

石山本願寺との長期戦

“天下目前”の信長に顕如率いる本願寺が十一年間、立ち塞がる

信長のもっとも長く、過酷な戦いが石山本願寺との対決であった。各地で起こる一向一揆、さらには義昭が暗躍した、浅井、朝倉、武田などの反信長の結集、毛利水軍との対決、どれをとっても一歩対処を誤まれば、天下統一は遠のく。これらを信長は類まれな“軍才”を発揮、講和もからめながら個別に撃破していくのである。

邦光史郎（作家）

「石山の地を明け渡せ」信長の難題に、本願寺はひそかに軍備を整えた

世にいう石山合戦は約一一年間つづいた。といっても一一年間、戦いつづけたわけでなく、途中、何度か休戦をくり返している。

石山本願寺は、摂津石山にあった本願寺本坊のことで、本願寺教団の本拠地だった。

もともと浄土宗の一派だが、親鸞を開祖とする浄土真宗は、親鸞の没後、京都東山の大谷廟所を中心に門弟が集まったことにはじまり、親鸞の曾孫で覚恵の子、覚如の代になって、天台宗青蓮院の末寺となった。そしてこの本廟が、やがて本願寺に成長した。

その後、蓮如の代になって、大教団にふくれ上がって、本願寺門徒は、近畿地方から中部地方一帯にひろがった。

組織者として抜群の能力を発揮した蓮如によって、巨大教団となったこの浄土真宗を、一向宗と呼んだのは、一向一心に阿弥陀仏を念ずるためだという。

天文二（一五三三）年、第一〇世証如の時、それまで本坊としていた山科（京都）の本願寺を戦火に焼かれたので、摂津石山に本坊を移した。

これが石山御坊であり、石山本願寺であって、“抜き難し、南無六字の城”と讃えられた法城となった。

石山城は、天下統一をめざす織田信長が大軍をもって攻撃したものの、攻めあぐんで自ら講和を提案するほど難攻不落のため、よほど堅固な城のように思われがちだが、寺内町を内部に抱え込んだ環濠城塞都市であって、はじめから戦闘用に造られたわけでなく、実際は“堀一重の要害”にすぎなかった。

大坂にあった石山城というと、ついに現在の大阪市と大阪城をイメージしがちだが、元は、淀川の押し流す土砂や堆積物によって生じた大小の島の集まりで、東に生駒山系、西に浪速の海を控えた上町台地の北端に本坊が所在した。

境内地の東端に猫間川という短い川が堀がわりに流れ、さらにそのすこし東側にこれは長々と延びた平野川が外堀となっている。

そしてどちらも淀川につづき、石山本願寺の北端は、島を抱えた木津川の上流に面していた。

西の海からは潮風が吹き渡り、北からは、淀川を越えて北摂の山風が届いてくる。

顕如画像（本願寺蔵）。本願寺第11世法主。武田、上杉などの反信長陣営と組み、信長と対決した。最終的には毛利輝元と手を結び、5年にも渡る信長の兵糧攻めにじっと耐え、反撃の機をうかがった。

方八町（約八七二平方メートル）という石山御堂の境内や門前には他屋といって末寺の詰所があったり、町屋が建ち並んでいて、各地から本山へやってきた番衆めあてに商いをする商家も多かった。

さらに多くの参詣人が連日各地からやってくるので、さながら一つの都市の観を呈していた。

この万を超える人たちのため、自治組織が設けられて、防衛と警察的役割を果たし、いったん事ある時には、番衆が何倍にもふくれ上がった。

何百万人もの門徒衆から納められる莫大な献金と、参詣者の志納金が、本山の金箱に唸っている。

この巨大な勢力と財力を見逃すはずのない天下布武の英雄織田信長はなんとか本願寺を手に入れようとした。さらにもう一点、軍事的大天才だった信長は、まず石山本願寺の立地条件に目をつけた。

この石山は淀川を通じて京につながり、木津川の川口に集まった諸国の船が、毎日のように各地の産物を運んでくる、いわば諸国の物資の集散地でもあった。

交通や交易の利便だけでなく、三方を川と海に囲まれた石山の地は、攻めるに難く守るに易い要害の地である。

——あの高台に本格的な城郭を築いたなら、それこそ天下一の名城となることだろう。

かねがねそう考えていた信長は、永禄十一（一五六八）年、足利義昭を奉じて京都に入ると、さっそく貿易港堺に二万貫、石山本願寺には五〇〇〇貫の矢銭（軍用金）を課している。

払う理由がないといって断ると、信長は尼崎を焼いて威嚇した。しかたなく本願寺は五〇〇〇貫の矢銭を納めた。

するとその翌年、さらに難題が降りかかってきた。本山のある石山の地を明け渡せというのである。

これは絶対に呑めない要求であるというので、本願寺側はひそかに戦備を整えた。

「石山合戦配置図」（大阪城天守閣蔵）。石山本願寺との戦いの火ぶたは、元亀元（一五七〇）年、摂津の野田・福島にいた三好勢を陥落寸前に追いつめていた信長軍に対し、本願寺側が攻撃を開始したことから切られる。それ以降一一年間に渡っての、長い戦いが続いたわけだ。信長の狙いは、門徒衆から集められる莫大な志納金と、淀川を通して京に通じる交通、交易の要所に当たる本願寺の立地条件のよさだった。しかし、事はそう容易には進まなかったのである。

信長包囲網、縮まる！弟を見殺しにした信長は屈辱的な和議を結ぶ

当時、信長は、岐阜城にあって、全国制覇を目ざしていた。ところが彼の上洛を阻む小谷山城の浅井長政の存在が気になるので、異腹の妹お市を嫁がせた。ところが浅井は、越前の朝倉氏と結んでいて、遂に叛旗をひるがえした。この浅井、朝倉の連合軍ばかりか、その背後には比叡山延暦寺といった強敵が控えていた。

その上、領国の尾張には北東に甲斐の武田信玄という難敵を抱えていて、中国の毛利、四国から南河内へと勢力を伸ばしている三好三人衆といった強敵ぞろいの包囲網にひしひしと取り囲まれていた。

さらに比叡山延暦寺という日本仏教界の大物を敵に回し、今また農民層や地侍たちを信徒にもつ真宗本願寺派に挑戦状を投げつけたのである。

たかが僧侶と農民の集まりと、はじめは高を括っていたのだろう、元亀元（一五七〇）年八月二十五日、京都本能寺の宿所を出た信長は、淀川を渡って、翌二十六日、石山本願寺の南方に位置する天王寺に陣を構えた。

本願寺側は、三〇か所から四〇か所に及ぶ砦や屯営のようなものを要所要所に設けて、雑賀衆の鉄砲隊を配している。

鉄砲づくりをしながら射撃にも励ん

でいる雑賀衆や舟を操る根来衆が、石山城の主戦力だが、法主である顕如は、一向宗徒の多い江北（滋賀県）の浅井長政や、水軍をもっている毛利氏、江南の六角氏といった反信長側の大名に連絡をとって、反信長連合の環を縮めるように工作した。

どんな場合でも籠城には援軍が必要で、まったくの孤立無援では、まず糧食弾薬が尽きてお手上げとなる。

そこで毛利の水軍に頼んで糧食を運んでもらい、さらに毛利の武士を派遣してもらって、戦いかたを知らない番衆の指導に当たらせた。

次に近江の六角義賢と結び、河内の一向宗徒に命じて三好の一党を援けさせて、側面から織田攻撃を仕掛けてもらった。

さらに顕如は、傘下の門徒たちに、法城に迫る危機を告げて、開山以来の仏法が今や滅亡に瀕していると訴えた。

そして紀州門徒に動員を命じ、東海、近畿の各地にいる門徒に一揆を起こせと促した。

けれど石山本願寺に本拠を置く顕如は、一向に立ち上がろうとしないばかりか、通常と変わらぬ法主の務めを淡々と果たしていた。

九月十二日、信長は、本営を進めて海老江に陣を移した。ところが翌早朝、今でいう台風、大風が雨をつれて西からやってきたため、淀川に逆流が起こった。それをみて、三好の一党が堤を破壊したので、淀川の下流に当たる低湿地帯の海老江は水浸しとなった。

驚いた信長は、陣を高みにある田園地域に移動して、高い矢倉を組ませた。

一方、顕如は、夜半に、早鐘を打ち鳴らして、兵を挙げた。そして雑賀衆をはじめとする三〇〇〇人の鉄砲隊に一斉射撃を命じた。

二十日になると、織田方の勇将野村越中守が戦死したため、信長も、これは容易ならぬ敵だと悟った。

しかも顕如の要請を受けた朝倉・浅井の連合軍に一向一揆が加わって三万人にふくれ上がった軍勢が近江の坂本に到着したという報せが届き、その大軍が大津、伏見、山科の各地に放火して、京都へ進撃しようとしているという急報が入った。

これは下手をすれば挟撃されるというので、信長は囲みを解いて京都へ引き上げていった。

その頃、顕如の指令に従って各地の一向宗徒が一斉に蜂起して、伊勢の北部にあった長島の一向一揆は、信長の実弟信興の居城を襲って、これを斃した。

弟を見殺しにした形の信長は、朝廷に働きかけて、本願寺と和議を結び、急ぎ帰国の途についた。

長島の一向一揆鎮圧、比叡山焼き打ち……個別撃破作戦にかける

四面楚歌の中で、屈辱的な和議によ うやく危地を逃れた形の信長は、これはどうしても石山本願寺の勢力を挫いておかないと、天下統一の妨げになるだろうと悟った。

そして石山本願寺を落とすためには、その背後にある朝倉、浅井、六角、三好の一党、つまりもっとも近い反信長同盟を崩しておく必要があった。

その手はじめとして、彼はまず目障りな長島一揆を鎮圧した。それも降伏を受け容れておきながら、一揆の老若男女をみな殺しにするという残忍さだった。この宗徒たちを見殺しにした形の顕如は涙をのんで信長に講和を申し出て、名物の白天目を献上した。

信長は、さらに反信長派の中心勢力の一つである比叡山延暦寺を焼き討ちにして、三〇〇〇人に及ぶと称された僧侶や坂本の町民を殺害、さらに朝倉、浅井を滅して、こんどこそ石山本願寺をと、隙を狙っていた。

その間に、顕如と結んでいた甲斐の武田信玄が、陣中で急死するという幸運が手伝って、反信長包囲網がすこしゆるんできた。

さらに越前の一向一揆が本坊から派遣された坊官（僧侶の代官）の内紛が生じたのを好機として、信長は兵を進めた。頑強さをもって知られた越前の一向一揆を鎮圧した信長は、安土に築城して、本拠地である東海地方と京を結ぶ要としようとした。

もっとも大きな宗徒団だった越前門徒衆を制圧された本願寺の法主顕如は、またしても三好康長、松井友閑を仲介者として信長に三度目の講和を申し入れた。

それも時間稼ぎのためで、顕如は、その間に雑賀から鉄砲を取り寄せたり、糧食の運搬基地として淡路島の岩屋に陣営を設けて、毛利兵を常駐させたりしている。

信長はその間を利用して、安土の築城を急がせた。北陸方面の門徒と石山本願寺との連絡を絶つためでもあった。

タイム・テーブル5

石山本願寺との長期戦

年月	出来事
元亀元（1570）年9月	●野田・福島に迫った織田軍に対し、顕如が紀州門徒に出馬を命じる。
同月	●浅井・朝倉の軍勢が迫り、信長、野田・福島の砦を引き払う。
11月	●長島一向一揆で居城・小木江城を攻められた織田信興が自害する。
同月	●朝廷を動かし、本願寺との和議が成立する。
元亀2年5月	●長島一向一揆討伐のため出陣するが失敗。氏家卜全討死、柴田勝家負傷。
天正元（1573）年8月	●朝倉氏に続き、浅井氏も滅亡。
天正2年9月	●伊勢長島の一向一揆を討伐。男女2万人を焼き殺す。
天正3年8月	●越前一向一揆を討伐する。
10月	●顕如、講和を求め、信長が受け入れる。
天正4（1576）年4月	●毛利輝元と結んだ顕如が再び兵を上げる。信長は明智光秀などに本願寺を攻めさせる。
7月	●織田水軍、毛利水軍に敗れる。
天正5年2月	●紀井・畠山貞政が離反。雑賀の一向宗門徒らとともに挙兵。
3月	●雑賀一揆を鎮圧。
天正6年11月	●九鬼嘉隆率いる織田水軍が毛利水軍を木津川河口で破る。
天正8年閏3月	●信長の講和を顕如が受け入れ、本願寺、大坂を退去する。

一向一揆の図（絵本拾遺信長記）。この当時、信長の頭痛のタネが、各地で起こった一向一揆だった。信長はこれらを越前や長島では武力で押さえつける一方で懐柔策も用い、無力化していった。

戦艦までつぎ込んだ五年にわたる兵糧攻めに顕如はたまらず屈服した

天正四（一五七六）年一月、まだ壁土も十分乾かないような安土城に入った信長は、四月十四日、明智光秀、原田直政、細川藤孝（幽斎）、荒木村重の四将に命じて石山本願寺の攻略に取りかかった。

五月三日、三津寺方面に迫った織田軍を、本願寺側は一万の大軍で、逆包囲して、原田直政を戦死させた。数千挺の鉄砲をそろえた門徒軍に圧倒された信長軍は、多数の死傷者を出し、急を聞いた信長はわずかに一〇〇騎ばかりの手兵を引きつれて、天王寺へ急行した。途中、追ってきた将兵を加えて、織田軍三〇〇〇、門徒軍一万五千余が天王寺あたりで対陣したけれど、そこは千軍万馬の精兵ぞろいで、織田軍が猛攻を加えたため、たまらず門徒軍は崩れて、石山へと退却していった。

それに懲りた信長は、尼崎、吹田、能勢、三田、茨木、高槻など一〇か所に砦を築いて、兵糧攻めに取りかかった。

一方、本願寺側も五〇か所の端城を設けて信長軍に対抗したため、それ以来、五か年にわたる籠城戦がはじまった。

だが孤立無援では、必ず敗れるというので、顕如は諸国の門徒に檄を飛ばすとともに、毛利の水軍に糧食を運んでもらった。

織田軍は陸上でこそ一騎当千の働きを期待できるが、海上ではまったくの無力だった。そのため毛利の水軍は、難なく織田方の抵抗を排して食糧を石山本願寺へ運び込んだ。

そこは戦術の大家信長のことなので、さっそく海上権を取り戻すため伊勢の九鬼嘉隆に命じて、鉄板で装甲した戦艦六隻を造らせたうえ、大鉄砲を積み込ませた。

これを堺港でみた宣教師オルガンチノは、本国（ポルトガル）でも数少ない戦艦をよくも建造したものと驚いてローマに報告している。

この戦艦を木津川の川口に配して、糧食を満載した毛利の水軍を迎撃して、大鉄砲を撃ち込んだため、毛利の水軍は敢えなく全滅した。

ところが荒木村重が叛いたため、信長は荒木の居城である伊丹の有岡城攻めに兵を回したので、その間、本願寺側は一息つくことができた。

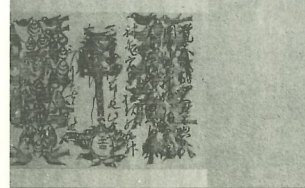
だが、唯一の支援者だった毛利勢の将兵が、信長の過酷な荒木一族の処刑を目にして引きあげていったため、本願寺はとうとう孤立無援となった。

しかも、戦艦六隻が木津川を遡上して攻めてくるというので、本願寺側は、朝廷に調停を依頼した。かねての献金が物をいって、関白が乗り出してきたけれど、信長は、講和の条件として、石山の明け渡しを要求して、あくまで譲らなかったため、遂に顕如は、門徒軍全員の助命と、諸国の門徒との交通の自由を条件に、ようやく屈服した。

天正八年四月、顕如の紀伊鷺ノ森退去をもって石山合戦は終結して、信長の勝利となったが、稀代の戦上手だった信長も石山攻めには四苦八苦して、やっと面目を保ったというべきだろうか。

信長・本願寺和睦起請文。元亀元年、顕如の指示により信長の弟信興が長島で攻められ、自害させられた。一方、信長も浅井・朝倉の参戦で窮地に追い込まれていた。信長は仕方なく、朝廷に働きかけ、屈辱的な和議を本願寺と結んだ。

波乱万丈！信長の戦人生 ストーリー 6

本能寺の怪

信長・弑逆の謎は不可解な徳川家康の数日の行動にあり

もはや信長の天下統一は誰の目にも明らかであるかに見えた。天正九年に京都で馬揃を行ない天下人としての勢威を示し、翌年三月には、最終的に武田氏を滅していた。中原に並び立つ勢力はない。あとは一気呵成に……それは信長の心づもりでもあったろう。しかし、同年六月二日、信長には予測もしなかった運命が待っていたのだ！

童門冬二（作家）

歴史を変える大事件は京都の寺の戸を叩く音から開始された

天正十（一五八二）年六月二日の未明、攻撃軍は京都本能寺の門の戸を叩いた。中から、

「何者だ？」と誰何する声が聞こえた。攻撃軍の先頭に立って指揮をとっていたのは斎藤内蔵助である。春日局の父親だ。斎藤はこう答えた。

「われらは明智光秀の手の者でございます。この度中国出陣につき、軍勢に新しい装備を致しましたので、是非とも信長様にご覧いただきたく、こうしてまかりこしました次第でございます」。向う側は、

「このような早朝に？」と訝し気な声を立てた。内蔵助は、

「何分にも中国への軍旅を急ぎますので」

と言い逃れた。門が開かれた。それっと内蔵助が采配を振り、軍勢は一斉に本能寺内に突入した。織田信長はすでに起きていた。本堂の縁側近くで、上半身裸になって、顔を洗い、体を拭いていた。突然乱入して来た軍勢に、「何だ？」と顔を振り向けた。その背に、明智勢の兵士が矢を射込んだ。信長は矢を引き抜き、すぐ、

「薙刀を持て！」といって、駆けつけた小姓の手から薙刀を取ると、明智勢と戦いはじめた。森蘭丸が駆けつけて来た。そして、

「御自ら薙刀を使って戦われるのは、御大将のなすことではありません。どうぞ、お退りください」と叫んで、信長の前面に立った。

信長は、

「それも理だ」といって、本堂の中に入り障子を閉めた。その背に、明智勢の一人が槍を振るった。手応えがあった。蘭丸は、その兵士を切り殺し、奮戦しはじめた。が、すぐ本堂から火の手があがった。本堂は燃えはじめた。紅蓮の炎の中で、信長がどうしたのかわからない。しかし、蘭丸も殺され、信長を護衛していた百数十人の武士がすべて戦死した後、明智勢は本堂の焼け跡に踏み込んだが、ついに信長の遺体を発見することはできなかった。

事件の前奏は、すでに中国の毛利攻めの大将選びから始まっていた

あれほど、情報通であり、諸所にネットワークを持っていた織田信長が、なぜ、この明智光秀の謀反を予想できなかったのだろうか。人間五十年を標榜していたかれが、四九歳になって、そろそろ死をのぞんでいたのでなければ、まさに〝油断〟の一言につきる。

この年の春に、甲斐の武田勝頼を滅ぼした信長は四月になって拠点の安土城に帰ってきた。京都朝廷では、天皇が勅使を派遣した。信長に、

「帝には、あなたを征夷大将軍に任じ、幕府を開いていただきたいというご内意があるが、お受けになるか？」

ときいた。信長は、

「考えさせていただきます」と応じた。

明智光秀書状（細川父子宛）。能吏であった光秀は、書にもその人柄が表れている。格式や儀典に詳しい彼のまじめさが、織田家中では災いしたのかもしれない。

しかし、腹の中では（征夷大将軍なら受けてもいい）と思っていた。

心のトゲとして、いちいちうるさい妨げになっていた足利将軍義昭も京都からすでに追放した。いまかれは備後（現広島県）の鞆にいる。再起不能だ。（これで、本当の天下人になれる）と心が躍った。

その直後、中国戦線の羽柴秀吉から、

「戦いの進展がどうも思わしくないので、御大将自ら指揮をとっていただきたい」

と申し出てきた。これは秀吉らしい処世術だ。中国戦線は、かれの思いのままに毛利勢を圧倒していた。秀吉にすれば、最後の花道を信長のためにあけておきたかったのである。信長は（猿め）と思いながらもこれに乗った。そのため、明智光秀をはじめとして、近畿地方の諸大名に中国出陣を命じた。が、この時信長は光秀を呼んでこういうことをいった。

「中国を攻め立てると同時に、四国も征伐する。四国征伐の総指揮は三男の信孝にとらせる。ついては、丹波国からも、軍勢、馬、兵糧などを持った武士を全部徴発する。おまえにしても、快いことではあるまいから、この際、丹波国は召し上げる。同時に近江に与えてある坂本一郡も取り上げる」

明智光秀（1528～1582）。光秀の出身については謎が多い。歴史に登場してくるのは越前の朝倉に仕える武将としてであった。朝倉に身を寄せていた足利義昭に、信長を頼ることを推めたのが光秀で、これ以後、信長とつながる。

光秀はビックリした。

「それでは私は無禄になってしまいます。いかなるご存念であらせられますか？」

信長は、光秀をじっと見つめながらこういった。

「代わりに、出雲と岩見の国を与える。おまえの裁量で、切り取った分はすべて自分の領地としてよい」

「出雲と岩見を？」光秀は信長を見返した。

「不満なのか？」

「いや、そういうわけでは……」

光秀は口ごもった。しかし心の中では、

（出雲や岩見の国を与えるといっても、まだ毛利の支配地で、織田の土地ではない。それを制圧するまで領地が得られないとすれば、俺は無一文になってしまう。それに、都に近い丹波国と近江に比べれば、出雲と岩見は僻地だ。信長様は、いよいよ俺を遠ざける気だ）

と感じた。

律儀な友・家康の不可解な行動が、じつは水面下で進行していた

中国出陣の命令を受けた時、明智光秀は安土にやって来た徳川家康と、武田家の一族で、勝頼を裏切った穴山梅雪の接待役を命ぜられていた。穴山梅雪は、武田家から駿河探題を命ぜられていたが、勝頼とうまくいかず裏切った。そして、徳川家康の案内役に立って駿河口から武田攻撃の先陣を切っていた。武田家を滅ぼすと、信長は、穴山に旧領を全部与えた。徳川家康には、武田の領地だった駿河国一国を与えた。

そのお礼に、家康と穴山が連れ立っ

てやって来たのだ。信長は明智光秀に接待役を命じた。光秀は堺や京都などから、美味を取り寄せ、供応に寧日なかった。
それが、突然の出陣命令である。光秀は拠点の丹波国亀山城(現亀岡市)に戻った。しかし、信長の手の打ち方は早く、三男信孝はすでに丹波国に入り込んで、武士を集め、馬や兵糧や弾薬、武器などを果敢に徴発していた。これを見て、光秀の腹心である斎藤内蔵助が怒りの声をあげた。
「信長公は、鬼道の人である。武士の心を持ち合わせていない人非人だ!」
と罵った。この斎藤のわめきが、次々と都に入った。特に、御所の公家の間で、斎藤の叫びが評判になり、
「明智殿は、信長公に背くのではないのか」
という噂が流れはじめた。この噂を真っ先に聞いたのが、京都の商人茶屋四郎次郎である。茶屋は、前々から家康と昵懇で、今度の家康・穴山一行に対しても、何くれとなく面倒を見ていた。茶屋は、この噂を聞くとすぐ京都見物中の家康のところに行った。そしてこれこれだと告げた。家康は茶屋の顔を見、穴山の顔を見た。
「すぐ、信長様に告げたほうがいいな?」
といった。ところが、穴山と茶屋は顔を見合わせてから、共に顔を振った。
「いや、このことは信長公には申しあげないほうがいいでしょう」
「なぜだ?」家康の目の底が光った。穴山と茶屋は共に意味深長な目付をした。その目の底から、家康はある意味を読み取った。三人の顔の見合いが続いた。家康はやがてうなずいた。
「なるほど、では、このことは信長様には黙っていよう」
「そのほうがよろしゅうございます。第一、いまの信長公は、このような噂を聞く耳を持ち合わせていらっしゃいません」
「それもそうだ」
老獪な家康はクスッと笑った。茶屋と穴山はホッとして肩を落とした。

光秀を織田軍団に加えた信長は、異例の抜擢人事で光秀を引き上げてゆく。一五六八年に京都奉行、七一年に近江坂本城主、七五年には惟任の姓を与え丹波亀山城もまかせた。

タイム・テーブル❻

本能寺の怪

天正10(1582)年3月	●武田勝頼、3月11日田野で自刃し、武田家が滅びる。
4月25日	●朝廷では、信長を太政大臣か関白か将軍に推挙することを決定する。
5月4日	●信長に推挙を伝えるため、勅使が安土に下向。
12日	●信長、安土にて自らの誕生日、5月12日を「聖日」として安土の摠見寺に参詣することを命じたとルイス・フロイスは伝える。
15日	●徳川家康と穴山梅雪、安土を訪れる。その饗応役を明智光秀に命じる。
19日	●摠見寺で幸若八郎九郎大夫の舞を見物。家康も同席。
21日	●家康、安土を発って京都へ向かう。
26日	●光秀、中国攻め応援のため坂本城を出て丹波亀山城に入る。
29日	●信長、安土を出て上洛。本能寺に宿泊。
6月1日	●本能寺で茶会。公家らも訪問し信長の上洛を賀す。同日午後6時ごろ、光秀、亀山を出る。
2日	●午前0時すぎ、光秀は条野付近に至る。早朝、本能寺および二条城を攻撃。信長死す。
4日	●堺の家康は、伊賀越えで三河に戻る。穴山梅雪は死亡。

天主となった男に地上の陰謀は、かえって見えなくなっていた

茶屋たちが、家康に、
「いまの信長公には、聞く耳がございません」
といったことは当たっていた。信長は、自信過剰になっていた。かれは、少し前に織田家にずっと仕えてきた忠臣の佐久間信盛、林通勝などを追放していた。佐久間信盛に対しては、
「大坂石山本願寺詰めの時は、五年も年月をかけながら総攻撃の大将の一人として、何もしなかった」というのが罪だ。林通勝は「二五年前、おまえは俺の弟信行を立てて、俺を殺そうとした。その罪は重い」というのが罪状だった。

森長可画像(可成寺蔵)。森家はもともと美濃国守護土岐家に仕えたが、主家滅亡後は浪人。信長に見出され、織田家に仕えた森可成の次男が長可である。三男が、本能寺の変で信長と運命をともにした長定すなわち蘭丸である。四男の長隆、五男の長氏も本能寺で死亡。長可も、後の長久手の戦いで討死している。

呆れた話だ。石山攻めはずっと前の話だし、林の謀反については、信長自身がいうとおり、二五年も前の話なのである。それをむしかえして、いま罰するというのは、一体どういうことなのだろうか。信長にすれば、
(俺はいよいよ天下人になる。俺に背いた者は、たとえ今は忠義面をしていても信用しない。逆に、古い罪を思い出させてみせしめにする。だから、その血祭りに佐久間や林を罰するのだ)
と考えていた。
そして、そういう奇態な処罰をしても、罰せられた当事者や周囲が反乱を起こさなければ、それだけおれの威令が行き渡っているのだ、と信長は考えた。佐久間と林の処分はその実験である。
もう一つ、時の帝正親町天皇は、しきりに信長に気を使っていた。皇子誠仁は、信長の猶子(養子)になっている。安土城にやっていき勅使に対して、信長はこういう返事をしていた。
「帝が、誠仁親王に帝の位をお譲りになったら、この度のお話をお受け致しましょう」
勅使は呆れ返って信長の顔を見た。信長は、
「自分の養子が天皇になったら、征夷大将軍を引き受けよう」といっているのだ。現帝は早く引退しなさい、ということだ。皇位への不当な干渉であるが、これもどこまで本気なのかわからない。勅使をからかったのかも知れない。しかし、暴言である。が、この頃は信長にこれだけの暴言を吐かせるだけの実力が備わっていた。甲斐の名族武田氏を滅ぼして、そっちの方面の障害を除いた信長は、いまはうけに入っていた。すでに、天下を取ったのと同じような気持ちでいた。
勅使は、安土城を去る時に振り返って、山道から山頂の本丸を見た。普通、城の最も高いところにある建物を天守閣という。ところが信長は天主閣といっているそうだ。バテレン(パードレ。キリシタン神父のこと)たちにいわせれば、
「信長は、自分がデウス(天主)と思っているのに違いない」
と噂していた。あり得ることだと勅使は思った。それほど世間の人々から見ると信長は思いあがっていた。
そんな信長だから、京都御所内で公家がしきりに噂している。
「明智光秀が謀反を起すかも知れない」
という話も、おそらく笑い捨てるだろう。
「あのキンカン頭(明智光秀のこと)に、そんな度

京都市中京区にある現在の本能寺。事件当時は六角大宮にあったが、焼失後、秀吉によって現在の地に移された。本能寺で繰り広げられた光秀の謀反・信長弑逆については、古来、諸説が唱えられてきた。しかし今に至るまで、その動機ははっきりしていない。確かなのは、それまで出世街道のトップを走ってきた光秀が、事件当時、中国攻めの人事で秀吉に後れをとってしまったことである。

本能寺の変が起こったとき、徳川家康は堺にいた。家康は、信長にとり「律義な盟友」であったが、息子・信康を自害するよう強要されるなど、信長に対しては反感もあった。

胸があるわけがない」と歯牙にもかけないはずだ。

徳川家康は世間で「信長の義弟」と見られている。その家康が、もし茶屋四郎次郎から聞いたことを信長に告げれば、さすがに信長も考えたに違いない。信長が、もっとも信頼している同時代人は徳川家康以外なかった。家康は〝律儀な家康殿〟と呼ばれるほど、信長との同盟を守り抜いた。三方ヶ原(みかたはら)の合戦など、家康の拠点浜松城のはるか遠くを通り過ぎる武田信玄をそのまま見送ればいいものを、信長との盟約を守るために、わざわざ出陣して大敗を被った。それほど、家康は信長に対して盟約を守り続けていた。だから、もし家康が、

「明智光秀の臣、斎藤内蔵助が、こういうことを公言している」

と告げれば、信長も考えたに違いない。それを家康は告げなかった。茶屋四郎次郎と穴山梅雪の意味ありげな目配せによって、思い止まってしまったのである。

生き証人・穴山梅雪は伊賀の山中で密かに殺され史上最大の謀略は葬られた

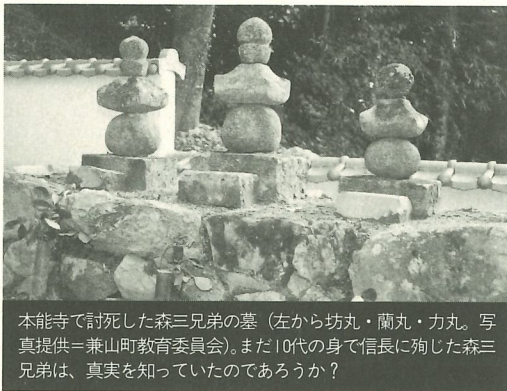
本能寺の変が起ったことを、家康に真っ先に告げたのも茶屋四郎次郎である。家康はこの時堺の町を見物中だったが、いきり立って叫んだ。

「これからすぐに京都にとって返し、明智光秀と一合戦する!」

この時も、穴山梅雪が脇にいたが、茶屋と一緒になって止めた。二人には、家康の激昂がどこか芝居じみて見えた。茶屋は、

「ともかくここから脱出して、一刻も早く岡崎にお帰りになるべきです。明智勢がおそらく追撃して来るでしょう。私がご案内に立ちます」

といった。

茶屋四郎次郎は、そこからすぐ案内に立った。かれは、店からありったけの金を持って来ていた。それを袋に入れて首にぶら下げていた。家康の脱出行は、ここから伊賀越えをして伊勢に出、伊勢の浜から船で海路三河に辿り着き、岡崎に戻る。しかし伊賀の山中には山賊が沢山いた。また明智光秀の謀反の報を得た地方豪族が、こういうカモを待ち構えていた。それを茶屋は金をばら撒きながら、通過して行った。そして、この脱出行の途中、穴山梅雪は土賊たちに殺されてしまう。しかし、これが偶発事故なのか、それとも家康と茶屋が心を合わせて仕組んだことなのか、真相は謎だ。そしてもっとわからないのは、家康自身が茶屋と穴山の進言によって、明智光秀があるいは織田信長を殺してしまうということを、予測していたかどうかということである。

本能寺で討死した森三兄弟の墓(左から坊丸・蘭丸・力丸。写真提供=兼山町教育委員会)。まだ10代の身で信長に殉じた森三兄弟は、真実を知っていたのであろうか?

織田信長は、もちろん自身の思いあがりによって油断したこともある。が、徳川家康が斎藤内蔵助のわめきを伝えなかったことも、かれが明智光秀の謀反を予測できなかった大きな原因であるはずだ。

そういえば、信長・徳川連合軍の武田攻めも「家康の謀略だ」という説がある。武田信玄との戦いはともかく、武田勝頼との争いのメインは家康であって、信長ではない。この戦いに信長をまきこんだのは、

「家康は、信長の力をそごうとしたのだ」

という憶測を生んだ。〝律儀な徳川殿〟がタヌキおやじになるのは、大坂の陣の時だといわれるが、実はもっと早い時期からだったのかも知れない。

その秘密を知る証人の穴山梅雪は、巧みに伊賀の山中で殺されてしまった。

もっと勘ぐれば、家康はほとんど部下を連れずに京都や堺を見物していた。そういうゆとりある態度を信長に見せつけ、信長の虚栄心を煽った。信長も糞っという気持ちになって、本能寺にはほとんど部下を泊まらせなかった。茶屋四郎次郎の知恵によるのだろうか。

信長自身の思いあがりと、家康の情報遮断が、ついに明智軍の突入まで、信長にその事実を予測させなかった。

「安土」城命名の意味を探る　井沢元彦(作家)

「策略渦巻く織田家中」　広瀬仁紀(作家)

「いつ天下を望んだか?」　檜山良昭(作家)

「権威を求めぬ男の覇道心理」　小林久三(作家)

謎に包まれた信長のディテール

狂気か天才か

信長のミステリーを解き明かす

歴史に謎は多い。戦国の世を鎮圧した希代の武将・織田信長も、さまざまなミステリーに彩られている。当代一流の作家たちが、信長の「動機」を読み解き、新しい"天下人"の姿を浮かび上がらせる。

天才か 狂気か

1

「安土」城 命名の意味を探る

平安楽土!? 「AZUTI」に信長は何を託したのか？

信長は命名の達人である。
しかし、中国の故事からとった
「岐阜」に続く安土のネーミングは
いまだナゾに包まれている。
本能寺の変さえ起こらなければ、
いま「大阪」は、「ノブナガブルグ」と
呼ばれていたかもしれない……。

井沢元彦
（作家）

ロシアの大都市レニングラードが旧名のペテルブルグに（正式には聖ペテルブルグ）に戻された。

ロシア革命華やかなりし頃には、とても考えられなかったことだが、これも時代の流れかもしれない。

ところでこのレニングラードがロシア革命の英雄レーニンを記念して命名されたことは御存じのことと思う（グラードはロシア語で「町」の意味、すなわち「レーニン町」「あるいは市」ということ）。ではペテルスブルグはどうか、これもある英雄の名をとっている。これもロシア史の上では常識の、あのピュートル大帝である。

ピュートルというのはロシア式発音で、英語ならピーター、イタリア語ならピエトロ、ラテン語ならペトルスになる。それでは、ペテルブルグと、どうして言うのか？

ザルツブルク（意味は「塩の町」）等の地名でおわかりのように、これはドイツ語である。これがアメリカ人ならもともとは「ブルグ」でも、自分たちの読み方で読む、たとえばゲティスバーグのように。

それなのにれっきとしたロシア人がどうして「ペテルブルグ」などというドイツ語を使うのか？

実は帝政時代のロシア人というのはドイツ語かぶれだったのである。正確に言うと貴族はフランス語で、知識階級はドイツ語だった。自分の国の言葉よりも、外国の言葉を重んじていたのである。

あのレーニンにしてからが、共産主義に関する論文はほとんどドイツ語で書いている。ペテルブルグがペトログラードになったのは、ドイツが革命ソビエトの敵に回ったからだ。だが、このペトログラード時代は長くなかった。10年の後、今度はレニングラードと改められたからだ。そして今、ロシア語のペトログラードではなくドイツ語のペテルブルグに戻された。

伝統というのは不思議なものだ。

もっとも、ロシアというのは外国かぶれのどうしようもない国だな、などと思ってはいけない。

なぜなら日本の首都は何というか？

東京ではないか。この「東」も「京」も、もとはと言えば中国語である。確かに今は「とうきょう」と日本語の発音で読んではいるが、これをたとえば純粋な大和言葉の「あずまのみやこ」と読もう、あるいは「中国文字」を使うのはやめて、ひらがな書きにしようと主張する人はいない。

伝統というのはそういうものである。

日本に"アレキサンドリア"は存在しない

しかし、ここで一つ気が付くことがある。

日本ではそういう英雄の名を冠した地名（都市の名）が一つもないという事実である。

もちろん山や谷の名としてはないでもないが、源義経を記念しての義経町とか、坂本龍馬を記念しての龍馬市などはない。

もっとも、下の名ではなく姓のほうなら、ないこともない。

日本を代表する経済人（一族）の名を冠した市だといっても、なかなか頭には浮かんでこないだろう。

それは愛知県豊田市である。

徳川家康の故郷三河にあるこの地は、筆者が子供の頃は（だからそんな昔ではない）挙母と言った。それを世界的大企業トヨタ自動車の本拠地であることから、豊田市と改めたのである。日本は地方自治のシステムをとっている。市名の変更は市議会でできる。また、個人の名ではないが似たような経緯をたどったのは奈良県の天理市だ。これは天理教の本部があることから、そのように改名したのである。

なぜ、こんな例を長々とあげたかというと、日本では現在ですら個人の名前（姓ではなく）をつけた市はないということを、理解して頂きたかったからだ。

外国では英雄や有名人の名を冠した都市は決して珍しくない。

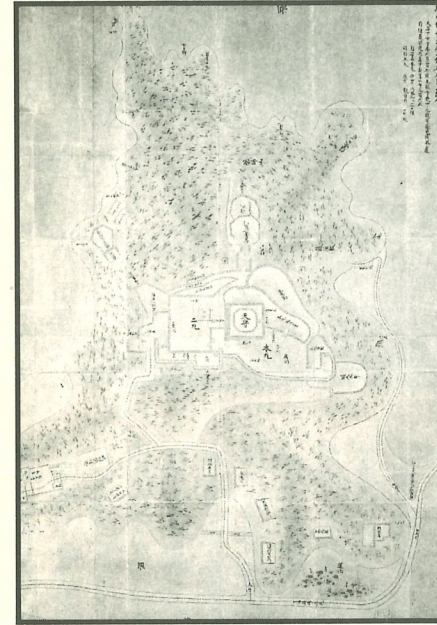
東ローマ帝国の英主コンスタンチン大帝を記念して、コンスタンチノープル（現在のイスタンブール）が建設されたり、マケドニアのアレキサンダー大王はアレキサンドリアを作った。

しかし、東洋とくに東アジア世界ではそんな例はまったくない。

それは東洋では人名を気安く呼べないというタブーがあるからだ。大河ドラマ「太平記」の主要な登場人物の一人後醍醐天皇は本名を「尊治」というが、当時でも現在でもその名を口にする人はいない。どうしてそんなタブーができたのか、これも興味ある問題だが、本稿のテーマとは関係ないので割愛させて頂く。興味のある方は拙者『言霊』祥伝社刊をお読みください。

先程、英雄の名を冠した都市はなく、姓を冠したのも豊田市以外にないと言ったが、おそらく太平記ブームの今日では、それなら足利市はどうだ、新田郡はどうだ、と反論が返ってくるだろう。或いは平家物語に詳しい人は木曾福島はどうだと、言うかもしれない。

だが、これらはすべて逆なのである。

もともと足利、新田、木曾等は地名としてあったのだ。そして源氏の一族がそこに住みついた時、地名からとって姓にしたのである。自分の姓をつけたのではない。

安土城古図。天正3（1575）年、信長は岐阜城を信忠に譲り、年が明けてすぐ、安土城の築城に取りかかっている。そして2月には建物の一部が完成するほどの猛スピードであった。その結果、工事中、多くの犠牲者が出たといわれる。そして天正7年には、天守閣の内装だけを残して、ほとんどが完成している。那古野→清須→小牧山→岐阜、そして安土と、信長は天下統一にとってもっとも合理的な地を本拠としてきたのだ。

これは想像だが、おそらく言霊信仰の盛んな日本では、安易に地名を変えることは許されないと考えられていたのかもしれない。

あるいは、ひょっとすると、地名を変えるのは天皇の大権と考えられていたのかもしれない。

"命名の大権"を天皇から奪った男

これはとっぴな考え方に見えるかもしれないが、実は姓を新たに決めるということは天皇の大権なのである。

実は今まで「姓」と「苗字」を混同して使ってきた。この二つは同じものと考えられているが本来は違う。足利尊氏で言えば「足利」は苗字であり姓は「源（氏）」である。織田信長なら「織田」は苗字で姓は「平（氏）」だ。俗に四大姓として「源・平・藤・橘」というが、これはいずれも天皇の大権によって下賜されたものだ。藤は「藤原」である。古代史に詳しい人なら、大化の改新に功績のあった中臣鎌足に、天智天皇が「藤原」姓を与えたことを思い出して頂けるだろう。

あの「豊臣」も秀吉がわざわざ朝廷に願って賜った新姓なのである。

ここで再び地名の話に戻るが、地名を改たに命名するということも、日本の歴史の中では、少なくとも古代史の中では天皇家しかやっていない。特にヤマトタケル神話では、地名の由来がタケルの事績に基づくことが何度も語られているし、都を移すにあたって「平城京」「平安京」という名をつけたのも天皇たちである。

つまり歴史の本にはまったく書かれていないが、日本には地名をみだりに変えてはいけない、それは畏れ多いことだ、という観念がずっとあったに違いない。西洋では、支配者が替わったり帝国が発展したりすれば、必ずそれに応じて地名の改変が行われるというのに（コンスタンチノープルがイスタンブールに変わったのもそれである）。

その観念を破ったのが信長なのである。

現在の安土城址。安土は琵琶湖湖畔にあり、当時、交通の要所であった。まず中山道と北陸道ののど元に位置していたうえに、琵琶湖で快船を用いれば、京都まで半日しかかからない。また信長にとって、安土が岐阜と京都のちょうど中間地点に当たることも、重要だった。信長はここに城を構えることで、中京圏と近畿圏の両方を掌握しようとしたのだ。

信長は周知のごとく美濃稲葉山城を奪った際、それまで井の口という名であった町を「岐阜」と改めた。

よくよく考えてみれば、あの斎藤道三も北条早雲もしていないことである。西洋ではあたり前のことなのに。

信長は征服した土地の名を次々に変えていくということで、支配者が変わったことを印象づけようとした、日本史上初めての男なのである。

このことは今までの歴史書にはまったく触れられていない。盲点というのはこういうことかもしれない。

「平安楽土」と安土を結びつける都市

それがなぜ盲点となってしまったのか、それは信長以後、その影響を受けた武将が次々と同じことをやったからだ。

いま思いつくだけでも、豊臣秀吉が近江国今浜を長浜と変え、蒲生氏郷が陸奥国黒川を若松と変え、加藤清正が肥後国隈本を熊本と変えている。そういえば「石山」を「大坂（大阪）」としたのも秀吉だ。秀吉は地名に「大」とか「長」とか「大きい」ものをつけるのが好きなようだ。一方、信長の娘婿で大器と言われた蒲生氏郷は「松」という目出たい字が好きで、「松阪」や「若松」を考えている。一方、清正は縁起をかつぎ「隈」では「丘」を「畏」れる、ので熊と改めている。そういえば明治の頃、大坂が大阪になったのも、「坂」の字は「土」に「反」るので縁起が悪いとされたからだという。こうした例はまだ沢山ある。

その師匠である信長はどういう好みか？

明らかに彼は、秀吉や清正のような「一字改変派」ではない。

岐阜などという「中国読み」の地名は極めて珍しい。東京を「あずまのみやこ」と読むのと、読み方の奇妙さではいい勝負だろう。当時の人はおそらく変な顔をしたに違いない。

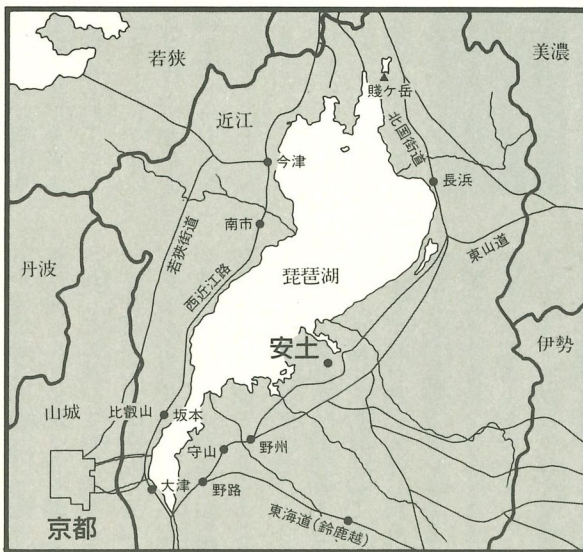
これは中国の周王朝が岐山という場所から起こったことにちなんだものという。

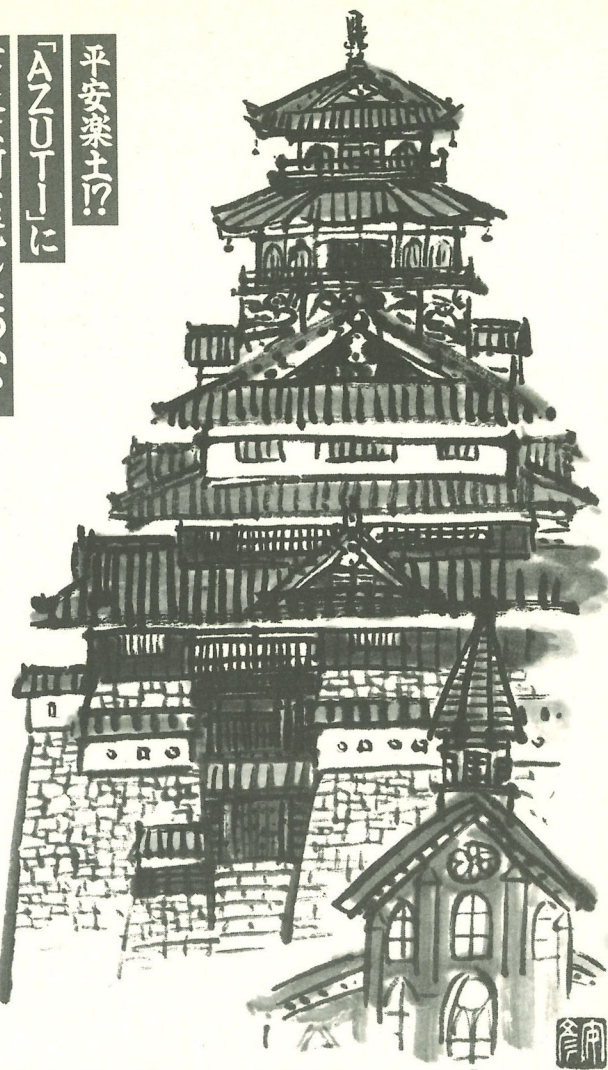
では、岐阜の次の根拠地である安土はどうか？

実は信長がどうしてあの地を「安土」と命名したかについては定説はない。

元からの地名だったのではないかという説も有力で、その説をとる人の中には、岐阜についても「岐蘇（木曽）川」のほとりにあった地名だったろう、と言う人もいる。

つまり信長の積極的関与を否定する立場だ。岐阜の命名が周の故事に基づくということは文献もあるのだが、それも信頼できないということらしい。

だが、わたしはいま確信している。そういう地名由来説はまちがいである。

地図で見ると、京都は琵琶湖をはさんですぐ向こうに位置する。信長の時代、そこには古い権力の象徴・平安京があった。近代の扉を開いたパイオニア・信長は、実は平安京以上の都を安土に築こうとしていたのだ。

平安楽土!?「AZUTI」に信長は何を託したのか?

なぜ、そう言えるか。

それは安土の地名が、断じて偶然に命名されたものではないからだ。

安土という漢字の組み合わせから当時の人間に容易に連想できる言葉がある。

平安楽土、意味は解説するまでもない。

もっとも、なんだそんなことかと顔をしかめる人がいるかもしれない。安土の地名が「平安楽土」に基づくということは既に指摘されているからだ。

しかし、この説には反対者が多い。それは中国の故事に平安楽土のエピソードがなく、平安楽土と安土を結びつける理由が何も発見できないからだ。

逆にそれさえ発見できれば、安土は平安楽土からとったのだ、とはっきり断言できる。

安土の果てには「ノブナガブルグ」があった!?

その理由を私はとうとう発見した。

これはあらゆる信長研究者が誰も気が付いていないことだ。実は私もこの夏に安土を再訪するまで、気が付かなかった。いや正確に言えば自宅へ帰って、ぼんやりと近畿地方の地図を見ていて初めて気が付いたのだ。

ぜひ地図を見て頂きたい。ヒントはこの文中にある——。

おわかりだろうか。

琵琶湖をはさんで反対側には何があるか、天子のおわす都——すなわち平安京である。

もうおわかりだろう。

明らかに安土という名は、日本の古い権力を象徴した平安京に対抗して命名されたものだ。平安京に対する、それ以上の都である平安楽土、神を目指したという信長に最もふさわしい名ではないか。

ああ、どうして今までこんな簡単なことに気が付かなかったのだろうか。

今まで誰も気が付かなかったのが不思議に思えるほどだ。

しかし、信長はあくまでこの城を天下統一の中間点としてしか考えていなかった。

それは安土城の位置から考えてもまずまちがいない。だいたい安土は海に面していない。

もちろん最後の根拠地は今でいう「大阪」である。今でいう、と言ったのは、信長ならそういう名をつけなかっただろうと考えられるからだ。信長のネーミングの原則は「中国の故事」か「抽象的理念」である。もっとも「平安京」というのも「長安」のイミテーションだから、「平安楽土」である安土も〃中国〃路線にあると言えないこともない。

では、信長が本能寺で死ななかったら、大阪はどういう名になったか。

ここで思い出すのは、岐阜が中国周王朝の発祥の地からとっていることだ。となれば当然、天下統一の際には中国の王朝の都の名にちなむに違いない。

まず洛陽か長安か、それに類する名だろう。

さらに想像をたくましくすれば、信長は南蛮にも進出し、彼等の習慣にそって、どこかに「ノブナガブルグ」「ノブナガグラード」を作ったかもしれない。

彼は自らが神として崇拝されることを望んでいたというのだから。

義昭がシナリオを書いた？
信長謀殺に密約があった

天才か 狂気か

2 策略渦巻く織田家中

広瀬仁紀（作家）

光秀が謀った本能寺の変当時、
秀吉、そして家康にも
不可解な行動が目立った。
「信長は天位を窺うのか……」
公家の不信、義昭の復讐、
そして獅子身中の虫たち。
本能寺に「密約」はあったのか!?

何かと諸説はあっても、譜代中の丹羽長秀が佐和山城に、羽柴秀吉が長浜城に配置されたと同様、明智光秀も琵琶湖畔要所の坂本城にいた。織田家の家中で、不遇だったわけではない。

現に、これぞ光秀謀反の決定的原因――だと、織田信長の旗本で相手の身辺の消息に通じていた太田牛一記述・信長公記を原本に採ったというにもかかわらず、当の太田がまったく書き残していない事態を、その場に居合わせたはずがない医師・小瀬甫庵がなぜ、そのあたりを知り得たのか、そちらの考証は抜きで、専一にその著述・太閤記に準拠の説が、結果的には〝決定的な事実〟になってしまった。

《徳川家康来訪に備えた信長は、光秀にその饗応を命じた。光秀は贅を惜しまずに応じて見せた。そうであったにもかかわらず、魚類の臭気がなどと瑣細を口実にした信長の勘気によって罷免の光秀は、さらに羽柴秀吉の下風に立たざるを得ない中国筋攻略参陣の下知を聞かされて激怒、用意の道具・饗応の物のことごとく安土城の堀あるいは琵琶湖に投げうち、坂本城に戻った。その直前に信長が長谷川秀一を、城下の明智屋敷に上使で差し立て、まだ織田家の領分ではない出雲・石見二か国を明智に知行するかわりに、近江の数郡と丹波一国は召上と伝えさせた。要は出陣を前に光秀は無一文になったと言っていい。この体にては合戦のほど思いもよらずと明智は謀反に踏みきらざるを得なくなった。だからこそ……》

という次第になったのであろうけれども、従三位大福左衛門督吉田兼見の日録・兼見卿記の同日の記述に、

……惟日在住荘之儀、自信長被仰付、此間用意馳走以外也

……

そう書いた。惟日とは明智が織田家に許された新姓、いわば次の段階での九州侵攻に際して便利のために、九州名族から採った姓氏・惟任と官名・日向守を合わせた略称だが、要は休暇中だった明智光秀が饗応役に任ぜられた結果、見事な仕様で接待を済ませたというのだから、罷免だの解任だなどあり得ないと、推論する外にない。

饗応を終えたら出陣では苦労に違いない――何やら同情するかの響きも感じられないではないのが、あるいは謀反の誘因と勘ぐられたのかも知れないのだけれども、自身の立場と主人の信長の性格を計算し抜いていたに違いない光秀にしたら、その程度で謀反を決意とは、考え得る状況ではなかった。

何より彼より以前の明智光秀の境遇で言うなら、いくら室町幕府直参と胸を張ったところが、方寸に足る知行地とて皆無だったのに、現状で所領の丹波一国は、慶長五（一六〇〇）年から元和五（一六一九）年にかけての石高の計算で、八藩に天領一か所を合わせて二八万石余、実高でとなれば、おそらく三〇万石を超えたに違いない。

同様に坂本城主の所領・近江数郡が十数万石。明智家所領は五〇万石に近い石高になっていた筈だ。

仮に、出雲と石見の二か国をと、出陣を前に告げられたにもせよ、切り取り勝手は、戦国で最大の許認というべきで、その石高は江戸幕府創成時で四藩・二九万石と三藩・九万石、計三八万石だから、明智光秀は八〇万石を超えた大大名になり得たに違いない。

感謝こそすればとて、光秀が織田信長を憎悪しなければならない理由は、皆無、と言っていい。まして謀反などは、論外の事態であった。

それにもかかわらず、明智光秀は謀反に踏みきった。

何が原因になったのか？ やがて推論で考証するが、本能寺の変の四日前の五月二十八日に光秀が愛宕社に参籠している事実を見ても、謀反を決意したのは相違ないにもせよ、十五日から十七日の饗応を無事に終え、備中に侵入し湖面に浮かべた高松城と、派兵後詰の毛利輝元四万の軍勢と、こちらは三万の勢力で対峙の羽柴秀吉が送りきたった救援状で、即座に自身出馬を決めた信長の下知により、明智光秀と寄騎・長岡（細川）藤孝以下の備中先鋒は、すでに饗応初日に決まった軍令だから、いまさら不足だ遺恨だに変わったりする問題ではない。

織田信長画像（本能寺蔵）。信長の天下統一への意志は、何者も近づけない鬼気迫るものがあった。それが獅子身中の虫を抱える因になろうとは……。天正10（1582）年6月2日早暁、信長は「是非もなし」とつぶやくのである。

当然、明智光秀の失意だ怨恨だは、生じようもなかった。

そうだというのに、なぜ、謀反と極端な展開に発展してしまったのかを、次の主題にして記述を進めたい。

古い権威を笑うかのごとく信長は次々と官職を辞退する

天正四（一五七六）年春に安土城に移った織田信長は、十一月下旬早々に、御所の席次で「三公」と敬される左大臣・右大臣につぐ内大臣就任は、正三位叙任の同月に発令された。

さらに驚くべきは、翌年の同時期に従二位に昇任後、右大臣に補任された。

宮中の常識でなら破格、と言うほかにないが、織田右府の栄達は止まるところを知らず、翌天正六年一月六日には正二位に叙され、もはや朝臣中の朝臣、と言う以外にはなくなった。

そうであるにもかかわらず、さながら古き権威を嗤うかのごとくに、同年四月上旬になって、信長は官位官職のことごとくを辞任した。

さても信長なる者は……!? 最初は、その程度に驚き呆れてすませた堂上も、次第にそうとばかりは言っていられない不安、危惧に取り憑かれざるを得なくなった。

第一、朝臣でない者ならば、そうそう用件があろう訳もない都の中に、頻々と無官の信長の姿を見たから、だった。

天正五年十一月十四日未明の上洛に始まって、翌春三月から十二月中旬までに七度の上洛となった日には、前右大臣は何を気ぜわし気に、などと囁きかわしているばかりでは埒もあかない。

しかもこの間の織田信長が、三公のすべてを歴任し、天文二十二（一五五三）年から永禄十一（一五六八）年までの一五年余を摂政関白で居続けた近衛前久（晴嗣）と、しきりに懇親を深めてとなったら、なおさらのものがあった。

ついに信長なる者は天位を窺うにあらざるや!?

堂上に危惧と恐怖が錯綜しながら二年が過ぎた天正九年一月下旬、信長は明智光秀に洛中馬揃の奉行を命じた。

翌月二十日に織田信長入京。同月二十八日になって御所東門外で大馬揃を興行。今上正親町帝をも御所の塀の外・桟敷に連れ出し、織田家の武威を否応なしに見せつけた。

あまりの仕様に怯えきった御所の中は、馬揃直後の三月一日に正親町帝の勅語をもって、織田信長を左大臣に補任すべきを、仰せ出された。

摂政関白といい太政大臣といえ、帝室の私的な顧問官の立場なだけに、実質的にはともかくも、朝臣は左大臣が至極の官職と決まらざるを得ない。

そのあたりを知らぬ訳がないのに、――王命は誠仁親王に譲位なされた後に、拝命いたすでありましょう。

織田信長は暗に、今上の退位を促すかに似た言いようで奉請し、そう奉答した三月九日の五日前に、再度の馬揃をやってのけた。

要するに、一種の恫喝そのものであった。

堂上の織田信長についての疑惑は、もしや、と半信半疑ながらも、濃厚な気配になった。

そこいらを確認するためだったかど

安国寺恵瓊木像。天正元（一五七三）年、義昭が頼った毛利輝元から調停工作の使者として、信長の元に送られたのが、恵瓊であった。恵瓊はその後、信長はその家臣に討たれるであろうと予言した。本能寺の変が起きる9年前のことであった。

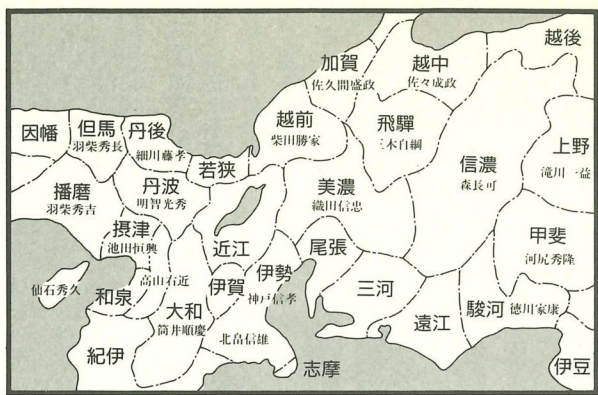
うかは判然としないにもせよ、朝廷は慌ただしく勅使を安土城に派し、織田信長が平氏流を称しているにもかかわらず、武家の慣例に背いた征夷大将軍、ないしは天子を後見する太政大臣の両職いずれなりとも、

——前右府の意望にまかすべし。

と、破格と言わんよりは、法にも理にもならないような旨を伝宣をさせた。

だが、織田信長は鰾膠もなしに、勅意を蹴り放した。

さては信長なる者はついに天位を窺うにあらざるや!? 堂上公卿の疑惑は決定的なものになり、織田信長こそは、逆賊乱臣、と標的にもされるに至った。

足利義昭とそりが合わずに、永禄十二(一五六九)年に職を解かれて出奔し、義昭が追放の後、天正六(一五七八)年正月に詔命をもって帰洛、三月には織田信長の陣中に入って甲州に同道して懇親を深め、そうすることで機会を摑み、信長の野心を宥めすかす算段でいたやもしれない近衛前久も、おそらくはその日をかぎりに、匙を投げたに違いない——。

本能寺の変当時、重臣たちは何をしていたのか。まず越前を任されていた柴田勝家は、前田利家、佐々成政らと、越後の上杉景勝とにらみ合っていた。滝川一益は、北条氏政が支配する関東への進出を目的として、上野に置かれ、一方、宿老の丹羽長秀は、四国征伐のために大坂から船で向かおうとしていたときであった。滝川一益などは、信長の死で好機到来とばかりに攻め込んできた氏政・氏直父子と戦い、破れて伊勢に逃げ帰っている。

公家と征夷大将軍を結ぶ家康のエージェントたち

いまやこの国の覇王になるのは間違いない織田信長を誅滅させようとなったら、諸方有力の大名が決して異議をたてない〝大看板〟を持ち出して見せないことには話にならずと、そこは何事も権威主義の公卿・近衛前久が思案を決めたとしても、何の不思議もありはしない。

それに最適の相手といったら、依然として室町幕府一五代の征夷大将軍・足利義昭が一番、であった。

御所滅亡は公家の破綻になってしまう以上、前久は小異を棄てて、足利義昭との連繫を考えた。

両者の連絡を果たす密使の確保に苦労したに相違ないが、それに最適の異能者が存在した。

天正九年九月に織田信長が伊賀一国を焦土と化してしまったことで、前久が伊賀の玄妙な忍者を懐柔して抱き込んだ可能性は否定できまい。あるいは以前から、それらを手なずけていたと考えても、時代が時代だから、あり得ない事態ではなかった。

本能寺の変後に近衛前久が徳川家康に厚く庇護されたのが、以前に生じた何かの縁故によってと考えなければ、辻褄が合わないから、すでに伊賀者の統領・服部半蔵を抱えていた家康の口ききでとなったら、可能性はさらに濃いものにならざるを得ない。

本能寺の変が勃発したころ、秀吉(写真上)は、中国方面軍司令官として備中高松城の清水宗治を落とすため、水攻めの真っ最中であり、一方家康(下)は、信長にすすめられ堺見物をしているところだった。突然の信長の死だったはずなのだが……。

その徳川家康は織田信長に勧められ、長谷川秀一を案内人にして、天正十年五月二十一日に安土を離れたが、同日夕刻から二十八日までは、洛中二条新町の茶屋四郎次郎の私邸に滞在した。

洛中に隠れのない豪商に違いないにせよ、茶屋四郎次郎は名乗は清延といって、徳川家康家中の者であったが、

……上方筋に於いて聞込み候儀も之有候わば、速かに言上仕るべし……

茶屋由緒書にあるように、単なる商人ではなくて、高級諜報官、と言っていい立場にいた。

二十九日に京から堺に至った家康は、何事かを予測するかに似て、その日のうちに茶屋四郎次郎を帰洛させてしまった。

以後、月が六月に変わるまでの二日間をかけて、家康は余念なげに堺を遊覧し、その合間合間には津田宗及、今井宗久らの茶会に招ぜられた。

義昭がシナリオを書いた? 信長謀殺に密約があった

そのあたりの閑雅は、ここまでの徳川家康の盟約の苦労、努力を織田信長が感謝してと見えるのだけれども、内実は大違いだった。

——さても織田右府様とは怖しき御方にて……

後年になった長谷川秀一が語って残した。

——徳川殿に堺見物を勧められし一方では、案内の途中往還は問わずとも、三河守を刺せ、と某に密命なされし事もござりしぞ。

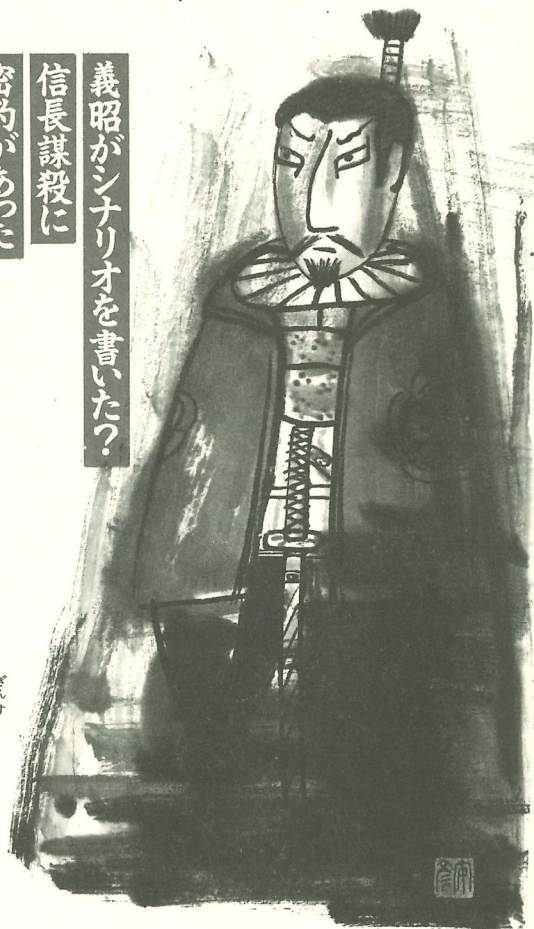
その真疑は定かではないが、決してあり得ない下命ではない。

六月二日朝になって、右府公御見送リナスベシ、と家康はにわかに言い出し、本多忠勝と服部半蔵のほかは御小姓組一二人を含めて四〇人たらずの供揃で、堺を出立の次第になった。

早暁の本能寺焼亡から、その北東一二町・一二〇〇メートル強の二条館・天正七年冬に織田信長が誠仁親王に献上の城中に駆け籠った織田信忠を辰ノ刻・午前八時に包囲するのを見て洛中を抜け、八条口を竹田街道にはいり伏見街道を過ぎて交野郡枚方に騎走し続けた茶屋四郎次郎が、本多と出会ったのは午ノ刻・午後零時になってであった。

二条新町↓伏見↓枚方までがほぼ九里・三六キロの走路だから、あらかた五時間弱で、平均一里二九町・約七キロ弱、四郎次郎は駆け抜けた計算にならざるを得ない。当時の和産馬でなら、茶屋清延は馬乗りの達者、と評判に恥じない名手と言っていい。

この時刻すでに誠仁親王退避後の二条館は、隣接の近衛屋敷の大屋根に登った明智鉄砲隊の轟発によって炎上陥落し、織田信忠は火中に果てていた。

寡勢抗し難ければ洛中知恩院に入って殉死なさん! 織田家客将で主従というのでもないのに、殉死などと家康は訳の分からない喚きを聞かせたが、やがて本多忠勝に容易に〝説得〟され、四郎次郎が用意の銀子八〇枚と半蔵の繋ぎで集結の伊賀者の護衛を得て伊賀の山中を突破、当月五日に岡崎城に戻った。

冷静に過ぎた、徳川家康が発狂するに似た有様になったのも解せないが、神君一代ノ御難儀ナリ、と古記録に書かれたにしては、格別のことはない日数と帰還の状況、と言わざるを得ない——。

毛利との和議、「大返」……秀吉の不可解

だが六月二日以降の不可解な行動は、備中高松陣における羽柴秀吉においてさらなるものがあった。

明智光秀が四条坊門西洞院の本能寺焼亡直後の卯ノ刻・午前六時早々に毛利陣中の日差山・小早川隆景に密使を駆けさせたとしても、洛中勘解由小路室町↓伏見↓西宮↓姫路↓岡山↓高松までは行程五五里・二二六キロ前後の計算にならざるを得ない。

その遠距離を馬術に達者な茶屋四郎次郎と同様、一時間・平均七キロ弱で走り通せる訳がないのに、その密使は二日深夜の午前零時過ぎに足守川の南北も弁ぜず、小早川の幕営と錯覚して羽柴陣中に迷い込んで捕らわれた。

二七時間かけても不可能な走路を二〇時間で駆け抜けた。

いや時刻となれば、それと同様に長谷川宗仁が派した使者は、三日夜中に入って到着した。こちらは時間的な狂いはないが、そこいらは別にして、その三日の昼に、秀吉は一存で、すこぶる寛大な条件の変更を前提に毛利家との和議を決めたのが不可解と言わざるを得ない。

救援状を送り、出馬を求めた織田信長が到着の前に、そんな独断専行をした日には、秀吉の首と胴が生き別れとは、目に見えた事態だからであった。

別の密報で織田信長の戦死を知らなければ、秀吉とても、そんな真似は不可能だったに違いない。

事実、明智光秀が坂本城から放った密使・旧尼子家浪人原平内の場合は、三日の未ノ刻・午後二時に、急度飛檄を以て言上せしめ候、と始まり、将軍御旗を出され、と文中で毛利家が足利義昭の命を奉じ、織田信長に抗する忠誠を書いた明智光秀の密書を、すでに三日以後は封鎖の山陽道を突破して、六日の午後に日差山の小早川隆景の陣中に届けた。

最初の密使が足守川をはさんで、身も蓋もなしに言ってしまえば、それぞれ北と南の後方にあった羽柴秀吉本陣石井山と在所を間違えたのは、何とも理解できない結果だが、その密書の内容を見たのは秀吉一人、側近にいた黒田孝高も見ていないとなったら、不可思議以外の何ものでもあるまい。

直後に毛利側との和議の条件が、七か国割が三か国と骨抜きも同然になって即日で成立。翌四日には高松城守将の清水宗治が切腹。翌々日の昼過ぎから、つまり原平内が日差山に駆け込む二時間前に羽柴勢は撤退開始。出陣の時には姫路─岡山城までで全軍でなら月越で二〇日ほどかけ、編成単位でいえば四日五夜になった道乗りが、さらに二里強は延びた高松を発し、すでに先発の宇喜多秀家隊とは別の直属二万が、七日の夕刻には姫路に着到。二日一夜で撤収を終えたのは、二日後の夜には、姫路城から羽柴全軍が明智討滅の出撃に移ったのを見ても明らかな事実だった。

その迅速に驚嘆した世間は、羽柴秀吉の神速を言うのに「大返」と賞讃してやまなかった。要するに本能寺の変の前後から羽柴秀吉と徳川家康の動向に、何やら〝異様〟が付いて回っているのは、否定できない〝事実〟と言わざるを得ない。

(「別冊歴史読本」第14巻第6号を参考にしました)

当時、丹波を任されていた光秀は、本能寺の信長を討つため、亀山の居城を6月1日の午後6時ごろ1万3000人の軍勢を率い、出陣したといわれる。そして条野で陣揃を立て始めた。そして老ノ坂を越え、沓掛を通って本能寺になだれ込んでいる。途中、中国地方へ行く道と違うので不審を抱く家臣もおり、光秀は「中国出陣の前に信長に軍備を見せるのだ」と納得させたといわれる。光秀の軍勢が押し入ったとき、信長は手と顔を洗い終わって手拭でふいているところだったという。時は6月2日午前6時。その後、光秀の軍勢は信忠を討つため、二条御所に向かう。本能寺の変は、信忠が自刃した午前9時ごろに、ほぼ決着がついたのである。

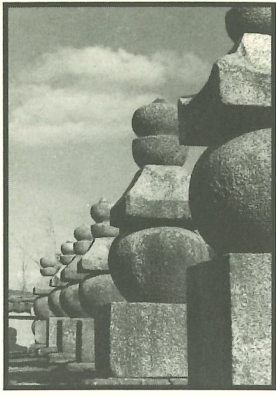
秀吉・家康・光秀が結んだ信長謀殺の密約

異様なのは、明智光秀も、類似していた。羽柴秀吉が凱旋と言うなら珍しくもないが、これから毛利攻めに出陣直前の三月中旬早々に、誰ぞの重臣ではなくて、ほとんど光秀の分身と言っていい明智秀満に姫路まで持参させた茶ノ湯の名物、後から「明智井戸」と言われた名器を贈った。

この時点で秀吉・家康・光秀の織田信長打倒の密約は漠然とではあっても存在していたのであろうから、光秀はまだ踏んぎりがつかないままに、なお一段の密謀を図るために、茶碗進呈を口実にして、秀満を派したと考えなければ、順序が逆なだけに辻褄も合わない。

やがて光秀も中国筋参戦を前に、長谷川秀一と同様、こちらは陣中の一〇〇や二〇〇の士兵をさいての徳川家康暗殺を命ぜられ、前々年の夏に織田家譜代の佐久間信盛父子が、織田信長の命によって、一方的な追放の破目になった時、我らもいつまで続きますやら、と羽柴秀吉に囁かれた言葉を思い浮かべて、光秀は戦慄。五月十七日に坂本帰城、さらに二十六日になって亀山に戻り、二十八日からの愛宕山参籠の前には、謀反は決定的なものになっていた。

だから戦勝祈願が皆無だったはずはないが、織田家討滅を果たした以後の鎮静を図って、洛中洛外の地租を免ずるとなったら、光秀自身に莫大な経費が必要になるため、社領一万石余で山城一帯の主力金融機関的な立場にあった愛宕社に、いわば融資の交渉に出向いたと考えたほうが、愛宕山には月参と、月毎の利息の返済を唄ったような俗謡もあるくらいだから、むしろ妥当であるに違いない。

後日に里村紹巴が、羽柴秀吉の面前で右往左往して見せた連歌百韻興行の明智光秀の発句、時は今あめが下識る五月哉、も時期の梅雨に合わせた発句、時は今あめが下なる五月哉、となれば何の変哲もない月並になった。

大徳寺・総見院にある織田一族の墓。右側から三番目が信長の墓。信長を討ったあと光秀は、信長と敵対していた上杉氏や毛利氏に書状を送り、反信長の連帯を呼びかけている。しかし、その甲斐もなく、六月十三日には自らも命を落とすのである。

参籠二日を終えて、当月末日に亀山城に帰着した明智光秀は、翌六月一日をもって出陣と重臣の口から振れ出させた。もはや、謀反は、既定の事実に化したと言っていい。

黒幕・義昭の唯一の誤算

一日の梅雨空の闇夜に亀山城を出た明智家士兵一万三千余は、半里少々先の野条に戌ノ刻・午後八時に集結を開始、陣揃を立て始めた。いくら早く終わったとしても亥ノ刻・午後一〇時にはなっていた筈だ。縦隊二列、騎馬武者や小荷駄輸送をはさんだ列伍は先鋒・中軍・殿軍で列長はほぼ二里・八キロ前後になったに違いない。

それらが順次に出発して、以後は老ノ坂にかかって頂上までが一里少々・四三〇〇メートル、山陽道が西になる沓掛まで一里弱・三七〇〇メートル、ここで四半刻・三〇分の休息があって、桂川西岸に至る行程が一里半・五七〇〇メートル少々だから、五里二〇町の距離に違いないが、先鋒の最初の士兵が桂川西岸に達した丑ノ下刻・午前二時三〇分には、最後尾は頂上を越えたか越えないかの時刻でしかなかった。

さらに梅雨どきの増水で桂川が増水し、川幅は二〇〇間弱・三六〇メートルに拡大されていたとなったら、西岸到着の順に渡河し終えたにせよ、船橋を使ったのは決まった事で、時刻は寅ノ刻・午前四時を過ぎていない筈すらなかった。公卿あるいは町衆が書き残した日記は、本能寺襲撃は二日未明の寅ノ刻前後で一致しているから、そうだとなれば明智光秀は桂川東岸にいた計算にならざるを得ない。

時間も証言も存在するから、二条館攻撃は明智勢に違いないにもせよ、本能寺襲撃で明智光秀の鼻をあかせたのは、羽柴秀吉の腹心中の腹心・蜂須賀正勝が在野でいた頃の配下、すっ破・乱破に似た者たち、美濃・尾張から三河にかけて三万とも二万とも言われた野武士が、正勝の密命でやってのけたのではないかと、疑えば疑うに足りる事態であった。羽柴秀吉はむろん、徳川家康もまた織田信長の死を予測していた。結果的には、それが妙に異様な動向にもなった。鼻をあかされる恰好に陥った明智光秀だけが、単に毛利側に密書を送って、羽柴退陣の際の足枷にすべく謀ったものの、根本的に秀吉を疑っていなかったからこそ、不意を突かれて六月十三日昼には、山崎の合戦で敗亡するにいたった。

近衛前久との連繋に応じて策謀、右の三人を煽って筋書を書いたのは、ともノ津に所在の足利義昭であったに違いない。山を一つ越えれば備中高松、変後の当夜に秀吉に変報を知らせられたのも、義昭がしたのでなければ考えられない状況だった。

豊臣秀吉にも正親町帝にとっても最大の功労者は、足利義昭であったればこそ、征夷大将軍としては何の功績も皆無なのにもかかわらず、天正十五年に帰洛するや、親王あるいは諸王につぐ准后にもなり得た。

そう考えなければ、何も彼も辻褄が合わずに、終始しなければならない。

それにしても明智光秀の敗北は、足利義昭の計算外の事態だったのであろうか、幕府開府を意図したらしい羽柴秀吉が、足利家の猶子たらんことを求めた時、鰾膠もなしに拒絶で応じた義昭だが、徳川家康の求めには容易に応じて族流を認めた。

何ごとかを謝しての好意であったのか？　紙幅に限りがあって、意を詳細に伝えられないままに、章を終わらなければならないが、本能寺の変の前後から、さらに以後の展開に興味がおありならば、講談社刊の『天正十年・本能寺炎上』の中に、諸説を採って一編の小説にまとめた。

私としては、定説とは違った展開と顛末が存在したあらかたを納得できようかと、信じて疑わない──。

天才か狂気か

3 いつ天下を望んだか

若い信長に宿った ニヒルなまでの権力への意志

檜山良昭（作家）

群雄割拠の戦国の世で
他の武将と信長を分かつものは
天下統一へまっすぐに突き進む意志と
合理的な、その手法である。
桶狭間の義元奇襲、家康との同盟、
美濃攻めと、信長の天下取りの前段階で
いつ確固たる意志が芽生えたのか？

信長が織田信秀の三男として生まれたとき、信秀は尾張国の古渡城を居城として、合戦に明け暮れていた。そもそも織田氏は室町時代の三管領の一人である斯波氏に仕える有力豪族であった。

織田本家は尾張の守護代を務める家柄だが、主家の斯波氏が衰えたあと、二家に分かれて尾張を支配した。岩倉の織田氏と清洲の織田氏である。信秀の家格は清洲織田家の三奉行家の一つであったという。織田の支流であり、中程度の豪族であった。

ところが、信秀はなかなかのやり手で、主家である清洲織田氏を圧倒し、信長が生まれたときには尾張の海東、海西、愛知、知多の四郡をほぼ手中におさめていた。そして上四郡を支配する岩倉織田氏と尾張全域の支配権を巡って激しく争っていた。

この時代の戦いは中小土豪を自分の系列化に置いて家臣化する競争であり、土地と農民を獲得する争いである。

中小の土豪たちは自分たちが支配している土地を守り、またそれを増やしてくれそうな親分につこうとする。親分の旗色が悪いとか、将来性がないと判断すると、さっさと他の親分の元に走ってしまうドライさを持っている。この時代にいわれた言葉に、「器量人」という言葉がある。器量人とはこの親分になるための資質をいう言葉である。家臣に対して恩情が厚く、知恵才覚があって、勇敢で、戦が上手、将来にみどころがあるような人物ということである。

信秀はなかなかの器量人であった。

信長が生まれたころには主家である清洲織田家をしのぐような中大名にのし上がっていた。

天文二十（一五五一）年、この信秀が病死する。信長一八歳のときである。

ところがこの若殿は家臣たちが危ぶむほどの無軌道な不良少年である。戦国時代とはいえ、上級武士には上級武士としての礼儀や服装やたしなみがある。だが信長はそういうモノをいっさい無視し、胴衣を肩脱ぎになり、腰には火打ち袋をいくつもぶらさげ、瓜や柿をかじりながら城下を遊び歩く。挙句の果ては、まだ一四、五歳の少年にすぎないのに、生駒家宗の出戻り娘の吉野の元に通い詰め、子供まで作ってしまう。

土豪である生駒の屋敷には蜂須賀小六や木下藤吉郎といった近隣の不良少年たちが居候をしていたが、これらの者と仲良くなって魚とりをした。

「織田の小倅はうつけだそうだ」

うつけとは馬鹿ということである。織田領ばかりか、他国にもそういう噂が広まった。だれもこの無軌道な不良少年が、後の天下人に大化けするとは予想もしなかったのである。昔から多くの人が信長に惹かれるのも、この落差の大きな彼の一生に魅力を感じるからである。

信長の奇矯は敵を欺くための芝居ではない。本気である。中小企業の社長の息子が竹の子族や暴走族になったようなものである。そういう奇矯な振舞で、信長は古い時代に反抗したのだ、という見方もあるが、はたしてハイティーン時代の信長がそこまで考えていたかどうか。

偉人の伝記というのは、その偉人が子供のときからなにか傑出したところがあり、それが後の成功に導いたというように書きがちである。だが信長にしてみれば、理屈もなにもない。そうしたいからやった、おもしろいからやったということではないか。

信長は傍若無人で、型にはめられるのが大嫌いな若者だった。信長が若いときから天下人への野心を抱いていたというのも、偉人が子供のときから人並み外れた人間であるかのように書きたがる伝記作者の作為である。信秀の跡を継いだ信長には、まず父から受け継いだ自分の立場を固めるのが精一杯であったと見ていい。

「天下布武」の印。自ら天下統一の意志を公にしたこの印を、信長は永禄十年より使い始めた。同年、信長は美濃の斎藤龍興を稲葉山城から追い落とし、「岐阜」と改名、居城を移している。

信長一九歳 尾張統一の野望を抱く

それでは信長はいつごろから天下統一への野心を抱くようになったのか。

これについて信長がはっきり言明したような記録はない。しかし信長の戦略を注意深く見ていけば、信長の考えていたことがわかってくるのではないだろうか。

信長が家督を相続したのは、天文二十年の三月である。彼はそれから約一年間、那古野城に腰を据え、目立った動きをしていない。この間に老臣の平手政秀が信長のうつけぶりを諫めるために諫死するという事件があるから、あいかわらず信長の素行はおさまらなかったようである。

兄弟、肉親、家臣でさえ、油断をすれば裏切る戦国時代である。かといって元服をすませているとはいえ、一〇代後半の少年にできることはたかがしれている。彼は乗馬の稽古、水泳、弓や鉄砲の訓練、兵法の勉強、鷹狩りなどで毎日を過ごしたが、行儀や服装などは相変わらずだった。そうして彼は一人前になるのを待っていたのである。

その信長が動きはじめるのは天文二十一年、一九歳のときである。

清洲織田氏の小守護代である坂井大膳が、信長派の松葉城の織田伊賀守、深田城の織田右衛門尉を攻撃した。その知らせを聞いた信長は、ただちに出陣し、坂井を清洲城に追い返している。

後年の片鱗を思わせるようなすばやい処置である。しかしこの戦いは坂井が信長派の子分を攻撃したから、反撃したものであって、信長が仕掛けた戦いではない。子分が攻撃されたら、親分はそれを助けなくてはならない。それをしなかったら、子分たちは親分から離れていく。そのための戦いである。

清洲城には主君である斯波氏の当主である義統が清洲城織田家の彦五郎信友によって庇護されながら名目上の守護として住んでいた。信友は彼の権威で尾張を支配しようとしていたが、利用価値がないと判断し、天文二十三年、七月、義統を殺してしまった。

義統の子、義銀は運よく厄介を免れ、信長の元に逃げた。信長にしてみれば、主君の仇を討つという大義名分ができたわけで、翌年四月、彼は叔父の守山城主である信光と図って信友を殺し、清洲城を占領してしまった。

これによって信長は清洲織田氏の勢力圏を含め、尾張の下四郡を完全に支配下に置いた。彼は清洲織田に代わり、名目上は尾張の守護代職となった。

これで自信をつけたのか、彼は自分の地位を脅かしそうな叔父の信光を謀殺し、謀反を起こしたという罪を着せて弟の信行を殺す。また、同じく謀反を企てたという罪を着せて兄の信広を恭順させ、一族のライバルを次々に取り除いた。

信長に尾張全域に対する野心が生まれたのはこのころである。父信秀が果たせなかった尾張の守護になるのも夢ではないとも思えるようになったのである。

それを裏書きするように、信長は永禄元（一五五八）年に、岩倉織田氏に対する攻撃戦に乗り出した。その最中の永禄二年二月に、信長は上洛して将軍義輝に拝謁している。尾張国守護として将軍より認知を受けるための布石である。尾張に戻った信長は、ただちに岩倉攻めを続行し、町に火を放って岩倉城を裸にし、火矢、鉄砲を討ちかけて城を落とした。

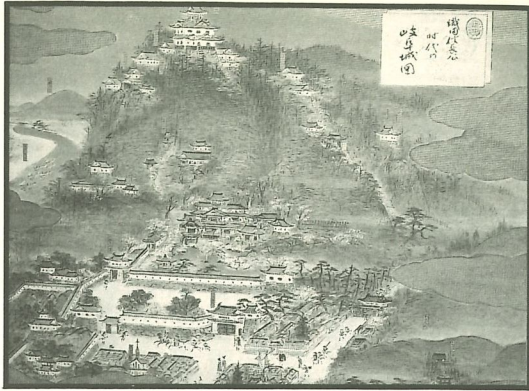
これにより、信長はほぼ尾張の大半を手に入れたのである。

大望へのきっかけとなった 桶狭間の成功

その後信長は内政を整備しながら美濃国との抗争に決着をつけようとした。美濃では弘治二（一五五六）年四月に、斎藤義龍が信長にとっては舅に当たる道三を殺して美濃を手に入れた。

彼は尾張を攪乱するために岩倉織田氏を抱き込んで信長に対抗させたり、信長の兄信広に接触して、謀反を起こさせようとした。信長の織田一族との激しい戦いの背後には義龍の影がちらついていた。

信長としては服属して間もない岩倉地方の支配を安定させ、義龍につけいるすきをあたえないようにする必要があった。美濃との戦いは領土的な野心のためではなく、あくまでも義龍の攻勢にたいする防衛が目的だった。ところがここに信長の計算違いの出来事が起こる。駿河、三河、遠江を支配する今川義元が上洛のための遠征軍を準備し始めたのである。

今川軍が上洛するとすれば、とうぜん東海道を西に進み、尾張の領内を通行する。それを手をこまねいて座視すれば、義元に対して恭順の意を示したことになる。

岐阜城図（金華山ロープウェイ蔵）。「天下布武」印とこの岐阜城は、信長が天下統一の意志を確かなものにした証といえる。岐阜城は長良川を北に望む金華山にあり、城砦と居館からなっていた。

軍隊が領内をたんに通過するという問題ではない。今川義元は信長を恭順させた証として、休息に名をかりて清洲城への入城を要求するだろうし、食料の提供を求めたり、住民の徴発や織田軍の出征を要求するだろう。また領土の多くを今川に取られ、信長は昔の小大名の地位に転落するかもしれない。

今川とは戦うほかにない。だが相手は三国を支配する大大名である。常識から判断して勝ち目はない。

義元が上洛を準備しているという噂が尾張に広まったのは、永禄三年の正月ごろである。そして五月になると、今川の大軍が尾張に押し寄せてきた。

織田家では、幹部たちが連日軍議を開き、恭順か、応戦か、議論を戦わしていたが、結論はでない。この間信長は胸の中をだれにも明かさず、幹部たちの議論を黙って聞いているだけである。

家臣の中には、

「城を捨て退去なさる思案をしているのだろう」

と悪く言う者もいた。

しかし信長が胸の中を明らかにしなかったのには、家臣たちの去就や決意を推し量るためと、彼の作戦を今川方に知られたくないからである。家臣のだれが今川に内通しているかわからなかったのである。

信長の腹は応戦で決まっていた。一か八か義元が油断している隙をつき、電撃的な奇襲を行って彼の本陣をつく。そのわずかな可能性に賭けよう。そう思っていた。この作戦がみごとにあたり、信長は桶狭間で義元を破った。

天下統一のグランドデザインは家康との同盟から始まった

「全国統一も夢ではないぞ」

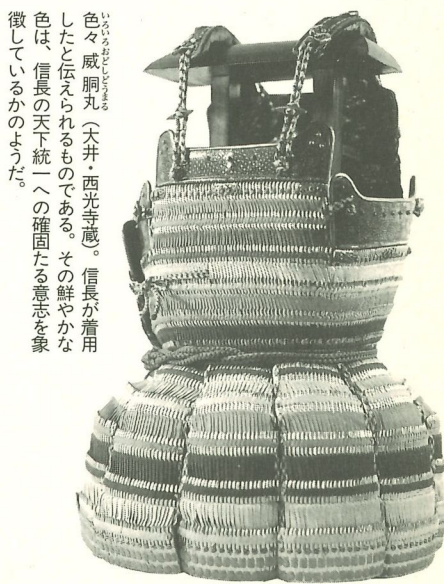
信長が天下人への野心を持ったのは桶狭間の戦いの直後である。

義元が戦死した後、三河では長い間今川の人質となっていた徳川家康が独立して、三河の領主となった。

このとき信長の頭に、

「家康と同盟を結び、東を安全にして美濃を攻略する」

という、グランドデザインがひらめいたのである。

桶狭間の戦いから一〇か月後、信長は家康に和睦を提案した。家康は桶狭間の戦いの後、さかんに国境近くの織田領を荒らしていた。ここで信長が三河や今川領を攻めれば、後で触れるような信玄と謙信とのような長期戦になったかもしれない。

色々威胴丸（大井・西光寺蔵）。信長が着用したと伝えられるものである。その鮮やかな色は、信長の天下統一への確固たる意志を象徴しているかのようだ。

だが信長は、

「美濃を取り、できるだけ早く上洛して、天下に号令するのだ」

という目的意識がある。

彼は家康の挑発を無視し、数回にわたって家康のもとにに使者を送り、同盟を提案した。家康のほうでも最後は信長の度重なる提案に折れて和睦に同意した。このとき家康が家臣たちに相談すると、家臣たちは一様に次のようにいった。

「義元の嫡子である氏真は昼は蹴鞠や

若い信長に宿った ニヒルなまでの権力への意志

茶の湯に熱中し、夜は酒宴乱舞に興じており、とても父君の仇を取ろうなどとは思ってもおりませぬ。一両年もたたないうちに、今川の所領は北条か武田に奪われて、今川家は滅亡することでしょう。もしも殿が天下に志がおありなら、早く今川と手切れして信長に協力なされませ」

永禄四（一五六一）年三月、家康は清洲城に赴いて信長と対面した。このとき信長は喜色満面で、家康にこう言ったと、『三河物語』は書き残している。

「今より共に水魚の情深く交わり、二人の旗でもって天下の乱を収めようではないか。信長が天下を統一すれば、徳川殿が我の旗の下につきたまえ。もし徳川殿が天下を取ったなら、この信長が徳川殿の旗の下につき従おうではないか」

信長が喜ぶのも無理はない。

彼は三河を含め東国には野心がない。桶狭間で今川義元を破った後、勢いを駆って今川領に攻め込まなかったのも、今川領を取ったところで時間と兵力のむだであると考えていたためである。

彼の目は美濃に向けられていた。

その美濃とは、義龍側に走った犬山城主の織田信清が信長に反抗しており、また信清に呼応して義龍の家臣である宇留間城主の大沢正秀がしきりに国境付近で策動している。このことは早晩美濃との戦争が近いことを思わせた。

信長が上洛するためにも美濃は押えておきたい要所である。しかし、うっかり美濃に攻め込めば、背後を今川につかれる恐れがある。家康との同盟はこのような後顧の憂いを取り払ってくれたのである。

「これで天下を取れるぞ」

家康との同盟を成立させ、心の中で信長は喝采を叫んだはずだ。

果たせるかな信長はただちに美濃との国境近くの墨俣に出陣した。将来の美濃攻略戦に備えて、侵入路を確保するのが狙いである。信長が美濃に侵入し、義龍を追放して美濃を手中に収めたのは家康との同盟の六年後の永禄十年である。思ったよりも長い年数がかかったが、彼が美濃攻略を時間をかけてじっくりやれたのも、家康との同盟によって東からの脅威が取り除かれていたからである。

その翌年に信長は足利義昭を奉じて念願の上洛を果たすのである。

窮地の信長を支えたのはニヒルなまでの権力への意志だ

信長を天下統一に駆り立てたのは、権力への衝動、権力への強い意志である。この意志の弱い人間、あるいはそれが欠けている人間は弱肉強食の戦国時代では敗れ去るしかないのである。

信長の激しい権力への意志は兄弟や織田一族との骨肉相はむ戦いの中で鍛えられていった。彼はこの戦いの中で意志の強い者が弱い者に勝つことを学んだ。

美濃を取ったことは彼の征服戦争のスプリング・ボードであった。天下統一レースのスタート点についたのである。その後の戦いは決して楽ではなかった。浅井・朝倉との壮絶な戦争、一向宗徒や延暦寺との戦い、近畿の土豪たちの反抗。

どれをとっても楽な戦いではないが、不屈の意志をもって信長は彼らを打ち負かし、天下を統一していった。その強靭な精神の根底にあったのがニヒルなまでの権力への意志だった。この点で信長に優る戦国大名はいなかった。

たとえば小田原城を本拠地として関東を支配する北条氏康は「文武兼備の大器」といわれる名将であるが、天下に覇を唱えようという野心はなく、自分の領土の確保と、周辺地域に対する侵略で満足していた。また中国地方の大大名である毛利氏も同じであった。むしろ天下に野心を抱いているのは地の利もある近畿地方の中小の大名たちである。たとえばそれは荒木村重であ

り、浅井や朝倉である。だが彼らは小者である。信長と互角で勝負できるうつわではない。

それでは信長に対抗できるような大物のライバルは誰か。

「天下一統」に一直線に進む信長が2人のライバルを出し抜いた

それは甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信である。

信玄が父信虎を追い出して家督を継いだのは天文十(一五四一)年のことであるから、信長が八歳のときである。彼の野心は信濃の領有にあったが、弘治元(一五五五)年になってようやくその大半が制圧できた。そのあいだ信玄は一四年にわたって信濃に兵を動かしていたわけである。

信玄の本心としては、土地の豊かな相模や駿河に南進したいというのが本音だったろう。しかし当時の信玄には、大国である今川や北条と戦って勝つ自信はなく、領土を拡張するとすれば、信濃に向かう他はなかった。

信濃を手に入れたことで信玄は大大名にのし上がったが、予期しない障害にぶつかった。北信濃の豪族たちが越後に逃げ、謙信の援助を求めた。そして信玄の北進に脅威を感じた謙信が信玄に戦いを挑んできたのである。

謙信が生まれたのは享禄三(一五三〇)年だから、信玄よりも九歳年下、信長よりも四歳年上である。もともとは平安時代後期の坂東八平氏のひとつである長尾氏の末裔であり、室町時代の関東管領である上杉家の家臣である。

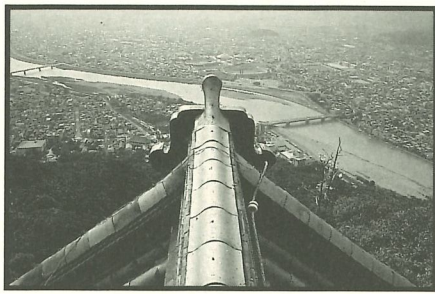
たんに名目だけになった関東管領職を、謙信を頼って身を寄せていた上杉憲政が謙信に職を譲ったのは永禄四(一五六一)年のことである。

謙信は絶え間のない国内土豪の反抗に手を焼きながら、関東に遠征したり、川中島に出兵して信玄と戦った。関東に出たのは主家である上杉を支援するためであり、川中島に出撃したのは信玄の北進を食い止めるためである。領土への拡張的な野心ではない。

天文十九年、信玄は今川、北条と三国同盟を結び、背後の安全を確保してから、謙信に当たろうとした。いっぽうの謙信も天文二十二年に上洛して天皇や幕府から信玄追討の御墨付きをもらう。この結果、信玄と謙信は泥沼化した長期戦にはまりこんでしまった。

信玄としては謙信の越後に対する領土的野心があったわけではなく、信濃を制圧した後には関東や東海に矛先を向け、全国制覇のスプリング・ボードにするつもりでいたろう。

他方謙信には天下統一の野心はない。関東管領として、かつての上杉家が支配していた関東を支配するのが悲願である。信玄は早く南進したいが、偏執的なまでの謙信の攻撃に対応するのがせいいっぱいで、南進できなかった。

信玄の戦略的な失敗である。彼としては天下に覇を唱えたいのであれば、北越を謙信に譲り、関東からは手を引いて、今川領を奪い、それから三河、尾張に進むべきだったのである。

岐阜城から長良川を望む。信長は安土城を築城するまで、10年間、岐阜を拠点に天下統一の事業を進めた。小牧山城→岐阜城→安土城と、信長は領土の拡大とともに城を移し、合理的な天下取りを目指した。

永禄十一年九月、美濃を手に入れた信長は足利義昭を奉じて上洛した。義昭は信長によって将軍職に就けられた。信長は義昭将軍を傀儡にしたて、将軍の名前で「天下布武」を成し遂げようとした。このとき信玄はようやく今川氏康を追い払って駿河城を奪ったが、とき はすでに遅かった。彼の余命はあと五年しか残されていなかったのである。

桶狭間の戦いの後、天下統一という目的に向けて目的意識的に上洛に向かってまっしぐらに突き進んだ信長と対照的に、信玄は謙信との戦いという道草を食いすぎた。

そして信玄が慌てて南進策をとったときには、信長は尾張と美濃を収め、家康という同盟者を得て幕府を握っていたのである。

いっぽうもう一人の雄である謙信のほうも、信玄との葛藤にこだわるあまり、信玄との戦いに明け暮れ、関東政略や越中攻略の機会を逃してしまった。

結論を言えば、謙信は優れた武将ではあっても、優れた政治家ではなかった。彼の野心は関東管領としての上杉家の支配を復興することであり、その野心の小ささが信長に先を越された原因である。

また信玄のほうは天下統一への野心を持ちながら、その野心の実現に向かってまっしぐらに進んでいくという目的意識的な戦略観がなかった。彼は謙信との講和の機会も摑めないままに、いたずらに謙信との泥沼戦争に引き込まれ、時間を空費してしまった。いちはやく家康との同盟に踏み切った信長の戦略観は信玄のそれと比べるといっそう際立ってみえるだろう。

みずからを神とした信長なぜ天皇・将軍を討たなかった

天才か 狂気か

4 権威を求めぬ男の覇道心理

安土城に自分自身を祭るための神社を造ったことすらある信長も、最後まで、当時の権威=天皇・将軍を滅ぼそうとはしなかった。機会はあったにもかかわらず、自らが、その地位を奪わなかった本当の理由を推理する。

小林久三(作家)

信長は、旧秩序の破壊者だといわれる。

信長が登場した一六世紀中頃は、中世の秩序が崩れて、近世社会への胎動をはらんで、時代の振り子が大きく揺れ動いた時期であるが、信長、秀吉、家康の戦国時代の三英雄のなかで、信長のもつ破壊力はとくに強大であった。政治から軍事、経済、文化など、社会のあらゆる面で、信長は、時に振り子が振り切れんばかりの破壊力を示し、いわゆる中世的権威に真っ向から挑戦していった。

信長というと、日本にはめずらしい独裁者のイメージが強く、既成の権威を叩き壊した人物と受けとられがちだ。

したがって、天皇や将軍の権威を無視し、天皇や将軍を抹殺することも辞さなかったようにおもわれがちだけれど、信長は慎重に二人を殺害することだけは避けた。

なぜなのか。この問題を追及していくと、政治的天才といわれた信長の、もうひとつの異なった側面がみえてくる。その側面にスポットをあててみよう。

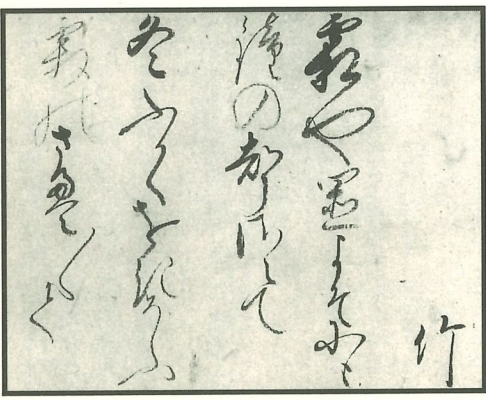
信長が生まれた天文三(一五三四)年の頃は、後奈良天皇の時代だった。この時期の皇室は、みる影もないほど衰微していた。経済的に完全に疲弊していたのである。

諸国に設けられた荘園や国衙領といった御料所は、南北朝時代から地方豪族によって蚕食されていた。その傾向は、戦国時代にさらに強くなった。大永六(一五二六)年四月に天皇位を継いだ後奈良天皇は、即位式を行えない始末だった。周防の大内氏と越前の朝倉氏らの献金によって、天皇がようやく即位式を催したのは、一〇年後の天文五(一五三六)年二月のことだった。

信長の父の織田信秀は、天文の初め朝廷に献金をして従五位備後守に任じられている。信秀は、これを契機に主家を押さえて大名にのし上がるのだが、このとき御所の修理費として献上された四〇〇〇貫文は生活費に回されたという話がある。

弘治三(一五五七)年九月、御奈良天皇崩御。同年十月に、正親町天皇が践祚したが、正親町天皇も窮乏をきわめ、安芸の毛利元就の献上した精錬銀を元に即位式を行ったのは、三年後の永禄三(一五六〇)年一月のことであった。信長が桶狭間合戦で、今川義元を討ち取った年のことである。

正親町天皇は、信長を非常に頼りにしたらしい。

信長のもとに使者を派遣し、兵乱を平定せよとの密勅を伝え、さらには御料所の回復を命じている。だが、尾張

正親町天皇「連歌詠草」(紙本墨書、東京国立博物館蔵)。正親町天皇(一五一七〜九三)は戦国末期の混乱のなかで即位。織豊政権の展開に従い、皇室・公家社会に安定のきざしが見えた時期だった。

を根拠地にして美濃攻略に全力を傾けている信長には、天皇の要請にこたえている余裕など、まったくなかったといっていい。密勅を無視して、物品を献上するのが、精一杯だったといわれる。

永禄十年八月、信長は念願していた美濃稲葉城の奪取に成功し、斎藤龍興を滅ぼし、岐阜と改めた。このときもまた天皇は使者を遣わし、尾張・美濃の御料所の回復を要請するとともに、第一皇子の元服費献上をもとめている。天皇は、信長が覇権を取るとみて、先物買いをしたのであろう。

信長に対する見方に誤りはなかったといえる。

永禄十一年九月、信長が将軍足利義昭を擁して、軍勢を近江に進め、上洛の機会をうかがうと、天皇は信長に禁中警固の綸旨を下している。信長の先手先手を打つ形で、次々に勅命を出していくのである。

これは、天皇による一方的な接近であった。

一向一揆を天皇と将軍の権威を借りて脱出した信長の読み

それに対して、信長は、どのように反応したか。旧来の権威を否定し、秩序を無視しがちな信長は、こういった天皇側の要請に対して、意外に忠実にしたがっていく。

永禄十一年九月に京都に入った信長は、翌十二年二月には、朝山日乗・村井貞勝を奉行に御所の修築にのりだし、紫宸殿や清涼殿などの修復につとめている。

天皇に対する、信長の友好的な姿勢が功を奏するのは、元亀元(一五七〇)年に、石山本願寺の勢力と結んだ浅井・朝倉両軍と対峙したときのことであろう。信長は、近江姉川で浅井・朝倉軍を撃破したが、両軍は打倒信長を叫んで蜂起した石山本願寺と結んで再起して、信長軍に迫ってきた。

それと呼応するかのように、伊勢長島で一向一揆が発生した。こういった動きに、信長は窮地に追いこまれるが、信長は天皇と将軍義昭の力を借りて、苦境を逃れる。天皇と将軍に縋って、同年十一月には本願寺、十二月には浅井・朝倉軍との講和にこぎつけ、窮地を脱することができたのである。

信長と石山本願寺との合戦は、一〇年にわたってつづき、天正八(一五八〇)年閏三月に終結するが、この背景には、正親町天皇の勅命が本願寺に下ったということがあった。天皇は、終始、信長に好意的だったのだが、信長も、丹波山国荘、山城国一一郷を御料所にしたり、洛中洛外から集めた運上米五二〇石余を京の人々に貸しつけ、その利息を禁裏供御米にあてるなど、経済的に逼迫した朝廷に皇室料を献上し、朝廷復活に力をつくす。

かくて、信長は正二位、右大臣に叙任される。父の信秀が、従五位備後守に任ぜられたのと格段の差で、その意味では、天皇は官位授与を巧妙に活用したといえるだろう。

信長は、しかし、官位が欲しいために、天皇の要請にこたえたとは考えられない。後奈良天皇といい、正親町天皇といっても、当時の皇室は政治の局外にあって、政治的影響力は乏しかった。

そうはいっても、神権に裏打ちされているだけに、調停役としての存在は無視できない。うまく活用すれば、利用価値は大きい。

そういった点に着目して、信長は天皇のもつ有形無形の権威を活用するという方向に傾いていく。天皇を弑逆して、歴史の異端者になることを慎重に避け、皇室には恭順な態度を崩そうとしない。

このへんの信長は、小心で臆病といえるほど、用心深いうえに巧妙で、現実的だ。単に破壊のために破壊するのではなく、利用価値があるとみた場合には、上手に活用した。

信長所用の陣羽織（東京国立博物館蔵)。大胆な戦術で難敵を幾度となく破った信長も、さすがに天皇に対しては、小心で臆病といえるほど用心深い態度で接している。

もちつもたれつの関係だった足利義昭との連帯関係

天皇ばかりではなく、信長は一五代将軍の足利義昭に対しても、同じよう

〈右〉信長の京都政策にとって正親町天皇は大きな後ろ楯であり、なくてはならない存在だった。〈左〉正親町天皇の皇太子。譲位が内定していたが天正十四(一五八六)年、急死。信長にとって権威は、自らの天下統一という野望のための政治の手段にすぎなかったのかもしれない。(ともに泉涌寺蔵)。

に恭謙な態度でのぞんだ。だが、正親町天皇とは違って、義昭は、信長に徹底的に反抗し、何度も煮え湯を飲ませている。

にもかかわらず、信長は、なぜか義昭を殺さなかった。その一方で、信長は、自分に抵抗し、敵対してくる人間や集団に対しては、容赦なく弾圧し、殺戮した。元亀二(一五七一)年の比叡山の焼き打ちでは、ほとんどの堂塔を焼き払ったうえ、数千人の人間を無差別に抹殺し、三年後の天正二年には伊勢長島の一向一揆で、二万人の人間を柵のなかに閉じ込めて全員を焼き殺している。

個人的にも、敵将の浅井長政父子と朝倉義景の髑髏に酒を盛って家臣に飲ませたりするなど、自分を裏切った者に対しては、残忍きわまりない手段で報復した。仮借のない、その酷薄さ、苛烈さは、日本人離れしているともいえる。

だが、信長は、足利義昭だけは、特殊例外的に殺そうとしなかった。

その謎を追究する前に、信長と義昭の関係を紹介しておこう。

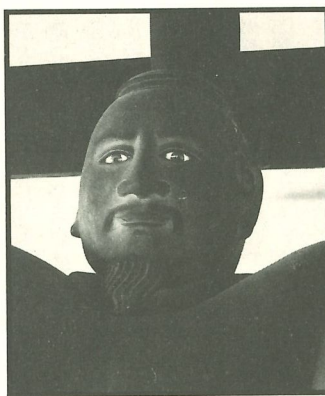
二人が初めて出会ったのは、永禄十一(一五六八)年七月のことである。

その三年前の永禄八年に、義昭の兄の一三代将軍義輝は、松永久秀や三好義継や三好三人衆に殺害されるという事件が起こった。足利幕府の再建を計った義昭は、まず上杉謙信と武田信玄に出兵をもとめたが、両者ともおたがいに睨み合っていたため、動きがとれなかった。

義昭は、松永久秀たちの追及を逃れて、近江の和田惟政や若狭の武田義統、越前の朝倉義景らのもとを転々とした後、信長におのれの命運を賭けることにした。

当時の信長は、尾張の新興の大名に過ぎなかった。その信長に、将軍家の将来の運命を託そうとする。正親町天皇と同じ選択をしたのだが、信長には、既成の大名にはない、猛々しい勢いと激しいなにかがあったのであろう。

信長と義昭は、美濃・西庄の立政寺で会った。会見にのぞんで、信長は、金銭をはじめ、太刀、鎧などの献上品を山のように積みあげて、義昭を歓待したという。

このとき、信長は三四歳。新興大名が、将軍の血をひく義昭から頼りにされて、感激するとともに、将来に対する野心が芽ばえたに違いない。義昭とともに歩めば、天下を取れるかもしれぬと。

〈左〉足利義昭。信長によって将軍の地位に就きながら、結局は傀儡として使われた。地位を追われて後は、反信長勢力の糾合に努める。〈右〉足利義輝。第一三代将軍、義昭の兄。永禄八(一五六五)年、松永久秀、三好三人衆らの手によって殺された。弟の義昭を将軍に奉じるのは信長にとって好機だった。

その機会は、いちはやく訪れた。

三好三人衆によって擁立された、一四代将軍の足利義栄が、永禄十一(一五六八)年十月に病死したのである。その一〇日後に、義昭は信長の奉請を受けて、一五代将軍となった。義昭が信長に会ってから、わずか二年後のことである。

感謝と憎悪が入り交じった傀儡将軍の胸の内

義昭の賭けは、みごとに的中した。

喜んだ義昭は、信長を幕府の管領にしようとしたが、信長は恐れ多いと辞退した。将軍を補佐して、幕府の政策を統轄する、ナンバーツウの管領職を辞退したのだが、このとき、信長はなにを考えていたのか。本心から、恐れ

みずからを神とした信長 なぜ天皇・将軍を討たなかった

多いとおもって、辞退したのか。

その後の信長の行動をみていると、信長の本心は、どうやら別なところにあったようである。

管領を辞退した信長は、その代償として、堺、大津、草津に織田家の代官をおいて、町を支配する権利を得た。この三つの町は、水陸交通の要衝で、戦略的に重要な位置を占めている。

信長は実利を得たのだが、その後の行動は謎めいている。義昭が将軍になってまもなく、信長は岐阜にもどった。その隙を狙って、三好三人衆が義昭のいる本圀寺を急襲した際に、信長は雪の中を二日間で京都に引き返して敵を追いちらす一方で、「殿中御掟」を定めた。

これは、一見、義昭が制定したかのようにみえるが、信長が将軍の権限行使を規制できるようなからくりをもっていた。信長としては、政治好きな義昭の性格を見抜いたうえで、義昭の自由な行動に歯どめをかけようとしたのであろう。

同時に、信長は、兄義輝を殺害した松永久秀や三好義継たちを殺害せずに、彼らの命を救った。

こういった具合に、将軍義昭の地位と権威を無視するかのような態度に出る一方で、信長は義昭のために二条城の造営に着手し、贅をつくした豪壮な建物をつくっている。

完成したとき、義昭は信長に涙を流して感謝し、岐阜に帰国する信長を粟田口まで見送ったというが、義昭の胸に揺曳していたのはどんな感情だったのか。

急速に冷えてゆく、信長と義昭との協力関係

以後、信長と義昭の間は、急速に冷えていく。二条城が完成した翌年の元亀元(一五七〇)年正月、信長は義昭に五か条の要求をつきつけてくる。

その内容は、天下の政務は信長が行うこと。義昭が、諸国の大名に書状を送る場合、かならず信長の添書をつけること、これまで義昭の命令で裁可した案件はすべて破棄すること、といったもので、いわば信長の将軍宣言のようなものであった。義昭は、信長の傀儡にすぎず、実質的な将軍は信長自身である。

信長にしてみれば、義昭を一五代将軍の座につけてやったのは自分だという、自負があったのであろう。義昭のほうでは、もともと信長は取るにたらぬ尾張の新興大名ではないかという意識がある。両者の認識の差が、時間の経過とともに大きくなり、いつか二人の間に埋めようもない裂け目をつくっていったのであろう。

義昭の態度は一転して、反信長に変わっていく。反信長の浅井・朝倉・本願寺・武田といった諸大名や組織に檄をとばし、信長への総攻撃を命じる。それればかりか、兄義輝を葬った松永久秀・三好義継たちとも手を結んで、織田家の京都奉行の村井貞勝の屋敷を攻撃する始末。

信長のほうも、負けていない。義昭に一七か条の意見書をつきつけ、義昭は将軍の名に価しない無能な男だと罵倒した。罵倒しただけでなく、義昭がたてこもった二条城を包囲した。

反信長に変わった義昭は、武田信玄と上杉謙信に期待し、信玄の上洛に夢を賭けたものの、それが幻と悟って、信長に降伏を申し出た。信長は、その申し出を認めなかったが、天皇の勅命によって、やむを得ず講和したものの、

足利義昭袖判織田信長条書（御茶の水図書館蔵）。信長が義昭を将軍に就かせて後、義昭とは不和の状態だった。元亀元（1570）年1月、信長は義昭に5か条からなるこの条書を送って認めさせた。第1条では、義昭が諸国に御内書を出す際には信長の添状をそえること。第2条、これまでに出した義昭の下知はすべて破棄すること。第3条、義昭が恩賞を与えるときには、信長の分国から所領を提供する。第4条、天下の政務を信長に任せたうえは、義昭の意見を待たず処分すること。第5条、朝廷への奉仕を義務づける。この条書には義昭の印が押されており、信長の出した条件をのんだことがわかる。事実上、義昭は政治的に無力化された。

義昭とは会見せず、帰国する。

反信長の執念に燃える義昭は、天正元(一五七三)年、山城槇島城に約四〇〇〇の兵とともにたてこもるが、信長の軍に攻め陥とされ、足利幕府は滅亡する。義昭は、運命を託した信長によって最後の将軍となり、その信長に滅ぼされるという皮肉な運命をたどったことになる。

義昭は、この後も信長打倒に徹し、信長攻略を画策するが、信玄が病死し、謙信もまた他界して、彼の努力はすべて徒労に帰した。

"織田幕府"の構想のため天皇の存在は絶対に必要だった

義昭ほど、反信長の旗幟を鮮明にした者はいない。諸国の大名に呼びかけて、反信長連合軍を形成することに狂奔したばかりか、みずから陣頭にたって采配をふるった。

信長は、しかし、幕府そのものを崩壊させたが、義昭の命まで奪おうとしなかったのは、謎というしかないが、その大きな理由のひとつは、将軍を弑逆して、諸大名の反感を買うことを警戒したことがあげられるだろう。

"主殺し"の汚名を着ることは、生涯、負のイメージを背負って生きることを意味する。義昭の執拗な攻撃にさらされているとき、信長は東に信玄や謙信、西に毛利輝元という強大な敵をかかえていた。そのときに将軍義昭を殺し、信玄や毛利輝元が、幕府再興をかかげて、反信長連合軍を形成したら、ひとたまりもなく押し潰されるに違いない。

そういう読みのうえにたって、信長は、慎重かつ狡猾に「天下布武」を推し進めていった。東の武田氏を滅亡させ、西の毛利氏に攻撃をしかけて、「天下布武」の理想がようやく実現しようとしたやさき、信長は本能寺の変で横死するのだが、明智光秀は、もともと義昭の家臣で、信長を頼るように進言した人物であった。

光秀は、その後、信長の家臣になったが、光秀は朝廷や公家衆に知己が多かった。信長は、光秀の線から、正親町天皇を動かして、"織田幕府"を認可させ、みずから初代将軍になろうとしていたのではなかったか。

その工作を、地下で着々と進めていたが、織田幕府を開く場合、義昭を殺害しては、自分を、一三代将軍義輝を弑逆した松永久秀たちと同レベルに置くことになってしまう。自分を、松永久秀たちと同列におくことは、信長の誇りと自尊心が許さなかった。

義昭が将軍となり、信長を管領にしようとした時点から、信長にはおそらく織田幕府を開くことへの野心が芽ばえたのではないか。

そのためには、朝廷との関係を円滑にしておく必要がある。信長が天皇の扱いに慎重で、将軍義昭をも殺さずにおいたのは、そのためであろう。光秀の朝廷工作がうまくいかず、信長の光秀に対する苛立ちはつのり、光秀を虐待した。それが裏目に出て、光秀に討たれたのは、歴史の皮肉だというしかない。

信長本陣が"天下統一"の軌跡をたどる

1 東海

「たわけ」の激動の10年

数において優勢だった今川義元軍を、奇襲によって織田軍が打ち破った桶狭間の合戦は信長のデビュー戦であった。信長の旅の第一歩にふさわしい。古戦場は名鉄中京競馬場の近くにある。ひと巡りして、碑と戦死者を祀ったという戦人塚を見てみるといい。今川義元本陣跡と伝えられる高徳院には、義元らの墓碑や、戦に使ったといわれる鎧や兜が展示された資料館がある。桶狭間の合戦をシミュレーションで学ぶこともでき、大いに気分は盛り上がる。

盛り上がった気分をもって次は熱田神宮へ行ってみよう。名鉄神宮前か地下鉄神宮前が近い。熱田神宮は桶狭間の合戦の折、清洲城を出撃した信長が、全軍の到着を待って戦勝祈願をしたところで、勝利を収めたお礼として奉納した〝信長塀〟がある。当時のまま残されている箇所もあって、戦に勝った信長の気持ちを伝えている。

信長が二一～三〇歳までを過ごし、尾張統一の拠点とした清洲城は、当時のものは何も残されていないが、一度は立ち寄りたい。名鉄あるいはJR清洲駅で下車する。現在は再築天守閣が観光のシンボルとして建つ。城跡公園には魅力的な信長像があり、これは一見の価値あり。「信長最中」「清洲信長」(酒)が土産として売られている。

岐阜は、その名を信長に命名され、安土へ移るまでの一〇年、天下布武をスローガンに戦った信長の本拠であり、また楽市・楽座が行われたところ。ぜひコースに加えたい。まずバスで金華山へ。山のふもとの岐阜公園内に信長居館跡が発掘整備されており、自由に見学できる。ここは信長の日常生活の場とも考えられているので、さまざまなことを思い浮かべつつゆっくり歩いていただきたい。

公園内のロープウェイを利用して金華山頂上の岐阜城天守閣へ。信長の時代の苦労を身をもって知りたい方は登山道をどうぞ。天守閣からは、眼下に町並み、長良川、天気がよければ伊吹、鈴鹿の山も伊勢湾も、関ヶ原も見ることができる。「天下人の気分」がこの城のキャッチフレーズ。天守閣内部には戦国時代の資料を展示した、ちょっとした博物館になっている。

崇福寺は織田家の菩提寺で、信長・信忠父子の廟がある。信長の側室お鍋の方が遺品を埋め、位牌が安置された。寺の奥の裏庭にひっそりと廟は建っている。ここには、信長愛用の櫓時計や稲葉一鉄寄進の鐘楼や、本堂の血天井など興味深い品が多いが、見学したい場合は事前に連絡しておいたほうがいい。

〝楽市〟がどこで行われたか、見たいと思うなら円徳寺を訪れてみよう。寺の門前に〝楽市楽座制札〟が立てられたそうだ。この札は現在は歴史博物館で見ることができる。また、信長寄進の陣鐘など、所縁の品もある。余談だが、この円徳寺の向かいの和菓子屋に「織田焼き」という菓子が売られている。栗入りのどら焼きだが、なかなかユニークな味だ。

時間があったら犬山の有楽苑へも行ってみよう。信長の弟有楽斎が建てた茶室も見学でき、茶も点ててもらえる。

桶狭間古戦場
西側の高台にある高徳院には義元らの墓碑が立ち、戦に使われたと伝えられる鎧などが展示された宝物館がある。

▼

熱田神宮
織田信長が桶狭間の戦いに勝利を収めたお礼として奉納した〝信長塀〟がある。本宮を囲むように現存する。

▼

清洲城・清洲公園
織田信長の尾張統一の拠点となった城。公園には信長像が、城跡には現在、再築天守閣がある。

▼

岐阜城・信長居館跡
「いままで見たどんな宮殿より、この館は精巧、華麗である」とルイス・フロイスを驚かせたのが岐阜城である。

▼

崇福寺
織田信長父子の廟がある。本能寺の変後、信長の側室お鍋の方が遺品をこの寺に埋め、位牌を安置させたという。

▼

円徳寺
信長が同寺門前で行った「楽市」に出したという「楽市楽座制札」、信長寄進の陣鐘等、ゆかりの品が多くある。

2 滋賀

「天下布武」の正念場

琵琶湖の東と北の史跡巡りは小谷からスタートしたい。小谷城は浅井三代の居城で、日本でも有数の山城だったが、現在は石垣と記念碑があるのみ。小谷山から目と鼻の先に、信長の本陣が置かれたという虎御前山が見える。そのあまりの近さに、落城前の差し迫った様子が伝わってくるようだ。

小谷山を降りてきたところに、浅井家の祈願所でもあった小谷寺がある。お市の方の所縁の品もあるので見ておきたい。お市の方の持仏と伝えられる愛染明王と、兄信長から贈られた刀がある。この刀は女性用にしては長く実用向きで、女性でもこのくらいの刀を持たねばならない乱世のきびしさが感じられる。

さてこの近くに、長政やお市の方も湯治に通ったという、須賀谷温泉がある。今も旅館が一軒あるが、ここは各部屋に「信長の間」だの「長政の間」だのと名がついていて楽しい。この湯に入ると、女性はお市の方のように美しくなれるという。

小谷から北陸本線沿いに長浜へ向かう途中、姉川古戦場跡と国友鉄砲の里資料館がある。姉川は浅井・朝倉軍と織田・徳川軍が死闘を繰り広げた古戦場。川辺には〝姉川戦死者之碑〟と〝姉川古戦場〟の石柱が立つ。

鉄砲に興味があるなら国友鉄砲の里資料館へ。鉄砲伝来の翌年から鍛冶が始まったというだけあって資料は多い。さまざまな形の鉄砲やその製作工程も学ぶことができる。

安土城跡には、何があっても行かなくてはならない。信長の天下統一のシンボルで、華麗な天主閣をもつ絢爛豪華な城郭であった。今は、その豪壮な石塁が残るのみである。安土城築城の際、信長の命で建立された摠見寺は、仁王門と三重塔が現存する。安土山にあるので城跡とともに、見ることができる。西湖からの風に吹かれながら、ゆっくりと石塁の間を歩き、信長の夢を追ってみたい。運がよければ天守閣の瓦を拾うこともあるが、「持って帰ってはいけない」との安土町からのお達しがある。

安土山からそう遠くないところにセミナリオ跡がある。公園になり石碑が立っているが、付近に目印がなくわかりにくいので、案内所などで聞いておいたほうがいい。

安土駅から徒歩一〇分ほどの所に、浄土宗対日蓮宗の安土宗論が行われた浄厳院がある。安土城築城に際して再興され、現在に至る。信長木像も見ることができる。

安土をひと回りして駅に戻ったら、駅前の城郭資料館へ寄ってみよう。安土城天主閣の模型を眺めつつ、喫茶コーナーでカフェ・カプチーノを味わうことができる。

安土城の絵のテレカ、コンペイトウ、信長の肖像画入りしおり、「信長」という名の酒と、土産はほとんど信長がらみ。平成三年六月には、駅前に信長像もできた。安土町は日々〝信長色〟が強くなっている。

小谷城跡
浅井氏の城跡。周囲6kmという日本有数の大きさをもつ山城のひとつ。現在は石垣と記念碑がある。

▼

小谷寺
浅井3代の祈願所だった寺。お市の方の持仏愛染明王、信長がお市の方に贈ったといわれる刀類がある。

▼

姉川古戦場
信長と浅井・朝倉の激戦跡には、いま野村橋のたもとに「姉川戦死者之碑」、三田に「姉川古戦場」の石柱が立つ。

▼

国友鉄砲の里資料館
鉄砲鍛冶国友一貫斎の資料を中心に、各種の国友鉄砲やその製造工程などが展示、解説されている。

▼

安土城跡・摠見寺
信長の天下統一のシンボル。華麗な天守閣をもつ絢爛豪華な城だと伝えられ、いまもなお豪壮な石塁を残す。

▼

浄厳院
安土城築城の際、再興された。有名な安土宗論が行われた寺。

▼

セミナリオ史跡公園
実際、セミナリオ（神学校）があったといわれる場所には民家があるので、少しずらした場所に公園がある。

▼

城郭資料館
安土城天主閣の模型が展示してある。

「奇行」の背景を読む

[図説]〃非常の人〃信長の時代探訪

信長が天下統一を進めてゆくころ、
世界が、そして日本が
大きく変わりつつあった。
尾張の「うつけ」とよばれた
この男の「奇行」も、
この時代のうねりのなかで見るとき
初めてのその意味がわかる。
世界の激動が、人々の心の変化が、
そして経済や芸術が、
巨人・信長のなかでは
ひとつになっていたのかもしれない。

都の南蛮寺図
(神戸市立博物館蔵)

「ゆめまぼろし」

京都で信長所縁の地を訪れるなら、やはり本能寺からだろう。京都駅からバスか地下鉄を利用するといい。火災と移転とで、信長のころを伝えるものは少ないが、境内には〃信長公廟〃、〃本能寺の変戦没者合祀墓〃がある。信長画像、書状、三足のわらじ等の品も収められ、年一回六月二日に展示される。寺の並びの本能寺会館に泊まり、信長膳を食せば、信長気分に浸れるかもしれない。ここも、Tシャツ、バッジなど、信長がらみの商品ばかりだ。

東山にある大雲院は、信長の長男信忠の追善のため建てられた。所縁の品も多いが、展示は春と秋の二回のみ。公開日に注意したい。

数多い信長の墓の中で、遺骨が収められた確率が一番高いとしたら、それは阿弥陀寺の墓だろうか。本能寺の変の当日、この寺の清玉上人が本能寺へ駆けつけて、信長の遺骨を持ち帰ったという言い伝えがあるのだ。本堂には信長、信忠の木像もある。

信長の後継者たることを印象づけるため、秀吉が大々的に信長の葬儀を行ったことで有名な大徳寺総見院は紫野にある。信長の菩提寺であるから知らん顔もできない。広い墓所の奥に織田家一族の墓がある。信長の木像、画像も伝えられているが、拝したい場合は事前に連絡が必要。

大徳寺にほど近い船岡山山頂に、信長を祀った建勲神社が建っている。もともと秀吉が信長の寺をと考えていた所だが、秀吉の死で中断。明治になって改めて神社となった。建勲は信長の神号である。信長の鎧や『信長公記』も収められている。

京都で信長所縁の地を訪れると、どうしても墓巡りになってしまう。墓にはいつも熱心なファンによって花が手向けられている。

墓以外の史跡を、と望むなら、六角油小路本能寺小学校(旧本能寺跡)や、地下鉄丸太町付近、京都御所内に復元された旧二条城跡石垣はどうだろう。信長とは縁の深い場所だ。

本能寺
信長公廟、本能寺の変戦没者合祀墓がある。当時の場所とは異なるが、信長の書状をはじめゆかりの品も多い。
▼
大雲院
織田信長の長男・信忠追善のため、正親町帝の勅命によって創建された。信長父子の画像などがある。
▼
阿弥陀寺
本能寺の変当日、同寺の清玉上人が信長の遺体を見つけて、茶毘にふし、遺骨を持ち帰ったという伝えがある。
▼
大徳寺総見院
明智光秀討伐後、大徳寺で信長の葬儀を盛大に催した秀吉が、信長の菩提寺として建立した。
▼
建勲神社
信長父子を祀ってある。明治になって、信長が建勲の神号を賜った際に、この地に遷座された。
▼
二条城跡
二条城は地下鉄工事中に発掘された。石垣が、地下鉄丸太町付近の京都御所内に復元されている。

熱狂的な信長ファンが集まる 信長本陣とは?

「グループ信長本陣」は、熱狂的な信長ファン一五〇人が集うグループである。全国に広がる会員は、一年に一回信長ゆかりの地を訪ねる旅行をしたり、隔月刊の機関誌も発行している。さらに同グループでは、来年のNHK大河ドラマで信長が取り上げられるのを機に、『ルネシタ』(イタリア語で〃ルネッサンス〃の意)という独自のマンスリーニュースを、自らNHKに取材し、放映中ずっと刊行する予定である。

［図説］信長の時代探訪 ①

世界のなかの信長――南蛮文化の影響

永禄十二（一五六九）年、信長は二条城ではじめて〝南蛮人〟と会った。そのフロイスに魅せられた信長は、戦国時代にあって唯一「地球人」の意識を備えた人物だった。

文・松田毅一 京都外国語大学教授

太田牛一の『信長公記』には、天正八（一五八〇）年三月二十日に織田信長が諸国を廻り歩いていた奇僧「無辺」を尋問したことが見える。一六世紀の後半に三〇年あまり日本に滞在して厖大な記録を残したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、その著『日本史』の中に、「無辺」のことで『信長公記』とほとんどまったく同じ記事を掲げているから、ともに信憑性が高い。その文中に次の記述がある。

「（信長公）、客僧の生国は何くぞ、と御尋ねあり。無辺（フロイスは、“Infinito”（無限、無窮の意））と答ふ。また、唐人か天竺人（フロイスは「シャム」）かと御意候。ただ、修行の者と申し、人間の生国三国の外には不審なり。さては術物にてあるか、しからば炙り候はん間、火の拵へ仕り候へと御諚のところ、御一言に迫り、出羽の羽黒の者と申し上げ候……」

ここで注目されるのは、信長が世界三国観、すなわち人間は日本、中国、天竺（インド、シャム）人から成るとみなしていたという点である。当今ではもはや「三国一の花嫁」などと言わなくなったが、少なくとも戦前までは「世界一」を「三国一」と表現することもあった。実は織田信長の時代に日本人の世界観が大きく拡大して、三国観の誤りが判り、ようやくそれが真にグローバルなものとなって行った。信長はその先頭に立つ人物であり、彼が南蛮人と呼ばれた南ヨーロッパ・キリスト教国民から受けた最大の影響はその点なのである。

信長は、いつどこで南蛮人と出会ったのか？

信長がこの世に生を享けたのは一五三四（天文三）年のことで、その一二年前にマゼラン（マガリャンイシュ）艦隊の一艘ヴィクトリア号は世界周航を成就していた。ポルトガル人は東廻り、スペイン人は西廻りで世界の七つの海に雄飛して、ヨーロッパ人はほぼ地球の全体像を知るに至ったが、戦乱に明け暮れていた極東の島国に籠居していた日本人は、そうした海外事情を知るべくもなかった。だが信長が九歳の折、ポルトガル人三名が乗っていた中国船が種子島に着いたし、同じ頃、スペイン船サン・ファン号は、今、小笠原諸島と呼ばれる島々を発見し、「アルソビスポ諸島」と命名した。ついで九州にポルトガル船で宣教師や商人が続々渡来するが、信長はいつどこで初めてそれら南蛮人と接触したであろうか。

信長は永禄二（一五五九）年に上洛し

南蛮屏風（神戸市立博物館蔵）

たが、それは洋暦三月十日（邦暦二月二日）のことで、将軍義輝に謁見を賜ってすぐ立ち去っている。ポルトガル人宣教師のヴィレラが入京したのは十一月初めだから、この年双方は出会っていない。その九年後に信長は義昭を奉じて入京したが、南蛮の伴天連（司祭の意）と称される異国の僧侶が、「都」で仏教の側から苦しめられていることを聞くと、逢うことにした。そこでルイス・フロイスは、翌永禄十二（一五六九）年三月三十日に、ヨーロッパ製の鏡、孔雀の尾、黒いびろうどの帽子、ベンガル産の籐杖を贈物として携えて出向いたが、信長は彼に馳走したものの離れたところから伴天連を観察し、贈物のうち黒帽子を受理するに留まった。信長はその後で、「幾千里もの遠国からはるばる日本に来た外国人をどのように迎えてよいか判らなかった」と家臣に述懐したという。生涯、誰一人何一つ畏れるものがなかった権勢家の信長が、貧しい装いの異国の一人の僧侶に対することの態度は、フェリーペ二世の習癖と通じるものがあって微笑ましい。だが翌四月十九日頃には、工事中の二条城の濠橋の上でフロイスと対面した。信長は、ヨーロッパやインドから日本までの距離、その他、初めて耳にすることどもに驚嘆し、また好奇心に駆られた。彼は一目惚れといったように南蛮の伴天連に魅せられ、一方宣教師は思いもよらぬ有力な保護者の出現を喜び、岐阜へ、ついで安土へ、また信長が上洛の際には京都でと、しばしば長い歓談を重ねた。信長は地球儀を持参してもらい、それによって地球上のことを何かと教わり、四大（地水火風）の性質、日月星辰、寒暑の諸国、諸国の習俗を聞いて喜んだ。彼はそれまでに早くから異国の珍奇な品々を入手していたから、宣教師から贈られて特に満足した品とてはない。酒を飲まなかった信長はフラスコ入りの金米糖を好み、それに例外として贈られた絹の袋に入れられたポルトガルの樽に大喜びした。

信長が使ったといわれる南蛮鉄兜（提供：岐阜市歴史博物館）。天正3（1575）年の長篠の戦いを描いた合戦屏風の中には、兜持ちが高々と南蛮笠の兜を掲げている姿がある。

グローバルに日本を見たはじめての日本人

信長が長篠の合戦において三〇〇〇梃の鉄砲の威力を発揮したことは有名であるが、その鉄砲は天文十二（一五四三）年にポルトガル人が種子島へ携えて来た東南アジア製のものを、日本人がたちまち大量に生産したもので、信長は一五、六歳の頃から鉄砲の訓練に励み、やがて鉄砲隊をもって敵を圧倒したのであった。だが鉄砲を南蛮渡来の文物とするには、あまりにも関係が浅い。

また信長は伴天連から洋式の時計をもらったことがあるが、興味がなく返却している。それに伴天連たちがもっとも影響を与えたかったキリスト教について、信長は終始何の関心もなく、ついには自らが神仏と崇められることを願うに至り、宣教師たちに幻滅の感を抱かせた。

洋人奏楽図屏風（細川護立氏蔵）。史料にある限りでは、信長はフロイスをはじめとする南蛮人の宣教師に少なくとも31回は会っている。フロイスのほかにはイタリア人のニエッキ・ソルド、オルガンティーノらがいる。

信長が壮年で非業の死を遂げていなければいかに処したかは判らぬが、早くから秀吉その他の側近から、南蛮の伴天連を優遇し好意を示すについて忠告や勧告を受けながら、彼はそれを一笑に付し、他方、自ら誇るに足りる岐阜城、安土城についても、南蛮人に向かって貴国には、これ以上の建築があろうと何度も謙虚に語った信長は、日本人の中でもっとも早く、グローバルに日本国の実情を認識してヨーロッパ人に対処した者の一人と言えるのではあるまいか。

次の天下人、豊臣秀吉の代に入り、南蛮人の実情が、より明白になるに至って、日欧双方ともに新たな展開を見るに至る。だが信長の代に関して言えば、あたかも有為の若い青年と才女の出会いのような甘さがある。

“南蛮もの”を好んだ信長のダンディズム

フロイスの描写によると、信長は「中くらいの背丈で、華奢な体軀であり、髯は少なく、はなはだ声は快調」な人物だったらしい。毛が少なかったせいではないだろうが、信長は南蛮の帽子をえらく気に入っていた。武田信玄に対し、進物のひとつとして緋羅紗の南蛮帽を届けたという話も伝わっている。南蛮文化の導入にひと役買った信長のダンディズム。洋装の信長はこんな感じだったのではないか。

信長が着用したといわれるビロードのマント（「赤地牡丹唐草文天鵞絨洋套」上杉神社蔵）。これはのちに、将軍義昭が浅井、朝倉、武田などと反信長連合を策した際、武田と対立していた上杉謙信に贈られたものである。

［図説］信長の時代探訪2

安土城天主の造形——信長の思想と夢

信長にとって「城」は、単なる戦いのための「砦」ではなかった。そこには、信長の世界観がすべて込められていたといえる。安土城の復元を通じて、彼の大いなる心の中を見る。

文・内藤 昌 東京工業大学教授 名古屋工業大学教授

地球的世界を知った人間がつくった造形

大航海時代の日本で、いみじくも生まれた文化遺産に「天主（守）」がある。その創始とされる安土城天主の壮麗な造形は、ヨーロッパ文化圏に初めて喧伝された日本建築であるだけに、古代における伊勢の社や法隆寺の名建築にもまして、まさに世界史的な関心がもたれるのである。

それは単に、一つの空間を造るというミクロな問題ではなくして、日本の文化が、これまでの世界認識である「唐（中国）」「天竺（インド）」を含んだ「三国世界」のかなたに、「ヨーロッパ世界」の存在を知った結果の造形である。そのマクロな世界史的視座にたつ信長の、新しい時代をつくろうとする積極性を改めて歴史的に評価すべきであろう。

安土御構にみられる近世的な城下町計画

いまだ東に上杉と武田の敵勢をひかえ、また近くに石山本願寺門徒の反乱、さらにはその西に毛利の大軍を意識しなければならない政情極めて不安定な天正四（一五七六）年正月から、あえて安土築城の大工事を始めている。丹羽長秀を総普請奉行とし、尾張・美濃・三河・伊勢・越前・若狭など一一か国に役夫を徴し、「天も地もゆるがすばかり」の大工事であったと『信長公記』は伝えている。

天主（守）の建築工事は、翌天正五年から始まっている。尾張熱田社の御大工岡部又右衛門を棟梁にして同年八月二十四日に立柱、十一月三日に上葺する。以後内装工事に移って、狩野永徳・光信父子らの金碧障壁画や、後藤平四郎や鉢阿彌の飾金具、刑部の漆仕上げがおこなわれ、いよいよ信長父子が正式に移徙したのは、天正七年五月十一日であった。

城下町の建設も、以上の天主の工事と並行している。中世の「根小屋」と異なって、定住を旨とした武家屋敷が計画され、加えて有名な「楽市楽座」制による商業の繁栄策が実施されたのは、早くも天正五年六月である。続いて新時代を象徴するキリスト教の大公堂セミナリオも建設され、城下は日々殷賑の度を増している。

そうして完成された安土城は、いわゆる平山城の縄張（都市計画）である。北方に琵琶湖伊庭内湖へ突出する安土山（標高一九九メートル、湖面よりの比高一一〇メートル）を配し、軍学書にいう「後堅固」の構えをもち、南方低地に内堀を介して町を開く。城正面には水平距離二〇〇メートルにおよぶ直線の大手道石段を設け、そのパースペクティブを生かした計画性は極めて西洋的である。周辺には「安土御構」と称する濠がめぐる。ヨーロッパや中国の環濠城塞都市を日本化した近世城下町の先駆的計画である。

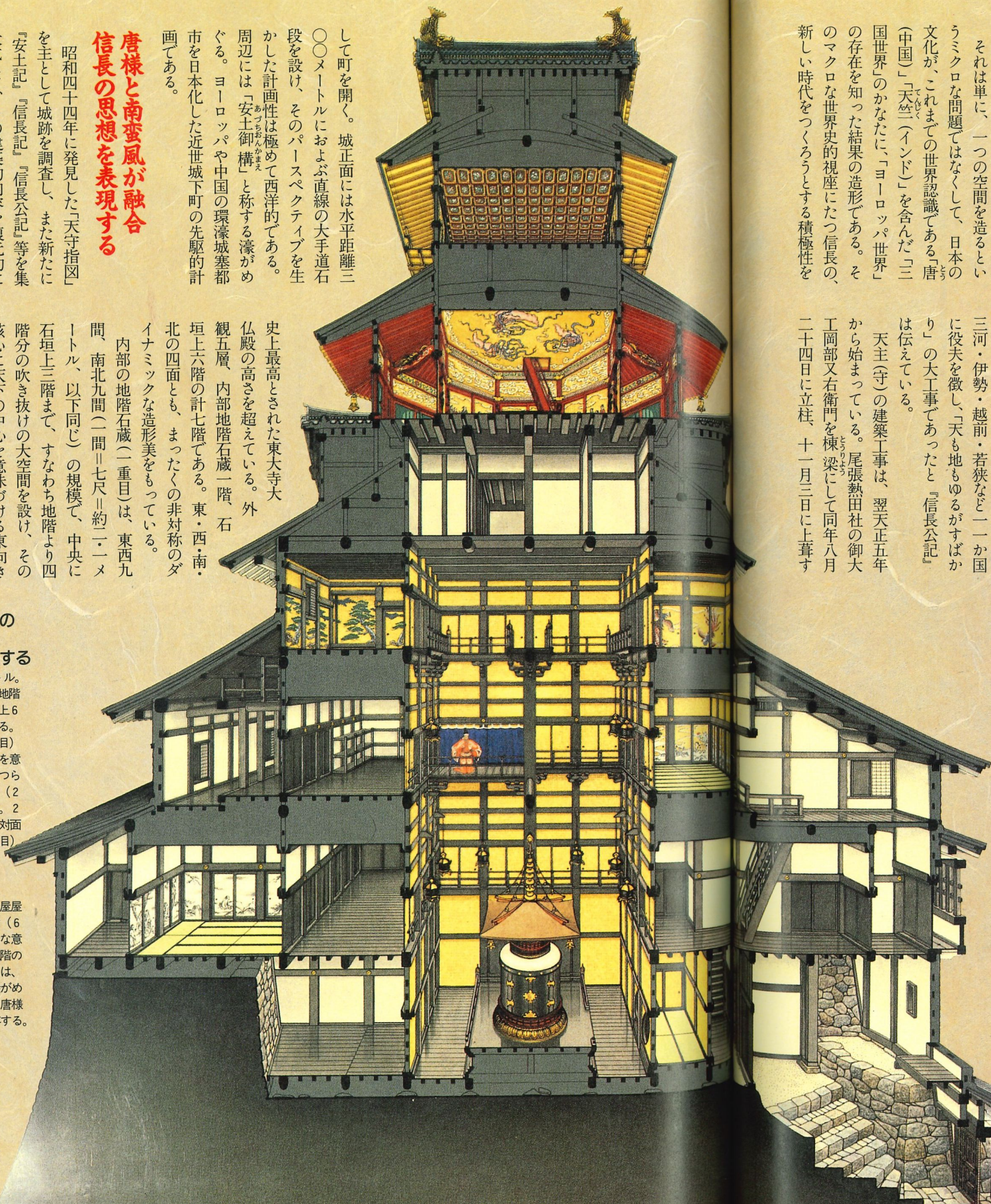
唐様と南蛮風が融合 信長の思想を表現する

昭和四十四年に発見した「天守指図」を主として城跡を調査し、また新たに『安土記』『信長記』『信長公記』等を集大成して、その建築的内容を復元的に考察すれば以下になる。

安土城天主の総高は、地上一五一・五尺（約四六メートル）で、古代以来史上最高とされた東大寺大仏殿の高さを超えている。外観五層、内部地階石蔵一階、石垣上六階の計七階である。東・西・南・北の四面とも、まったくの非対称のダイナミックな造形美をもっている。

内部の地階石蔵（一重目）は、東西九間、南北九間（一間＝七尺＝約二・一メートル、以下同じ）の規模で、中央に石垣上三階まで、すなわち地階より四階分の吹き抜けの大空間を設け、その核心に天下の中心を意味づける東向き宝塔をまつる。

次に、石垣上一階（二重目）は、東西一七間、南北一七間の不等辺八角形で、

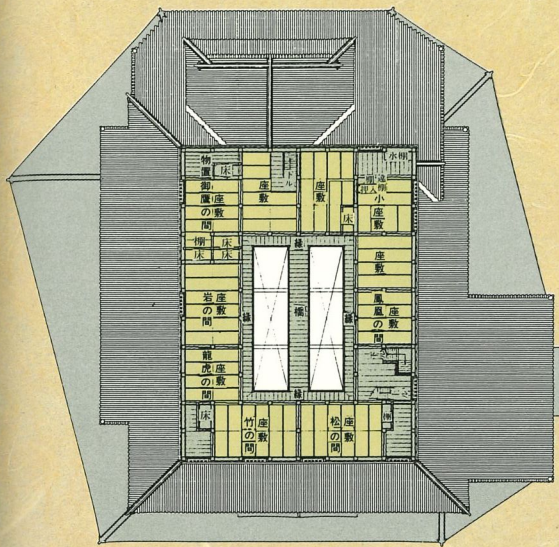
安土城天主の内側を詳細に探訪する
総高約46メートル。外観5層、内部地階石蔵1階、石垣上6階の計7階である。地階石蔵（1重目）には天下の中心を意味する宝塔がまつられていた。1階（2重目）は大広間。2階（3重目）は対面所。3階（4重目）は信長の常住の諸座敷がある。4階（5重目）は大入母屋屋根裏部屋。5階（6重目）は仏教的な意匠で統一。最上階の6階（7重目）は、勾欄つきの落縁がめぐらしてある。唐様と南蛮風が並存する。

近世武家殿舎でいう大広間で、大名の接見および諸儀式をおこなう政庁の機能を有する。さらに、イエズス会の日本年報でバチカンに報告されてもいる「盆山（ボンサン）」の霊石をまつる神道の座敷がある。

二階（三重目）は、対面所である。東西一〇間、南北一二間の凹凸の多い複雑な平面で、先述した地階よりの吹き抜け空間には、二間四方の舞台を張り出し、それに正対して対面所最上席を設けた接客儀礼の空間である。

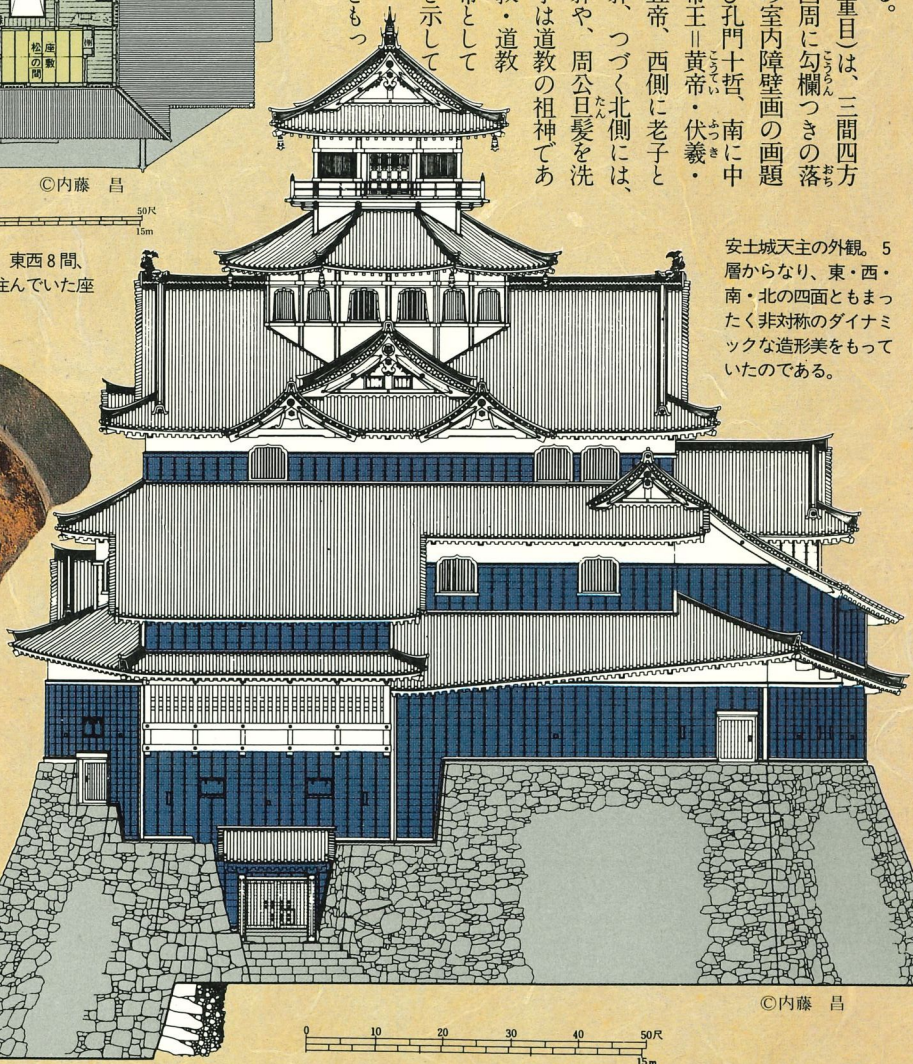
三階（四重目）は、東西八間、南北一一間の矩形（くけい）平面で、南から西にかけて信長常住の諸座敷や黄金の茶座敷がある。

四階（五重目）は、外観第三層目の大（おお）入母屋（いりもや）屋根裏部屋である。

五階（六重目）は、対辺間距離五間の正八角形平面で、仏教的な意匠で統一されている。天井に天人影向（ようごう）の図が描かれ、柱には、後の日光東照宮など周知の「昇り竜」「降り竜」がかざられている。そして金碧極彩色でもって仕上げられた室内には、釈門十大弟子の群像のなかで、釈尊が説く仏法世界が顕現されている。

最上階の六階（七重目）は、三間四方の正方形平面で、四周に勾欄（こうらん）つきの落縁（おちえん）がめぐる。金碧の室内障壁画の画題は、東に孔子および孔門十哲、南に中国創世紀の伝説的帝王＝黄帝（こうてい）・伏羲（ふっき）・神農（しんのう）などの三皇・五帝、西側に老子と文王（ぶんおう）車にて御成の躰、つづく北側には、太公望（たいこうぼう）への勅使の躰や、周公旦（たん）髪を洗うの躰である。老子は道教の祖神である。要するに、儒教・道教の思想の下に、天帝として世をおさめる提要を示しているわけで、天下布武の信長の思想をもっともよく表現している。

©内藤　昌

天主3階（4重目）の平面図。東西8間、南北11間の矩形平面。信長が住んでいた座敷があった。

安土城址から出土した金泥瓦。信長は安土で、みずからを神となし、天下統一のすすむ日本各地に命令を発していた。（提供：岐阜市歴史博物館）

安土城天主の外観。5層からなり、東・西・南・北の四面ともまったく非対称のダイナミックな造形美をもっていたのである。

©内藤　昌

以上の造形は、古代以来常に理想とした「唐様（からよう）」の建築様式を主としており、とりわけ大航海時代に影響をうけた東南アジアから天竺（インド）を通じてのあこがれの「南蛮風」のデザインであった。

安土城は天主の創始。込められた天道思想

いわゆる下剋上（げこくじょう）の戦国社会において、旧来のさまざまな伝統、そして道徳や法までもが、公然と否定され破られる際、そうした行動を、何らかのかたちで意義あらしめる倫理意識に天道（てんどう）思想があった。すなわち、室町時代特有の儒仏不二（ふに）・神仏唯一・三教一致の思想から、天道思想が導き出されている。これより日々死闘に明け暮れる戦国武将は、実力主義を鼓吹、もって運命打開の契機とする神秘性と、支配権力を理念づけ社会秩序の安定を願う倫理性を希求した。加えてキリスト教の「デウス」が、「天道」「天主」に擬せられたことも見逃せない。

結局、天道思想は、安土城天主が造形された天正初期（一五七〇年代）において、儒教・道教・仏教・神道、それに新来のキリスト教までも包括していた。そうした既有のイデオロギーに超越する思想をもって信長は、まず須弥山（しゅみせん）上にみたてた安土山頂に宝塔を設け、ついで一階に盆山を奉祀して「神にして不滅なる」自己の化身を崇めさせ、そこで醸成される超越的権威によって一～二階で行われる政治を支配、自らは三階に居住する。吹き抜けの空間を利用しての二階舞台は、時に饗応の用には供しても、天上の楽を奏でることが可能である。そして五～六階は、まさしく天堂である。キリスト教のデウス＝天主にも通じて、唯一絶対というよりは、むしろ統一絶対神たる信長の座をきわめている。安土城をもって「天主の創始」となす歴史的意義は、こうして成立したのである。「国中の郡郷を総見する」意をこめて併設された「摠（そう）見寺（けんじ）」は、その安土城天主の陽光をうけて、大航海時代の日本で、新しい「平安楽土」のイメージを城下、さらには天下万民に知らしめたものであろう。

かくて世界史上にその名をとどめた安土城天主は、「基督教国にもあるべしと思わざる甚だ宏壮なる建築」（『耶蘇会士日本通信』）と喧伝され、かつてマルコ・ポーロが「黄金の国ジパング」と紹介して以来の日本の幻想を、さまざまにはぐくんだものと考えられる。

琵琶湖畔につくられた安土城は京都にも近く、また水運を通じて日本国中に四通八達している地であったといえる。

〈左〉城の大手門跡。いま安土はうっそうと樹木がしげり、当時のおもかげを隠している。

〈中〉信長が自らをまつらせた摠見寺。信長はしだいに自分が神であるという自覚をもった。

〈右〉いまも残る安土城の石垣。城が焼失したあと、石垣の石は各地に運び出された。

〔図説〕信長の時代探訪 3

日本中世最後の人信長の経済感覚

信長の天下統一において、他武将と比べ飛び抜けているのが、その経済政策である。しかし信長といえども、中世の経済体制をすべて打破するというわけにはいかなかった——。

文・脇田修
大阪大学教授

よく知られているように、信長は楽市楽座をはじめ、時代に先駆けた経済政策をとったとされている。しかし、その実態はどうだったのか。どこまで信長はその意味を自覚していたのか。ひとつひとつの事実の検証を通じて、信長のもう一つの側面が浮かびあがる。

信長はまず、経済の拠点都市を把握した

信長の旗印には、永楽通宝が用いられている。真田の六文銭は有名であるが、信長の旗印については、あまり注目されていない。永楽通宝は中国で明の永楽帝の時に発行された通貨であるが、日本でも室町時代にはもっとも主要な通貨となっており、日本で私鋳されるほどになっていた。この旗印は、中国文化と富へのあこがれを物語っているとともに、信長の経済への関心の強さを示している。そして、このような経済感覚は、信長の出た尾張の風土に負うところが多いと思われる。そこは畿内から東国へ向かう東海道が通っており、揖斐・長良・木曾の三大河川と伊勢湾に面して、水運にも恵まれた土地であったからである。

信長所用のものと伝えられる永楽通宝７個を使った鉄鐔（提供：岐阜市歴史博物館）。信長は撰銭令を出したが、あまり効果はなかった。

さて信長の天下布武にあたって、まず彼は畿内近国という日本でもっとも経済的に発達した地域をおさえた。武田勝頼のひきいる最強の騎馬隊を、三河長篠において鉄砲隊をもって打ち破った合戦は、彼の戦術眼のすぐれていることはもちろんであるが、三〇〇〇挺の鉄砲を揃えることができた経済的背景を忘れることができない。

それには信長は、まず経済の拠点である都市を把握しなければならなかった。室町時代には京都・堺をはじめ多くの都市が成立していたが、首都であった京都でも上京・下京の惣町結合が発達したように、ベニスのごとき自由都市とされた堺、〝十楽の津〟といわれた桑名などの自治都市が成立していたし、また寺内町といって一向宗や日蓮宗などの寺院の境内という形式をとった自治都市も生まれていた。信長が斎藤道三と婚舅の対面をした富田の聖徳寺は、尾張・美濃の守護から認められていた寺内町の一つで、中立地帯だったところから、両者の対面の場となったのであった。

現実に即し、計算された流通革命

このように畿内近国では、商工業者は自らの安住の地を求めて自治都市を建設していた。信長は将軍義昭に味方したとして上京を焼き討ちにしたように、敵対する都市は弾圧したが、堺については武装を解除したのちは、その都市特権を認めて、経済力を利用した。京都は家臣村井貞勝を所司代として市政をおさえ、堺には清洲の町人松井友閑を政所としておいて、その掌握にあたらせたのであった。

もちろん信長は自己の拠点として城下町の発展を望んだから、天下統一の拠点となった安土の城下町には掟を発し、町人に対して多くの特権を与えた。各地で自治都市が繁栄しているなかで、戦火の危険にさらされる恐れのある城下町に商工業者を集めようとすれば、その活動の自由と安全を保証し、優遇する必要があったからであった。

また岐阜でいえば、城下町岐阜の近くに楽市場・加納の自治都市を認めている。これはある種の複合都市として城下町と既存の都市の経済機能を組み合わせた構成をとっていることで、城下町が戦火の危険にさらされている状況のもとでは、このような方法が実際

洛中洛外図（上杉家蔵）。信長は「楽市楽座」、関所の撤廃など、さまざまな政策で商業の育成を図っている。たとえば尾張では、早くも永禄６（1563）年、瀬戸の商人に対して国中の往来を保障している。しかし信長の政策は画一的なものではなく、国侍や寺社の経済活動には一部で特権をもたせたりして、現実的に対応している。

の経済活動に有利であったためであった。

信長は中世の座組織や関所などの旧流通体制にも対処しなければならなかった。まず信長は分国において関所撤廃を令するなど流通体制の革新をはかっている。

しかしこれを過大に評価することはできない。関所撤廃の範囲は分国という以上、尾張・美濃・近江であったとみられ、事実、京都では皇室領の関所は機能していた。また流通路を独占したりして、活動していた座商人については、信長は座組織を安堵した。つまりそれによって畿内の路はおさえられていたし、京都・奈良の座はすべて活動したのであった。

なぜ信長は全面的に旧体制を廃止しなかったのであろうか。関所や座は皇室や公家・寺院などを本所として課役を納めて、その庇護下にあった。信長はこれらの勢力の権益を侵すことを避けたこと、また信長のおかれていた状況のなかでは、既設の流通体制に依存する必要があったからである。信長の勢力は、彼の死の直前においても、西は備前・伯耆、東は駿河・信濃・越前の範囲であり、本州の中央部をおさえたにすぎず、大陸につながる大動脈瀬戸内海も日本海も掌握していなかった。御用商人を使おうにも、それはたちまち敵に捕えられるであろう。旧来の流通組織を利用することによって、物資は円滑に動くのであった。

信長の選択は、ここでも現実的で効果的なものであった。

この経済活動を支えたのは、尾張・美濃では商人司となった伊藤惣十郎であり清洲の松井友閑らであった。

また畿内では堺の商人今井宗久がまず馳せ参じたし、津田宗及や千利休らも側近になり、堺はもちろん京都や平野など各地の都市豪商や旧来の座組織も織田政権の安堵をえて活躍したのであった。

検地尺。戦国時代の検地は、一国単位のものは少なく、新たに支配した地域などの部分検地が多かった。信長も伊勢、越前、摂津などで検地を行っており、他の戦国大名と比べ、かなり詳細なものであった。

信長の経済政策は、旧来の制度をすべて撤廃するといったものではなく、現実的な対応を踏まえて実施された。飛躍をとげるのは秀吉の時代である。

信長の苦闘を秀吉が開花させた

経済の基礎となる貨幣制度であるが、これについては従来の室町幕府と同じく撰銭令をだしている。これは中国貨幣や日本での模造品など多様な貨幣流通を、一定の整理をして流通させることであるが、これは往々にして通常の相場と異なるため流通の混乱を招いた。悪銭を相場以上に取引するよう命ぜられた結果、彼の命令の行き届いた城下町岐阜には悪銭が集まり、商売に支障が起こっている。京都では米でもって交換をすることを撰銭令追加において禁じているが、銭貨の流通が制約されると、むしろ物々交換が行われるのであった。

ここでも彼はすぐれた現実の認識をしているが、政策は旧来のものを踏襲したのであった。

信長の経済感覚はすぐれたもので、現実の動向をふまえて、それなりに有効な政策をとったが、それは戦国の枠を超えるものではなかった。信長の苦闘した路を、秀吉がうけつぎ展開して近世的な体制が成立するのであった。

[図説]信長の時代探訪 4

茶の湯に託された政治と芸術の境界

無趣味といわれる信長が、一つだけ熱を上げたものがあった。それが茶の湯である。商人たちに命じ、名物茶器を献上させたりしている。いったいその狙いは何だったのか?

文・熊倉功夫
筑波大学教授

妙喜庵茶室。信長と茶器との〝政治的な〟関係は、堺の代表的商人である今井宗久が、松島の茶壺を献じた時点から始まった。

無趣味人・信長がなぜ茶の湯に興味をもったか

織田信長は茶の湯を好んだのは事実だが、その楽しみかたは、世の茶の湯とまた一風変わっていた。

そもそも信長は無趣味な人だった。それは茶の湯のような都会的な趣味という意味で、馬と鉄砲と弓の稽古は欠かさなかったのだから、それが趣味といえば趣味。ほかにはわずかだが幸若舞と小歌をたしなんだ。小歌といえば「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりのこすよの」の一つ覚えであったという。いささか現代の猛烈ビジネスマンの悲哀に通じる。

信長が上洛して、都会的な趣味世界を知ると、自ら楽しむこともさることながら、むしろその社会的機能に注目した。その代表が茶の湯である。茶の湯がその形式を整えてきたのは信長の時代をさかのぼること、せいぜい半世紀。それほど古い歴史があるわけではない。しかし、その以前から茶の湯に用いる器物のなかに、中国から舶載された唐物といわれる名物がたくさんあった。その多くは、はじめ大寺院や足利幕府の什物であったが、やがて経済的実力が、地方の戦国大名や京都や堺の商人へ移ってゆくと、天下の名物道具も実力者のところへと流れていった。

名物持ちの一人に堺の大商人武野紹鷗がいた。紹鷗は皮屋という屋号の商人で、皮革製品の武具馬具を扱っていただろうと推定され、財力にものをいわせて、名物を五〇ないし六〇も所持したとされる。名物一つも所持すれば茶の湯者として認められる時代に、で

ある。当時の状況を観察したヨーロッパ人の記述に、名物道具が宝石のように扱われていると見える。

当然のことながら信長は名物に注目した。

従来いわれているところでは、信長が永禄十一（一五六八）年九月に上洛したとき、松永弾正久秀が名物茶入の「九十九茄子」を献上し、また堺の町衆今井宗久が松島の茶壷と名物茶入の紹鷗茄子を信長に献じ、これがきっかけとなって信長の茶器収集がはじまったとされる。献上の理由は、堺と信長との衝突を避けるためだったという。しかし私の考えでは、事態はもう少し複雑だ。細かい論証は省くが、先の今井宗久の茶器献上の背景には実は宗久の訴訟がからんでいた。

今井宗久は、さきにあげた武野紹鷗の娘婿で茶人としても著名だった。紹鷗が五四歳で没したとき、嫡男の武野新五郎（のちの宗瓦）はわずか六歳。おそらく紹鷗の莫大な財産と名物道具は後見役の今井宗久の管理するところとなった。やがて武野宗瓦は成人する。しかし名物道具は戻ってこない。宗瓦は織田信長に今井宗久を訴えた。

天猫姥口釜（藤田美術館蔵）。信長は永禄12（1569）年から茶器の〝名物狩り〟をするようになった。

茶入「九十九茄子」（静嘉堂文庫蔵）。永禄十一（一五六八）年に松永久秀が信長に献じたもの。このころから信長の茶器集めが高じる。

永禄十一年十二月十六日に、信長の判決文が出た。この日付は、信長と堺の和睦が合意される以前なのであるが、これによると、信長の調停案に武野宗瓦が同意しなかったので、今井宗久の全面勝訴、と記されている。この訴訟の最中に、さきの松島の茶壷と紹鷗茄子の二つの紹鷗遺愛の名物道具が今井宗久から信長に献じられていたというのが真相である。名物道具の献上は明らかに調停を有利に運ぶための策ではなかったか。

宗久と争った武野宗瓦もこれを座視していたわけではない。宗瓦も対抗してやはり名物茶入の「珠光小茄子」を信長に献じていたという（米原正義『織豊期武将にとって茶とは』）。

一国の領地より重い茶入れ一個の価値

この珠光小茄子という茶入も名高い道具で、のちにこんなエピソードがある。米原氏の記すところによると、信長の家臣滝川一益は武田氏との戦い（天正十〈一五八二〉年）において、抜群の戦功を上げた。この戦功によって滝川一益が望んだのがさきの珠光小茄子である。ところが信長は有名無実の関東管領職と東国の三郡を一益に与えて茶入は与えなかった。一益はがっかりして「茶の湯の冥加尽き候」と嘆いている。戦国大名が一国の領地と茶入一個を引きかえにしたと、よくいわれるのは、こうしたエピソードをもとにして説かれるのである。

それにしても宗瓦の献じた珠光小茄子より、宗久の献じた茶壷と茶入のほうが効果があったのだろう。宗久に有利に訴訟は展開した。しかしこれはむしろ町衆の論理ではなかったか。

堺の町衆たちのほうが名物の経済的価値を熟知していた。彼らは茶席でふた言目には名物の値段の話に打ち興じていたにちがいない。それだからこそ信長への贈りものとして名物が最適だと考えたのである。たちまち信長は町衆の論理に同調した。しかしそれはあくまで名物道具の経済的価値という点においての話であった。

信長は茶の湯に政治的役割を与えた

信長が茶道史の上で重要なのは、茶の湯に経済的役割のみならず政治的役割を与えたことである。それはいみじくも信長の後継者豊臣秀吉が残した「御茶湯御政道」の語に象徴されている。秀吉は信長を回顧し、御茶の湯は御政道としてめったなことには許されなかったのに、それが許されたとき、「今生後生忘れ難く」涙を流して喜んだと述べている。何がそれほどありがたかったのだろうか。

「平蜘蛛の釜」（東京国立博物館蔵）。天正5（1577）年、信長に背いた松永久秀は、この釜を抱いて自爆したといわれる。

東山時代にも名物道具はあった。しかし、それはあくまで書院の飾りの一部にすぎない。わび茶が武野紹鷗・千利休師弟によって完成され、はじめて首尾一貫した茶会が生まれたのである。信長は、それを政治の場へ引きだし、天下人の儀礼の一つに加えたのである。

京都や堺でおこなった名物狩りや、献上によって大量の名物道具が集まると、茶の湯の専門家を茶道（茶頭）として召しかかえた。利休や今井宗久、津田宗及などの堺の町衆たちである。そして頻繁に茶会を開いた。茶道に点前をやらせるだけでなく、自らも茶をたてた。これは天下人が茶をたてた最初であろう。

そこに招かれる武将も町衆も限られていた。天下人の自ら主催する茶会は、明らかに政治的儀式である。儀式に参加できるのは天下人に認められた政治的特権であり、天下人の政治への参加を意味していた。——それでこそ「御茶湯御政道」でありえたのである。茶の湯の政治化こそ、信長が創造した新しい茶の湯の性格であったといえよう。

特別対談

信長は2人いたのか？ 苛烈と合理性を同時に備えた男の不思議

時代を先取りした男の脳裏に去来したのは

津本陽（作家）

「勉強をしない頭のいい人。そういう人が、実はいちばん怖いんです。信長は、まさにそういう男だ」

信長は残酷な男とは言えない。むしろ理に重きを置いた

小和田　「血腥い信長」を書くという話があったとうかがいましたが、津本先生が描かれた信長はむしろさわやかに時代を生きた人物ですね。

津本　信長のイメージというのはいろいろあって当然なんでしょうが、やはりその時代によって見る目が変わってきたのでしょうね。しかし、当時のことを考えると私は信長が冷酷で惨たらしい人物であったとはいえないと思います。戦国時代というのは、歴史の大きな岐路です。どの勢力が日本を取るか、武士か農民か、それとも寺社勢力かといった時代ですからね。そのなかでの決断が、かなりの程度は冷酷であったのは当然だと思うのです。

小和田　実際、信長がサディスティックに振る舞ったという記録はないですね。

津本　ええ。最後のころには随分苛烈なことをしたように書いてあるものもありますね。女中が何かを忘れたので殺したとか。これは信長が精神的にも疲れてきていたと見るべきです。それまでの信長が苛酷なことをするときには、見せしめという要素が、かなり強かったように思いますね。有名なのは浅井・朝倉の頭蓋骨に漆を塗ったものを杯にして酒を飲んだというのですが、あきらかにこれは見せしめだし、これに似た習慣は外国にもあったそうですからね。そうでなくて、ただ意味なくして残虐行為におよぶということはなかった。むしろ、当時は他の大名のほうが凄かったと思う。たとえば、斎藤道三が処刑する男に油をたらして……。

自分は、この国を変える神だという確信だった

あまりにも時代を超えていたがゆえに、信長の心のなかは謎につつまれている。この男につきまとう相反するイメージを手がかりに、『下天は夢か』の作者と、大胆な仮説で注目される歴史学者が、信長の心のなかをのぞく。

小和田哲男（静岡大学教授）

「信長のイメージは、結局江戸時代につくられた。だから、マイナス面は値引きして考えないと……」

小和田　釜茹でにしてしまうとか。

津本　徳川家康の息子の信康が、女中がいらんことをいったというので、口に指を突っ込んで引き裂いたとか。細川忠興だって、屋根師が屋根の修理中に足場を踏み外して庭に転がり落ちたら首をはねてしまったとかね。戦国時代は何が自分の身に起こるかわからない時代ですよ。そんな時代は人間もいまからみたら殺伐となるんじゃないでしょうか。

小和田　残虐が当たり前の時代というか、刑罰に関してもそうですね。いまいわれた釜茹での刑なんかは、斎藤、武田、その他いろんなところで行われています。それから車裂きの刑、牛裂きの刑とかもあって、ことさらに残酷な刑罰を加えることによって見せしめにするために行うわけです。家康だってすごい残虐なことをやっていますから、信長だけが冷酷非道だったというのは不当ですね。

津本　私は『下天は夢か』のなかでも、ある程度処刑の場面も書きました。石山本願寺攻めのところでしたが、信長の苛烈さに、あとで顕如が震え上がり、はやく寺を明け渡すことになる。そういうメリットもあったことも確かなのです。信長の「冷酷」には、非常に理性的な面があったのです。

小和田　それと、信長には潔癖な性格もありましたね。二条城の築城現場で、信長を見ようとして被り物をちょっとあげたところを見て、つかつかと寄っていって一刀のもとに斬り捨てたという話もそうです。また自分の部屋にあった果物のカスを捨てなかった女中を殺したとかも同じで、自分の意に逆らう人間の存在を許せないという、きわめて潔癖な面もあったかもしれませんね。しかし、武将としての信

長に関しては、津本先生がいわれたように、冷静な計算が働いている。また一向一揆に対する凄い殺戮は望んでやったというより、やらざるを得なかったという側面が強いと思うのです。

津本　なるほど。

小和田　武士対武士の戦いの場合には、ある程度までいけば、降参するとか和睦するとかの選択肢がある。ところが、「南無阿弥陀仏を唱えれば往生極楽へ行ける」という一向一揆の場合には勝つか死ぬかしかない。降参がないのですね。信長も、このときばかりは普通の武士と戦うときと違う意識をもたなくてはならなかったと思うのですよ。

津本　その武士にしても、当時の死生観というのはいまと違っていましたからね。「死」それ自体をそんなに怖がらないんですね。いよいよダメだったら、死に方が格好いいか悪いか。そんなことを、まず考える。たしか森蘭丸の兄の森長可でしたか、武士の生活はもういやだ。死ぬのが怖くないのは嘘で、だから戦争のないときは博打三昧でスッテンテンになるような生活をする、といっている。たしかに、当時の武士のそういう生活は、死の恐怖と裏返しとは思います。思いますが、やはり最期となれば、当時の武士はわりと度胸が座るんですね。いま松永弾正久秀を書いているんですが、彼は立派に切腹するために脳天の百会というところに灸をすえている。それから丹羽長秀でしたか、病気になっても……。

小和田　腹に刀をつき刺して、胆石か何かをほじくり出して、「これが俺を苦しめたのか」といって死んでゆく（笑）。

津本　そういう面も持ち合わせている。やっぱり、ちょっと違う。

小和田　自分の死そのものは、恐れないわけですよね。むしろ、子孫というか、家が続くかどうかというのが判断のバロメーターですね。自分の死によって、家が続くならば、自分はむしろ格好よくというか、きれいに死んだほうがいいという側面は結構あるんですよ。たとえば、長篠の戦いで活躍した鳥居強右衛門なども、最終的には家の継続と繁栄を考えている。自分の肉体は滅びても家が残るというのが、彼らの死に方なんじゃないでしょうか。

死のうは一定と口ずさんだ小唄は、彼の人生観だった

津本　信長の場合も、その側面はありますね。ただ、彼の場合には、ニヒリストという側面もあるんです。宇宙の大法則といったらいいんでしょうか、宣教師たちのいうゼウスのような超越存在があることは認めるんです。ところが、神とか仏とかいうものは、あるかもしれないし、ないかもしれない。どっちかわからないというんですね。ただ、四季の変化とか、それから万物の生々衰滅というんですか、その大法則はあると。だから人生五〇年なら五〇年の命を与えられて死んでしまうという人生は、たぶん宇宙の何らかの法則で動いているだろうとは考えているんです。そして同時に信長には、この命の与えられている間は、彼の持っているすごい攻撃性によって、自分を妨げる奴を粉砕してやろうという、すごいエネルギー、あるいはポテンシャルもある。でも、心の底にあるのは、「下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」という感覚……。

●現在の清洲城

信長は清洲城に入って尾張を統一。それから小牧山、岐阜と居城を移しつつ、天下統一を進めていった。まるで最初から計算しつくしていたかのようだ。

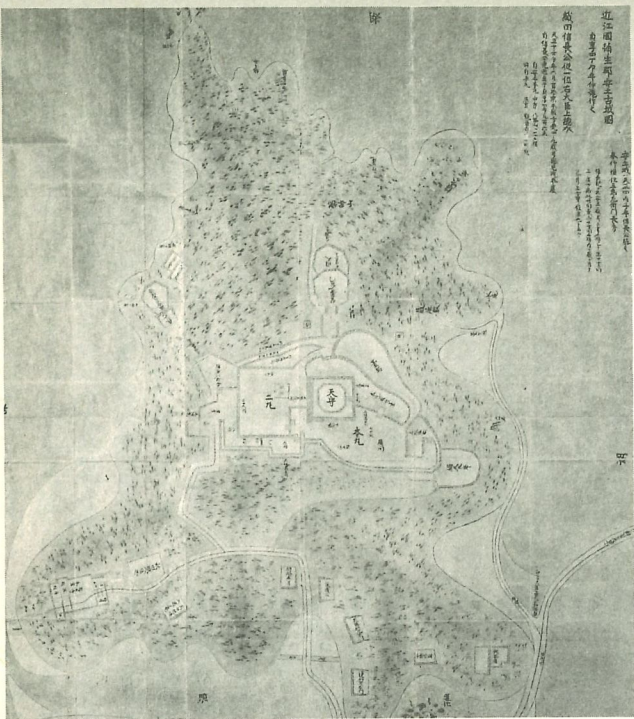
●安土城古図

安土の地に城を築きはじめたとき、信長の天下統一は間近にせまっているように思われた。この地で信長は、日本全国を支配する布石を打ちはじめていた。

小和田　当時の武将たちは、人の世というのは、永い宇宙の時間から見ると、ほんの一握りなんだと考えていた。これは当時の小唄などにも残っているんですが、それこそ「笹の葉の露」だというようないい方もしています。「夢幻」だといえば、まさにその通りなんですよ。生きている間というのは、全宇宙の歴史からすると、ほんの小さなものだという意識でやっていますからね。それは、信長の好きだった幸若舞「敦盛」の一節「人間五〇年……」にも、小唄の「死のうは一定、しのび草には何をしよぞ……」に典型的にあらわれていますね。

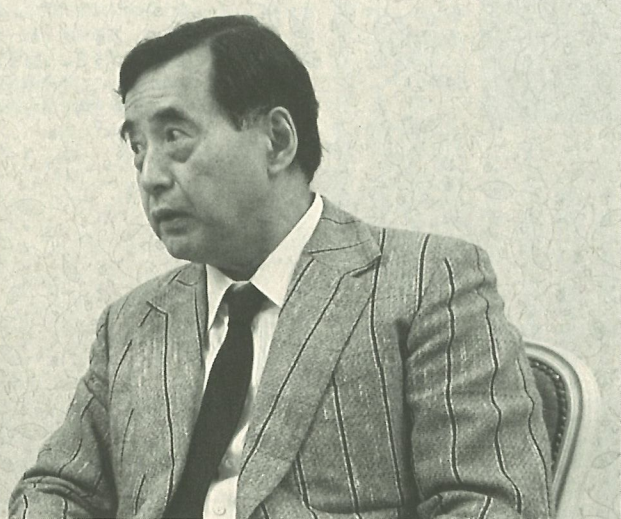
津本　ええ、その通りです。

小和田　ただ、いまのお話で思い出したのですが、イエズス会の宣教師たちは、信長という男は神仏を信じていないといういい方をしましたね。フロイスも「神および仏の一切の礼拝、尊崇、ならびにあらゆる異教的占卜や迷信的習慣の軽蔑者であった」と書いていますが、でも、本当に超越的なものを信じていなかったかといえば、違うのではないかと思うのです。信長が信じなかったのは、要するに、呪いとか祟りとかの付随的なものを信じなかったというのが正確なような気がします。よくいわれるように、無神論者ではない。それどころか、彼は父祖の地ともいうべき津島に牛頭天王社本殿を造営していますし、基本的なところでは、禅宗の宗教観に影響されていますしね。

津本　信長の考え方には、禅宗と通い合うところがありますね。一方では人間ははかないものなんですが、一方では人間は永遠なんだという考え方。宮本武蔵とか柳生石舟斎たちはみな臨済宗ですが、この考え方があった。身体は、水に潜っているうちは潜水服をきていて、水から上がったらそれを脱ぐのだと。つまり、たまたまこの世で身体をもっているがそれは借りているにすぎない。だから、人間は永遠であるといえるんだというわけです。そうでなければ、命を賭けて真剣で斬り合いなどできなかったと思うのですよ。信長にも、こういう考えがあったのかもしれない。そのせいか、彼には、自分の生に

重きを置いていないような一面がありながら、もう一方では民衆を現世で幸せにしてみせる、自分の力でそれはできるという確信をもっていたようなところがある。その確信はだんだん大きくなっていったようですね。

小和田　最後になると、安土に摠見寺というお寺をつくって、自分がそれこそ神になって、皆にお賽銭を供えさせる。たしかに、ここまでくると、発想自体が、それまでの日本人には、なかったものですよね。この変化は、やはり状況の変化からきたと思うのです。安土にくる前、天正元（一五七三）年の危機の最中、武田信玄が急死しますね。安土に移った少しあとに上杉謙信も死ぬ。信長にしてみると、自分にとって敵対する者が、ちょうどうまい具合に死んでくれる。これは、自分に超人的な能力が備わっているからじゃないのかという思いがだんだん強くなっていって、最後に自分は神だという意識になったような気がします。自分に敵対する者は、次々と死んでゆくのだとね。それは、単なる偶然だったのでしょうけれど、信長がこれは自分が神である証拠なんだと、そういう位置づけをしてしまったのでしょうね。

津本　信長は、神仏は日本も海外も人間であって、そういう神仏は現世の人をちっとも救ってこなかったじゃないか、といっているんですね。この俺が、家族が一つ屋根の下に暮らして、八〇歳まで生きられるような世の中をつくったら、最高の神だと。それは現世利益の点では、全然間違っていない論理です。信長の関所の撤廃で、経済が盛んになって、人口が爆発的に増えて、生活は目に見えてよくなっていったでしょう。だから、信長は過去の神仏にできなかったことを、自分がやったんだと考えても不思議はないですね。もしそう考えていたら、自分が最高の神なんだという自信をすらもっていたでしょうね。

小和田　信長の時代というのは、現代日本でいう一九六〇年代の高度経済成長期のような時代ですね。新田開発も進みますし、当然、人口も増えてくる。それまでの日本の人口が、せいぜい一二〇〇万～一三〇〇万から一四〇〇万なんですね。それが、信長の時代には一八〇〇万から二〇〇〇万に近づいていくんです。ほんの数年に、急速に伸びる。それと軌を一にするように、ビッグプロジェクトをどんどんやりますよね。安土城の築城などは、内需拡大の典型だと思うんです。信長がつくれば、当然、秀吉なり光秀なりが築城する。秀吉は長浜に、光秀は坂本に……というわけでさらに大きなプロジェクトが進む。この意味では、信長が安土城をつくったことが、非常な波及効果を生んだのです。さらに、関所の撤廃、道路の整備をさらに進めていく。そのなかで、信長は神になっていったのかもしれないですね。

神になれると思ったのは、発展する国土を見たから

小和田　信長のイメージとしてよく指摘されるものが、もう一つあって、非常に合理的だったというものですね。これは確かにいえますね。戦争のやり方にしても、経済に関する政策にしても。

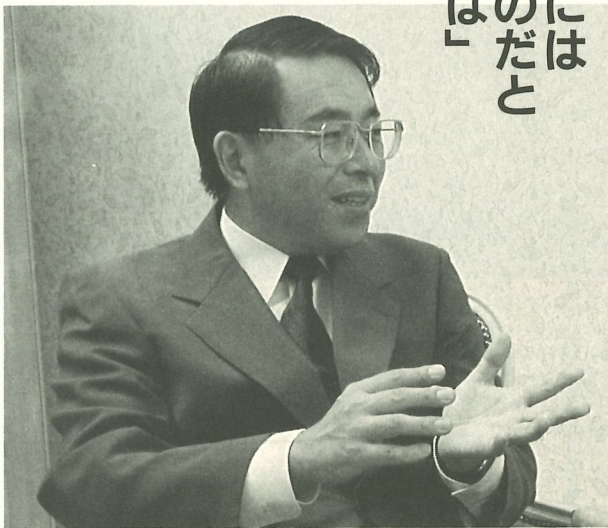
津本　彼は大変明晰ですね。あの明晰さというのは

「いっぽうで、人生は結局夢幻のごとくと知りつつ、いっぽうでは民衆の繁栄を望んでいたという不思議さ」

「自らの運の強さと力量を自覚するにつれて、信長には自分が神のような存在なのだと考えるようになったのでは」

あの時代にあって驚くべきものです。あのような霧につつまれた時代に、前途を開拓してゆくのに間違いがない。

小和田　信長がイエズス会の宣教師に「地球は丸い」と教えられたときに、「理にかなっている」と答えたのは有名ですが、この時代にいったい日本人の何人がこの事実を理解できたろうと考えたくなりますね。

津本　私はよくいうんですが、勉強をしていない頭のいい人は怖い。つまり、それまでの形にとらわれないで考えるから、間違えない。間違えないから、一番いい選択をするんですね。信玄とか家康は、本当に一生懸命勉強しているわけですよ。信玄なんかは、兵法も非常によく学んでいる。あの「風林火山」という旗からして、孫子の一節ですよね。その戦いは兵法にきわめて則ったものです。ところが、信長の場合は、彼は勉強しないでしょう。たぶん、途中で馬鹿馬鹿しいといって、やめてしまったんですね。自分で考えたほうがいいやとね。すると、見えてくるわけですよね、鉄砲は威力がありそうだ。じゃあ、自分で試してみよう。鉄砲を中心にして作戦を考えてみよう……。だから、まったく他の武将たちと違うような戦い方をする。ヨーロッパと比べても何十年も、あるいは何百年も早いような戦法をどんどん考え出す。そして、それを成功させるんですね。誰もやらない戦法を、やってみるのは勇気ですよ。誰かがやっているから、うまくマネするのは秀才的な頭。信長の頭は違うんです。

小和田　ひとつには、他の大名のような育てられ方をしなかったのもよかったのでしょうね。

津本　そうですね。ほかの大名の子というのは、大体家老の入れ知恵で、家老のいう通りにおとなしく座って、勉強することになる。

小和田　兵法か何かの本を読んだりしてね（笑）。

津本　そうです。それで、結局ある程度じんわりと大きくなって、その家老たちをうまくつかえば、まあまあ九〇点くらいでしょうか。ところが、信長はそんなのとは全然違います。とにかくいつも危機感というか、切迫した状況に置かれていましたから、そのことを自覚せざるを得なかったのでしょうね。だから、いつも情報をあつめて、自分の織田家での位置づけを模索しているようなところがあった。年中、情報収集をする。しかも階級を超えて農民や町民のなかに入っていく。やはり、頭がよかったのでしょうね。

小和田　市場に入りこんで、寿司を食いながら世間話をしてくるというようなスタイルですね。そのために、階級を超えてといわれましたが、当時、武士は武士同士でしかふだんは話をしないですよ。商人などと口をきくなどというのは、もっての外だったでしょう。しかし、信長の場合には、むしろ情報はそういうところにあるとわかっていた。そこで、市がたてば、そこにいってブラブラしているわけです。これは、普通の武士から見れば異端ですよね。だから、かれは「うつけ」とか「たわけ」ということになってしまった。

しかし、ここには彼が常識を超えた行動をしていたことが現れているととるべきでしょう。そういう行動も、信長の意思だったでしょうが、父の信秀が津島の商人と付き合いがありましたから、それを見

て学んだことでもあったのでしょうね。

津本　おじいさんの信定が、津島の商人に女をやっていて、やはりそのあたりの遺伝というんですかね。こうして、信長が身につけていった情報感覚というのが、戦でも経済政策でも発揮されるんです。いってみれば、信長は忍者の元締めみたいなものです。

小和田　なるほど。

津本　信長の戦というのは、終始一貫した、徹底的な情報戦です。戦いの勝敗は、戦場で三割、情報で七割で決まるといっている。戦場に来る前に、勝利のための根回しがすんでいるんですよ。それで、相手を誘導する。長篠の戦いなどは、その典型的なものでしょう。武田軍は信長の情報操作によって、設楽原へ誘い込まれていったわけです。

小和田　それは桶狭間の戦いも同じことですね。桶狭間というと奇襲のイメージがあって、一か八かの戦いをやったと思う人がまだ多いですが、この戦いにしても、すでに情報重視の方針は貫かれていました。そうでなければ、どうして論功行賞の一番が、今川義元に槍をつけた服部小平太や首をとった毛利新介ではなく、情報活動を行った簗田政綱だった理由がわかりにくくなります。

津本　ですから、私は信長の最期を、光秀をいじめたからだとは思わないんです。信長がもし光秀をいじめていたら、ちゃんと光秀の情報をとって、警戒していますよ。これはさきほどの、理由のない残虐な行為はしていないのではないかという話と繋がってくるんですが、信用のおける史料には光秀が信長にいじめられたという記録はないわけですからね。

小和田　「いじめ」は後世の史料に出てくるものですからね。

津本　信長が悪く描かれているものの多くは、徳川の世になってから書かれているわけですよね。私の感じでは信長は自分の部下に対して、依怙贔屓をするような人ではなくて、かなり平衡感覚のある人です。

小和田　いまいわれた通り、要するに信長のイメージというのは、江戸時代の初めにかなりつくられてしまっているんですよ。いま残っている史料も、江戸時代の初めに大体書かれているのが多くて、現代もそれに依拠しながら信長イメージをつくりあげているわけでしょう。それは、やはり家康が東照大権現として崇められるのと裏腹の関係で、信長はそれなりに実像よりちょっと悪く描かれているという側面はあると思います。そこに、癇が強いとか、残虐だとかいうマイナス・イメージがかなり増幅されている部分が多いのではないかな。

信長にそういう側面があったことも否定しませんが、ちょっとした針の頭くらいのものを、大きくいっているものもあるのではないかと思うんです。

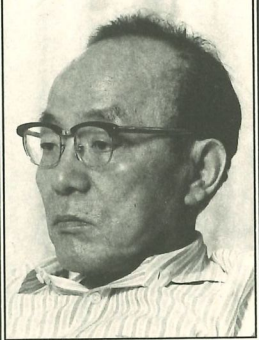
（この対談の一部は『ザ・ビッグマン』一九九一年一二月号に掲載されました）。

教師たちのもたらした南蛮文化に強い興味をしめした。「地球は丸い」といわれても動ぜずに「それは理にかなっている」と答えたという。

異説・信長の実像

秀吉・家康・信長
三人三様のイメージづくりが真実の信長の姿を歪めている

信長の顔は、秀吉や家康の農村の匂いのする顔と違って、〝水の匂い〟がする。これは商才にたけた人物の顔である。そう考えると、現在、「勝手に」つくり上げられた信長のイメージは、果たして真実なのか。秀吉、家康がらみで語られる信長像は、生の信長を伝えていない。若き日の信長に思いを致し、真実の織田信長像に迫る。

遠藤周作（作家）

信長は土の香りより〝水の匂い〟がする

肖像画を見ると、信長の顔は、一般にいう秀才顔です。秀吉や家康のそれは、土の香り、農村の匂いが強いのですが、信長はむしろ水の匂いがして、堺の貿易商というか、千利休に似た雰囲気の顔をしています。父の信秀は、伊勢湾貿易でかなりの利潤を上げた人だといわれていることから、信長も商才にたけた人物ではなかったのでしょうか。商業政策、経済政策を基本に置いた政治家。彼の顔を見ていると、いままでいわれてきたような短気とか苛烈とかとは違った、別な思いが湧いてきます。

信長に関する史料は、従来、主として『信長公記』『信長記』など数少なかった。大体これに基づき、信長関係の歴史小説はいままで書かれていたわけですが、伊勢湾台風のときに、現在の江南市前野町に住んでおられる方の蔵が壊れ、そのために先祖の武功を記した文書が発見されました。後にそれが『武功夜話』と題して出版され、そのおかげで、いままでわからなかった部分もかなり補足できるようになったのです。

私は趣味として、ここ二〇年間ぐらい、戦国時代の山城を訪ね歩いています。全くの趣味であり、時代小説を書こうというつもりは全然なかったのですが、その『武功夜話』を読み、書いてみたい気持ちにさせられたのです。それが『決戦の時』や『反逆』という信長がらみの小説を書く一つのきっかけになっています。

大体、歴史小説というのは、史実に忠実とは限りません。純文学なら別でしょうが、多くの場合、作家が自分で面白がって書いているんだろうと思います。テーマはこうであるとか、この行動の裏打ちはどうなっているとか、あんまり考えないで書く。

今度の場合も、私も楽しんで書いていますから、読者の方も楽しんで読んでくださいという感じなのです。ただ、いまのところは、信長に限らず、秀吉にしても、大体決まったイメージというものがあり、そこから大きく逸脱することは普通はちょっとむずかしい。来年のNHK大河ドラマは「信長」に決まったそうですが、やはり、従来のイメージに即した信長の人物像になるのだろうと想像されます。

駿河の大企業と尾張の小企業の対決

信長、秀吉、家康の三人については、どうやら日本人がもっている元形的イメージがあり、それに外れるようなことをドラマにしてもあまり面白がってもらえない。

小説の読者やテレビの視聴者の側に、『忠臣蔵』と同じような基本知識があり、そのパターンの上で期待しますから、作家のほうもそれに応えて、基本を壊さないようにしながら、いろんな細部を書いてきたようです。

たとえば、秀吉の場合、出世物語としてのドラマは視聴率が高いが、これをもし、朝鮮侵略のころから書いたら、見る人は極端に減るだろうと思います。朝鮮侵略だとか、日本が疲弊のどん底に陥って、民衆が食うものがないというのに聚楽第をこしらえたりしてカネを使っている。そういう横暴な秀吉を日本人は見たくないから、とくにテレビではそこを押し出さないでしょう。

信長についていえば、従来、近世を開いた革命児というイメージで捉える傾向があります。信長、秀吉、家康の三人の三側面に、あるイメージを定着させることで、われわれ日本人は無意識の中になにかが引き起こされるのではないでしょうか。しかし、実際の信長は意外に保守的な部分があり、座制などを温存したり、現実に即応して、非常に柔軟性のあるやり方を採用してきた人なんです。いまの国会でいえば、決して社会党的存在ではないし、絵に描いた餅ではなく現実利益を尊重する人という気がします。

「信長、秀吉、家康の３人の３側面に、あるイメージを定着させることで、われわれ日本人は無意識の中に何かが引き起こされるのではないでしょうか」

『武功夜話』などによると、桶狭間の戦いぶり一つとっても、従来いわれてきた信長像とはかなり違っています。いままでのイメージでは、勇猛果敢にパーッと走り出す武将ということですが、初めからちゃんと計算し、今川義元の軍隊が桶狭間へ入り込むように仕向けてあり、それを襲ったということになっています。

ただ、『武功夜話』は一等史料ではありません。一等史料なら、そのまま信用していいのですが、こういう家記というのは、自分の家が合戦で一番手柄を立てたような書き方がとかく多いものです。そのために、前野、蜂須賀両人が献上物を並べて今川を桶狭間に引き込んだり、当時の藤吉郎と連絡を取り合いながらやったという話は、話としてはそれ自体すごく面白いのだが、本当かなという疑問も残ります。

しかしながら、信長は『信長公記』でいわれているように、急に駆け出したりするほど無茶な人ではなかっただろうという推察はできると思います。

義元対信長というのは、いわば、駿河の大企業対愛知の小企業の対決です。そういう両者がぶつかり合うときに、それなりの作戦がなければ、勝負になるはずがありません。そういう意味で、どういう作戦を使ったかと興味をもったときに、『武功夜話』にはそれを裏打ちするようなことが書いてあるので面白いのです。

信長は、ラッパ（スパイ）を使って今川の軍勢を調べ上げ、すでにわかっている進入経路をもとにして作戦を立てたのです。

また、墨俣の城をつくる話があります。柵をこしらえ、敵がくると待ち構えていて鉄砲で撃つ。『武功夜話』にはそのために斎藤勢が入ってこられなかったと書いてあります。これは藤吉郎の作戦ですが、信長は、後の武田の騎馬隊との決戦のときに、この作戦をそっくり真似ています。

他にも、稲葉山城攻めのときに、藤吉郎たちは山に駆け登り、城の火薬庫に火をつけていますが、これも近江の佐々木観音寺を攻撃するときに、藤吉郎が使った作戦です。

信長と秀吉という二人の天才がいつも知恵を絞り合っていたのだと考えられます。そして、ある時は、信長も藤吉郎の真似をするという、柔軟性のある考え方というのは、従来の信長像にはあまりなかったといえるでしょう。

現代の信長像は果たして真実なのか

実際は、他人の真似もしているわけですが、従来は、信長は非常にオリジナリティのある人だといわれてきました。例を挙げるなら、信長は、弟の信行を殺すとき、斎藤道三の息子が弟たちを殺すやり方をそっくり真似ています。両者とも病気と称して弟をおびきよせて殺している。このように、全体としてはオリジナリティがあるのですが、部分においては、いろんなことを応用してことに当ったという感じがします。

そういう応用力は、いままでの信長のイメージにはなく、ただ、思い立ったら、一直線に人を殺してしまうという、非常に苛烈な人物にされているところがあります。信長が竹生島に行った留守に桑実寺に参詣に行った侍女が帰ってきたら、縛り上げてみんな殺してしまった。さらに寺の坊主まで殺してしまったとか伝えられています。伝えているのは『信長公記』です。しかし、そういう話はどうやら真実ではないらしいのです。桑実寺のほうでは、そんな事実はなかったといっています。そうなると、われわれが頼りにしていた『信長公記』がどれだけ信憑性があるかということから洗い直す必要も出てきます。

異説・
信長の実像

同時に、われわれが信長の人間像に迫る場合、その時代に自分を置いて考えないと正しい判断ができないと思います。

最近、『たたかいの原像』（千葉徳爾著・平凡社選書）という興味ある本を読みましたが、これによると、侍の作法や心理というのは、山に住んでいる人たちから受け継がれているということが書いてあります。山に住んでいる狩人を昔は「ごろつき」といったそうですが、その人たちが動物と戦うときに、相手を苦しめないで殺してやる「ごろつきの作法」があるそうです。それが武士に受け継がれているから、いまの人間から見ると残酷に思えるようなことでも、それは作法であったりするのです。

切腹という行為を考えてみても、当時といまとでは全然感覚が違います。前関白の豊臣秀次が高野山で秀吉から切腹を命じられます。そのときに、一緒について行った小姓が、誰が一番先に切腹をするかというので言い争いをします。結局、秀次が決めるのですが、選に漏れた者が頭にきて、高野山の青厳寺の柳の間で「みなさんの前にお慰めするものがないといけませんので」といって、パーッと走り出て腹を切ってしまうのです。こういう感覚というのは、はったりというものではなく、当時の侍の自己主張の気持ちの中に常にあったわけです。

そういうものを踏まえた上で、信長の心理だとか、行動をはからないと、なかなか理解できません。なにしろ、信長の生きた時代は食うか食われるかの世界です。小谷城の義弟の浅井長政に裏切られ、これを攻めた後、自分の甥を串刺しにして殺す。それから、長政の頭蓋骨を正月の酒の肴にして家臣に見せたりもします。いまの感覚なら、ひどいことをするものだ、というところでしょうが、生かしておけば、浅井家の残党が子供を中心にもう一度結束し、反旗を翻すのはわかりきったことですから、やはり、当時の時代感覚や政策を心得た上でそういう行為を捉えていくべきでしょう。

現実には、浅井の残党の大半は、長浜城の秀吉の家臣になったりして、反逆の芽は摘み取られているのですが、歴史というのは、その時代に身を置いてみないとわからないということはいろいろとあります。

個人商店の社長は長距離は走れない!?

信長は、軍人としての側面を眺めると、ずばり天才だといえるでしょう。軍人として、秀吉も家康も天才には違いないのですが、信長の場合、ブレーンというものの意見をほとんど聞かずに、自分でなんでも考えた。

ただ、このやり方が長距離競走に適していたかどうかは疑問です。宣教師の報告によると、信長が指一本動かすと家臣は蜘蛛の子を散らすように遠ざかり、一声叫ぶと、二〇人ぐらいがドッと集まったといいます。岐阜城のころから、家臣に対して恐怖を植えつけるようなことをやっていたのは本当でしょう。家臣団を畏怖せしめて、使い物にならない部下はさっと切り捨てます。信長に比べ、秀吉のほうは、気に入らない家臣を一応追放するけれど、しばらくしてほとぼりが冷めると、また呼び戻しておとぎ衆にしたりなど、柔軟な人材活用をしています。信長は若くして死んでしまったからいいようなものの、長生きをしていたら、みんながついてきたかどうか疑問です。

『反逆』では、荒木村重という、使われる立場の人間から見た信長を書いてみました。荒木村重はムチばかり振るわれた、いわば、悲劇の部下です。これが秀吉なら、ムチも振るがアメもしゃぶらせるということをしますが、信長は村重をいじめ抜きます。そうなったら、部下は「社長」のすることなすこと、すべて憎らしくなります。信長のような社長がいたら、社員はたまったもんじゃないに違いありません。

人使いという観点から見ると、信長は、中小企業の社長タイプという感じがします。大企業なら、重役を置き、重大事項の決定には重役会議を開くでしょう。

秀吉は五大老・五奉行をつくり、家康に至っては、肝心なところにはいまの大企業なみに管理職をしっかりと置いています。

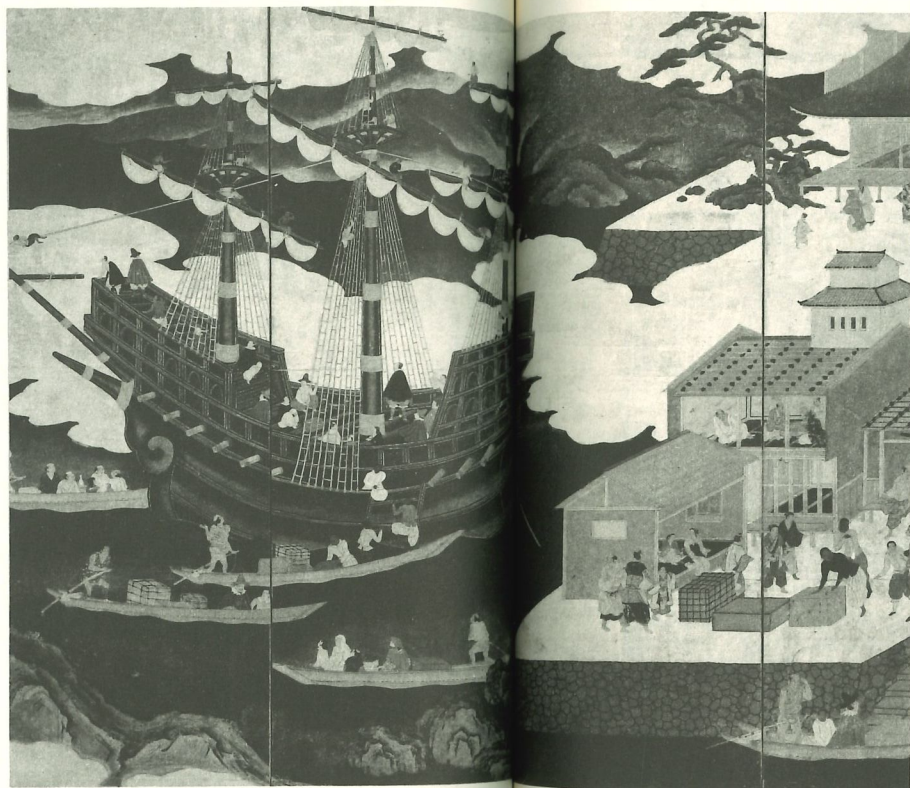
織田ファミリーの縄張り争い

大体、信長というのは、個人商店の社長を長く務めてきた人なんです。われわれは、織田信長という武将を個人で捉える傾向がありますが、実際は、織田信長ファミリーという小さな会社の社長という視点で見ていくほうがいいかもしれません。

当時と今とでは、家意識がまったく違います。なぜかといえば、織田ファミリーに従属している土豪たちの生活が、すべて織田ファミリーにかかっていたわけです。そのために、同じ織田ファミリーでも、信長ファミリーと弟の信行ファミリーとは争いになります。犬山にも別の織田ファミリーがあるし、愛知県の岩倉にも別の織田ファミリーがありました。

そういういろんな織田ファミリーがあちこちに散らばっていて、戦国時代というのは、個人より、その個人が属しているファミリーの存続が重要だったわけです。たとえば、真田家などは、関ヶ原の合戦で、兄が東軍につき、弟が西軍についています。これは、個人なんかどうでもよく、大事なのは、家の存続だという考え方から生まれています。どっちが勝っても、どっちが負けても、真田家は残るという配慮があり、こういう考え方は現代にはありませんから、やはり、その時代の感覚に戻って見詰めなければ、正しい理解は得られない。

信長は、信長ファミリーの存続を一身に背負って、兄弟や叔父をどんどん殺していき、やがて、自分が全織田ファミリーの棟梁になります。織田ファミリーという同族会社の社長に誰がなるかという確執があり、叔父さんも加わって、兄弟や従兄弟うちの誰が社長になるかの瀬戸際で、ずっと喧嘩してきたようなものでしょう。それぞれみんなファミリーを抱えていますから、相手を殺してでも成長しなければならなかったのだと思います。

「おそらく、信長は、自分の時代は、一代限りだとわかっていたのではないでしょうか。個人商店↗というのは、そういう側面をもっているものです」

尾張一国でも五つぐらいの親類が点在しています。信長は、自分の従兄弟のいる岩倉城へ行き、一緒に謡曲の練習をやりながら、城の構造などを調べてしまい、それから攻め落としたりするようなことをしていたのです。

私は、小牧山城、犬山城といった周辺を歩いて感じたのですが、二つの城の間はクルマで二〇分ぐらいしかなく、非常に小さい地域の中で争っていた、いわば、戦争というより、縄張り争いの趣が強いのです。そして、戦う人間にしても、たとえば、木曾川のほとりにいる船頭たちが、たちまち戦闘集団に加わるというように、侍と他の階級との区別がつかない時代だったのです。

尾張の不遇時代が強い猜疑心を生んだ

藤吉郎が信長に仕えて一〇年目ぐらいで、俸給がいまの二、三十万円ぐらいです。その藤吉郎が、兵を集めるのに、「お願いします。お願いします」と船頭たちの親方に頭を下げて、やっと二〇〇人ぐらいの男を借りて、自分の兵一〇〇人と合わせて、初陣をしたわけです。このように信長も尾張を統一するまでの状況は、縄張り争いの様相が非常に濃かったようです。

そういう血みどろの死闘を繰り返してきたのが、桶狭間の戦いの前の時代ですが、信長に関する史料は、いままで、そのころのことが欠落していたのです。ところが、『武功夜話』には、比較的詳しく書いてあり、暗部が少し見えたという気がします。この尾張一国を全部治めるまでは、軍資金が足りなくなったり、あの柴田勝家が弟のほうについたりとか、信長にとって最も苦しかった時代ではなかったでしょうか。このころの信長は裏切りの連続を経験し、自分以外は信用できないという強い猜疑心が身にしみついてしまいます。

家康の場合は、少年時代、今川家に預けられましたが、三河の家臣たちが守ってきましたから、信頼感というものがありました。その信頼感が信長にはなく、それが人使いにも現れて、個人商店の社長のイメージがつきまとうのです。人を信用できないというのが、信長の最大の弱点でしょう。おそらく、信長は、自分の時代は、一代限りだとわかっていたのではないでしょうか。個人商店というのは、そういう側面をもっているものです。もちろん、できれば子供に跡を継がせたかったという思いはあったでしょうが、信長ファミリーには、頭が良くて、寝返りを打ちそうな男たちが揃っています。その筆頭が秀吉です。

異説・
信長の実像

秀吉だって明智光秀と同じように、どうやって、いつ信長を倒そうかということをずっと考えていたと思います。いずれ、オレは、この人と戦争をしなくちゃならないと考えているから、秀吉は、中国を全部くれというようなことをいっているのです。いつか戦うという思いが秀吉の胸の中をかすめなかったはずがありません。

家康にしてももちろん同じ思いです。家康の場合、信長といつ戦うかと同時に、秀吉との戦いも考えていたはずです。ただ、家康にとって一番いいのは、二人が衰弱していくことで、これは社長がガンになれば専務が喜ぶというようなものだったでしょう。

それにしても、なぜ、信長という男は日本人に人気があるのでしょうか。その最大の理由は、早死にをしたということでしょう。沖田総司と同じで、本能寺の後も生きていたとしたら、信長の今日の人気はなかったと思います。

彼がもし長生きをしていたら、秀吉のやったように切支丹も禁制にして、経済政策としては、おそらく外国を侵略していたと想像されます。父親は貿易商として利潤を上げたが、信長は武力で経済を支えることを考えたかもしれないのです。結局、戦争を起こすということは、増え続ける家臣団に知行地をどんどんあてがっていくことですから、いずれは外国へ出るよりしょうがないのだと思います。秀吉は実際にそれをやってしまったわけですけれど、信長はやらなかっただろうと断定はできません。五〇パーセントの可能性で、信長も外国侵略をしたかもしれません。

それから、初めは擁護していたキリスト教を禁止する方向へ向かったでしょう。もともと、キリスト教を信長が擁護したのも、それが経済政策に役に立つからであって、別にキリスト教に関心があったわけではありません。なぜなら、キリスト教というのは、ヨーロッパの東洋侵略の上に乗って来ていたものですから、やがては、信長も態度を硬化させたはずです。要するに、考えられることは、秀吉というのは、信長の政策を受け継ぎ、朝鮮侵略もやり、キリスト教禁止令も出しているのです。ですから、信長が生きていたとしたら、秀吉と同じようなことをやっていたと考えられるのです。信長は、仏教を弾圧し、最終的に、摠見寺を建て、自分を神様として礼拝しろといいだしています。これには、キリスト教の外国人宣教師も、さすがについていけなくなりますが、ちょうどそんなところに、光秀に殺されていますから、あんまりイメージダウンにならずに人生を終わったのではないでしょうか。あれ以上長生きしていたら、信長の末路はどうなっていたかわかりません。

少し想像力を広げるなら、明智光秀の反逆も、信長のそういう神経に我慢ができなかったというところにつながるのではないかという気がします。

本能寺で光秀に殺されたことは、歴史的な意味よりも、日本人の信長に対するイメージの美化に非常に役立っている、と私は思います。

(この記事は『ザ・ビッグマン』1991年10月号に掲載されました)

簡読！

親切読本

古文書の信長

生き生きとした信長を知るなら
古文書の世界をひもとくのがいちばんだ。
南蛮人の目から見た信長、
側近から見た信長、
後世の〝作家〟が描いた信長……。
さまざまな信長像が描かれている。
虚実、入り乱れたものだが、
古文書それぞれの背景を知れば、
ますます信長が味わい深いものになる。
それだけ信長は〝巨人〟だったのである。

百瀬明治（歴史作家）

信長公記

太田牛一 著

史料として高い評価のある書。一度は挑戦してみたい

**つねに勝ち続ける信長の戦人生の秘密を
「戦いの原理を変えてしまった男」としての視点から
解明してみせた信長の一級史料。
独創と奇行の謎が、この書物には詰まっている。**

戦国大名の実力が領土の広さ、兵力の多寡、実績や知名度によって量られるとすれば、自立当初の織田信長は、どう贔屓目にみてもベストテンにさえ入らない後発勢力であった。信長が織田の家督を継いだ天文二十（一五五一）年の時点で他の群雄と比較してみると、今川義元・武田信玄・毛利元就らは第三コーナーにさしかかろうとしているのに、信長はようやくスタートラインについたにすぎない程度だったと評しても過言ではない。

それゆえ、信長が一代にして天下を取るためには、少々無理をしてでも戦機をつくり出し、つねに勝ちつづける必要があった。実際、信長ほど頻繁に兵を動かし、勝つことに執心した戦国武将は、他に見当たらないとさえいえる。

武田信玄や毛利元就は、ある程度領国の拡大をはたすと、あとは勝つことよりも負けないことのほうを重視した。これを不敗主義と名づけるなら、信長の流儀は必勝主義と呼ぶのがふさわしいであろう。

では、必勝主義はどのようにしたら達成できるのか。

〝わが国最初の近代人〟とも〝異能の人〟とも形容される信長は、時代に突出した合理思考をフル回転させてその難問に挑み、ついにある結論に達した。

「戦いの原理を根底から変えてしまえばよい」

それが、苦心惨憺したすえにつかみとった信長の解答であった。

不敗主義でいくなら、戦いに関する過去の事例を分析し、成功と失敗の教訓に学び、より完成度の高い戦略・戦術を追求すればよい。

だが、必勝主義となると、そうはいかない。過去の事例の延長上にいくら完成度を追求しても、ライバル武将が同程度のレベルの完成度に達していれば、戦って必ず勝てるとは限らないのだ。同じ土俵でのレベルの競いあいは、不敗の保証とはなりえても、必勝の決め手とはなりえない。

必勝主義を実現するには、土俵を異にした発想、つまり戦いの原理そのものの改変が不可欠なのである。そうすれば、ライバル武将が新しい原理に慣れるまで、発案者は連戦連勝を享受できるであろう。

『信長公記』は、そのような視点に立って戦国の常識を次々と打ちやぶり、みるみる最後尾から群雄のトップに躍り出た信長の一代記である。内容は年代順に信長の動きを追っており、部分的に誤りもあるが、信長研究の基本資料とされている。

筆者は、信長の家臣太田和泉守牛一。牛一は「うしかず」と読むほうが正しいともいわれる。

牛一ははじめ僧侶であったが、やがて寺をとび出し、足軽として信長に仕えた。弓術にすぐれていた牛一はしだいに武功をあげて信長に認められ、天正九（一五八一）年ごろには近江国愛智郡鯰江の代官に任じられるまでになった。

本能寺の変後はいったん蟄居したが、ほどなく秀吉のもとに出仕し、晩年は秀吉の側室松の丸殿付きの老職に昇った。

『信長公記』は牛一が豊臣家に仕えてのち、執筆にとりかかったもので、完成したのは慶長十五（一六一〇）年のことと伝える。

構成は、信長が尾張・美濃両国を斬り従えた永禄十（一五六七）年までの苦闘時代を巻首として全一六巻。巻一以降は、信長の事績が一年ごとにまとめられており、本能寺の変を叙する巻一五が最終巻となっている。

信長の異能ぶりは早くも巻首において印象的に描き出されており、特に次の一節は名高い。

「爰に見悪事あり。（信長は）町を御通りの時、人目をも御憚りなく、くり、柿は申すに及ばず、瓜をかぶりくひになされ、町中にて、立ちながら餅をほおばり、人により懸かり、人の肩につらさがりてより外は、御ありきなく候」

ものを食べながら友だちの肩によりかかって歩くというのは、昨今の若者のあいだでは珍しくない現象だが、当時としてはたいへんな不作法である。ましてや、信長は小なりといえども戦国大名の御曹司なのだから、その振舞はことさら目立ち、世間の顰蹙をかった。かくて信長は、世にはみだした愚かな人物という意味で、「大うつけ」と仇名されるようになる。

しかし、信長の先鋭な合理主義もすでにこのころから芽生えていた。父信秀の葬儀の場面における信長の次の挙措が、その推定を端的に裏づけている。

「信長、御焼香に御出づ。其の時の信長公御仕立、長つかの大刀、わきざしを三五なわ（しめなわ）にてまかせられ、髪はちゃせんに巻き立て、袴もめし候はで、仏前へ御出でありて、抹香をくはつと御つかみ候て、仏前へ投げ懸け、御帰る」

信長は野良歩きそのままの略装で葬場にあらわれ、父の位牌に向けて抹香を投げつけると、経も唱えずそのまま

太田牛一著『信長公記』。もともとは『信長記』と記されているが、小瀬甫庵の『信長記』と区別するために『公記』の名で呼ばれるようになった。太田牛一は尾張国春日部郡山田庄安食村の住人。天文23年、柴田勝家が清州を攻撃したときの足軽衆6名の中に、その名がみえる。弓矢が得意であったといわれている。（池田家文庫蔵）

姿を消してしまった、というのである。何とも奇矯な振舞であり、それは当時の常識からすると、たしかに非法のきわみと難詰されてもしかたのないことだった。

だが、信長自身からすると、それは奇矯でも何でもなかった。自分が吟味し、真に納得したものでなければ、伝統にも権威にも従う必要はないという合理思考を、ごく自然に実践しただけのことであった。のちに信長が比叡山延暦寺を焼き打ちするなど、宗教勢力を容赦なく弾圧したルーツも、ここに発していた、といってよい。

「町を御通りの時、人目をも御憚りなく、くり、柿は申すに及ばず、瓜をかぶりくひになされ、町中にて、立ちながら餅をほおばり、人により懸かり、人の肩につらさがりてより外は、御ありきなく候」

信長が戦いの原理を改変する上で、もっとも有力な武器として活用した鉄砲の威力に着目したのも、やはり「大うつけ」時代のことである。

『信長公記』は、信長のうつけぶりを述べる直前に「橋本一巴を師匠として鉄炮御稽古」と明記している。

天文二十二(一五五三)年四月、美濃の斎藤道三は、娘を嫁がせた信長の器量を見定めるべく、正徳寺という寺院において初対面の場を設けた。すると信長は、家臣に五〇〇挺ほどの鉄砲を持たせて正徳寺にあらわれ、道三を驚倒させる。そして、道三が長嘆息しつつ、述懐することに、

「されば無念なる事に候。山城(道三)が子供、たわけが門外に馬を繫べき事、案の内にて候」

信長はたわけどころか、恐るべき逸材じゃ、口惜しいことだが、いずれわしの子孫は信長に攻め破られ、織田の家臣とされてしまうであろう、というのである。

道三が驚倒したのも、無理はない。天文二十二年といえば、種子島に鉄砲が伝来してからやっと一〇年目のことであり、五〇〇挺もの鉄砲を揃えている大名は他にいなかったのだから。

しかも、信長の凄いところは、単に数量を揃えたばかりでなく、鉄砲のシステマティックな活用法まで案出した点にある。

当時の鉄砲は火縄銃なので、弾丸を装塡してから発射するまでにだいぶ時間がかかるという欠陥があった。そこで、武田信玄などは鉄砲隊よりも騎馬隊のほうが効率的だと考え、騎馬軍団の強化につとめた。

それに対し、信長は鉄砲の短所ではなく長所に着目し、その使用法を徹底的に追究したすえ、鉄砲を戦場の主要武器化することに成功した。いわゆる「鉄砲の三段構え」がそれである。

この織田鉄砲隊と武田騎馬軍団の決戦は、天正三(一五七五)年三河国長篠において行われたが、完敗を喫したのはそのころ天下無敵を誇っていた武田騎馬軍団のほうだった。

「(武田方の)一番、山懸三郎兵衛、推し太鼓を打ちて、懸かり来たり(略)、かくの如く、御敵入れ替へ候へども、(織田方の)御人数一首も御出なく、鉄砲ばかりを相加え、足軽にて会釈、ねり倒され、人数をうたせ、引き入るゝなり。(略)日の出より刁卯の方へ向けて未の刻まで、(武田方は)入れ替はり〱相戦ひ、諸卒をうたせ、次第〱に無人になりて、何れも、武田四郎(勝頼)旗下へ馳せ集まり、叶ひ難く存知候。敵、鳳来寺さして、噇と廃軍致す」

武田方の歴戦の勇将たちも、足軽たちが三段構えで連続的に斉射する鉄砲の威力には抗することができなかったのである。長篠の一戦はまた、信長が推進してきた「戦いの原理」を変える方策がもののみごとに開花した、記念すべき一戦でもあった。

『信長公記』は、信長の事績を叙述するだけで、筆者牛一の論評や分析は加えられていない。そのため、一読無味乾燥の感もおぼえさせられるが、行間の意味をくみとって戦国という時代の状況と重ねあわせると、以上の例のほかにも、信長がどれほど時勢に突出した合理的人間であったか、その異能ぶりをまざまざと私たちに伝えてくれる豊富な事例が随所にちりばめられている。

信長記

小瀬甫庵 著

軍記物語の典型。読み物としての面白さは群を抜く

名文が浮き上がらせる信長の活躍。儒教思想の枠に押し込めようとした無理はあるが、江戸時代の人々にとっての人気は高く、信長のイメージを固めるのに貢献した。

信長記巻第一　　大田和泉守牛一輯録　小瀬甫庵道喜居士重撰

興亡

尾州浮野合戦事
義元合戦事
美濃國森部合戦事
美濃國賀留美合戦事
美濃国退治事
自義昭公信長卿被成御教書事
義昭公自越前國美濃國被作御座事
近江國追罰評諚并佐久間忠言事
信長卿御入洛并坂井久蔵給感状事
箕作城落去付観音寺城開退事
義昭公御歸洛事
岩成主税頭降參事
芥川小清水瀧山城開退事

小瀬甫庵著『信長記』。太田牛一の『信長公記』をもとに、増補潤色して書き上げたといわれる。小瀬甫庵は通説によれば1564年生まれ、1640年没。牛一より三十数歳若いことになる。(内閣文庫蔵)

『信長公記』と並ぶ織田信長の伝記であり、全一五巻からなる。稿がまとまったのは、『信長公記』成立の翌慶長十六(一六一一)年のことだった。

作者の小瀬甫庵は永禄七(一五六四)年の生まれと伝えるから、『信長公記』の太田牛一より三七歳も若く、本能寺の変のころにはようやく一九歳だったという勘定になる。

それゆえ、甫庵は牛一のように信長に直接仕えた体験はない。本来の職業は医師で、池田恒興、豊臣秀次らに歴仕したあと、浪人して京都に住み、『信長記』を著した。

甫庵が『信長記』の筆をおこしたのは、牛一の『信長公記』を読んで不満を禁じえなかったからだった。

「左府(信長)が士に大田(ママ)和泉守と云ふ人あり。近世至治に帰する(信長の)其の功、後代に伝へん事を欲して粗記し行くまゝに、漸く重累して数帙成んぬ。(略)予是を本として、且は公(信長)の善、尽く備はらざることを嘆き、且は功あつて洩れぬる人、其の遺憾いかばかりぞやと思ふまゝに、且々拾ひ求めて之を重撰す」

甫庵は、『信長記』の「起」において、牛一の『信長公記』を批判しながら、執筆意図をそう述べている。

それだけに、『信長記』には『信長公記』にない記事も数多く見かけられるが、また反面、曲筆も少なしとしない。そのため、当時から内容の不正確さに批判の声があり、大久保彦左衛門も自著『三河物語』において、『信長記』を槍玉にあげている。

「扨又、信長記ヲ見ルに、イツハリ多シ。三ケ一は有事なり。三ケ一者、似タル事モ有。三ケ一ハ無跡形モ事なり」

三分の一は事実、三分の一はそれらしいことがあったと認めてよいが、残りの三分の一は作者のでっちあげだ、というのである。

『信長公記』ができるだけ事実に即して簡素を旨としているのに対し、『信長記』の特徴は信長を儒教道徳の体現者として理想化しようとするところにあった。

両書の違いは、早くも冒頭の部分にはっきりあらわれている。『信長公記』は「さる程に、尾張国は八郡なり」と即物的なのに、『信長記』のほうは「夫以れば、天下を治むるに道あり。賢を親み姦を遠く」と、のっけから儒教臭を芬々とさせているのだ。

しかし、信長は旧来の慣習や道徳の破壊者であり、儒教の教えとはまったく正反対の生き方を貫いた人物だった。そんな信長を儒教の枠のなかに押しこめようとしたところに、甫庵の構想の根本的な無理があった、といってよい。

ただし、『信長記』の叙述は『信長公記』よりずっと名文であり、わが国伝統の軍記物語の骨法を採用していた。そのため、江戸の人士のあいだでは『信長記』の人気のほうが相対的に高く、くり返し刊行されて信長の名を民間にまで広げるのに大きく貢献した。

「予是を本として、且は公(信長)の善、尽く備はらざることを嘆き、且は功あつて洩れぬる人、其の遺憾いかばかりぞやと思ふまゝに、且々拾ひ求めて之を重撰す」

武功夜話

前野雄翟 著

突如発見された古文書は
信長の若き日々の、生々とした姿を叙述していた。
津本陽『下天は夢か』、遠藤周作『決戦の時』など、
現代の作家たちに与えた影響は大きい。

若き時代の信長、秀吉を生き生きとした筆致で描く

歴史上の事件や人物の理解ないし評価は、新しい史資料の出現によってだいぶ趣を変えることが、時としてある。

信長と彼の生きた時代に関していうならば、昭和六十二年に刊行のはじまった『武功夜話』は、まさにそのような性格をもつ新史料だとしてよい。とりわけ、史家や文筆家ではなく、織田家に仕えた一家臣の側の視点から描かれた記録であるというところに、『武功夜話』の貴重な価値がある。

『武功夜話』は、愛知県の旧家吉田家の所蔵になるもので、昭和三十四年の伊勢湾台風で土蔵が破損した折、内部の古文書を整理しているうちに発見された。

吉田家はもとの姓を前野といい、尾張国丹羽郡の郡司の家系につらなる開発領主だった。その後、前野氏は一三代宗康の代にいたって織田家に臣従し、はじめは岩倉織田氏の麾下に属した。

しかし、戦国時代に入って織田氏に内訌が続き、岩倉織田氏が信長に攻め滅ぼされると、前野氏は信長に臣従するようになった。永禄二（一五五九）年のことである。その一族からは但馬出石城一一万石の城主前野長康、越中礪波郡井波城に拠って一万五〇〇〇石を領した前野勝長らが出ている。

ただし、彼らは武門として江戸時代まで生き残ることができず、本家の一五代雄善も慶長七（一六〇二）年に浪人し、本貫の前野村に蟄居した。

『武功夜話』は、その子で前野村の庄屋職をつとめた一六代雄翟によってまとめられたものである。雄翟は一五歳のとき、父に従って関ヶ原の戦いに初陣しているので、戦国最後の世代にあたるといってよい。

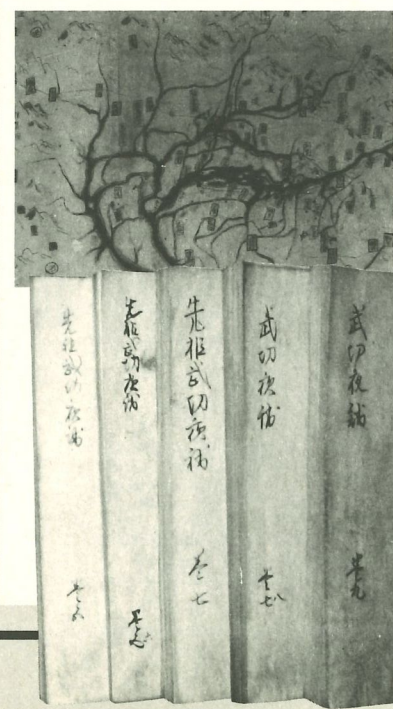
刊本『武功夜話』の「はしがき」によると、雄翟は先祖から伝わる記録や手記をもととし、戦国生き残りの家臣からも体験談を聴取しつつ、慶長末（〜一六一五）年より、その編纂にとりかかった。その作業がようやく実り、全二一巻本として完成したのは、寛永十一（一六三四）年から同十五年にかけてのことというから、およそ二〇年前後の歳月が費やされたわけである。

このような来歴をもつ記録だけに、『武功夜話』にはこれまで『信長公記』・『信長記』などによって形成されてきた通説を覆すような、いくつかの斬新な記述がもりこまれている。

たとえば、信長は少年のころから合理主義のかたまりで、冷酷非情の傾きが強かったといわれるが、体内には熱い血が流れており、時には喜びに我を忘れて狂態をさらすこともあった。

「吉野様男子お誕生遊ばされ候。このとき、（略）牢人衆、親類縁者の家人、召使いの下男下女、さては若党小者に至るまで、無礼無講の御触に付、馬場前のたまりに夜の更け行くを打ち忘れ、乱舞の狂態、さても目出度き哉と、信長様おどり出でられ、果ては明け方と相成り候も歌いおどりの子細」

吉野とは、前野氏と親戚関係にあった生駒氏の娘で、信長の最初の愛人。その吉野が男子を出産したというので、嬉しさのあまり夜を徹して踊り狂ったというのだから、この純情さは世の若

永禄9（1566）年、前野長康の署名入り「尾張・美濃図」。この年、信長は尾張守を名乗り、美濃の斎藤龍興を攻撃している。長康は、『武功夜話』の前野氏の一族。

旧家吉田家から出てきた『武功夜話』。昭和34年の伊勢湾台風で土蔵が破損したさい、発見された。全21巻が完成したのが寛永11〜16（1634〜39）年のことと伝えられる。

者と少しも変わるところがない。

『武功夜話』によれば、桶狭間の戦いに関する経緯も、従来説とはだいぶ異なっている。

『武功夜話』において、桶狭間戦の陰の主役を演じたとされるのは、前野氏および同家と昵懇の蜂須賀小六である。

両人は、駿河の今川義元の動きがおかしいと聞き、自主的に偵察活動に出る。すると、案の定、義元が尾張に攻めこむべく、陣触れを発していることが判明した。両人はさっそく信長にその旨を報告したが、信長は動じる色もなく呵々大笑していった。

「大軍を迎え五、三日も支え候とも加勢なお甲斐なき事。清須（洲）まで半日、山なく大河なく、無手の籠城は一層不甲斐なし。この期に望み、河の行の因、所詮労あって益なし」

今川のような大軍が攻めこんでくるのであれば、迎撃しても籠城しても所詮勝ち目はないのだから、今から慌てふためいてあれこれ準備をしても何の役に立とう、というのである。

とはいえ、むろんのことだが、信長は義元との戦いを前に、まったく無策のままでいたのではなかった。信長は、不安げに顔を見合わせる前野氏と小六に対し、自信ありげに告げる。

「備えず構えず機をはかって応変。すなわち間合いこそ肝要なり」

大軍の弱点は、進軍途上で統一的な行動をとれないところにある。とくに、攻撃目標が分散していれば、各部隊はおのずから細分化され、本隊も孤立しがちだ。

それゆえ、前線部隊と離れた義元本隊の動向を事前に察知し、地形を選んで奇襲攻撃をかけたなら、兵力は十分の一でも織田勢が義元の首級をあげるのは決して不可能ではない——信長のいう「応変」「間合い」の戦略意図とは、そのようなものであった。

現実の歴史の展開に従うと、運命の日、義元本隊は桶狭間の一域にある狭い窪地、田楽狭間に軍馬をとどめ、昼餉の仕度にとりかかった。そこへ、近在の神主や農民が酒樽ほかの献上品をはこんでくる。義元は上機嫌で彼らをねぎらい、酒盛りをはじめたが、実はこれ、信長の指図に従い、義元本隊を少しでも長く田楽狭間に足どめすべく、小六の一党が仕組んだことだった、という。

『武功夜話』にはこのほか、土豪武士からみた信長の人間像や当時の風俗など、多くの斬新な知見がもりこまれている。

そのため、『武功夜話』は刊行以来、史家や作家の高い関心を集め、津本陽氏の『下天は夢か』、遠藤周作氏の『反逆』など、『武功夜話』をベースにしたあらたな信長物語も生み出されつつある。

日本史

ルイス＝フロイス 著

世界史のなかで信長を見直すために不可欠の史料

戦国の後半から安土桃山時代にかけて、わが国にはイエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会の宣教師が数多く渡ってきた。そのうち圧倒的多数を占めたのはイエズス会の宣教師であり、日本上陸の先頭を切ったフランシスコ＝ザビエルは、ゴア（インドのポルトガル領の首都）に書き送った長文の書簡のなかに次のようなことを述べている。

「日本人は今までに発見された民族のなかで、もっとも秀れたものである。未信者の中で日本人より勝っている人々はいないと思われる。日本人は友誼を重んじ、その性は善良で、何よりも名誉を尊ぶ。彼らは大多数が貧しいが、貧困は決して貴族にとっても平民にとっても不名誉ではない」

外国人の見た信長像の最良のもの。
直接会った回数も一番多いとされるポルトガル人の
宣教師・ルイス=フロイスが記述した
世界史のなかの信長が、この本からよみがえる。

このような、好意的すぎるとも思える戦国期日本人への評価は、決してザビエル一人のものではなかった。

ザビエルに遅れること三〇年ほどして日本を訪れたイエズス会の巡察使ヴァリニャーノも、日本人を率直に讃える感想をその巡察記に吐露している。

「日本人はきわめて忍耐強く、飢餓や寒気、また人間としてのあらゆる苦しみや不自由を堪え忍ぶ。それは、（略）幼少の時から、あらゆる苦しみを甘受するよう育てられるからである。彼らは感情を表すことにははなはだ慎み深く、胸中に抱く感情を外部に示さず、憤怒の情を抑制しているので、怒りを発することは稀である」

戦国時代の日本は、国内では合戦のやむときがなかったが、精神史の観点からすると、民族としての日本人の意識が空前の高まりをみせた時代であった。そんな意識の高揚は、信長や秀吉が中国に侵略の兵を送ろうという、前代ではおよそ考えもつかなかった破天荒な軍事作戦を企図した点などに、はっきり反映されている。

すなわち、戦国時代はそれまで主として中国の強い影響のもとにあった日本が、はじめて意識の上で民族的な自立をとげ、自分たちの文化・文明に自信を持ちはじめた時代だったのである。そして、人々がそのように自信にみちあふれていたからこそ、ザビエルやヴァリニャーノもそこに西欧とは別の文明を見出し、日本人を高く評価したのであった。

『日本史』の筆者ルイス=フロイスも、やはり日本に魅せられたイエズス会宣教師の一人である。

フロイスはポルトガルの首都リスボンの生まれで、一五四八年イエズス会に入会し、ゴアでザビエルに会って日本に対する予備知識を得たのち、三一歳を数えた一五六三（永禄六）年待望の来日をはたした。以来、フロイスは後半生のほとんどを日本で過ごし、一五九七（慶長二）年長崎に六五年の生涯を閉じる。

フロイスが、外国人からみた同時代資料の白眉とされる『日本史』の執筆にとりかかったのは、一五八三（天正十一）年のことである。彼に直接執筆を命じたのはイエズス会日本副管区長ガスパル=コエリョであり、その目的はザビエル以来の日本における初期教会史を編述することにあった。

フロイスは『日本史』の執筆に心血を注ぎ、死の直前まで筆を休めなかった。その段階で、『日本史』は三部作四巻の体裁をととのえていたという。

だが『日本史』はヨーロッパのイエズス会本部に送付されず、いつしか散逸の運命を辿った。『日本史』がふたたび日の目をみるのは二〇世紀に入ってからのことであり、世界各地から発見された断片的な写本をつなぎ合わせた結果、冒頭の一巻と末尾を除く一五四九年から一五九三年までが復元されて現在にいたっている。

さて、フロイスがはじめて織田信長に対面したのは、永禄十一（一五六八）年の末ないし翌年初頭のことであった。

そのころ、キリシタン宣教師たちは松永久秀の弾圧にあって京都を追われ、フロイスは堺に避難して時節の到来を待っていた。そこへ信長が足利義昭を擁して出兵上洛し、松永久秀を駆逐したので、フロイスは伝手を辿り、布教再開の許可を願って信長のもとに参上したのである。

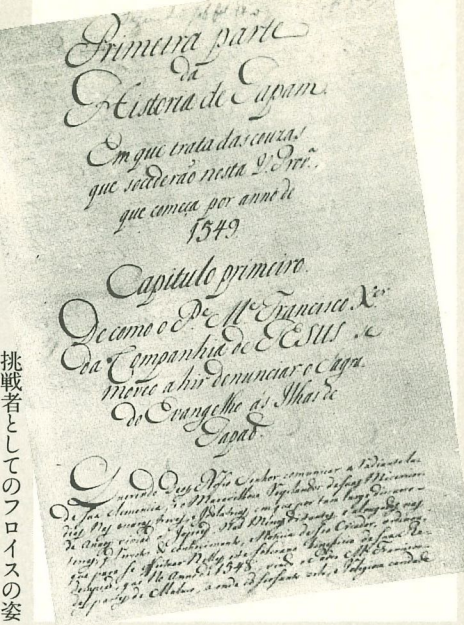
この第一回の表敬訪問に続き、両者の二度目の対面は、信長が将軍義昭のために造営中の二条御所の工事現場において行われた。その日、信長は上機嫌でフロイスにいろいろと話しかけ、ほどなく布教再開も許可されるはこびとなった。

フロイスは二度目の対面のとき、胸を張って信長にこう語っている。

「（自分は）日本においていかなる名誉も富も名声も、その他何らの現世的な一時的な利益は求めておらず、ひたすらデウスの教えを説き、人々に宣布することだけを望んでいる」

信仰に一身を堵した使命感、果敢な

「予が（略）非人情に伴天連を遇すれば、インドや彼の出身地の諸国で予の名がよく聞こえると思うか」

ルイス=フロイス『日本史』。ポルトガル人、ルイス=フロイスは18回以上、信長と会っている。その体験をもとに、信長の印象を『日本史』のなかに記した。(平凡社・国民百科事典より)

挑戦者としてのフロイスの姿勢は、みずからも乱世を終息させようという「天下布武」の使命感に生き、果敢な挑戦者としてありつづけた信長に、強い感銘と共感を与えたようである。

ただし、宗教嫌いの信長がキリシタン宣教師に限って厚遇したのは、単にそのような共感にもとづいてばかりのことではなかった。

信長は「天下布武」実現のために、何よりも富国強兵に意を注いでいた。そんな信長からすると、フロイスのような宗教者を地球の裏側の島国にまで送り出せるヨーロッパの国家とはどのような構造をしているのか、深甚の関心を抱かざるをえない。もし、その秘密を探り出すことができたなら、天下布武の事業は一挙に加速するであろう

——宣教師厚遇の背後にはそんな思惑もあり、信長は宣教師との会話の合間に、そのころヨーロッパで全盛をきわめていた絶対主義の概念を看取した気配さえ濃厚である。

「予が（略）非人情に伴天連を遇すれば、インドや彼の出身地の諸国で予の名がよく聞こえると思うか」

そのような、当時の日本人としては希有の世界的視野を備えていたことも、信長の宣教師厚遇の一因に数えてよい。

したがって、信長とフロイスの関係は、当初きわめて良好であり、『日本史』には信長に対する讃辞がいくつか書きつらねられている。

「彼（信長）は中くらいの背丈で、華奢な体格であり、髯は少なくはなはだ声は快調で、きわめて戦を好み、軍事的修練にいそしみ、名誉心にとみ、正義において厳格であった」

「彼は善き理性と明晰な判断力を有し、（略）霊魂の不滅、来世の賞罰などはないと見なした」

「彼は自邸においてきわめて清潔であり、自己のあらゆることの指図に非常に良心的で、対談の際、遅延することや、だらだらした前置きを嫌い、ごく卑賤の者とも親しく話をした」

フロイスは信長の厚遇に感激するあまり、つい筆をすべらせたのか、こんな所懐まで洩らしている。

「ある意味で、デウスはその聖なる教えの道を開くために彼（信長）をそれとなく選び給うたごとくであった」

つまり、信長こそ、デウスが聖なる教えの道を日本に開くため、思慮深く選びたもうた人物ではなかったか、というのである。

しかし、信長とフロイスの友好関係は、やがて信長がデウスを否定したことによって破綻をきたし、『日本史』にも信長を容赦なく批判する文章が頻出するようになる。

「彼（信長）を支配していた傲慢さと尊大さは非常なもので、そのため、この不幸にして哀れな人物は、途方もない狂気と盲目に陥り、自らに勝る宇宙の主なり造物主は存在しないと述べ、（略）彼自身が地上で礼拝されることを望み、彼、すなわち信長以外に礼拝に値する者は誰もないと言うに至った」

「彼はもはや、自らを日本の絶対君主と称し、諸国でそのように処遇されることだけでは満足せず、全身に燃えあがったこの悪魔的傲岸さから、（略）自らが単に地上の死すべき人間としてでなく、あたかも神的生命を有し、不滅の主であるかのように万人から礼拝されることを希望した」

それゆえ、本能寺の変に関する『日本史』の筆致も、きわめて冷淡である。

「我らの主なるデウスは、彼（信長）があの群衆と衆人の参拝を見て味わっていた歓喜が十九日以上継続することを許し給うことがなかった」

信長は自身を神体とする寺院摠見寺を安土城下に建立し、諸国の領民に参

太閤記

小瀬甫庵 著

日本史上、「いちばん怖い上司」についた人間が、いかにして気に入られ、出世したかを読ませてくれる、好読み物として若き日の秀吉を描く第１〜３巻をひもとくべし。

信長と秀吉の関係を楽しく読ませてくれる読み物

織田信長を創造の天才とすれば、豊臣秀吉は模倣ないし実用化の天才といえるかもしれない。信長が本能寺に斃れたあと、秀吉がその遺産である織田領国を継承し、みるみる天下人の座に上りつめることができたのは、生前から信長を尊敬し、信長の流儀をじっくり研究して自家薬籠中のものとしていたからにほかならない。秀吉は、他の武将には見えなかった信長の先進的創造性をほとんど完璧に理解した唯一の人物であり、その意味で信長学校のまさに出藍の一番弟子であった。

秀吉の冴えは、天下を統一して守成の段階を迎えると、とたんに曇りをみせる。それも、もとを辿れば、信長が覇業の途次に横死し、秀吉の模範とすべき政権樹立後のマニュアルを残していなかったのが一因と考えることさえできないではない。

さて、その秀吉の事蹟を描いた『太閤記』にはいくつかの種類があるが、単に『太閤記』という場合は、小瀬甫庵作の『太閤記』一五巻をさす。

甫庵は、前掲の『信長記』の作者でもあり、京都で浪人生活をすごしたあと、加賀一〇〇万石の前田氏に招かれて仕官した寛永元（一六二四）年から翌年にかけ、『太閤記』を完成した。本書巻頭の「凡例」に「此書、太田和泉守記しおけるを便となす」とあり、甫庵は太田牛一の『太かうさまくんきのうち』や秀吉の右筆だった大村由己の『天正記』など、先行する太閤記ものを参照しつつ、執筆を進めたようである。

そのほか、前田氏の家老で信長や秀吉の行跡に詳しかった横山長知からの聞き書きも大いに活用したと伝えられる。

ただし、甫庵は『信長記』と同じく『太閤記』も儒教道徳をからませた軍記物語として構成しており、史実そのものの信憑性に関しては、相対的に価値が低い。

そのかわり、甫庵は『太閤記』を単なる秀吉讃美の書に終わらせず、「凡例」において「秀吉公の事も、善は善とし、悪を悪としてこれを記す」と揚言しているように、秀吉の所業を批評的にきっちりと書きわけた。しかも、他の太閤記ものに比べると、物語風の叙述が抜群に面白く仕上がっていたので、広く一般庶民の人気を博した。江戸時代以降、秀吉に関する歌舞伎、講談、芝居、映画などが多く作られたが、その種本とされたのはまず例外なく甫庵作『太閤記』である。

全一五巻のうち、信長と秀吉との直接の関わりが描かれているのは、第三巻まで。

信長は、集団合議制の原則が機能していた日本において、まったくといってよいほど部下の声に耳を傾けず、ルイス＝フロイスさえびっくりしたほどの徹底的な独裁をつらぬいた人物だった。言いかえるなら、部下からするともっとも仕えにくいタイプの上官であったとしてよい。

そのような上官の信頼をどのようにしたらかちとり、自分の能力を認めさせることができるか――そのテーマに挑んだ秀吉流のノウハウが、この三巻には生き生きと示されている。

「信長公未明に打出給ふに、馬に乗いさめる者あり。誰ぞと宣へば、木下藤吉郎秀吉とぞ名乗りける」。

詣すべきことを命じていた。信長が本能寺に横死したのはそれから一九日目のことであり、フロイスはその惨劇を、神を僭称した信長が真の神デウスによって当然の罰を加えられたにすぎない、とみなしたのである。『日本史』には、このほか豊臣秀吉、武田信玄、加藤清正、明智光秀、大友宗麟、高山右近ら、西洋人の眼から見た多くの戦国大名の動静が語られており、国内の同時資料と読み比べると、意外性にとんで興味深いエピソードが満載されている。

小瀬甫庵著『太閤記』。『信長記』の甫庵による豊臣秀吉の一代記だが、全15巻のうち第１〜３巻には秀吉と信長の関わりが描かれていて興味深い。物語風の叙述は生々している。

織田ルネッサンスを支えた男たち

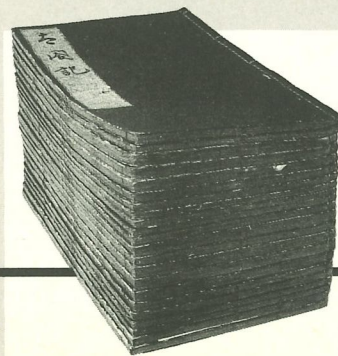
人物から読み解く 信長・乱世の構図

信長を軸に、近世の入り口で覇権を争った男たち——
〝天下〟を巡るバトル・ゲームの裏では
知略、謀略、武略、そして血の結託と
革命には付きものの色濃い人間模様が繰り広げられた。

本文監修：小和田哲男
構成：ヒューマンプレス

※記事内の略系図はすべて『日本系譜綜覧』（名著刊行会）を参考に作成。

PART 1

信長前史

織田家の悲願が信長を生んだ

人は境遇でつくられる──尾張統一までの長くて遠い道程が信長の異能を磨いた。天下取りの出発点・桶狭間の戦いは、実は織田家の到達点だった！

尾張へ！ 越前・織田荘故地からの一族大移動

信長はある時までは藤原氏を称し、また天下が身近なものになってからは平氏を称した。藤原氏の場合は、信長以前の代から長く称されてきたらしい。平姓のほうは天下を掌握する武家の源平交替思想にのっとって、一種のたてまえとして創作されたものである。

ただし、創作とはいうものの、まったくのデタラメでは説得力を欠くのは当然で、そこには源平の戦を逃れた平資盛の懐妊した妾が近江に落ちのびて子を産み、その利発な子が、越前の神官に貰われていった……という始まりになっている。

ところが、越前には、現在も織田町(福井県丹生郡、「おた」と澄んで発音する)があり、そこには織田剣神社が現存している。奈良以来の古刹であり、中世の資料からもそこが一定の規模をもった織田荘の管理機構を担っていたことがわかりはじめ、現在ではこの織田荘の荘官が織田氏であったとされている。それならば、越前守護・斯波氏との関係やその後の尾張移住との関連もすっきりしてくる。

昭和五十年に剣神社に着任した緒方教明宮司によると十数年前までは、地元でも特に信長への意識はなかったという。信長が織田氏が織田を離れて百数十年後に生まれた人物であってみれば無理もないかもしれない。

それが、ここ数年は信長ゆかりの一六市町村による『信長サミット』なる催しにも取り上げられるようになり、近年の「信長生誕四五〇年祭」には同神社も参加して盛大に盛り上がったという。

同神社には信長時代の文書も伝わり、柴田勝家が、『殿様氏神……』と表現している文書も現存している。

織田家はどこから来たのか？

飛驒
織田剣神社
織田一族
美濃
若狭
尾張
赤間関より
平資盛の妾の子として
三河
丹波
津田郷
京都
伊賀
摂津
大和
伊勢
志摩

織田氏の出自は越前国丹生郡織田荘の荘官で、同地の剣神社（現在の織田剣神社）の神官も兼ねていた。そして1400年ころ越前守護・斯波義重が尾張守護も兼ねることとなり、その守護代として織田氏も尾張へ。信長はその流れをくんでいるといわれる。

守護・斯波氏の被官で織田荘の荘官クラスの土豪で、織田剣神社の神官を兼ねたもの、それが尾張以前の織田氏であった。

京都の守護代織田常松 尾張に土着した「又代」

応永七(一四〇〇)年ころ、越前守護・斯波義重は尾張守護と兼任になった。この時、織田常松なるものが尾張守護代となっている。しかし、守護も守護代も京都にあって、実質上の現地での尾張経営は「又代」の織田常竹があたっていた。

この時に、織田一族がこぞって越前から移ったのかどうかはよくわからない。ただ、柴田氏など、斯波氏の支流と称する家も尾張に移って土着しているので(愛知郡)、かなりの人の動きがあったのかもしれない。

当時の尾張は東海道の重要地点で、水利に恵まれたかなり肥沃な土地が広がっていた。

ここに先代から数多くの小領主が跋扈していた。

兼松氏(葉栗郡島村)、祖父江氏(中島郡祖父江)、熱田宮の一族、津島衆……また、先の柴田氏のように他所から移ってきてこの地に土着した家も多かった。

佐久間氏(愛知郡御器所、安房より)、塙氏(春日井郡、常陸より)、前

田氏(愛知郡荒子、美濃より)、丹羽氏(丹羽郡、武蔵より)……。

それだけ地味も豊かで交通にも便利だったのだろう。これらの子孫は後にみな信長の配下として活躍している。織田氏自身がこのように他所から移り住んだ氏族だったが、信長の家が、入府した守護代・織田氏から尾張で派生した家か、すでに越前時代に織田氏から派生し、ともに尾張に入府した家かはわかっていない。

ともあれ、守護代織田氏はこうした風土の中で守護代としての経営にあたったのだった。

守護所は国衙に近い下津(現稲沢市)におかれた。

二つの守護家・斯波氏と二つの守護代家・織田氏

ところが、京都にいた名門・斯波氏に応仁の乱の一因ともなった一族の内紛が起こった。斯波義廉と義敏の家督争いである。

応仁の乱が起こると義廉は西軍・山名方の将として戦い、義敏は東軍・細川方についた。

京都を舞台とした応仁の乱そのものは文明五(一四七三)年ころには終焉していたが、斯波氏の抗争や地方の戦乱はなおも続いた。

文明七年義廉は尾張に入府し、当時の尾張の守護代で岩倉にいた織田伊勢守敏広(常松の曾孫という)に擁された。義廉は越前の朝倉を頼ったが、すでに守護の実権は被官朝倉氏に移っていたのである。

一方、越前を見限った義敏も文明十五(一四八三)年尾張に入府し、清須にいた織田大和守敏定を頼った。

ここに二人の守護、二人の守護代が誕生したのである。岩倉にいた伊勢守系の織田家と清須にいた大和守系の両織田家。岩倉と清須は八キロほどしか離れていない。当然、無数に存在した土豪、小領主をまきこんだ激しい対立と抗争がくりひろげられたが、次第に清須の大和守系織田家が優勢になっていった。

信長の父、信秀のころには、一応、

伊勢守系―居城・岩倉、上四郡(丹羽・葉栗・中島・春日井)支配

大和守系―居城・清須、下四郡(海東・海西・愛知・知多)支配

という情勢になっていた。

この二つの守護家、つまり二つの織田家による尾張の分割統治は、信長が統一する永禄二(一五五九)年まで続くのである。

もっとも、信秀の家筋はこの二つの織田家のうちのいずれでもなく、下四郡を統治する大和守系織田家の三奉行のうちの一家にすぎなかった。すなわち織田因幡守、織田藤左衛門、織田弾正忠のうち、織田弾正忠というのが信秀その人である。しかし、ここまで時系列に下ってきてからいってしまっては元も子もないのだが、実はこの弾正忠家も、傍流であることは確かだとしても、前述のように越前時代に分かれた傍流なのか、傍流守護代家の傍流なのか、あるいは単なる傍流の傍流なのかは歴然としていないのである。

略系図（信長以前）

下の系図は、一般的によくいわれているものであるが、これは、信長が天下を治めるのに十分な〝血統〟をもっているかのように、都合よくつくられたもの、というのが現代の定説である。まず、その祖・平重盛は源平交代思想にのっとり、借用してきたものであるし、また信長の3代前に織田大和守「敏定」の名前が見えるが、これも信長を織田家の本流にしようという創作だといわれる。つまり逆にいえば、信長の「織田家」はそれ以前と比べようがないほど、父信秀と信長で大きく勢力を伸ばした家なのである。傍流の家が本家を凌駕したわけだ。

織田弾正忠信秀は信長より大物だった？

だが、弾正忠信秀はなかなかいい場所にいた。地位ではなく、本拠・本領がである。土地の肥えた尾張には前述のようにさまざまな武士が土着して、それぞれが小さな世界の小領主として自立していた。信秀も清須を辞去し本領にもどれば、少なくとも殿と呼ばれる身分である。戦国期の尾張にはそういう領主たちの城館が二〇〇はあったという（国立歴史民族博物館・千田嘉博氏）。

これは同時に、一度乱れれば境や権益を争ってとんでもない騒ぎになることを意味している。

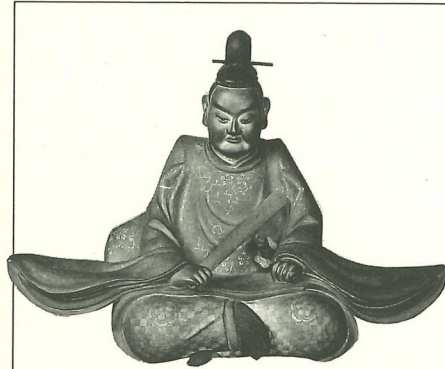
そして、まさに、信秀の時代は、そんなとんでもない状態の真っ盛りにあったといっていい。

しかし、清須の西方一〇キロのところにあった本拠・勝幡城（現・佐織町）は水郷の町場・津島に接していた。当時の津島は、津島神社の門前町であり、尾張で最も商業の盛んな河港町でもあった。信秀はこの経済の中心地を押さえ、その経済力を背景に那古野、古渡、末森の各城を築き主家とは別に勢力をのばしていった。天文十二（一五四三）年、信秀は内裏の台風被害に対し四〇〇〇貫文を献上している。世は朝廷どころではない時代であり、これも信秀の経済力をよく物語っている。

こうした環境のなかで、天文三（一五三四）年、信長が生まれている。幼名、吉法師。幼いうちに那古野城におかれた。これにつけられたのが、有名な平手政秀である。

しかし、国内での守護代家の積年の対立ばかりでなく、目を外に向ければ、北に斎藤道三の美濃をひかえ、すぐ南の、目と鼻の先には伊勢長島の一向一揆の拠点があった。東には膨張中の駿河・遠江守護、今川義元がいてすでに三河を併呑し尾張に侵攻しつつあった。

信長も天文十五年、一三歳で元服し翌十六年に三河・吉良へ初陣、さらに十七年には美濃との政略結婚で、道三の女をめとるなど次第に社会との接触をもちはじめていた。翌十八年には、すでに藤原信長の署名で熱田八か村に禁制を下している。

そんな状況下の天文二十（一五五一）年、信秀が死んだ。

織田家が傍流の家から〝本流〟への道を歩み出したのは、信長の父信秀のときだった。信秀の父信定時代に、織田家は城を海西郡・勝幡に構え、津島地方を支配している。当時、津島は港町で、津島神社の門前町としても栄え、多くの人々が集まる尾張でも屈指の経済拠点だった。その後、信秀が那古野に居を移し、尾張の中央に進出。さらにもうひとつの経済の中心地・熱田をおさえるために古渡城も築城。信秀は優れた経済力を背景に織田一族のトップに駆け上がるのである。

桶狭間へのとんでもなく長くて遠い困難な道のり

莫大な遺産をもたらした信秀の死は尾張中を動揺させた。大小無数の利害が錯綜した。身内だけでも一一人の男の兄弟、古い同族、さらには上四郡の伊勢守系の織田氏の一党。そして外には侵攻の速度を速める今川勢。そんななかで信長は、作法やぶりの葬儀出席を行い「うつけ」ぶりを見せて家督を継ぐ。信長一八歳。有名なシーンだが、またそれだけに誤解されやすいが、「うつけ」という言葉は、例えば、「ばさら」といったような特殊なニュアンスのある言葉ではなく、文字どおり馬鹿のことである。

今川勢は知多郡に前衛をおき、天文二十二（一五五三）年になると鳴海の山口教継が今川方につき笠寺、中村に砦を築いてしまった。土豪たちも、蜂須賀氏のように美濃によしみを通じるなど、激動を始めた。

さらには守護を擁した守護代の織田信友（信長の主家）の家臣・坂井大膳と信長の対立が深まり、天文二十三年、信長と結ぼうとした斯波義統が坂井に殺されてしまう。義統の子・義銀は信長を頼り、対抗上、坂井は信長の叔父、織田信光（守山城主）を味方として清須に入れてしまう。そこで信長は、信光に愛知郡・知多郡を与える約束をし、大膳を追い、守護代、織田信友を倒す。結果的には守護の擁護を理由に主家を倒したのである。

信長は約束どおり信光に那古野城を渡して清須に入城したが、こんどはその信光が家臣に殺されてしまう。信長は再び那古野城をおさえ重臣・林通勝（秀貞の説あり）を入れる。

一方、守山城では織田信次の家臣が誤って弟秀孝を殺し、信次は出奔してしまう。そのあとに弟信時を入れたが、弘治二（一五五六）年、信時も家臣に殺され、再び信次を入れる……。

他方、庶兄の信広は斎藤義龍と謀り清須城をのっとろうとする。

おりしも弘治二年、今度は弟信行（末

森城）が「おとな」（宿老）の柴田勝家、林通勝らに擁され謀反。上四郡守護代の織田氏と手を結んでしまい、一家は二分して戦う。稲生（現・名古屋市）で合戦に及び、信長は自ら林の弟、林美作守通具の首をとる。

いったん和睦するが、弘治三年信行は再び謀反を企てるが、今度は柴田勝家の密告により未然に防ぎ、信行を那古野城に誘殺する。

……要するに、無茶苦茶である。

柴田は気がとがめてか、自分が裏切った信行の子信澄を養育する。

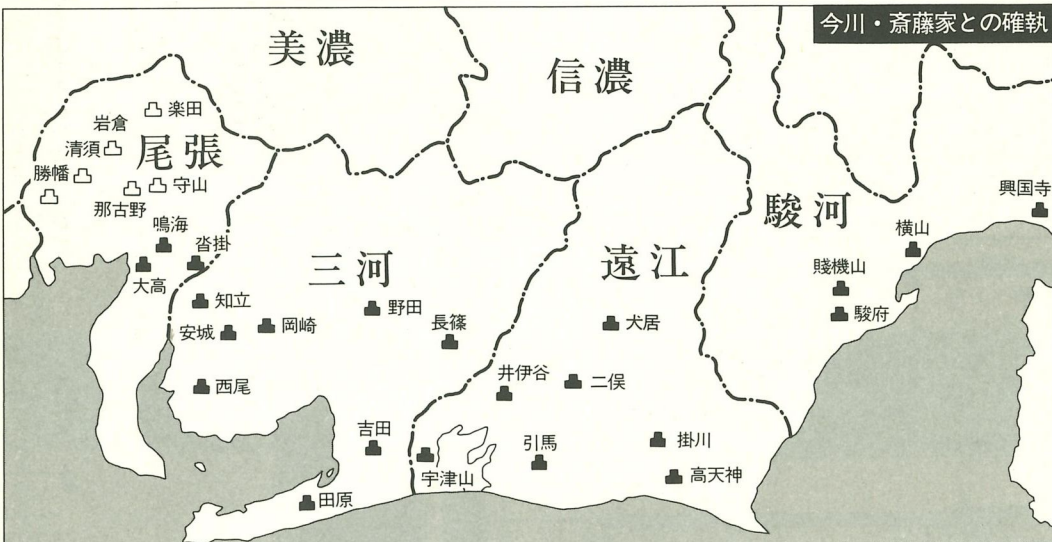
そして、永禄元（一五五八）年尾張上四郡守護代・織田信賢を浮野で破って、ここにようやく尾張を統一し、翌二（一五五九）年二月、上洛を果たす。

翌年（一五六〇）の桶狭間までは、はなはだ長くうっとうしい道のりだったのである。

土地領有を経済の根本原理とし、そこに多数の血統がいりまじって分離・独立し、庶家が派生していく時代にあっては、生き残りへの道がすなわち勝者への道といえる。しかし、現代でも、戦前の家督相続法の時代には殺戮という手段は選ばないものの、ちょっとした旧家などには戦国時代さながらの家庭劇はいくらでもあったはずだ。信長はその宿命を克服したのである。

織田家の勢力図

尾張統一の道

当時の尾張は、守護斯波氏の権威が衰え、分裂状態にあったといえる。そのなかで信長の父信秀は急速に力を蓄えつつあったが、尾張の統一をみることなく、志半ばで天文20（1551）年3月に病死した。そして家督を継いだ信長を待っていたのが、凄まじい織田家内部の主導権争いである。守護斯波義統は清須城にいたが、実権を握っていたのは、信長の主家である守護代織田信友とその家臣・坂井大膳であった。信長と結ぼうとした斯波義統は坂井に殺されてしまう。その坂井と信友を、伯父の信光の力を得、信長は弘治元（1555）年に倒すのである。とりあえずこの時点で、信長は形のうえでは尾張の半分、つまり下4郡を手に入れたことになるのだが、事はそうすんなりとは収まらなかった。そして尾張統一の過程で信長最大の危機が、翌年起こった。林通勝や柴田勝家などの謀反である。林は筆頭の家老で那古野城をあずけていた重臣であったし、柴田も有力な家臣だった。また、彼らが擁した信長の弟信行は、当時、信長より信望があったといわれている。これらを乗り越え、信長は永禄2（1559）年に尾張上4郡の守護代織田信賢を討ち、やっと尾張の統一を実現するのである。信秀没後、約10年もの険しい道のりであった。

信長は尾張の統一だけに専念しているわけにはいかなかった。当時、東の今川氏は、松平氏の三河も飲み込み、駿河・遠江と合わせ、3か国を領する一大勢力を誇っていたのである。尾張にも勢力を伸ばし、すでに知多郡が今川氏の手にあった。とくに信秀の死後には、鳴海の山口教継が今川氏につき、信長の目の前までやってきていた。

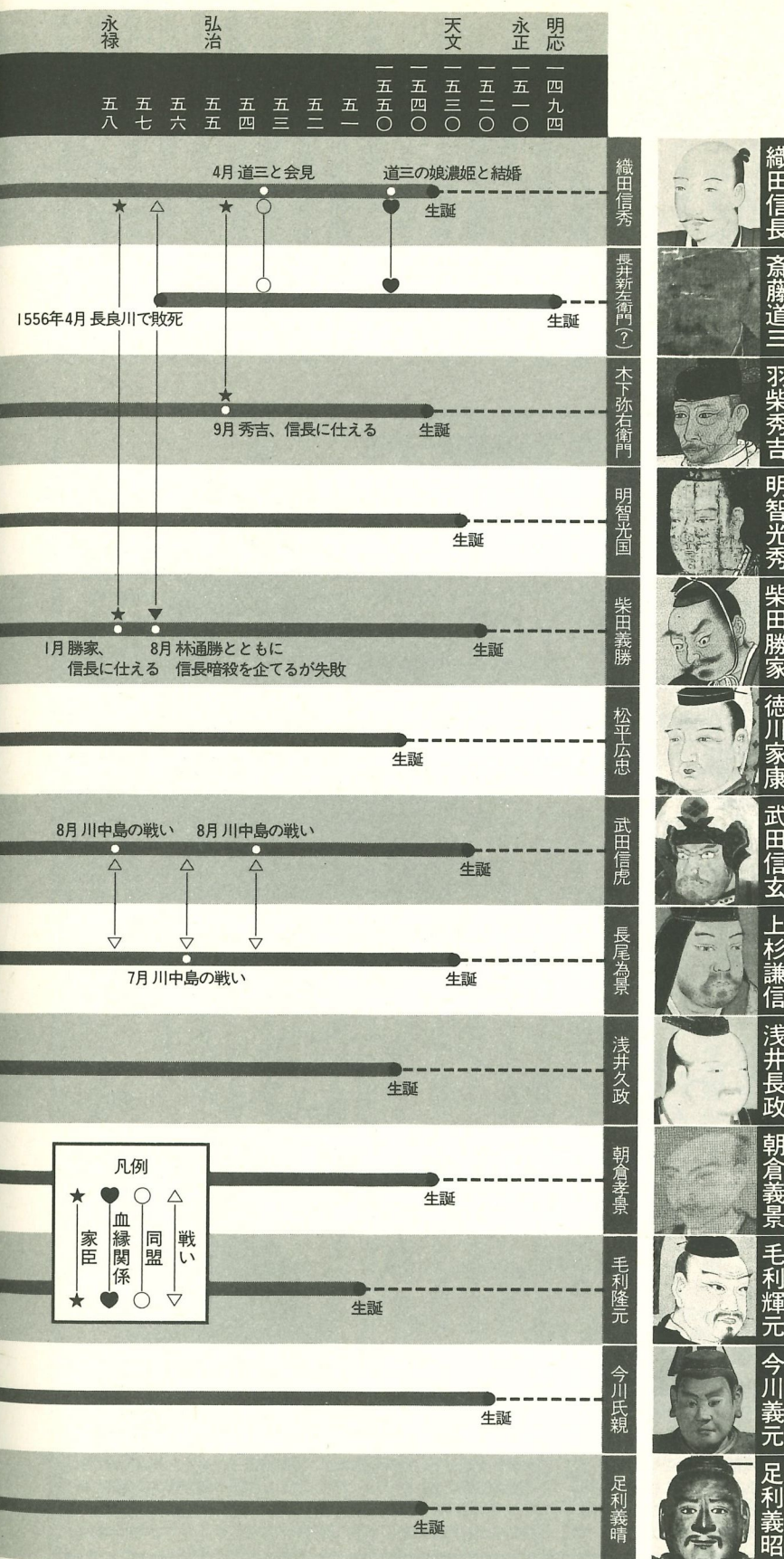
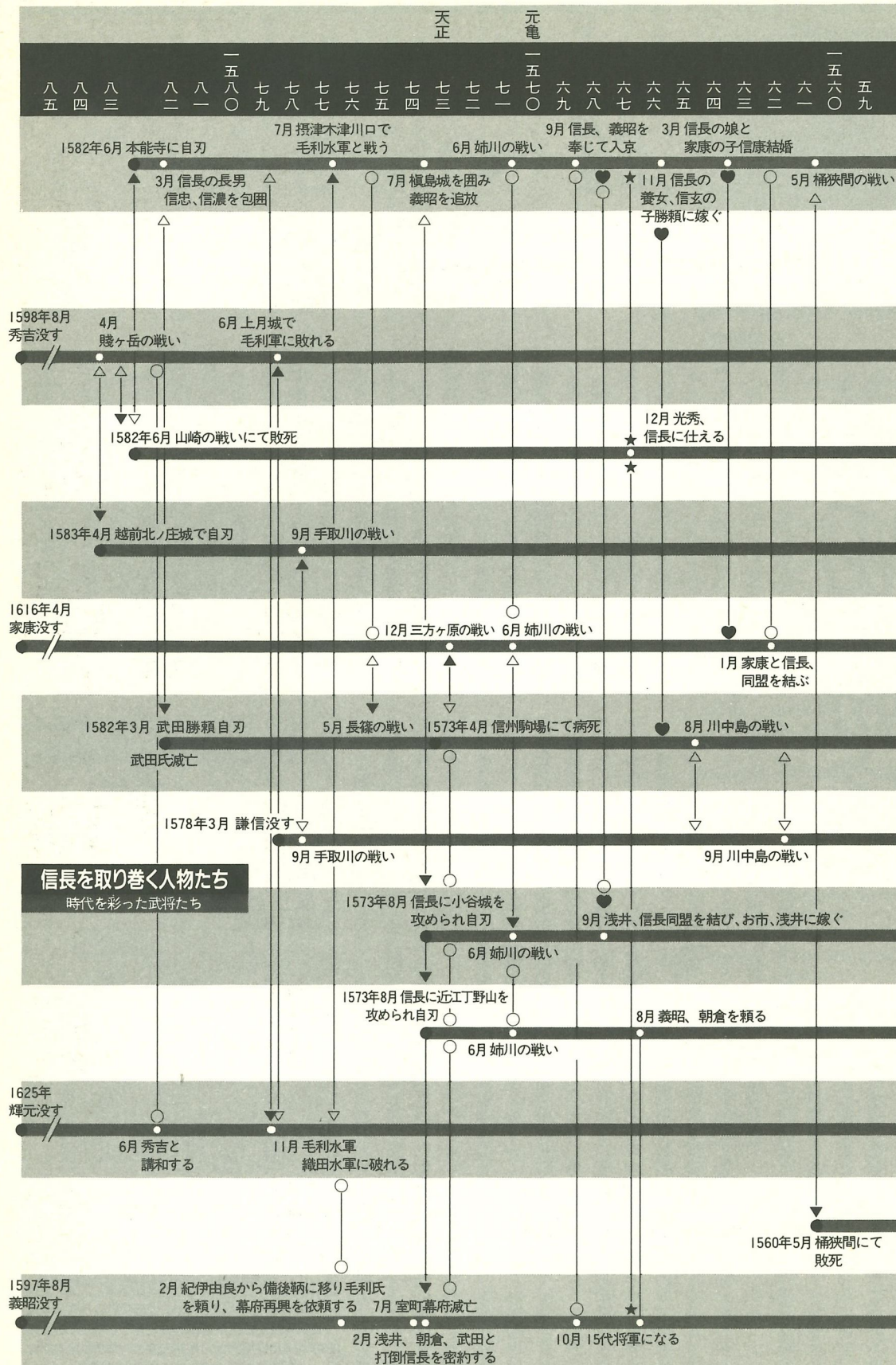
一方、尾張の北に位置する美濃では、信秀が結んだ和睦以降、良好な関係を保っていた斎藤道三が、家督を譲った息子・義龍に殺され、不穏な空気が流れていた。のちにこれが信長の美濃討伐に発展するわけだ。さらに一向宗の拡大で、民衆の間に大きな動揺が広がりつつあった。信長にとっては内憂外患の非常にゆううつな時代である。

PART 2

信長相関図

戦国を演出した男たちの実像

のちに信長の跡を継いで、天下を手中に収める秀吉、家康を筆頭に戦国ルネッサンスを織りなす武将たちの実像に迫る。

名将列伝 FILE No.1 Shibata Katsuie **敵対→家臣**

織田家臣団の中核を担った随一の宿老

柴田勝家は「鬼柴田」と異名をとる尾張はえぬきの武将である。当初、信長の弟・信行を擁して謀反を起こすが、信長の並みはずれた才能を見抜き、〝返り忠〟で尽くした。

柴田勝家

剛直は少年期からだった

柴田勝家は尾張はえぬきの織田家の宿老である。愛知郡に本領があった。さかのぼれば越前守護の斯波氏の庶流だという。応永のころ（一四〇〇年ころ）斯波氏の尾張守護兼任の際に越前からやってきて土着したらしい。同じように守護代として尾張に土着した織田氏とは草創のころからの因縁も深いものがあったのだろう。

しかし、信長と勝家に関していえば、そう単純なものとはいえなかった。

生年は大永二（一五二二）年。通称を権六といい、こちらのほうがよく知られているかもしれない。父は柴田土佐守。子供のころから武芸を仕込まれ、信長の父、織田信秀の小姓として仕えていた。

勝家の武芸はこの子供のころから頭角をあらわし、すでに天文十一（一五四二）年、大軍で侵攻する今川軍を、信秀がわずか四〇〇〇の兵で迎え撃った小豆坂の戦いでも発揮された。勝家このとき、初陣だったといわれる。戦闘は凄まじく、寡兵の織田勢が荒々しく敵中に突っ込んでいく様をみて「勝つことは死すことなり」の信念を得、これが後の「鬼柴田」「甕割り柴田」などの異名をとる勝家の剛性で猛々しい戦法を育てるもととなったという。若かった勝家が、初陣でどこまで戦場の本質を見抜けるものか怪しいが、少なくとも勝家には、そうした槍一本にかける勇猛な絵にかいたような戦国武将のイメージが、だれからも認められていたのだろう。

後年の肖像画をみても、その髭面の容貌はいかにも恐ろしい。当時の武士は戦場で相手を威嚇するためのさまざまな装束をこらしたが、勝家の場合はこの顔だけで十分にその効果をあげている。こんな男と向かいあったら一生の不覚である。

やがて父信秀から信長の弟信行につけられ、末森城におかれた。ところが、弘治二（一五五六）年、同じく信行付きの「おとな（宿老）」林通勝と、信行を擁してこの男が謀反を起こした。勝家には信長が、剛直にひと押しすれば容易に落ちる相手とうつったと思われる。「うつけ」というのが信長の定評だった時代である。しかし、戦ったところ信長は容易には落ちない。そればかりか、みずから林通勝の弟、林美作守の首をあげている。そして、いったん和睦するにいたる。

しかし、翌年、再び信行が謀反を企てる。この時、勝家はいち早く信長に通報している。裏切りである。はじめの謀反で信長の戦いにおける非凡さを知り、ただ者ではないと思ったのかもしれない。

この裏切り、つまり返り忠によって、以後勝家は織田家の宿老として家臣の上座を占めるようになったのである。この返り忠は信長にとってよほどありがたかったらしく、後年、彼が大身に

略系図

柴田義勝
勝家
勝豊　勝政
勝重　勝次
勝利　信勝　勝興　勝忠　行重　勝定

柴田氏は、名門足利一族であり、将軍を補佐して幕府の中枢となる管領を出していた斯波氏の支流にあたる。斯波氏は越前・尾張・遠江の3か国の守護も兼ねていたが、京都に常駐していたために、領地には守護代を派遣して治めさせるに留まっていた。その守護代にとって代わられる形で斯波氏は急速に没落していくのだが、尾張の守護代だった織田家の一族である信長に、勝家が仕えることになるのは皮肉である。

大出世するのも、この時の功績が評価されたものだという。

「甕割り柴田」の美しい終焉

以後、戦いのあるたびに、猛将の名を高めていく。有名な「甕割り柴田」などというニックネームがついたのもそうした過程においてである。

元亀元（一五七〇）年四月、朝倉攻めの最中に、信長の妹お市の嫁ぎ先浅井長政が謀反を起こした。退路を断たれた信長は苦戦しながらほうほうの体で京都に逃げ帰るしかなかった。この時、勝家はわずか四〇〇の兵で南近江の長光寺山、別名甕割山の長光寺山城に籠城した。寄手の六角義賢は「城中には井戸はない」との情報から水の手を断ち、落城を待った。ところが、使者が入ってみると城兵たちは、城内でふんだんに水をつかい、あろうことか行水までしている。使者は、これは長期戦になると判断して帰った。その直後、勝家は城内の水をすべて三つの甕に集めさせ、城兵にたっぷり飲ませてからこう言ったという。

「死後に水は不用」

そして、三つの甕をことごとく槍の石突きで砕き割って、一気に城外に撃って出、油断していた六角軍を撃ち破ったという……。

いかにも勝家らしいエピソードである。ところが、実際には長光寺山城のあたりは湿地帯であり、水の手を断ったところで効果はないという疑問が古くから出されていた。つまり、後の人々の創作だろうというのだ。

ではなぜ、そんな伝説が生まれたのか……。

この年の六月四日に野洲川で決戦があり、六角軍は完敗している。その当時、勝家も長光寺山城におり、完敗の印象と勝家のイメージが重なってそういう俗説が生まれたのではないかと考えられている。

しかし、いずれにしてもこのことは勝家の剛勇ぶりが広く人々に認識されていたことを物語っている。

北陸経営時には名実ともに織田家の筆頭家老として織田家臣団随一の立場を誇っている。これは秀吉とは比べものにならない地位であり、秀吉はこれにあやかり、柴田の「柴」の字と同じく尾張はえぬきの丹羽長秀の「羽」をとって、名を羽柴とあらためたといわれているほどである。

だが、勝家のこの地位も、天正十（一五八二）年六月の本能寺の変を境に急速に窮地に追いやられていく。山崎の合戦で秀吉に功をひとりじめにされ、不利な状況下での清洲会議では老獪な秀吉にじりじりと押され、翌天正十一年の賤ヶ岳の運命的な合戦に突入する。

賤ヶ岳の膠着状態から離脱して、岐阜城攻めに向かった秀吉の留守中をねらって深追いした佐久間盛政は、秀吉の大垣からの一三里の大返しをくらい大敗する。勝家は数度にわたって佐久間を制止したというが聞かなかったという。

越前・北ノ庄城に敗走し、宴のあと城に火を放って自刃。浅井長政が討死したあと、勝家と再婚した信長の妹お市も、勝家の投降のすすめを断り、今度は主とともに果てた。

〔生涯年表〕

- 1522年　尾張国愛知郡に生まれる。生誕不祥。初名権六
- 1556年　兄信長に謀反を起こした織田信行を支援をするが、失敗に終わる
- 1557年　再び謀反を起こそうとした信行を裏切り、信長に密告、以来信長の家臣となる
- 1570年　野州川の戦いで佐久間信盛とともに、六角義賢、義治父子を破る
- 1575年　信長が越前を平定した後、越前国主となる
- 1580年　佐久間盛政とともに加賀一向一揆を討伐する
- 1582年　上杉景勝方の魚津城主、中条景泰を破る／滝川一益とともに信長の三男信孝の擁立をもくろむが失敗
- 1583年　賤ヶ岳の戦いで秀吉軍に敗れる／北ノ庄城天守閣に火を放ち、自刃する

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
二〇回以上の合戦経験をもち、猛将ではあったが尾張の伝統的土着勢力の代表であり、終始、信長に臣従することに満足し、革新性は育たなかった。	伝統的武将の典型でもあり、他者が批判をさしはさみにくい正統性があった。当初、信行を裏切って信長に属したが、前の主の子を養育している。	完全に信長臣下であり、その経済は独立したものではあり得なかったが、あたえられた越前の経営は必ずしも首尾の良いものではなかった。	およそ政治には不向きである。一五八二年の清洲会議から翌年の賤ヶ岳にいたる転落的敗北は、武力以前に政治的先見性の欠如に起因している。	信長の宿老ゆえ戦力は完全に独立していないが「甕割り柴田」の異名の通り戦の強さ勇猛さは抜群。しかしそれが大局的流れを変えていないので減点。	戦いに対する読みと配慮は非常にきめこまかく、決して向こう見ずの勇将ではなく智将の誉れも高いが、それはいわゆる知性とは同一にはできない。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

秀吉に次いで高かった。尾張平定、美濃攻略など信長の発展をしっかりと支えた。信長の宿老であることに疑いをはさまない点でも貢献度第一である。しかし、義昭擁立後はもはや彼の仕事では不足。

貧農の倅から信長の後継者へ 信長の下で〝戦国〟を体現した男

貧しい農家の倅が出世バシゴを駆け上がり、生まれてちょうど50年後に天下をとった。その武将人生は、信長の下でじっと天下取りのトレーニングを積んでいたかのようだ。

羽柴秀吉

貧農から武士への道

戦国の世に忽然と現れ、天下取りに成功した秀吉には、後世にさまざまな創作がなされ、その出自や性格など俗説も入り乱れ、不明な点が多い。秀吉も信長に代わり天下を治める〝血の正統性〟を主張するため、自ら皇胤説や公家落胤説を流布しているほどだ。

しかし、後世の我々が秀吉に魅了されるのは、貧しい農民のせがれに生まれた秀吉の、見事な立身出世の物語である。

秀吉の出生地は尾張国・中中村（現名古屋市中村区）、生年月日は天文五（一五三六）年と六年という説があり、現在では後者のほうが有力視されている。父弥右衛門は当時、織田信秀の鉄砲足軽であり、すでに木下という苗字をもっていたという記述もあるが、弥右衛門の没した年が、種子島に鉄砲が伝来した天文十二（一五四三）年であるから、辻褄が合わない。

『甫庵太閤記』やルイス・フロイスの『日本史』が伝える、土豪や地侍といった有力な名主百姓ではなく、秀吉は貧しい零細農家のせがれであったことが、いまや定説である。

秀吉はその貧しさの故か、八歳のころには近くの光明寺に預けられている。その後、寺を飛び出し、東海道を東に下り、引馬（現浜松市）の地侍・松下加兵衛に仕えた。そして天文二十三（一五五四）年、秀吉が一八歳のとき、松下加兵衛のもとを去り、尾張に戻り、幼なじみの一若の口ききで信長に仕えるようになった。

『絵本太閤記』には、秀吉が寺を飛び出し、東海道を西に上る途中、矢作川の橋の上で尾張国蜂須賀村の土豪・蜂須賀小六に出会い仕えるようになったという、有名な一説がある。

しかし、実際には当時、矢作川には橋はかかっておらず、これも後世の創作らしい。

とはいっても、群雄割拠の時代、のちに信長の下に集う〝野武士〟たちが出会っていても、なんら不思議ではない時代だったのである。

略系図

秀吉の父、木下弥右衛門が百姓であることは疑いないが、どんな百姓だったかについては意見が分かれる。当時の百姓は、有力百姓である土豪と大多数を占める平百姓とに分かれるが、これを明確に分けるのは、土豪だけが名字をもっていたことである。弥右衛門に木下という名字があれば土豪だったわけだが、今日では藤吉郎の代になってから使われたことが明らかになっている。各種史料から判断する限り、弥右衛門は自作農でありながら有力農民の小作もする貧しい農民だったとみるべきだろう。

上洛で先輩家臣と肩を並べる

一介の小人（走り使いなどの雑用係）として信長に仕え、その後、小人頭、足軽、足軽組頭、足軽大将……と、秀吉はめきめきと頭角をあらわす。

ちなみに永禄四（一五六一）年、秀吉二五歳のときに、お禰（当時一四歳）と結婚している。お禰の実家が播州龍野の木下氏の出であったことから、ちょうど武士の身分になった秀吉が、「木下」という苗字を使い始めたともいわれる。

そして秀吉が、丹羽長秀、佐久間信盛といった信長の重臣たちと肩を並べるのが、永禄十一（一五六八）年、信長の天下統一の第一歩、足利義昭を擁して信長が上洛した際である。

この時秀吉は、先の二人や明智光秀、村井貞勝とともに、複数の京都奉行のひとりに信長から命ぜられているのだ。

もちろんこれは前年まで続いた美濃攻略をはじめとする、信長の天下統一プロセスでの働きを評価されたもので、なかでも有名なのは永禄九（一五六六）年、斎藤龍興を破る拠点となった墨俣城築城である。

信長は、義理の父・斎藤道三を殺した義龍の子の龍興を攻める大義名分はあったのだが、信長の小牧山城からは木曽川を渡らなければ、攻められない。その木曽川渡りの拠点となるのが、墨俣城なのである。

しかし、城を構築しようとするたびに、斎藤勢に攻められ途中で壊されてしまう。

この時秀吉は自ら信長に申し出て、蜂須賀小六をはじめ野武士一二〇〇人を率い、一夜にして墨俣の砦を築いたといわれている。

しかし、これは誰でも知っている有名なエピソードだが、実際には一夜で築城できるはずもなく、歴史的に果たして墨俣城が存在したのかどうかも疑わしい点がある。

これも後世に創作された〝秀吉伝説〟の一つと考えたほうがいいのかもしれない。

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
5	4	3.5	4	4	1
その精神においても、活動においても信長配下随一の革新家。信長のやり方についてゆける唯一の存在。命令違反も時には許されるほどだった。	人へのとりいり方には苦労人秀吉、天性の才があった。決して柴田タイプの人望を集めたわけではなかったが、一種の対人関係能力が人を集めた。	信長臣下当時は、その枠を超えるものではなかったが、少年期の銭一千貫をもっての旅立ちといい、後年の政治といい、経済「感覚」は抜群だった。	極めて高かった。しかしそれが〝政治力〟という言葉にふさわしいものであるかどうかはわからない。巧妙かつ横暴極まる人心操作術というべきか。	備中高松城からの大返しといい賤ヶ岳への大返しといい、大軍を率いての行動は抜群。大軍の使い方が卓越している。しかし、晩年はそれで失敗する。	いわゆる「知性」というものは、ない。強固な生活哲学はもっていたろうが、それは「知性」という言葉にはなじまない。むしろ「知性」虐待の権化である。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

「墨俣築城」・「越前攻め殿軍」をはじめ上洛後の京都経営から中国攻略まで、ナンバーワンの貢献をした。そのわりには、山崎合戦までの待遇が不当だった。本来なら柴田との差はもっと大きいかも。

長浜城主から後継者へ急浮上

元亀元（一五七〇）年、秀吉は信長の朝倉義景征伐を目的とする越前攻めで、大きな武功を上げている。まず秀吉は、敦賀の手筒山城を落城させ、続いて金ヶ崎城を攻め、城主朝倉景恒に開城させている。しかしここで信長は、浅井長政の裏切りを知り、窮地に追い込まれる。この時、京都に急いで引き返す信長軍のしんがりをつとめ、朝倉勢の追撃を食い止めたのが、秀吉だった。

「金ヶ崎の退き口」と呼ばれるこの見事な手柄で、信長の秀吉に対する株がまた一段と上がったのである。

同年六月の姉川の戦い後、秀吉は信長から姉川近くの横山城を任されている。またその直後、浅井長政の小谷城攻めの責任者にも抜擢され、信長の信任が厚くなったことがわかる。

そして天正元（一五七三）年、浅井氏が滅びると、信長からその旧領北近江三郡（伊香・東浅井・坂田郡）と小谷城を恩賞として与えられている。

この地方の石高は一二万石で、秀吉がはじめて一国一城の主となったのが、この時だ。居城を今浜に移し、名を長浜と変え、本拠地としたわけだ。

ちなみにこの年の秀吉の書状に、はじめて「羽柴藤吉郎」と署名したものが見られる。「羽柴」は当然のことながら、柴田勝家、丹羽長秀から一文字ずつもらい、命名したものであった。

その後、秀吉は信長の命で姫路城を拠点に中国地方の攻略に力を注ぐ。

秀吉が本能寺の変の知らせを聞いたのは、備中高松城の水攻めの最中だった。毛利方との講和を素早くまとめた秀吉は、畿内にとって返し、山崎の戦いで光秀を破るのである。

光秀を討ったことで秀吉は、柴田勝家や丹羽長秀、徳川家康といった実力者を排して、信長後継者の最有力候補として急浮上したわけだ。

〔生涯年表〕

- 1537年　尾張国・中中村に生まれる。父弥右衛門は貧しい農民であった
- 1545年　光明寺に入る
- 1552年　松下加兵衛に仕える
- 1554年　信長の小人として仕える
- 1561年　お禰と結婚。木下の姓を名乗る
- 1568年　信長に京都奉行を命じられる
- 1570年　信長から横山城を任される
- 1573年　信長から浅井氏の旧領と小谷城を与えられる
- 1577年　信長から中国攻略を命じられる
- 1581年　鳥取城の戦いで毛利方の吉川経家を破る
- 1582年　山崎の戦いで明智光秀を破る
- 1583年　賤ケ岳の戦いで柴田勝家を破る
- 1585年　豊臣の姓を賜わる
- 1587年　九州征伐
- 1590年　小田原征伐により天下を統一
- 1592年　第1回朝鮮出兵（文禄の役）
- 1597年　第2回朝鮮出兵（慶長の役）
- 1598年　病死。62歳

名将列伝 FILE No.3 Akechi Mitsuhide 家臣→謀反

信長と義昭に仕えた"両属"武将の限界だったのか?

**「おのれがどこで骨を折ったというのだ」
信長に頭を打ち据えられた、出世頭・光秀。
そしてついに、その色白の貴公子が信長を討った!
積年の恨みか、両属の果てか——。**

略系図

源頼光 — 頼重(明智) — 頼篤 — 国篤 — 頼秋
頼秀 — 頼弘 — 頼定 — 頼尚
頼典 — 光国 — 光秀 — 光慶
女(織田信澄室)　女(細川忠興室)　女(筒井定次室)

永禄11(1568)年以前の光秀の軌跡についてはナゾが多く、父親の名前一つを例にとってみても光国、光綱、光隆と諸説がある。光秀は美濃の出身といわれているが、それは源氏の流れをくむ美濃国の守護土岐氏の一族が、現在の岐阜県可児郡可児町に明智荘を領して明智を名乗ったためで、ここには明智氏累代の居城址もある。源頼光から7代のちの土岐光行から4代目の頼基のとき、その子頼重が明地彦十郎を称したのが明智姓の最初とされる。

光秀の名族意識

光秀の出自は定かではない。『明智軍記』には「土岐(とき)氏の支流、明智頼兼の末、明智城主明智光安の甥」といった内容になっており、これが広まっている。しかし、諸説多くあり、ほとんどなんの脈絡も感じられない。共通しているのは土岐氏の末であるという点だけである。だが明智城址は実在する。

事実とすれば、名門土岐源氏の血を引いているなかなかのお坊っちゃんということになる。少なくとも、織田荘の荘官の末裔(まつえい)、織田定敏(さだとし)の末のまた末といわれ、当初藤原を名乗り後に平を名乗った信長よりはずっと由緒は正しそうである。

光秀の肖像画を見てもそれはいえる。

明智光秀

色白の貴公子然とした風貌には血みどろの権力抗争のイメージはまったくない。

光秀が信長に属したといわれる永禄(えいろく)十一(一五六八)年当時、光秀は一乗谷の朝倉義景(よしかげ)のもとに身を寄せていた。そして、細川藤孝(ふじたか)(幽斎(ゆうさい))のなかだちで当時、義景に庇護されていた足利義昭(よしあき)の直臣(じきしん)となっている。朝倉文化、細川藤孝との交流、義昭の近臣、これだけでも本人の名門意識を満足させるには十分だ。

信長に出会った際も光秀はおそらくその立場を売り物にしただろう。単なる武辺者(ぶへんもの)ではない素養とキレのよさ。尾張を平定し桶狭間(おけはざま)で勝ち、天下を強く意識しはじめた信長にとっても、それは都合のよいことだった。

つまり、光秀は使える男だった。信長三五歳。勇猛一途の"返り忠(かえりちゅう)"の宿老柴田勝家、四七歳。美濃攻略に際し墨俣(すのまた)築城、誘降工作で頭角をあらわした強靭な上昇志向の持ち主秀吉は、ちょっと弟分の三二歳。そして、物知りの名門出身(を標榜していた)光秀は少し年長の三九歳。剛の者と働き者そして名門の能才……これは野心ある男にとっては実に強力な持ち駒といえる。

事実、光秀は、義昭との折衝には万事そつなく対応したらしい。そればかりか義昭を擁するもののいっこうに具体的な動きを起こそうとしない朝倉義景を見限るようにすすめたのも光秀だったといわれている。「今は織田だ」という状況判断は光秀自身の処世判断でもあったろう。

旧権威の破壊者のように思われている信長だが、それは後の結果論であり、尾張平定などに際しても旧来の本領意識に凝り固まったおびただしい数の小領主勢力の家臣化には、周到な配慮を巡らせている。領内に入りこんでいるわずかな寺社領に対しても「そちらはウチには関係ないので……」などといった文書を発給しているほどだ。

そうしたスジの通し方をする信長が、名族意識をもったインテリ光秀の使い道を意識していないはずはない。伝統的将軍との微妙な機微を要する対応に、能吏としての光秀にかけた期待は小さくないだろう。少なくとも、それは秀吉の仕事ではない。

一方、光秀もそれによく応えた。名族意識の持ち主にとって、貴種との行き来は何よりも名誉なことだったろう。少なくとも、純粋な意味での信長の配下としての自身よりも、将軍との連携で動く自身のほうがここちよかったかもしれない。名族意識とはそんなものである。

京都の政治にも関与し、すでに永禄十二(一五六九)年には木下藤吉郎らと連名で地方の幕府の奉行人(ぶぎょうにん)にあてて義昭の下知を伝えている。それからわずか二年後の元亀二(一五七一)年九月には近江・滋賀郡を与えられ坂本城の築城に着手している。これは、信長軍団の中で、城持ちとなった第一号としても注目される。

築城しながら近江・河内戦を戦いぬき、武将としての活躍も人後に落ちない。一方、天正(てんしょう)元(一五七三)年には竣工した坂本城で連歌会を催すなど、戦国の大武将らしい生活がはじまっている。以後ずっと坂本城を居城とする。秀吉の出世ぶりがよく取り沙汰されるが、秀吉が長浜城主となるのはこの一年半後であり、スピードそのものは光秀のほうが速いのである。

〔生涯年表〕

年	事項
1528年	生誕とされているが定かではない
1566年	足利義昭の直臣として仕える
1568年	信長に仕える 京都奉行の要職に就く
1569年	義昭を本国寺に囲んだ三好三人衆を撃退
1571年	信長より宇佐山城を与えられる 坂本城の築城に着手
1572年	坂本城完成する
1573年	信長より丹羽、丹後の平定を命ぜられる
1576年	石山本願寺攻めに従軍
1577年	滝川一益とともに雑賀党を攻める
1578年	信長に従い、伊丹城の荒木村重を攻める
1579年	八上城の戦いで波多野秀治を破る 丹羽、丹後を平定する
1582年	本能寺の信長を攻める。信長自刃 近江、美農を平定する 山崎の戦いで、秀吉と信秀の軍に敗れる 敗走中、土民に襲われ死亡する

信長あっての光秀だったが……

当然、この段階で義昭との決別が行われ、反信長の態度をあらわした義昭勢力とはハッキリ敵対している。

当時の光秀の信長・義昭に対する両属性がよくいわれるが、それこそ光秀の立場とメンタリティを象徴しているのだ。

要するに光秀は、信長の力あっての光秀であったはずだが、どうもそういう自己認識はあまり得意でなかったらしいことは想像に難くない。

極論すれば、もともと尾張の守護代の庶流の成り上がりなどは自分が臣下の礼をとるべき相手ではない、とすら思っていたかもしれない。

信長がそういう男をかわいいと思うわけはなく、嫌いですらあったかもしれない。

だとすれば、のちに武田勝頼(かつより)攻めが一段落して、光秀が「これで我々も長年骨を折ってきた甲斐があるというものだ」などと同僚と喜びあっているのが、信長の逆鱗(げきりん)にふれ「おのれがどこで骨を折ったというのだ」と襟首をつかんで頭を打ちすえたという、有名かつ異様な信長の反応にもうなずけるものがある。

天正三(一五七五)年惟任日向守(これとうひゅうがのかみ)の名前を朝廷より授かる。もちろん信長の推挙である。それだけ信任が篤かった。つまり使える人材だとは思われていたのだ。

以降、本能寺の変まで丹波攻略を中心に、数年にわたって武将としての精力的な活動が続く。

その間に女(むすめ)の玉が細川忠興(ただおき)に嫁している。有名な細川ガラシャ夫人である。

本能寺の変の一一日後、天正十(一五八二)年六月十三日、山崎の戦いに敗れ、坂本に向かう途中で土民に襲われ自殺。

同十五日、首を本能寺に梟(さら)される。

〔名将度〕・5段階評価

	革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
評価	3	2.5	2	2	2	5
評	ない。というといかにもパターン的だが、光秀の上昇志向は旧来の文化を求めている。その自己実現のための努力には非凡な能力をふるうのだが。	だれとでも親しむ、というタイプではない。しかし細川藤孝や紹巴との交流にみられるようにとことんつきあう場合もある。政治家向きではない。	もともと流浪(らしい)の武士である。しかも、出のよさを標榜している。夢はあったろうが経済の力によるゴリ押しは似合わないしその蓄えもない。	光秀の優れた交渉力、プロデュース力を「政治力」といってよいかどうか。信長・義昭との間にはいった目覚ましい手腕も、能吏のそれに近い。	丹波・丹後攻略、石山本願寺攻め、雑賀攻めなど武将としての仕事もめざましい。無視するべきではない。だがそれは、勝ちを得たというにとどまる。	およそ伝統への傾斜は知性のなせるわざである。現実に対しかなり合理主義的でもあった光秀と伝統への憧れは矛盾するものではない。知性随一。

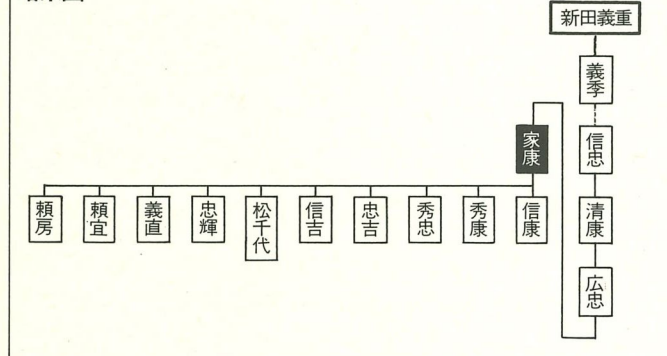
〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

抜群の貢献者である。光秀なくて京都の懐柔と諸政策が可能だったか疑問。秀吉の貢献度と一、二を争う。信長の本能寺の変直前をその人生のピークとすれば貢献度最大級。しかしその抹殺で、ゼロ。

"戦国"に翻弄された小大名が乱世に終焉を告げた

東に今川義元、西に織田信秀といった列強にはさまれた三河国松平家の長男・竹千代(家康)は、生母との離別、人質ぐらしと、幼いときから苦難の道を歩んだ。第三の男・家康のサクセス・ストーリーも信長との出会いから始まる。

徳川家康

今川氏の後ろ楯で育つ

三河国の小大名松平広忠の長男として生まれた家康は、幼名を竹千代といった。母は尾張国刈谷城主水野忠政の女、於大であるが、三歳の時に離別している。

家康が生まれた当時、松平氏を取り巻く政治的環境には厳しいものがあった。東に今川義元、西に織田信秀という強豪大名がいて、広忠自身も天文四(一五三五)年一〇歳の時には一時伊勢(三重県)に亡命したほどだった。

二年後、今川氏の援助で広忠は岡崎に戻るが、それからは今川氏について織田氏との抗争をくり返すようになる。信秀に通じた水野忠政の女をめとったのも、忠政と一時的な和睦を結ぶためのものだ。

ところが、竹千代が生まれた翌年の天文十二(一五四三)年、忠政が死んで長男の信元が継ぐと、信元は織田信秀に内通した。今川氏との関係が悪化するのをおそれた広忠は信元と絶交し、その妹である妻の於大を離縁した。こうして竹千代は、わずか三歳で生母と別れることになるのである。

織田氏の力はそれからさらに強いものとなり、広忠はいっそう今川氏の強い後ろ楯を必要とするようになる。義元はそれを認める代わりに六歳の竹千代を人質として要求したが、送られる途中で奪われて尾張に連れ去られてしまう。竹千代を織田信秀に引きわたしたのは、ほかならぬ義理の祖父にあたる田原城主戸田康光だった。このあたりにも一族がおかれた複雑な状況が見受けられる。

二年間、織田信秀の人質となっていた竹千代は、天文十八(一五四九)年の安城城の戦いで今川側に捕らえられた信秀の長男信広と人質交換される。そして、今川義元の本拠地である駿府に送られて永禄三(一五六〇)年までの一二年間をここで暮らす。

これまで、この一二年間は単なる人質と考えられていたが、最近では、義元が自分の右腕になるような武将として育てようとしていたとする説が有力になりつつある。

江戸時代にできた徳川系図によれば新田義重を祖とするとされるが、それが疑わしいことはもはや通説である。たしかな始祖としては親氏が最初で、三代信光のときに勢力を拡大し、その後、松平の支族は一四家にもなっている。三河の統一直後、家康は本姓である徳川氏に戻すが、はっきり新田氏の子孫であると宣言するのは、慶長八年に征夷大将軍に任ぜられたときで、これは将軍となるために清和源氏である必要があったためである。

信長の死まで続く清須同盟

それを裏付けるように、駿府にいた間に家康は元服をすませ、義元から「元」の一字を与えられて元信(のちに元康)と称している。しかも、義元の姪をめとるなど、単なる人質ではなかったことがわかる。

初陣も義元のもとにいた時で、信長に通じた三河寺部城主の鈴木重教を攻め、追撃する織田勢を破っている。永禄三年の桶狭間の戦いでも今川軍の先鋒として活躍するが、義元が討ち死にしたあと弔いの兵をあげようとしない今川氏真とは縁を切り、織田信長と同盟を結んでいる。

これが清須同盟で、数十年来続いてきた松平氏の外交政策を一八〇度転換させるものであり、同盟は信長が本能寺の変に倒れるまで実行された。

永禄六(一五六三)年にそれまでの松平から徳川に改姓した家康は、翌年には三河の一向一揆を鎮圧して三河一国を統一し、ようやく統治に専念できるようになった。

元亀三(一五七二)年十二月の三方ヶ原の戦いでは、織田・徳川連合軍は武田勢の前に壊滅状態となるが、家康は浜松に逃れ、信玄の急病で危機を脱することができた。信玄亡きあとの天正三(一五七五)年には、長篠で信長と連合して武田勝頼を破っている。

しかし、信長との関係がすべて順調にいったというわけではなかった。信長の女、徳姫と結婚した長男信康が、武田に内通したという嫌疑をかけられて正室築山殿ともども殺さなくてはならなかったこともあった。

待ちに待って天下を手に入れる

本能寺の変で明智光秀を討つ機会を逸した家康は、光秀を討って信長の後継者として台頭してきた秀吉の下にならざるをえなかった。

しかし、信長の死で主のいなくなった甲斐・信濃に兵を進めたことで、駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の五か国を支配する大名となり、秀吉に次ぐ地位を確保することに成功している。

秀吉に対抗するため織田信雄と同盟を結んだ家康は、小牧・長久手の戦いではその秀吉と戦っているが、当の信雄が秀吉と和解してしまったために、戦の大義名分を失って講和している。

そして二男秀康を秀吉に人質として養子に出し、また秀吉も佐治日向守に嫁いでいた妹朝日姫を離縁させ、築山殿の死後、正室がいなかった家康のもとに嫁がせている。

対等の立場をとろうとした家康だったが、上洛したことで結局は秀吉に対して臣従の礼をとるかたちになってしまったのである。

〔生涯年表〕

年	出来事
1542年	松平広忠の嫡子として生まれる。幼名竹千代
1555年	元服、次郎三郎元信を称する
1557年	元康と改名
1558年	三州寺部城攻めが初陣となる
1561年	織田信長と条約を結ぶ
1564年	一向一揆を平定。三河を統一する
	家康と改名
1567年	長子信康、信長の娘と結婚
1569年	掛川城の戦いで、今川氏真を攻める
1570年	姉川の戦いで、信長とともに浅井、朝倉を破る
1572年	武田信玄と三方ヶ原で戦うが、大敗する
1575年	信長とともに長篠の戦いで武田勝頼を破る
1579年	長子信康自殺する
1581年	高天神城を攻め落とす
1584年	織田信雄とともに、羽柴秀吉と小牧と長久手で戦う
1600年	関ヶ原の戦いで石田三成を破る
1603年	征夷大将軍となる
1614年	大坂冬の陣で豊臣秀頼と戦う
1615年	大坂夏の陣で豊臣秀頼を破る。豊臣氏滅亡
1616年	病死。75歳

天正十八(一五九〇)年の小田原征伐で先鋒をつとめた家康は、その功績によって北条氏の所領を与えられて江戸城に居城を定めている。

慶長三(一五九八)年、秀吉は家康に秀頼のことを頼みながら死んでいくが、次第に家康と秀頼派の石田三成らとの対立は決定的となり、慶長五(一六〇〇)年の関ヶ原の戦いへと突入していく。

この戦いに大勝した家康は、三年後の慶長八年に征夷大将軍に任ぜられ、さらに慶長十九(一六一四)年から翌年にかけて行われた大坂冬の陣・夏の陣で秀頼を倒し、対抗勢力を一掃したことで政権を強固なものにしている。これを見届けた家康は、翌年の元和二(一六一六)年、駿府城で没した。七五歳であった。

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
一般的なイメージでは革新性というよりも強固な保守的努力の権化のように思われるが、戦い方などではかなり大胆なことをやっている。	一族、家臣らへの配慮をみても、厚い人望が得られていい家康だが、若年時に少し苦労をしすぎた。それが大向こうの人望をあつめることにブレーキを。	肥沃とはいえ、三河の経営には苦慮している。なんといっても今川の強大な圧力をもろにうけて、伸びるべき経済力を当初、育てられなかった。	今川の人質生活、信長との同盟関係、いずれも微妙な人間関係のなかで苦労しそのなかで生きる知恵を育ててきた。政治力というものの源泉である。	弱い軍隊である。地盤の三河の維持もおぼつかない。しかし姉川で殿軍をかってでたり、関ヶ原で小早川に鉄砲を撃ち込んだり時々大胆なことをする。	苦労人の哲学。それを知性と呼べるかどうか。まじめに勉強しても知性への昇華は苦労が妨げている。「人生は…」の名文は他人の作ともいわれる。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

相当大きかった。初期に今川勢として反抗した時期もあったが、その後は同盟者として希有な立場を貫く。武田の防塁としての役割や、姉川の戦での活躍などで、初期の借りは返している。

信長の実力を見抜いた男が息子に首をとられるまで

油売りから武将に……
“希代の転職家”も実は後世の脚色だったらしい。
しかし、息子・義龍に殺されるまでの武将としての半生は
幾多の豪傑のなかでも、誰にも負けないドラマ性がある。

斎藤道三

「隣には嫌なる人にて候よ」

美濃の斎藤道三は戦国の梟雄として名高いが、信長の時代を中心に考えると、大きな関わりをもつ印象がある反面、いまひとつ関連性が薄い。その原因のひとつが道三と信長の世代のズレであることはいうまでもない。

道三が死んだ弘治二(一五五六)年といえば、信長がそれまで尾張下四郡の守護代だった主家筋の織田信友を倒して清須に入った翌年のことである。桶狭間はもちろんのこと、尾張の平定も果たしていない。柴田勝家らに擁された弟・信行の謀反に煩わされていたころのことである。

信長が清須に入る前年の天文二十三(一五五四)年今川義元は自ら兵を率いて岡崎に布陣し、尾張・小川城を攻めるべく村木に砦を築いた。小川城からの報せを受けると信長は、留守になる那古野を舅の道三に頼み、暴風の中を熱田から舟で小川城に向かい、一気に村木を急襲した。村木を落とすと近隣の今川勢に与した寺本城に火を放ったうえで速やかに那古野に引き上げ、道三の手の者に留守中の礼を述べた。いわば六年後の桶狭間奇襲の予行演習のようなことをやっている。

舅の道三はこの様子を聞き「すさまじき男、隣には嫌な人にて候よ」と評したという。道三が後年の信長を知ったら、いったいどんなふうに評しただろうか。

若年の信長に対する道三の評価には他のものにない鋭さがある。義龍との戦いで死ぬ前日にしたためた遺言状には美濃を信長に任せろ、と第一番に書いてあるほどだ。

下克上を絵に描いたような道三の場合、はっきりしているのはそれよりあとの世代だけで、父親はもとより本人にしてもわからないことが多い。出自や経歴については、従来の説と最近になって唱えられた新説があり、修行僧から戦国大名までの軌跡を道三一人によるものとみるか、道三とその父親との二代がかりで成し遂げたものとみるかに違いがある。いずれも長井家の名跡を奪ったのちに斎藤姓を名乗っている。

略系図

藤原魚名
宗景
宗長
景頼
親頼
頼茂
利永
利藤
利国
利親
利良
秀龍（道三）
義龍
龍元
龍之
女（織田信長室）

“希代の転職家”道三の真実

その道三にしたところで、凄まじさにかけては定評がある。通説ではこうなっている。

京都・西岡の武士松波左近将監基宗の子として生まれる。幼名・峯丸。一一歳で京都・妙覚寺に入る。法蓮房と名乗る。寺を出て、油商人・奈良屋又兵衛の娘婿となる。山崎屋庄五郎と改名し、油を売り大いに繁盛。美濃で妙覚寺時代の同僚・南陽房(守護土岐氏の重臣・長井豊後守利隆の弟)と再会する。利隆の口ききで、守護の土岐盛頼の弟・頼芸に仕える。

ここで武士として人生の再スタートをきるが、持ち前の弁舌で頼芸のおぼえもめでたかった。

頼芸の勧めで重臣西村氏の名跡を継ぎ西村勘九郎正利と改名、知行地をもつ。頼芸に兄盛頼への謀反を勧める。大永七(一五二七)年、クーデター成功、頼芸、守護になる。頼芸の重臣・長井長張を殺し名跡を奪い長井新九郎正利と名乗る。土岐家随一の実力者になり斎藤山城守秀龍と名乗り道三と号す。そして、天文十一(一五四二)年頼芸を追放し、美濃を手中にする……。

見事というか波瀾万丈というかあきれた経歴であり、とても一人の人間の業とは思えない。

と、早くから疑うべきだったのかもしれない。昭和三十九年からはじまった『岐阜県史』編纂の過程で一通の古文書が発見され、新説が出たのである。

〔名将度〕・5段階評価

	革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
評価 (0〜5)	4	1	3	2.5	3	2.5
評	「まむし」ののし上がりかたを「革新」と呼べるかどうかわからない。単なる乗っ取りを思わせる新説も出た。しかし、信長への評価は最も正しかった。	浪自体が否定されつつある。人望とは無縁。	ら毎年米を届けたという美談も残っているが、放 ない。放浪時代に世話になった家に、出世してか	出世物語を考えれば、金儲けのうまさなど常人を超えた能力を感じるが、それが事実でも、美濃の経済力とイコール。特筆するほどのものではない。	道三の栄達(?)は政治力というような範疇のものではない。まさに徹底した乗っ取りであり、しかも大きな野心は信長に期待するほかなかった。	義龍と戦った長良川の戦いでは二七〇〇しか集まらなかった。義龍は一万七〇〇〇。落ち目になってからの戦だが、それにしても戦力とは言いがたい。 いかに戦国時代であっても道三の生き方に「知性」を求めるのは無理だろう。坊主だったのなら多少の可能性はあるが今はそれも否定されてしまった。

〔信長への貢献度〕

−5 ―― 0 ―― +10（0の位置まで）

信長の那古野時代には、今川急襲の応戦に向かった信長の留守を守るなど良好な同盟関係が保たれた。美濃を信長に託すという遺言も武将としては希有な遺言だ。しかしその程度の貢献にとどまる。

二人でひとり分の道三の履歴!?

発見された古文書は永禄三(一五六〇)年、六角承禎が家臣たちに与えた条書の写しで、その中に道三の履歴が含まれていた。それによると、

京都・妙覚寺の僧、美濃に下る。還俗して西村と名乗る。長井弥二郎という武士に奉公して頭角をあらわす。主人の姓長井を名乗り長井新左衛門尉と称する……これが一代目。

新左衛門が死んだあと、その嫡子は左近大夫の官職につき、長井氏の惣領家を殺して諸職を奪い、斎藤を名乗る。これが道三だというのである。

その後の経歴は従来と同じだが、要するに道三は実力者であっても、まるで芝居のように波瀾万丈の転職を続けてきたのではないらしい。残念ではあるが、六角承禎の姉は道三が仕え、かつ追放した土岐頼芸の正室なので、信憑性は高いという。

道三と信長に年齢的なズレがあるにもかかわらずつねに信長史に欠かせないのは、道三の女・濃姫が信長に嫁いだことのほか、信長にとって重要なテーマであった美濃が道三・義龍・龍興の三代によって支配されてきたからに違いない。イメージが強烈だったため道三には履歴も含めて三代分の雑多な事柄が付加されて、戦国美濃の代表者として象徴的に扱われてきたのかもしれない。ところが三代とはいっても、真相は不明というしかないが、義龍は土岐頼芸から与えられた妾・深芳野の産んだ子で、これは頼芸の子だったという。道三は次男以下をかわいがり、廃嫡をおそれた義龍がこれを殺し、道三と敵対した。

そして、終末は、実に寂しいものだった。前半の経歴が自身のものでないとすれば、末期を美化しようにも困難なのである。

弘治二(一五五六)年四月十八日、鷺山城に陣する道三は義龍の稲葉山城をめざして二七〇〇の兵を進めた。一方、義龍も稲葉山城を出て、長良川をはさんで道三軍と対峙した。この時、義龍の陣営には一万七〇〇〇の軍勢が集まった。兵の数があまりにも違いすぎるが、道三側には信長が援軍として到着する手はずになっていたという。ところが、木曽川の増水によって信長からの援軍が到着しないうちに戦闘がはじまってしまい、義龍が圧勝した。道三は首を斬られたうえ鼻までそがれたという。

義龍の落胤説が事実だとすれば、先の履歴に関する新説などとも関連して「梟雄」というイメージにも多少違った味が加わり、新しい道三像が生み出される可能性がある。

〔生涯年表〕

- 1494年　山城国乙訓郡の武士、松波左近将監基宗の長男として生まれる。幼名峯丸
- 1505年　妙覚寺に入り、法蓮房と名乗る(?)
- ?　油商人、奈良屋又兵衛の女と結婚(?)
- ?　稲葉山城主長井長弘の家臣となる(?)
- ?　土岐頼芸の家臣となる(?)
- ?　西村勘九郎正利と名乗る(?)
- 1527年　頼芸に兄、盛頼を越前に追わせる
- 1530年　長井長弘を謀殺。長井新九郎正利を名乗る
- 1538年　斎藤秀龍を名乗る
- 1542年　頼芸を放逐、美濃を収める
- 1544年　稲葉山城を攻めてきた織田信秀を撃退
- 1547年　加納口にて織田信秀と戦う
- 1548年　信秀と和睦。娘の濃姫を信長に嫁がせる
- 1553年　信長と会見
- 1556年　長良川の戦いで長男義龍と戦い敗死。62歳

名将列伝 FILE No.6 Imagawa Yoshimoto 敵対

守護大名の名家出身 名門意識に足をすくわれる!?

**いまや皮肉にも今川義元の名は
信長の最初の武勲、桶狭間での奇襲の"被害者"として広く知られている。
しかし、今川家は当時、遠江、駿河、三河を治めた大大名である。
足利家の流れをくむエリート意識が、乱世への適応を遅らせたのか？**

今川義元

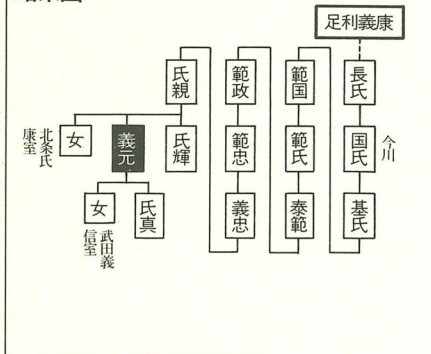
足利氏の流れをくむ守護大名

守護大名が次々と没落し、戦国大名にとって代わられていた時代にあって、名門足利氏の流れをくむ今川氏の存在は異彩を放っていた。

一般に義元は遠江、駿河国の守護今川氏親の三男とされているが、上には氏輝、彦五郎、玄広恵探、象耳泉奘と計四人の兄がいるので五男と考えるべきだろう。生母は氏親の正室である中御門宣胤の女、寿桂尼である。

長男の氏輝を後継者に定めた父の氏親は、二男の彦五郎を除いて三男と四男は寺に、義元の弟にあたる氏豊は尾張今川氏に養子に出していた。寺に入れたのは、兄弟による家督争いを未然に防ぎ、子供たちに学問を身につけさせるためだった。

義元は五男だったわけだが、正室を母に持つために、父の氏親は京都の建仁寺で修行していた九条承菊（太原崇孚、雪斎）を呼び寄せて教育係に任じている。

義元は幼名を芳菊丸（方菊丸ともいう）といった。大永二（一五二二）年、四歳の時、雪斎に伴われ富士郡の善得寺の門をくぐっている。享禄三（一五三〇）年に得度した芳菊丸は、名を梅岳承芳とあらためて喝食となった。喝食とは、禅寺において食事の支度をしたり、その用意ができたことを知らせる少年僧のことである。

のち、雪斎に伴われて京に上った承芳は建仁寺で修行しているが、そのころには父はすでに亡く、長兄氏輝の代となっていた。

略系図

- 足利義康
- 今川：長氏 ― 国氏 ― 基氏 ― 範国 ― 範氏 ― 泰範 ― 範政 ― 範忠 ― 義忠 ― 氏親
- 氏親の子：氏輝、義元、女（北条氏康室）
- 義元の子：氏真、女（武田義信室）

系図の売り買いが横行した戦国時代にあって、これほど出自のはっきりしている例は珍しい。名門足利氏の出であり、守護大名から戦国大名となった今川氏ならではだろう。系図を詐称してでも、源平いずれかの血を引くと称することで正統性を主張しようとした他の大名たちとは対照的だ。今川を名乗るようになったのは吉良長氏の子、国氏が最初である。義元はその国氏から二代のちの、室町幕府の引付頭人の要職も務めた範国から数えて七代目にあたる。

「甲相駿三国同盟」で基盤を固める

天文四（一五三五）年、甲斐の武田信虎との関係が険悪になったため、承芳は急遽兄によって呼び戻された。かつて得度した善得寺に再び弟をおいて武田方へ目を光らせるためだった。

翌天文五年三月十七日、長男の氏輝と二男彦五郎が突然死亡する。同じ館にいた兄弟が同じ日に死ぬこと自体、不自然な出来事だった。

残った四人のうち、末子の氏豊はすでに養子に行っており、三男、四男、五男そのいずれが家督を相続するということになった。

四男の象耳泉奘は下りたが、残る二人は生母を異にしたこともあって争うことになった。恵探の母親は氏親の側室である福島氏であり、承芳のほうは、亡くなった長兄氏輝と同じく氏親の正室中御門氏だった。

当然のことながら中御門氏（寿桂尼）は実子である承芳を推し、さらに雪斎と連携してほとんどの家臣を味方につけることに成功した。追い詰められた恵探は駿河の花倉で挙兵するが、これを「花倉の乱」と呼ぶ。争いは弟側の勝利に終わり、家督を得た承芳は還俗して、以後義元と名乗った。

天文六（一五三七）年、甲斐の武田信虎の女をめとって甲斐同盟を結んだ義元は四年後、信玄が信虎を追放した時にこれを受け入れている。さらに三河の松平氏（徳川）からは竹千代（家康）を人質とする代わりに、織田家の攻勢に対して援助することを約すなど、有力大名らしい役割を果たしている。

義元の教育係だった雪斎は、義元から重く用いられて軍師として力を発揮したほか、外交においてもその手腕は高く評価されていた。その働きで武田信玄、北条氏康と「甲相駿三国同盟」を結んだ義元は、父氏親が制定した「今川仮名目録」に追加をしたほか、殖産興業や交通整備などの諸政策に成果を上げていた。

そうしたことも功を奏して今川氏は、駿河、遠江、三河の三か国に一〇〇万石を領有する有力大名へとのし上がったのである。かたや織田信長は、まだ尾張の統一も果たしておらず、石高二〇万石の青年領主にすぎなかった。

今川氏の没落のはじまり

永禄三（一五六〇）年五月、義元は二万五〇〇〇の大軍を率いて尾張へと侵攻した。この時の出陣は、信長を倒してその勢いで一気に上洛しようとしていたとするのが通説になっている。たしかにこの時点で義元は、諸大名の中でもっとも上洛への最短距離にあるといわれていた。武田と北条とは同盟を結んでおり、安心して駿河を留守にすることができた。京までの道中にも尾張の織田信長、美濃の斎藤義龍、近江の六角承禎がいるだけだった。

だが、田楽狭間で信長の奇襲を受けた義元はあっけない最期を遂げる。今川の大軍を迎え撃った織田勢はわずか二五〇〇にすぎなかったが、この日を想定していた信長は、自ら馬を走らせて予定戦場を確認して綿密な作戦を練っていた。さらに当日、にわか豪雨が降ったことも奇襲を容易にしていた。もっとも信長が、寡兵による奇襲で大軍にあたったのはこの一回だけで、二度と行われることはなかった。

義元が死んでも、今川氏の脅威がなくなったわけではなかった。しかし、義元の子氏真が尾張への侵攻をあっさりと放棄したことは、信長にとって天の助けだった。今川の脅威がなくなったところで、美濃の斎藤龍興との戦いと尾張の統一に専念できるようになり、またたく間に一〇〇石大名の仲間入りを果たすわけだ。

一方の今川氏は、桶狭間の戦いを境に急速にこれまでの力を失っていった。従来の外交方針をあらためて織田と同盟するようになった松平氏（徳川家康）をはじめ、連鎖反応のように家臣たちは今川の手を離れていった。

義元を継いだ氏真は、元々文学を好むような風流人で、彼が詠んだ歌として確認されているものだけでも一七〇〇首におよぶが、反面、大国を維持するだけの武将の力量はなかったのである。

桶狭間から九年後の永禄十二（一五六九）年、最後の居城となった遠江の掛川城を明け渡した今川氏は、戦国大名の座から去った。

〔生涯年表〕

年	出来事
1519年	遠江、駿河守護今川氏親の五男として生まれる。幼名芳菊丸
1522年	雪斎に伴われ、善得寺に入る
1530年	出家し、梅岳承芳と改名。喝食となる
1535年	兄氏輝に呼びもどされる
1536年	氏輝死去
	駿河の花倉で兄恵探を倒し家督を得る
	義元を名乗る
1537年	武田信虎の娘を娶り、甲駿同盟を結ぶ
1541年	追放された信虎を受け入れる
1548年	三河小豆坂で織田信秀を破る
1552年	義元の娘、信玄の長男・義信に嫁ぐ
1553年	『今川仮名目録』を追加、21か条を制定する
1554年	信長方の緒川・水野信元を攻める
	武田信玄、北条氏康と『甲相駿三国同盟』を結ぶ
1560年	尾張出兵の際、田楽狭間において、織田信長の奇襲を受け、戦死。41歳

〔名将度〕・5段階評価

項目	評価	評
知性	2	「知性」を感じさせる話は伝わらない。古の京都を思わせる歌や美術もコレクションの域をでない。それがあまり知性と関係のないことは現代と同様。
戦力	4	広大な領地ゆえに小さくなかった。併呑された武将たちがそのまま戦力になっていた。徳川家康もその一人である。が、それゆえに離散も早かった。
政治力	2	義元の勢力の根幹は「政治力」というにはすでに時代性を欠いていた。莫大な遺産の勢いで膨張していたわけで、足利将軍家とある種の共通項が。
経済力	5	ある。駿河、遠江、三河、そして、一時は尾張にまで勢力が及んでいた。肥沃な東海道をまるごとおさめていたわけで、当代屈指の経済力があった。
人望	2.5	ない。道三とは逆の意味で、人望を集める要素が欠けている。貴族趣味と、駿河・遠江守護、そして三河の併呑は人の離反のほうに作用した。
革新性	1	ない。足利一門の天下の名族である。今川家は南北朝期以来駿河に守護として君臨。守護大名として存在していること自体が珍しいことである。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10（−5）

もっとも貢献しなかった。上杉謙信も貢献していないが、今川義元の場合は、それに尾張への侵略が加わる。早い時期から尾張は侵され、信長の初陣も対今川戦である。織田家はそれに悩み続けた。

朝倉家との義理に散った？ 29歳の若武者

信長の妹・お市をめとり、上洛の際には、先鋒まで務めた長政が、朝倉との義理を重んじ、信長に刃を向ける。「虚説あるべし」――そのときから長政の破局への道が始まった。

浅井長政

仇敵を倒し長政を名乗る

浅井氏の名前が戦国の世に出てくるのは、大永三(一五二三)年の今浜城の戦いからであろう。

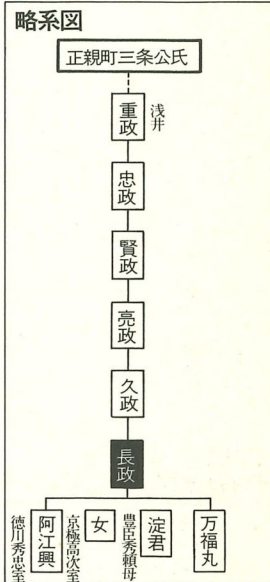
俗に国人一揆と呼ばれるこの戦いは、当時の北近江の守護大名、京極高清の相続人を巡ることから端を発している。守護代上坂信光は京極氏の二人の息子のうち、弟の高慶を推した。

常日ごろ、上坂信光に不満を抱く譜代家臣の、浅井亮政・三田村忠政、今井越前らは兄の高延を推し、浅見貞則の居城尾上城に集結、上坂軍と戦うことになる。

この戦いで、浅見貞則らは、上坂信光を尾張に追いやり、高延の守護擁立に成功する。

だが、その後、浅井亮政は浅見に対して不満を抱く者を巧みに操り、これを倒し、名実ともに北近江の実力者として君臨する。

略系図

正親町三条公氏 ― 重政(浅井) ― 忠政 ― 賢政 ― 亮政 ― 久政 ― 長政 ― 万福丸／淀君(豊臣秀頼母)／女(京極高次室)／阿江興(徳川秀忠室)

浅井氏は、近江国浅井郡（滋賀県東浅井郡）の豪族であるが、地名を姓につけるほどなので相当有力な豪族だったと考えられる。浅井姓を名乗ったのは重政が最初だが、歴史の表舞台に登場してくるのはそれより3代のちの、北近江の守護京極氏の被官だった亮政からである。亮政とその子の久政、さらにその子にあたる長政を「浅井三代」と呼んでいる。

それに対して亮政の子、久政は戦いにおいては亮政ほどではなかったが、政治的・行政的手腕に秀でたものがあった。そのころの南近江の守護六角氏に対して、低姿勢の態度をとりつつ、自分の領土を広げていった。

亮政の血を受け継いだのは長政であろう。

天文十四(一五四五)年長政は久政の嫡子として生まれる。幼名は猿夜叉と呼ばれていた。

永禄二(一五五九)年、元服した猿夜叉は賢政と名乗るようになる。これは当時の南近江守護六角義賢から一字を与えられたものである。また六角氏の重臣平井定武の女とも結婚している。

これらのことは浅井氏が、六角氏の傘下に入ることを意味している。

しかし賢政は、祖父の代からの仇敵の下に仕えるのが我慢ならなかったのであろう。

久政から家督を継ぐと、妻を平井氏に送り返し、名も賢政から長政に改めている。当然六角氏は怒り、永禄三(一五六〇)年、宇曾川をはさんでの戦いとなった。野良田表の戦いといわれるものである。この戦いで浅井氏は六角氏を打ち破り、北近江の大名としての地位を揺るぎないものとした。

義理堅さが"破滅"を呼び込む

永禄十年、ないし翌十一年早々、長政は信長の妹お市の方を正室として迎え入れている。六角氏の攻勢に備えようとする浅井氏と、美濃の斎藤氏攻略に備える信長の利害が一致しての政略結婚であった。

しかしお互いの利害もさることながら、信長は長政の人柄も気に入っていたらしい。一説によれば、賢政から長政に改名する時、信長の長をとったという。また、信長が上洛する際には先鋒をつとめた。

裏切り、謀反が当たり前の戦国時代にあって、義理堅い性格の長政は、信長にとって安心できる同盟主であったのであろう。

長政も信長の実力を認め、また信頼していた。

浅井の家臣、遠藤喜右衛門が、信長はのちのち浅井家に禍をもたらすであろうから、夜襲をかけ、信長を討ちとると進言したときも、だまし討ちは武士らしくないと拒否したという。

長政の義理堅さもさることながら、信長に対しての信頼の表れともとらえられるのではないだろうか。

だが、その信長も認める義理堅さが皮肉にも、浅井家滅亡につながってしまうのである。

越前の守護代朝倉義景に対して信長は、上洛を求めたが、義景はこれを拒否する。元亀元(一五七〇)年信長は三万の軍勢を率いて朝倉討伐に向かうことになる。

この情報は小谷城の長政にも入り、城内は騒然となった。朝倉氏は浅井亮政の時代から攻守同盟を結んでおり、亮政時代、何度か六角氏に攻められ、そのたび朝倉氏の来援を得ていて、いわば親類同様の関係であった。

重臣たちの意見は、攻守同盟を守るべきという意見と、あくまで中立を守るべしという意見とで真っ二つに分かれた。

義理の板ばさみになり、答えに窮する長政は、父久政から織田家と同盟を結ぶ際に、朝倉と事をかまえる時は事前に通告するという約束を破った織田家につくことはないとの忠告を受け、朝倉側につくことを決断する。

若武者の悲惨な死

越前に攻め入った信長のもとに、浅井氏謀反の報が届く。

退路を断たれるように浅井氏に裏切られた信長は、よほど信じられなかったのか、虚説あるべしと言ったそうである。

信長はわずか二〇〇人の兵に守られながら夜を徹して逃げ帰った。その時のしんがりをつとめたのが木下藤吉郎であった。

裏切られた信長の怒りは尋常ではなかったであろう。

岐阜に戻った信長はさっそく兵を整え、徳川の援軍六〇〇〇を加え、総勢三万四〇〇〇の軍勢を引き連れ浅井、朝倉討伐に向かう。一方浅井、朝倉軍も総勢一万八〇〇〇の軍勢で迎え撃ち、両軍は姉川をはさんで戦うことになるのである。

緒戦は浅井有利で展開したが、信長軍の圧倒的軍勢に次第に押され、浅井、朝倉軍は小谷城へ向けて落ちていった。

天正元(一五七三)年小谷城に籠城する長政に対して、信長は、総攻撃をしかけ、久政、長政親子は自刃。わずか三代で浅井氏は滅亡したのである。

その後、浅井、朝倉を討ちとった信長が、三人の頭蓋骨で酒盛りをしたのは有名な話である。こと長政に対しては、あれほど信頼していたのに裏切られた信長の怒りが表れているのではなかろうか。

義を重んじるばかりに、自ら悲劇を招いた浅井長政。自刃した時はまだ二九歳の若さであった。

〔生涯年表〕

年	出来事
1545年	浅井久政の子として生まれる。幼名猿夜叉
1559年	元服、賢政を名乗る
1560年	家督を継ぐ。長政を名乗る
	野良田表の戦いで六角義賢を破り、近江を支配する
1564年	織田信長と同盟を結ぶ
1567年	信長の妹お市をめとる
1568年	上洛する信長軍と近江で合流する
1570年	信長に対して謀反をおこす
	朝倉義景とともに信長・家康軍と姉川で戦う
1571年	長政の家臣、磯野員昌信長に寝返る
1573年	小谷城で信長と戦い敗れる
	城内で自刃。29歳

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
北近江の土豪を掌握し、その上に成長した国人大名だが、その成長の武器は別に革新ではなかった。一種の淘汰だが革新といえるほどの鮮烈さはない。	証拠だてる史料には乏しいが、極めて義理がたく実直だったという。信長はそれを買ったが、信長からの離反もその性格からきたものだという。	北近江一帯の領主で、それほど経済力はない。要所ではあったが地域的にもさほど大きくはなく、他の群雄を圧するほどの経済力はない。	半ば義理のような感じで信長に反旗をひるがえし朝倉と同盟を結ぶ。しかし磯野、阿閉氏ら重臣に背かれ敗北する。「政治力」のレベルに達しない。	信長の近江平定に朝倉とともにそれなりの成果を上げたが、むしろ信長に背いてからの方がめざましかった。信長を困らせるに足る戦力はあった。	浅井の人望には知性も寄与していたようだ。だが、この規模の大名になるとつまびらかなことは伝わらない。印象だけで評価する。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

近江平定には寄与した。信長もお市を嫁がせている。しかし、その後の、離反、元亀元年の朝倉義景との同盟による信長の痛手のほうが大きかった。信じていただけに信長の傷は深かった。

信長討伐の機会を2度も逃した〝風流武将〟の無念

**戦国乱世にあって、風流を好んだ朝倉家。
その運命が変わるのは、足利義昭を一乗谷に迎え入れたときから。
上洛の機会を逸した義景、一方、義昭を擁し着々と地歩を固める信長——
ふたりの命運は、これを機に急展開するのである。**

朝倉義景

独自の文化を築いた名門武将

朝倉義景の肖像を見ると、およそ戦国武将には見えない。どこか風流人を思わせる風貌でさえある。

義景の領地である越前の一乗谷は、福井平野の端に位置し、周りを山に囲まれている。防御性に優れた地形の利を生かし、朝倉氏は五代にわたり、独自の文化を築いてきた。

山裾の中心には、五八〇〇平方メートルにおよぶ「朝倉館」があった。常御殿を中心に、主殿、接客施設、武者留、警護施設、上台所などから構成されており、そのつくりをみると京都の管領邸の影響をかなり受けているように思われる。

また、周囲には土塁や堀を張り巡らしており、戦いに備えての櫓などの防御態勢も整えてある。義景はその中で、歌会などを行っていたらしい。庭園から発掘される陶器や染付などを見ると、京都にも勝るとも劣らぬ文化をもっていたと推測される。

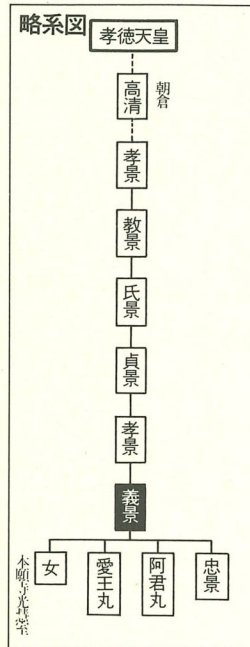
戦国乱世の時代にあってこのような文化を栄えさせたのは、朝倉家が軍事的にも経済的にも、安定した基盤を築き上げていたせいであろう。

義昭を利用できなかった〝不運〟

義景にとって、人生の転機となったのは、永禄八(一五六五)年に一三代将軍義輝が松永久秀らによって殺され、一乗院に入っていた弟の覚慶(後の義昭)を一乗谷へ迎えた時からであろう。

以前から将軍家と朝倉氏は密接な関係にあった。たとえば、義景は最初、孫次郎延景を名乗っていたが、義輝から義の字を与えられ、義景と改名している。上位の者から名前を与えられるということは、当時ではそうとう名誉なことであった。

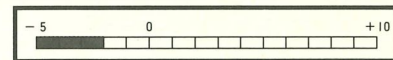
略系図

孝徳天皇
┆
朝倉 高清
┆
孝景
│
教景
│
氏景
│
貞景
│
孝景
│
義景
├ 忠景
├ 阿君丸
├ 愛王丸
└ 女(本願寺光佐室)

朝倉氏の系図をたどると、大化の改新で中臣鎌足らに擁立されて即位した孝徳天皇にいきつく。朝倉氏を名乗るようになったのは高清からだが、戦国大名になったのは孝景の代からとされている。この初代孝景から数えて2代氏景、3代貞景、4代孝景、5代義景が戦国大名の朝倉氏5代で、乱世の中にあってその文化の隆盛ぶりは特筆される。

義昭は義景の助力を得て、上洛し、将軍の座に着くシナリオを描いていた。また義景にとっても、義昭が将軍になれば自分の地位も確固たるものになる。

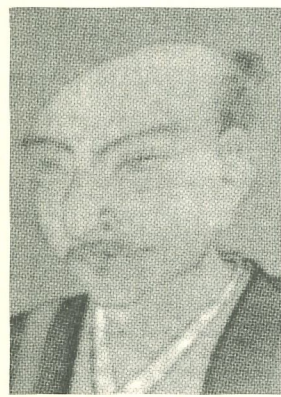
しかし、義景はなかなか動こうとしない。なぜだろうか。

永禄十一(一五六八)年、正室の小宰相が他界し、追い討ちをかけるように長男阿君も急死してしまい、周りの家臣が性格が変わったのではないかと思うほど、無気力状態に陥ってしまったのである。そんな義景に対して、義昭がいらだつのは無理もない。いつまでたっても上洛しようとしない義景に見切りをつけて、信長を頼ることになる。

おもしろくないのは義景である。不幸はあれど、上洛するつもりはあった。それを破竹の勢いで勢力を伸ばしているとはいえ、決して名家の出ではない信長に横取りされたということは、名門の朝倉氏にとってはそうとうプライドを傷つけられた出来事であった。

もとをたどれば朝倉氏と織田家はともに斯波家が越前の守護大名の時代に被官として仕えていた。斯波氏を排して越前の守護となった朝倉氏にとって織田家は位の低い被官ぐらいにしか見えていなかったことは想像に難くない。

一通の御内書が運命を変えた

永禄十一年信長の力を得て上洛した義昭だが、その仲は周知のとおり、長くは続かなかった。

元亀元(一五七〇)年、義昭は信長に利用されていると気づくと、義景や他の大名に御内書を送り、打倒信長を願っている。義景にしても、義昭を横取りされ、またさらに信長から再三にわたり、上洛して自分に仕えろと言う申し出を受けていた。プライドの高い義景はこれを無視したが、内心ははらわたが煮えくりかえっていたはずだ。

一方、信長にしても、天下統一のためには朝倉を押さえねばならなかった。元亀元年四月、名目上は、幕府に背いた武藤上野介を討伐するということにして、信長は三万の大軍を引き連れ朝倉討伐に向かい、京都を発った。

まず敦賀の手筒山城を落とし、続いて金ヶ崎城をも囲み、勝負あったかに思われたが、ここで信長にとって思わぬ事態が起きた。信長にとって盟友であり、義理の弟でもある浅井長政に突然裏切られ、退路を断たれてしまったのである。浅井と朝倉は先祖の代から同盟を結んでおり、その浅井が悩んだ末、朝倉側についたのである。

朝倉にしてみれば信長を討伐する千載一遇のチャンスであった。だが、なぜか義景は深追いはせず、近江に出陣させていた朝倉景鏡の軍も、越前に引き上げさせている。

同年六月、態勢を整えた信長は、家康の援軍を含め三万四〇〇〇の軍勢を引き連れ、近江の姉川をはさんで浅井・朝倉一万八〇〇〇の軍勢と戦い、浅井・朝倉軍を小谷城に追いやることに成功する。

その後九月に義景らは、本願寺と連絡を取り、三万の軍勢を引き連れ比叡山に登り、信長と戦っている。俗にいう志賀の陣である。ここでも信長をあと一歩のところまで追い込んだが、信長は天皇と将軍を動かし、勅命によって講和に持ち込み、窮地を脱出する。またもや義景は信長討伐をあと一歩のところで逃してしまうのである。

天正元(一五七三)年義景は、浅井長政の援軍として二万の兵を引き連れ敦賀を出、柳ヶ瀬に着陣したところを信長に攻められ、一乗谷へ落ちていく。しかしそこも信長に追撃され、義景は平泉寺に救援を願ったが、逆に見限られ、また一族の家臣、朝倉景鏡にも裏切られてしまう。

いくどとなく信長を討伐するチャンスがありながらも、果たせなかった義景は山田荘で自刃する。四一歳であった。朝倉の本拠一乗谷は平泉寺の衆徒によって火を放たれ、数日間燃え続けたという。五代にわたって築き上げてきた朝倉文化もここですべて燃えつきてしまったのである。

〔名将度〕・5段階評価

	革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
評価	2	3.5	4	3	2.5	4
評	この人も革新性とは無縁である。第一、足利義昭を擁するなどというのが古い。信長のそれはそういう伝統的秩序観とは一線を画している。	一乗谷の朝倉館は京都の風をまね、鄙にはまれな文化の薫りをただよわせていた。そういう気風を好む人々からの支持は大きかった。	朝倉の影響力は越前の近隣諸国に及んでいた。その隠然たる勢力を支える経済力もまた小さくはなかった。発掘された館あとがそれをしのばせる。	義昭の興福寺脱出やその擁立にも手を貸し、意外に政治力が認められる。この近辺では信長に対抗しうる唯一の勢力と目されていた。	有力視されながらも軍事力そのものは必ずしも大きくはなかった。浅井との同盟により信長を大いに翻弄したが、結果ははかなかった。	京風をまねたといっても、その文化には独自のものがあった。単なるものまねではなく、独自の文化を育んだ点に知性が感じられる。

〔信長への貢献度〕

−5 0 +10

浅井と同じく、近江平定には貢献したが、それ以外はほとんど信長の難敵であった。信長軍をちりぢりにさせ、信長自身を京都までひた走りに逃げさせるような一幕もあった。

〔生涯年表〕

年	出来事
1533年	越前一乗谷城主朝倉孝景の子として生まれる
1552年	家督を継ぐ 孫次郎延景から義景と改名
1567年	足利義昭を一乗谷に迎える
1568年	義景の息子、阿君急死 義昭、信長を頼り義景のもとを去る
1570年	義景の支城手筒山城、金ヶ崎城、信長の手に落ちる 織田・徳川両軍と姉川で浅井長政とともに戦い敗れる 本願寺の挙兵に呼応し、南近江へ出兵、宇佐山城を攻める 天皇の勅命を受け、信長と和睦する
1573年	一乗谷で信長と戦い敗れる。山田荘賢松寺で自刃。41歳

信長の背後を脅かした驚異の騎馬軍団を率いた男

**上杉謙信との5度にわたる壮絶な川中島の戦いで
信長を震え上がらせた信玄だったが
信長包囲網の成果を見ることもなく、志半ばで息絶えてしまった。
運だけ、信長に一歩及ばなかった非運の武将である。**

武田信玄

父を追放し、家督を奪う

甲斐国の守護、武田信虎の長男として生まれた信玄は、天文十(一五四一)年父を駿河に追放して一躍脚光を浴びるようになった。このことは、ライバル上杉謙信からは折にふれて親不孝者といわれ、宣教師ルイス・フロイスが本国ポルトガルに送った報告書の中にも、「信玄は父の国を奪い、これを国外に追い、その長子は牢に入れて苦しめたので、しばらくして死んだ」と記している。

父を追放したことは国の内外に大きな影響を与えた。元々、信玄は後継者として大事に育てられたが、弟信繁が生まれてからは、父は弟のほうを溺愛するようになり、家督も信繁に譲られる気配が濃厚だったことが関係しているといわれる。

しかし『勝山記』には、信虎があまり悪行をするので、信玄はこんな処置をしたが、領民はすべて喜び満足したという記述がある。悪行の具体的な内容は明らかではないが、奉行衆が他国に逃げるようでは、信玄としてもいたし方なかっただろう。

自立した信玄は、まだ統一されていなかった隣国の信濃へまず兵を向けた。天文十一年から諏訪攻めを開始し、諏訪氏の当主頼重を謀略によって殺し、小県郡・佐久郡へと勢力を拡大するが、天文十七(一五四八)年二月、上田原の戦いで、村上義清と戦って初陣以来はじめての敗北を喫する。しかも、板垣信方はじめ、甘利虎泰、初鹿野伝右衛門といった重臣を失い、自らも軽傷を負っている。

しかしそのあとの塩尻峠・勝弦峠の戦いでは小笠原長時を破っている。敗れた長時は、二年後の天文十九年には信濃を追われて越後に逃れている。義清もまた、本城である葛尾城を落とされて越後に逃れた。この二人がともに越後の上杉謙信を頼ったことから、信玄の前に上杉謙信が立ちはだかるようになる。

略系図

源義光 - (甲州武田) 信成 - 信春 - 信満 - 信重 - 信守 - 信昌 - 信縄 - 信虎 - 晴信(信玄)

晴信(信玄)の子: 義信、勝頼、龍実、信盛、信貞、信之、勝重、女(北条氏政室)、女(穴山信君室)、女(木曾義昌室)、女(上杉景勝室)、女(織田信忠婚約)

武田氏はもと甲斐国守護である。没落していった守護が多い中、発展して戦国大名にまでなったのは極めて例が少ないが、今川氏などと同様、出自のはっきりしていることでは共通点がある。源氏の流れを汲む武田氏の祖になるのは源義光で、それから三代のちの信義から武田姓を名乗るようになっている。系譜をみればわかるように、「信」の字は武田の通字となっていて、信玄はもちろん信義以来ほとんどの男子にこの字が使われている。

宿命のライバル謙信との戦い

両者の争いは、川中島の戦いと呼ばれたものだけでも全部で五回を数える。その最大の戦いは永禄四(一五六一)年九月の第四回で、信玄は「啄木鳥の戦法」で謙信軍をおびき出そうとするが、裏をかかれて八幡原で戦いとなって雌雄を決することなく兵を引いている。

その後、信玄は北進策から南進策へと転じている。義元死後の今川氏が弱体化したのに乗じて、駿河の今川義元、相模の北条氏康と結んでいた「甲相駿三国同盟」を破棄し、今川氏真を攻めている。氏真の妹は、信玄の嫡子義信の夫人だったが、義信が信玄の南進策を支持しなかったこともあって幽閉されて自刃したため、氏真の元に送り返されていた。

これに先立つ永禄八(一五六五)年、信玄は信長と同盟を結んでおり、信長は自分の姪を養女として勝頼に嫁がせている。美濃の苗木城主遠山友勝(苗木勘太郎)の女だが、彼女は勝頼の子を産んだまま死んでしまった。この子が、父勝頼とともに自刃する信勝である。義信が自刃したのはこの半月ほど前のことであり、信勝は生まれながらにして武田の正統を継ぐことを運命づけられていた。

養女の訃報をきいた信長は、ただちに信玄の女お松と自らの嫡男奇妙丸の縁談を進めている。

「三方ヶ原」大勝利後の悲運の死

信玄と信長の友好関係は、表面上は元亀三(一五七二)年十二月の三方ヶ原の戦いまで続いた。すでに駿河を平定した信玄は、次の狙いを徳川家康の本拠である遠江、三河にさだめていた。信玄は、浅井・朝倉や将軍足利義昭など巧みに連絡をとりながら、上洛の邪魔になる織田・徳川連合軍に対峙しようとしていた。

信濃から一気に遠江へとなだれこんだ武田の軍勢は、一言坂の緒戦で家康を破り、二俣城を攻略し、信長の重要拠点、岩村城も落とした。

岩村城主である遠山左衛門尉景任の妻は信長の叔母であり、二人の間には子がなかったので、信長は末子の御坊(勝長)を養子として送り込んでいた。景任はすでに没していたが、城攻めの将である秋山信友は未亡人を説得して自分の妻とし、御坊は人質として甲府へ送ってしまった。

そして、ついに三方ヶ原で武田軍二万五〇〇〇と織田・徳川連合軍一万一〇〇〇が激突することになった。

数において圧倒的優位に立つ武田は、作戦も見事で織田・徳川連合軍を完膚なきまでに打ち破り、家康は命からがら浜松城に逃げ帰った。

信長にとってもかつてないほどの危機だったが、合戦に大勝しながら信玄には運がなかった。

翌天正元(一五七三)年に入って、野田城、長篠城と破竹の勢いで進撃を続けてきた武田軍が突然兵を引いたのである。信玄の突然の発病が原因だった。病がひどくなった信玄は、四月十二日、信濃の駒場で没してしまう。結局、石山本願寺、浅井長政、朝倉義景、足利義昭らと結んだ信長包囲作戦は不発に終わり、天下統一の夢はむなしく散ってしまった。

細川忠興(三斎)の談話を茶人松屋久好が筆記した『三斎公伝記』は、信長にとっていかに信玄が気がかりな存在であったかを記している。

それによれば、それまでは何でも自分で検分しなくては気がすまなかった信長が、信玄の死後油断が生じ、側近の者を代わりに派遣するようになったという。

〔生涯年表〕

年	出来事
1521年	甲斐国守護信虎の子とし生まれる。幼名太郎
1536年	元服、晴信を名乗る
1538年	太郎(後の義信)誕生
1541年	父信虎を追放する
1542年	桑原城の諏訪氏を攻略
1546年	四郎(後の勝頼)誕生
1548年	上田原で村上義清と戦うが、大敗する
	小笠原長時と勝弦峠で戦い勝つ
1550年	村上義清の支城、戸石城で戦うが、敗れる
1553年	村上義清の本城、葛尾城を攻略する
	上杉謙信と川中島で戦う
1559年	出家し、信玄と号する
1561年	4回目川中島の戦い。弟信繁戦死
1565年	勝頼、織田信長の養女をめとる
1566年	長野業盛の箕輪城を攻略
1567年	義信、自殺をする
1568年	駿府今川館の戦いで、今川氏を破る
1572年	徳川、織田の連合軍を三方ヶ原の戦いで破る
1573年	三河の野田城を攻める
	信濃国駒場にて病死。52歳

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
最も遅れていた。今川を足利一門の時代遅れとすれば、武田は田舎守護の伝統的経営方針から抜け出ることができなかった。	伝統的領国経営とはいえ、その田舎の人々からの人望は厚かった。甲斐の宿命的に閉ざされた風土の中では圧倒的な支持を得ていた。	膨張政策の成否にかかっていた。豊富な金山の資源などにより経営の努力は払われていたが、その限界は見えはじめ、外に出ざるを得なかった。	仮にも守護大名である。京都との連携は行っていたし、父・信虎追放にあたっても、周到な工作を巡らせている。しかし、なにぶん甲斐は田舎である。	当時の日本最強の軍団である。ただし、伝統的な騎馬軍団であり、鎌倉時代なら無敵。負けたと言うのは後の世の評価であり、当時は恐怖の軍団だった。	無知蒙昧ではなかった。そればかりか叡山の全滅に際しては身延山への移転を図っている。しかし多分にまっこう臭く、知性では勝負していない。

〔信長への貢献度〕

−5 0 +10

恐怖を与えただけであり全く貢献していない。しかし信長が養女を勝頼に嫁がせ同盟を結ぶと守り、信長は後ろを心配せずに上洛。恐るべき軍団の存在が、信長の革新性を鍛え上げたかもしれない。

関東の地にこだわり 信長に先を越された越後の雄

関東管領という“旧職”にこだわり
謙信は信長包囲網に参加できなかった。
新しい日本を思い描いていた信長と
旧来の価値観にすがろうとしていた謙信の差が、ふたりを分けた。

上杉謙信

信玄の“啄木鳥戦法”の裏をかく

越後守護代長尾為景の末子である謙信は、寅年生まれということで幼名を虎千代といい、元服して平三景虎と名乗った。

天文五(一五三六)年、父為景が死んだ後、春日山城の麓にある林泉寺に預けられるが、のちにここを出て母方の古志栖吉長尾家の援助を受けながら、中越を平定する。そのころ兄晴景が病弱だったため、長尾家の家臣たちの中から景虎待望論が出てくる。そうした要望に押されるかたちで、晴景は弟を養子にして家督を譲っている。

天文二十(一五五一)年、陰謀を用いて対抗勢力の一つであった上田の長尾政景を倒して上越・中越の統一を達成し、さらに下越の揚北衆を圧倒して越後を押さえることに成功する。

同じころ、隣国の信濃から小笠原長時・村上義清らが武田信玄に追われて助けを求めてきたため、天文二十二(一五五三)年川中島において信玄と戦うことになる。これが川中島の戦いの第一回で、全部で五回にわたって戦っている。謙信にしても、北信濃が信玄領に組み込まれるようなことになれば、自らの安泰がおびやかされる危機感があった。

川中島の戦いの中で、最大の激戦となったのは第四回の戦いだった。このとき信玄二万、謙信も一万八〇〇〇の兵を率いて出陣している。

信玄は「啄木鳥の戦法」で、謙信の本陣妻女山の背後から攻めて前面の八幡原に追い出し、そこで待ち受ける本隊で討ち取ろうと考えた。しかし、謙信はこの作戦を読んでいて、夜のうちに山を下って八幡原に布陣していた。そこで戦いとなり、信玄・謙信が一騎討ちを演じたといわれているが、上杉側の史料『上杉家御年譜』によれば、信玄に斬りつけたのは謙信本人ではなく、家臣の荒川伊豆守だったといわれる。

この第四回戦も雌雄を決することなく、両軍とも兵を引いている。だが、信玄が川中島地域の土地を家臣に恩賞として与えているのに対し、謙信はそうした動きがないことから、勝負は引き分けだったが、実質的には信玄が利を得たという解釈はできる。

一七年連続の「越山」行為の成果

謙信の目は川中島のみに向いていたわけではなく、むしろ中心は関東出兵にあった。天文二十一(一五五二)年、小田原城の北条氏康に追われた関東管領上杉憲政を助けて関東に出兵したのを皮きりに、永禄十二(一五六九)年まで実に一七年間にわたり、毎年のように越後が雪で閉ざされる時期になると、三国峠を越えて関東へ出ている。このことを「越山」と呼んだ。毎年のこの軍事行動はかなりの負担だったことが想像できる。

永禄四(一五六一)年の「越山」では北条氏康の小田原城を囲んでもいる。しかし、一か月経っても城を落とすことはできず、そこへ北条と同盟関係にある武田の援軍が笛吹峠を越えて接近しているという情報を得た謙信はすばやく撤退した。

軍事的な戦果はいま一歩だったが、帰路、鎌倉の鶴岡八幡宮の社前で、同行した上杉憲政から関東管領職と上杉の名跡をゆずられ、名も憲政から「政」の一字を与えられて景虎を政虎と改めている。

永禄三年からは北陸にも進出し、越中・能登・加賀にも兵を進め、天正元(一五七三)年の武田信玄の死後、越中を平定して天正五年には能登七尾城を落としている。

信長を助けた“関東への義理”

謙信は、関東管領という職務を全うしたい気持ちとともに、将軍をもりたてて幕府を再興するという気持ちをもっていた。天文二十二(一五五三)年と永禄二(一五五九)年というかなり早い時期に二度までも謙信は上洛している。

さらにもう一度、謙信に上洛の機会が訪れる。

天正三(一五七五)年ころから、反信長という立場で石山本願寺と手を握った毛利輝元が、謙信に上洛を促してきたのである。本願寺と結べば、謙信の上洛の妨げになっていた加賀一向一揆への不安もなくなる。

天正四年、越中に兵を進めた謙信は能登で越年している。この時、毛利の勧めに応じて上洛していれば、毛利・本願寺勢力と協力して信長をはさみうちにする可能性は十二分にあった。

しかし、関東で北条氏康の子である氏政に脅かされていた安房の親上杉勢力から、援助を求める使いが届くや、待機させていた兵を引いてしまい、信長を討つ絶好のチャンスはついえてしまう。筋目を重んじる謙信は、関東へ執着するあまり、結果的に信長の前に道をひらくことになる。

武田と違い、信長の領地から越後まではかなりの距離があったが、信長にとって謙信は気になる存在ではあったようだ。

永禄七(一五六四)年、謙信の関東での勝利を祝して息子を謙信の養子にしようとしたのをはじめ、貢物を贈ったり、さまざまな情報を知らせたりと一〇年以上にわたってこまめな対応をしている。

天正二(一五七四)年には武田討伐を約束し、翌年、長篠の戦いの報告をしたりしている。

謙信に訪れた三度目の上洛のチャンスは、信長にとっても一向一揆や毛利勢を相手にしなくてはならず、忙しい時期だった。そこで謙信が動かないとみるや、これまでとは一転して上杉討伐を画策している。

天正五年七月、伊達輝宗を上杉討伐に誘ったほか、八月には上杉に備えて柴田勝家を加賀に派遣しているが、謙信が出陣するや勝家軍を返している。

翌天正六(一五七八)年三月、関東出兵を前にして謙信は脳溢血で急逝している。四九歳だった。

長尾氏は、平高望の系統である。南北朝のはじめに、景忠が越後・上野両国の守護上杉憲顕のもとで守護代となったのが、その繁栄のきっかけだった。長尾家は越後と上野、それぞれいくつかに分かれて発展した。謙信の父、為景は越後守護代だった長尾能景の子で、府内長尾家の惣領である。その子、謙信は、小田原城を包囲した功績で、上杉憲政から関東管領の職と上杉の名称を与えられている。

略系図

平高望 ― 景弘 ― 長景 ― 朝景 ― 重景 ― 能景 ― 為景 ― 輝虎(上杉謙信) ― 景虎 / 景勝

〔生涯年表〕

年	出来事
1530年	越後守護代長尾為景の次男として生まれる。幼名虎千代
1536年	林泉寺に預けられる
?	元服、景虎を名乗る
1548年	兄晴景の養子となり、家督を継ぎ、春日山城に入る
1551年	長尾政景、揚北衆らを倒し、越後を統一
1552年	上杉憲政を助けるため、関東へ出兵する
1553年	第1回川中島の戦い
1556年	出家しようとする
1561年	小田原城を囲む 上杉憲政から関東管領職と上杉の姓を継ぎ、上杉政虎を名乗る 第4回川中島の戦い
1562年	輝虎を名乗る
1564年	第5回川中島の戦い
1570年	謙信を名乗る
1573年	尻垂坂で越中一向一揆を収め、越中を平定
1576年	能登の七尾城をめぐり、長続連、綱連父子と戦う
1577年	七尾城開城
1578年	脳溢血で急死。48歳

〔名将度〕・5段階評価

革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
ない。ある意味では武田の古さに通じる。しかも、関東管領に任じられて恐れ入っているので、室町幕府の枠組みからは出られず、さらに悪いかも。	ある。やや神憑り的ながら、関東の諸将にも一目置かれる。管領職に義理だてし、律義に十数度も関東出張を繰り返したりしたからだろうか。	日本有数の雪国である。冬期は深い雪に閉ざされる。つらいものがある。しかも農閑期になると、関東まで出張しなければならない。なかなか厳しい。	義昭がしきりに「来よ来よ」といっている。それだけ期待されながら、内外に問題を抱え過ぎている。自身が生んだこだわりの結果が多いが解決困難。	強い。だがそれは戦力というよりも、独特の哲学によって神憑り的に戦うから強くなる。現代でも神憑りの人は強い。しかし、それを戦力とは呼ばない。	まっこう臭い仏教的哲学に凝り固まっている。特に毘沙門天には目がない。しかし、信玄のまっこう臭さとちがって、こちらには内省時間も多い。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

なにも貢献しない。ただ、上洛を果たす勢力として無視できない不気味さをもち続ける。義昭の信長包囲網作戦には恰好の存在であり、信長にとっては迷惑な存在だった。ただし、あまりにも遠かった。

信長を最後まで手こずらせた足利幕府最後の〝将軍意識〟

**信長が天下統一を果たすには、義昭は不可欠な人物だった。
しかし、これほどまでに信長を苦しめたのも
数ある武将を差し置いて、義昭しかいない。
その凄まじいまでの知略の陰に潜む執念とは……？**

足利義昭

『太平記』のような覚慶脱出劇

永禄八（一五六五）年五月十九日、松永久秀と三好三人衆は第一三代将軍足利義輝の二条の御所に夜討ちをかけた。夜討ちというと何やら戦めくが、実態は無勢の男を寄ってたかって虐殺したにすぎない。

当時の室町幕府はすでに名ばかりのもので、「夜討ち」に対抗する兵力もなければ宿直の警備員も満足にいなかったのである。結局、将軍義輝自身が刀を抜き戦った。

義輝は、腕におぼえがあったという。塚原卜伝に剣を学び、当時の有名な兵法者・上泉伊勢守の剣を見たこともあるという。刀を何本も畳に突き刺しておいて、とりかえながら戦ったという。結局、槍に足をとられ、転んだところを大勢に障子で押さえつけられ、殺された。

将軍が切り結ぶというのもたいしたものだが、それだけ防ぎ手もなかったのだろう。

暗殺隊は鹿苑院にも向かった。そこには足利家のしきたりで幼年期から出家している末弟の周暠がいた。捕まり、すぐに殺された。もう一人、次弟が奈良興福寺の一乗院にいた。覚慶といった。捕らえられたが、殺されはしなかった。一乗院門跡・覚慶、二八歳。これが三年後に室町幕府最後の一五代将軍となる義昭である。以後監視下におかれる。

略系図

源義家
義康　尊氏
義詮　義満
義教　義持
政知　義視　義政　義勝　義量
義澄　義植　義覚　義尚
義維　義晴
義栄　義昭　義輝

源氏か平氏いずれかの系譜に連なることは、戦国大名にとって存在証明のようなものだった。源義家から2代のちの義康、義重が、それぞれ足利氏、新田氏の祖となっている。義康の家系からは、細川・斯波・畠山の3管領家を輩出するが、室町幕府の開祖尊氏が登場するのは、それよりのちである。足利将軍は15代を数えるが、後継をめぐって発生した応仁の乱以降は、その実権を失って形骸化していく。

世間では覚慶を将軍にしようという運動も起きていた。朝倉義景なども久秀と談判したらしい。そうこうしているうちに、七月二十七日、覚慶は一乗院を脱出してしまった。

手引きをしたのは前将軍の近臣だった細川藤孝（幽斎）だった。山城・勝龍寺城城主。脱出には一色藤長も手をかしたという。

奈良から細川藤孝が案内して、近江甲賀郡の和田伊賀守惟政の城にかくまった。和田氏は幕府の共衆をつとめたこともあった。

覚慶はこうしたなかで、各地の武士にせっせと文を書き送りはじめる。源家の嫡流の自覚が生まれたのかもしれない。和田はいかにも奥地で、十一月になると、近江・野洲の矢島に移動した。……なにやら、『太平記』のような騒ぎである。

大小を問わず全国に檄をとばす

翌永禄九（一五六六）年二月になると、いよいよ還俗して名も義秋とあらためた。

畠山、上杉、北条、毛利、武田など各地の武家に出兵をうながし、しきりに上洛を求める。大身の家ばかりではなく、小さな国人にも内書を送っている。戦闘状態であるものに対してはそれぞれに和して自分に従うよう熱心によびかけている。

ところが各地の状況はそれどころではなく、時代は音をたてて変わりつつあり、内書をもらったところで、困惑するだけだった。

要するに、旧体制の「将軍」に期待するものなど、なにもなかったのである。

そこへ一乗谷の朝倉義景の招きがあり、義秋はこれに迎えられた。

上杉、武田ほどではないが、その次くらいが朝倉、と考えていたのかもしれない。

しかし、朝倉とてすぐに動けるわけではなく、義秋にしてみれば失望を感じながらも居場所の確保ができたことで満足しなければならなかった。

こうしているうちに永禄十一（一五六八）年二月には三好三人衆に擁された義秋の従弟にあたる足利義栄が一四代将軍となった。

ライバル中のライバルに先を越されたのである。義秋は焦りを覚えるなかで同年四月、一乗谷で元服し、名を義昭とあらためた。

〔名将度〕・5段階評価

	革新性	人望	経済力	政治力	戦力	知性
評価	1	2	1	5	1	3
寸評	幕府が消滅しても死ぬまで足利一五代将軍の意識を捨てなかった人で、保守精神の権化。流浪の身になっても将軍のように各地の武士に諭した。	義昭を擁す層は存在し、その人々のみには相当な印象を与え得た。また、秀吉の時代になっても、那古野に従軍するなど、パフォーマンスは多かった。	まったくなかった。寺を出てからは和田惟政、朝倉義景らに寄食し、将軍になってからは信長の膳立てに従った。流浪中の経済力はいうまでもない。	象徴としての強力な政治力をもっていた。少なくとも諸国の武士に内書を下し、信長を翻弄することができた。象徴ゆえに信長も手をこまねいた。	義昭の武器はもっぱら手紙である。毎日夥しい文書を発給し続けた。それが信長の計略を攪乱。だが、普通の意味での戦力は〝自衛〟隊すら持てなかった。	伝統的将軍というものがどのようなものであるかを誰よりも知っていた。そしてそれにふさわしくあろうと努めた。その矜持には知性を必要とした。

〔信長への貢献度〕

−5　0　+10

伝統やぶりの信長ではあるが、旧来の伝統を利用することはあった。上洛に際しても、将軍を擁することは都合がよかったし、将軍を思いのまま操ることはもっと都合がよかった。面倒もあったが。

生涯捨てなかった「将軍意識」

いっこうに動こうとはしない朝倉の近辺でもよい情報も得られた。細川藤孝と交流のある明智光秀がもたらしてくれた信長情報である。「類い稀な武将」と光秀は言った。

同年七月、義昭は光秀の仲立ちで信長と会見する。話は非常に早く、九月に入ると、信長は精鋭を引きつれて出城・近江に進撃し、三好党をさしたる抵抗にもあわず制圧、何の苦もなく京都に入った。このころ、一四代将軍義栄はわずか半年あまりの就任で死去している。

十月に入り、義昭は征夷大将軍に任ぜられた。最後の足利一五代将軍である。

信長は義昭の将軍就任が決まると、さっさと岐阜に引き上げた。その隙を狙って三好の一党が義昭の宿所を取り囲むようなことが起こると再び上洛して一掃、信長抜きでは何事も行い得ないことを強烈に印象づけた。そのうえで義昭の提案する一切の職を辞退する。

足利幕府の権限下に入ることを拒否するばかりか、信長の許しなく政務を行うことを一切禁止する。

しかし、義昭も信長の真意をくみ取ると、あらゆる抵抗をこころみた。以降、天正元（一五七三）年七月、信長に敗れて追放されるまでの五年間にわたって、ことごとく信長に逆らい、将軍としての権威を取り戻すべく並々ならぬ努力をし、決して一筋縄ではいかない特異な将軍として在任した。

信長は義昭の支配を一切拒否し続けたが、一方義昭もまた、信長に将軍職をもらいながら、全国各地に檄を飛ばし続け、「信長包囲網」の実現に腐心したのである。

将軍の権威の発揚は信長の死後はもちろん、慶長二（一五九七）年八月大坂に死すまで、流浪中も続けられた。

〔生涯年表〕

- 1537年　第12代将軍足利義晴の二男として生まれる
- 1542年　興福寺に入室
- 1565年　兄義輝、松永久秀らに殺される
- 1566年　還俗して義秋を名乗る／朝倉を頼る
- 1568年　元服。義昭と改名、15代将軍となる／信長を頼る
- 1569年　本国寺で三好三人衆に囲まれる／信長、義昭のために二条城を築城
- 1570年　信長、義昭に5か条の条書を送る
- 1573年　信長と断交。浅井、朝倉、武田と手を結ぶ。／信長に二条城を囲まれる。勅命により和睦／信長に槙島城を攻められる。義昭追放され、室町幕府滅亡
- 1576年　毛利輝元に幕府再興を依頼する
- 1587年　興福寺大乗院に入る
- 1587年　出家し、昌山を名乗る
- 1592年　秀吉の朝鮮出兵に従軍する
- 1597年　病死、61歳

PART 3 信長後史

残された凡将たちの悲劇

戦国を治めた信長の命は、突然、あっけなく散った。残された織田家の人々はその後、どう〝天下〟を求めたのであろうか？

それは本能寺の変直後雪崩のように始まった

本能寺の変の直後、信長の死の瞬間、日本の屋台骨に形容しがたい巨大な穴があき、次の瞬間には今度はそれを埋めようとする猛烈な動きが始まった。事変で死んだのは信長だけではなく、その後継者と目されていた長男・信忠も失われた。五男・勝長も二条城で信忠とともに死んでいる。

二条城で無念の死を遂げた長男・信忠

信忠は死ぬ前、前田玄以に岐阜城においてきた長男の秀信（三法師）を清洲城に移すよう命じて二条城から脱出させた。美濃は明智の故地なので災いをできる限りくいとめたかったのである。

悲報は全国に飛んだが、かなり対応に差があった。

備中・高松城を攻めていた秀吉には翌三日に伝わり、まず、事態を秘して毛利方と和睦交渉に入った。上杉方の魚津城を攻めていた柴田勝家には四日に伝わったが、将兵の離散が目立ち、敵方も蜂起し対応不能で越前に引き上げた。家康は堺見物の最中で岡崎に引き上げるのがやっと。滝川一益ははるか遠方の上野で転戦中。敵方に孤立するかたちになり、全軍伊勢長島への退却を命じた。三男の信孝と丹羽長秀は大坂から四国平定のため渡海しようとしているところだったが、将兵が一気に離散しわずか数十騎になってしまった。次男・信雄は領国の伊勢にいたが、いったん出動したもののなぜか伊勢に再び戻りうろうろしていた。

結局、妥協的和睦をすませ、四万の兵をそのまま率いて急遽上京した秀吉は十二日大坂に到着して布陣完了。十三日の山崎の決戦に望んだ。

この間、三男・信孝は、大坂で同族の津田信澄を討っていた。信澄は信長が殺した弟・信行の子で、信孝にとっては従兄弟。後難を恐れたのである。信雄は結局、十三日になってからやっと合戦現場に出てきた。

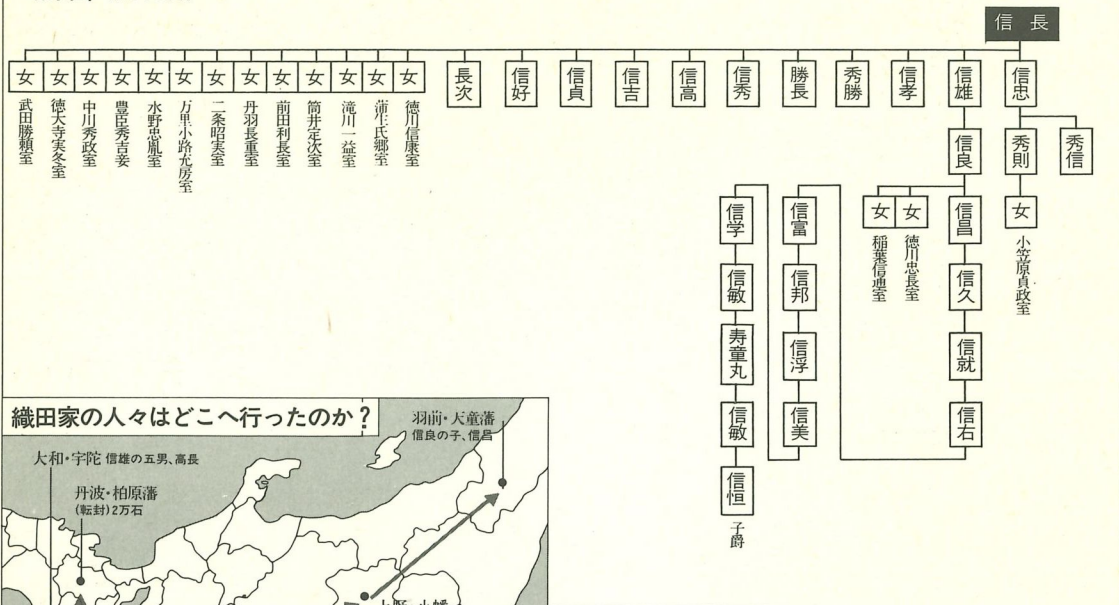
一族を合法的に分裂させる秀吉の人心操作術

合戦の結果は秀吉の勝利に終わり、出遅れた各宿将に対して圧倒的なリーダーシップを握ることに成功した。その月のうちにきわめて紳士的に(?)会議が催された。史上いう「清洲会議」である。出席は秀吉のほか、柴田、丹羽、滝川、池田恒興、堀秀政、そして遺子の信雄、信孝である。議題は信長の後継者選びである。信雄、信孝のいずれかに落ち着くだろうと思われたが、結局、秀吉に抱かれて現れた信忠の三歳になる遺児、秀信（三法師）に決まった。当然、後見人は秀吉である。

次男・信雄には尾張・伊勢・伊賀が継承され、信孝には美濃一国がわたった。不服な信孝は、同じく大いに不満を感じている勝家と結んだ。浅井家から戻っていたお市と勝家との縁談をまとめたのも信孝である。ここに賤ヶ岳の戦いの端緒がある。秀吉は信雄に近づき兄弟のバランスを利用して巧妙に織田同士が相争う自動的な構造をつくり上げた。柴田が湖北で兵をあげると岐阜の信孝は当然呼応した。秀吉にとってはかつての主君の子を堂々とたたくチャンスの到来である。信長の後継者はあくまでも三歳の秀信なのである。

賤ヶ岳の戦いがすんで柴田が滅ぶと、秀吉は信孝の処置を自らせず信雄にまかせた。当然、最悪の結果となり、城から出され寺に移された信孝は自刃を迫られて、果てた。

略系図（信長以降）

- 信長
  - 信忠
    - 秀則
      - 女（小笠原貞政室）
    - 秀信
  - 信雄
    - 信良
      - 信昌 — 信久 — 信就 — 信右
      - 女（徳川忠長室）
      - 女（稲葉信通室）
    - 信富 — 信邦 — 信浮 — 信美
    - 信学 — 信敏 — 寿童丸 — 信敏 — 信恒（子爵）
  - 信孝
  - 秀勝
  - 勝長
  - 信秀
  - 信高
  - 信吉
  - 信貞
  - 信好
  - 長次
  - 女（徳川信康室）
  - 女（蒲生氏郷室）
  - 女（滝川一益室）
  - 女（筒井定次室）
  - 女（前田利長室）
  - 女（丹羽長重室）
  - 女（二条昭実室）
  - 女（万里小路充房室）
  - 女（水野忠胤室）
  - 女（豊臣秀吉妾）
  - 女（中川秀政室）
  - 女（徳大寺実冬室）
  - 女（武田勝頼室）

信長の死後、跡目候補として有力だったのは二男・信雄と三男・信孝である。ともに25歳の青年武将であった。しかし、山崎の合戦で光秀を討った秀吉は、直系の相続を主張し、信忠の遺児・秀信を推した。結果、形のうえでは以降、柴田勝家と組んだ信孝、秀吉の下に走った信雄との間で跡目争いが起こるわけだが、内実は家臣たちの覇権争いである。織田家の残された武将たちは、あまりにも大きな存在だった父を継ぐには、力不足だった。

しかし、別段、信雄がそれ以前にくらべて良くなったというわけではなく、秀吉にとって利用価値がなくなったぶん、前より悪くなった。信雄はようやく気がついて家康と結び、これが八か月にわたる小牧・長久手戦の発端になるが、信雄は途中で秀吉と単独講和してしまう。

その後、小田原の北条攻めの際には秀吉の部将として一万五〇〇〇の兵を率いて戦うまでになり下がる。

それでも、全国各地に受け継がれた信長の血

家康の関東入国の際、信雄は家康の領地内に転封されるが、尾張にいたいと主張し、下野に追放されてしまう。夏の陣が終わると許され、大和と上野とに五万石を与えられた。そのうち上野・小幡二万石を継承した四男・信良の系統が次の代に山形・天童に移され、羽前天童藩として明治維新まで続いている。五男・高長の系統は大和宇陀三万石を継いだが、後に発病した藩主があり丹波柏原二万石に減封され、これも明治維新まで続く。

この二つの系統が次男・信雄の系統であり、長男・信忠なきあとは信長の直系といえる。

のちに家康に追放される二男・信雄

信長の弟・長益（有楽斎）の系統も続いている。長益は茶人としてのほうが有名だが、その領地のうち三男長政が継いだ大和戒重一万石が大和芝村藩として、六男尚長が継いだ分がそのまま大和柳本一万石として、それぞれ明治維新まで続いている。

信忠の直系秀信は関ヶ原の合戦のあと西軍として戦い高野山に蟄居し、慶長十（一六〇五）年二六歳で病死した。跡はない。

信長には一一男一一女あったのだが、女たちもそれぞれしかるべき家に嫁いだ。次女は蒲生氏郷に嫁ぎ、後の会津藩主・蒲生秀行を生んでいる。一一女は徳大寺実冬の室となり、右大臣・徳大寺公信を生んでいる。

形式としての宗家は残らなかったが、信長の血は各方面に受け継がれ、日本中に分配されたのである。

戦国の激闘を体験できる！
信長ファミコン・パソコンソフト

信長のように武将を引き連れて合戦をしてみたい、とか、世が世ならば、自分も信長のように天下統一に乗り出していたかもしれない、と思う時が誰にもある。それだけ、信長のストーリーは勇壮であり、人間・信長の魅力があるということなのだろう。しかし、本当に信長のような状況に立ったら、精神状態を平静に保つだけでも至難の業であるに違いない。

つねに生命の危機に瀕しているし、愛する家族にも次々裏切られる。周りはスキあらば寝首を掻いて、自分が信長に取って代わろうとしている者ばかり。戦争をするための資金の調達も、ままならない。そうこうするうち、鉄砲の調達も進まないのに、いつの間にか信長の軍団より立派な鉄砲隊が、信長の生命を狙い始めるときている。

現代のいったい誰が、こんな状況に耐えられるだろうか。イラクのフセインだって無理だ。フセインには、核爆弾から身を守れるシェルターがあったが、信長には、せいぜい安土城があるにすぎない。

信長は、すぐにカッとなったとか、子供のころから癇性が強かったといわれているが、時代の状況を考えると、生まれつきの性分でなくとも、始終イライラしていても不思議はなかったのだ。現代人ならば、慢性疲労の心神症、さらにノイローゼにもなってしまうだろう。

しかし、これが終始、生命の危険から免れながら天下統一の事業ができるとしたらどうだろうか。不死身の体をもって、信長のような合戦ができ、天下の経営に乗り出してゆけるなら、これほど愉快なことはない。

すでに、8年近くの「伝統」をもつパソコン、ファミコンの「信長もの」のゲームは、まさにその愉快さを追求して、何十万人ものファンを獲得してきたのだ。今回は、「信長ソフト」最古参かつ最大手のメーカー株式会社光栄を中心に、その面白さを紹介したい。

光栄が発表した「信長ソフト」は、最初の『信長の野望』以来、すでに四種類に及んでいる。しかもそれぞれが、二〇万本を超える売れ行きだという。もちろん、ドラゴン・クエストなどの人気ソフトに比べれば、多いとはいえないが、そのゲーム展開の複雑さや、これから紹介する、ゲームに必要な素養を考えると驚くべき数字である。楽しんでいる年齢層も、一〇代から上は六〇代までというのも、このゲームの特色だろう。

長々と説明するより、ゲームは実際にやってみるのが一番だが、もうひとこと付け加えておきたい。この種のゲームには、じつに多くの歴史上の蘊蓄（うんちく）が込められていて、より楽しく遊ぶには、けっこう知識が必要だということだ。信長とその時代の知識があればあるほど、勝ち進む可能性は高くなる。

たとえば、信長が今井宗久を通じて堺という商業都市を支配し、この街が生産する鉄砲を独占していったことは史実として知られている。しかも信長は、この今井宗久とは、茶道を通じてふれあい、政治と文化の融合する不思議な場を作りだした。こうした微妙な史実も、ゲームの一番新しい版では、十二分にとりいれられている。

信長は、武将として戦争に明け暮れたが、たんなる荒武者ではなかった。戦いつつ経済を発展させ、同時に文化のパトロンとしてもふるまった。部下たちは、その影響をうけ茶道にこるものも現れた。茶道が分からないと、政治もできなかった。そんなディテールに、ゲームのなかで頻繁に出合うのも、このシリーズの楽しみのひとつだ。

こんなにある 信長・関連図書

ビジネス

- ●堤義明は織田信長になる　共通する危険因子は何を暗示するか
  第一企画出版／永川幸樹
- ●ハクバヒューマンビジネス　織田信長の人間関係
  白馬出版／小島鋼平
- ●堤清二と織田信長　天下を支配する企業戦略と発想
  史輝出版／上之郷利昭
- ●織田信長男の凄さ・男の値打
  三笠書房／桑田忠親
- ●現代視点　織田信長
  旺文社

小説

- ●織田信長
  講談社／山岡荘八
- ●国盗り物語
  新潮社／司馬遼太郎
- ●織田信長
  徳間文庫／大仏次郎
- ●時代小説文庫　織田信長
  富士見書房／坂口安吾
- ●織田信長
  角川書店／桑田忠親
- ●織田信長殺人事件
  日本シェル出版／八切止夫
- ●第六天魔王信長
  角川書店／羽山信樹

まず内政をしっかりと
信長の野望
絶版

いまを去ること八年前、初めて信長がパソコンソフトになった。この初代『信長の野望』は、あっという間に人気沸騰し、結局、一二万本を売り尽くした。

このゲームの新しかった点は、どの国の大名になるにしても、合戦をやるには領国経営をしっかりしなくてはならないことだった。信長をはじめとする戦国大名のだれもが行ったように、自国を富ませ、その国力で戦争を勝ち抜くのだ。

当時のビジネス誌が、このソフトを取り上げて、称賛したほどで、その経営感覚とリアリズムは、特記に値したのである。

ゲームの進めかたは、まず一七ある国の大名の誰になるかを選び米の売買をしながら国を富ませ、武器を購入して戦うというもの。内政をしっかりして初めて、天下統一への夢を見ることができたのである。

現在は絶版。いまは懐かしいテープ版もあった。

戦闘が多様になった
信長の野望・全国版
Ⓟ9800円　Ⓕ9800円

名前の通り、信長の野望は全国へ広がり、戦いに加わる戦国大名は五〇に増えた。

増えたのは大名の数だけではなかった。内政も税金をとったりするだけではなく治水工事ができたりと、なかなか心憎い配慮がしてある。

ここまでくると、領国の経営をしているだけで、合戦の暇などなくなるのではと心配になるが、この方面でも工夫が加わり、戦闘の形にもバリエーションが加わっている。最初の版に比べて、はるかに複雑な戦いが可能になっている。

ただ、五〇も国があったら、天下統一するのに時間がかかるだろうと思うのだが、急ぎたい人のためにはモードの切り替えで一七か国のゲームにもできるようになっている。

パソコン版は現在二六万本。ファミコン版は四五万本出た。これぞ、信長ソフトの雄といえるだろう。

コミック

- ●歴史コミックス　織田信長
  講談社／横山光輝
- ●まんが人物日本史　織田信長
  学習研究社／中島利行
- ●ポプラ社・コミック・スペシャル　織田信長
  ポプラ社／森田拳次
- ●学習まんが　織田信長
  学習研究社／藤木てるみ
- ●まんが博物館　敵は本能寺
  実業之日本社／カゴ直利
- ●まんが博物館　野望にもえる織田信長
  実業之日本社／カゴ直利
- ●学習まんが・日本の伝記　織田信長
  集英社／柳川創造
- ●歴史人物なぜなぜ事典
  ぎょうせい

研究

- ●攻める―奇襲桶狭間　織田信長の戦略・戦術
  ビジネス社／武田淳彦
- ●織田信長　七つの謎
  新人物往来社
- ●織田信長と越前一向一揆
  誠文堂新光社／辻川達夫
- ●織田信長に学ぶ
  新人物往来社／童門冬二
- ●織田信長辞典
  新人物往来社／岡本良一
- ●織田信長のすべて
  新人物往来社／岡本良一

武将の個性を重視する

信長の野望・戦国群雄伝

Ⓟ9800円 Ⓕ11800円

この版になると、飛躍的な要素が加わる。

まず、これまでは、大名だけが表舞台にたっていたのだが、各武将が活躍するようになるのだ。武将にはそれぞれ個性があり、戦争にやたら強いのもいれば、内政に役立つものもいる。だから、大名は武将をうまく使って領国経営をし、また合戦を戦うことになる。

優秀な武将は引き抜きもあり、浪人をかこっている武将をリクルートする手もある。武力・知力・人間的魅力などの点で計算して、いま誰が必要かを考えるのも大名の仕事になるわけ。

さらに、戦術、用兵にも選択肢がふえ、ことに籠城戦ができるようになったことは、リアリティの点でも大きい。野戦から転じて籠城に、またその逆へ……。戦いは続いてゆくのだ。

現在、パソコン版は二三万三〇〇〇、ファミコン版三三万七〇〇〇。人間的要素がぐっときます。

「文化と技術」が決め手

信長の野望・武将風雲録

Ⓟ9800円 Ⓢ11800円

信長の偉大さは、文化と技術の力を知っていたことである。この版では、「文化と技術」が真っ正面から取り上げられている。

大名たちは堺の商人・今井宗久を呼んで茶の湯を催すが、このとき使用する茶器のグレードが問題になる。グレードの高い茶器を購入していた大名は宗久に鉄砲購入を申し込むさい、安くしてもらえる。茶器のグレードが高ければ高いほど、価格は安くなる。文化度が上がると、鉄砲の値段が下がる仕組みなのだ。教養のない大名は、相手にすらしてもらえないというのだから、きびしい。

また、技術開発を行うことで、自国で鉄砲がつくれるようになったり、鉄甲船が建造できるようになり、戦闘力が大幅に増すという側面もある。ゲームの最中に、武将が画面で話しかけてくるのも、新しい点といえよう。

ここまでくると、あまりにリアルで、天下統一もたいへん？

●織田信長の人間学
講談社／童門冬二
●織田信長おもしろ辞典
新人物往来社／高野澄
●織田信長と安土城
創元社／秋田裕毅
●織田信長の研究
プレジデント社／石原慎太郎
●織田信長おもしろ百科
永岡書店／松田司朗
●織田信長文書の研究
吉川弘文館／奥野高広
●近世日本国民史織田信長
講談社／徳富蘇峰
●織田信長の生涯
三笠書房／風巻紘一

子供向け

●くもんのまんがおもしろ大研究 織田信長
公文教育研究センター／森藤よしひろ
●子どもの伝記全集 織田信長
ポプラ社／山本和夫
●少年少女伝記文学館 織田信長
講談社／津本陽

その他

●戦国武将列伝第一巻 織田信長
けいせい出版／石井まさみ
●織田信長
中央公論社／脇田修
●織田信長 果断と独創
立風書房／加来耕三

ポルトガルの船乗りの物語

大航海時代

Ⓟ9800円 Ⓕ11800円

直接関係はないが、信長のゲームで遊んだら、当時の世界の動きにもふれておきたい。

時は大航海時代。物語はポルトガルの港町。主人公は船乗りであります。この男、進取の精神に富み、冒険的航海を繰り返し名声を獲得。王の命により困難な冒険に出かけ見事に成功。功により爵位を得、次第に位を上げてゆくのであります。

と、まあ、こうしたストーリーにしたがってゲームは進むのだが、仕組みがシミュレーションとロールプレイングが合わさった「リコエイション・ゲーム」といわれるもの。繰り返し遊べ、そのたびに新鮮な状況が繰り出される光栄オリジナルの方式。

ポルトガルの王様が銀を所望したときには、日本の長崎まで銀を探しにくるシチュエーションもあり、奇妙に懐かしい気持ちになる。

現在、パソコン版、ファミコン版ともに一〇万本出ている。

●ゲームボーイ版 信長の野望 5800円

『信長の野望』のゲームボーイ版。ゲームそれ自体は、「群雄伝」の流れをくんでいる。ただし、性格上、プレイする年齢層が低いため、簡略化・短時間化されている。

原則的には、対人型のゲーム。電車のなかで、野望に満ちた目付きでゲームボーイを操作する少年がいたら、それはきっとこのソフトで戦っているのに違いない。

●歴史ｉｆノベルズ『小説・信長の野望』 童門冬二著 1500円

本誌にも登場した作家・童門冬二氏が、「もし信長が本能寺で死ななかったら」という大胆な想定のもとに、書き下ろした異色作。本能寺以降の日本を背景に、信長の「野望と行動」は、ますます巨大なものになっていく。

この「歴史ｉｆノベルズ」は、歴史に「もしも」をあえて持ち込み、壮大なロマンを読者に味わってもらうために創刊された。紙の上で展開する、歴史シミュレーション！

●歴史ｉｆノベルズ『信長の野望・覇王の海上要塞』 東郷 隆著 1500円

「歴史ｉｆノベルズ」の第3弾。信長が放った刺客の凶刃を逃れた上杉謙信が、長年の夢だった上洛を果たそうとするという設定。謙信が死ななかった（歴史では病没ということになっている）ので、他の武将たちも意気が上がる。

盟友の徳川家康すらも、謙信に服し、ついに京都は上杉の軍勢が支配するところとなるが……。

●織田信長 にんげんの物語
ブロンズ新社／山中恒
●裏ばなし織田信長
コンパニオン出版
●ポプラ社文庫 織田信長
ポプラ社／山本和夫
●現代教養文庫 織田信長
社会思想社／江崎俊平
●嵐の中の日本人シリーズ 織田信長
あかね書房／童門冬二
●にほんを創った人々 織田信長
平凡社／岡本良一
●日本の合戦 織田信長
新人物往来社／桑田忠親
●岩波新書 織田信長
岩波書店／鈴木良一
●シミュレーション歴史ブック3 織田信長
学習研究社
●図説織田信長男の魅力
三笠書房／小和田哲男
●教養講座シリーズ 織田信長・豊臣秀吉
ぎょうせい／国立教育会館
●戦国百人一話 織田信長をめぐる群像
青人社／会田雄次
●おんな太閤記シリーズ 織田信長
日本シェル出版／八切止夫
●織田信長 文研の伝記
文研出版／渡辺正雄

Ⓟ:パソコン、Ⓕ:ファミコン、Ⓢ:スーパーファミコンを指す

詳細図表

信長の歩み

あと一歩のところで天下統一を果たせなかった信長だが、彼の登場で戦国の乱世は記録的な速度で収束する。しかも版図の拡大だけでなく、古い慣習に囚われないその姿勢は、経済や文化へも多大な貢献をしている。同じ時代に生きた武将たちの足跡と比較してみることも、功績をより理解する助けとなるだろう。

年	年齢	信長の合戦・経済戦略	天下統一プロセス	他の武将・幕府などの動き	世界の動き
天文三年（一五三四）	一歳	五月一二日、織田信秀の嫡男として尾張那古野城中で誕生する。幼名「吉法師」。兄信広は庶子である。		九月、足利義晴、京に上る。	英国国教会成立。イエズス会成立。
天文九年（一五四〇）	七歳	六月、信秀、三河安祥城を攻略する。			
天文一〇年（一五四一）	八歳			六月、武田信玄、父信虎を駿河に追放する。	カルヴィン宗教改革。
天文一一年（一五四二）	九歳			八月、斎藤道三、土岐頼芸を追放。	
天文一二年（一五四三）	一〇歳				コペルニクス、地動説を発表。八月、種子島に鉄砲伝わる。
天文一五年（一五四六）	一三歳	古渡城に赴き、元服して織田三郎信長を名乗る。「信」の字は、織田氏の通字である。			
天文一六年（一五四七）	一四歳	**○今川方の三河吉良へ初陣。**所々に放火して帰る。		六月、信玄「甲州法度之次第」二六カ条を制定。信秀、美濃で道三に完敗。	
天文一七年（一五四八）	一五歳	信秀、斎藤道三と和睦し、その女濃姫を信長に娶る。		一二月、長尾景虎（上杉謙信）、家督を継ぐ。	
天文一八年（一五四九）	一六歳	一一月、熱田八か村中に制礼を下し、「藤原信長」と署名する。		一一月、松平竹千代（徳川家康）、織田信広と人質交換されて岡崎に戻る。	七月、ザビエルがキリスト教を伝える。
天文二〇年（一五五一）	一八歳	三月、**信秀病没（四二歳）。**信長が家督を継ぐ。		九月、大内義隆、陶晴賢に襲われて自殺。	
天文二一年（一五五二）	一九歳	○八月、信長に背いた、守護代織田信友の家臣坂井大膳らを萱津で破る。	織田一族の争いが激化する。	一月、上杉憲政、景虎を頼る。一一月信玄の嫡男義信、今川義元の女を娶る。	ザビエル、明の上川島で死す。
天文二二年（一五五三）	二〇歳	閏一月、平手政秀、信長を諫めて切腹する。△四月、今川義元と通じた鳴海城主山口教継・教吉父子と激戦となるが、引き分ける。舅の斎藤道三と尾張正徳寺で会見する。		二月、義元「仮名目録追加二一カ条」を制定する。	
天文二三年（一五五四）	二一歳	○一月、尾張侵入を企てる今川義元が築城した、村木城を攻略。		七月、尾張の守護斯波義統、織田信友らに殺される。	
弘治元年（一五五五）	二二歳	○四月、叔父の孫十郎信光と謀って守護代織田信友を殺害。清洲城を奪って居城とする。		七月、第一回川中島の戦い。一〇月、毛利元就、陶晴賢を滅ぼす。	
弘治二年（一五五六）	二三歳	四月、道三、子の義龍と戦って戦死。**美濃攻略を開始。**○八月、反旗を翻した林通勝と弟信行の家臣柴田勝家を破る。			
永禄元年（一五五八）	二五歳	●三月、今川の武将、松平家次を尾張品野城に攻めるが敗れる。○七月、岩倉城主織田信賢を攻め、浮野で破る。			英、エリザベス一世即位。
永禄二年（一五五九）	二六歳	二月、上洛して将軍足利義輝に謁見する。○三月、岩倉城を攻めて織田信賢を追放する。	尾張を統一する。	四月、長尾景虎、上洛して将軍足利義輝に謁見する。	
永禄三年（一五六〇）	二七歳	**○五月、今川義元の大軍を田楽狭間に奇襲して破る。**	信長の躍進と今川氏の没落が始まる。	五月、長宗我部元親、初陣。	
永禄四年（一五六一）	二八歳	○五月、美濃に侵入して要衝の地、墨俣を奪う。○五月、十四条で斎藤勢と戦って破る。		閏三月、上杉謙信、関東管領に就任。五月、義龍没、子龍興が家督を継ぐ。	
永禄五年（一五六二）	二九歳	一月、**三河の松平元康（徳川家康）と同盟を結ぶ。**			
永禄六年（一五六三）	三〇歳	三月、信長の女と松平元康の嫡子信康の婚約が成立する。●この春、稲葉山城に斎藤龍興を攻めるが、敗北する。居城を清須から小牧山に移す。			
永禄七年（一五六四）	三一歳	六月、息子を上杉輝虎（謙信）の養子にすることを願う。○八月、東美濃を攻め、宇留間・猿喰・堂洞を占領する。			ミケランジェロ死す。

信長勢力図1

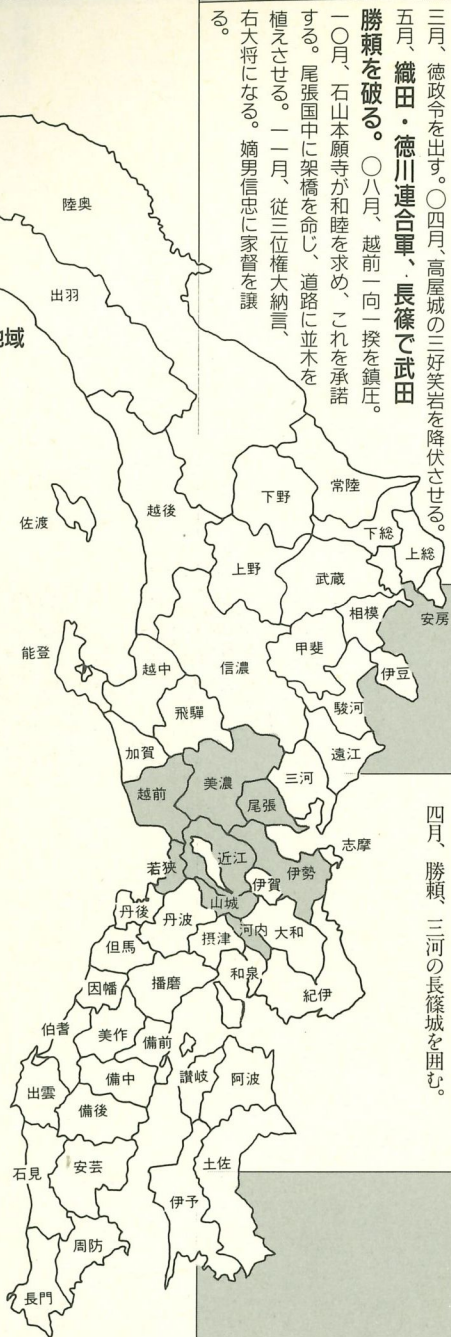
永禄2年〜永禄7年

信長が統一した地域

永禄2年　尾張

陸奥　出羽　佐渡　越後　下野　常陸　下総　上総　上野　武蔵　相模　安房　能登　越中　信濃　甲斐　伊豆　飛騨　駿河　加賀　遠江　越前　美濃　三河　尾張　志摩　若狭　近江　伊賀　伊勢　丹後　丹波　山城　但馬　摂津　河内　大和　和泉　因幡　播磨　紀伊　伯耆　美作　備前　出雲　備中　讃岐　阿波　備後　石見　安芸　土佐　伊予　周防　長門

信長の主な合戦成績（永禄7年時点）

9戦・8勝0敗1分

年	年齢	信長の合戦・経済戦略	天下統一プロセス	他の武将・幕府などの動き	世界の動き
永禄八年（一五六五）	三二歳	七月、佐藤右近衛門に美濃三郡の反銭・夫銭の徴収を許可する。一一月、養女を武田勝頼に嫁がせる。		五月、松永久秀らが将軍義輝を殺害する。義輝の弟覚慶（のちの足利義昭）、近江に逃れる。	
永禄九年（一五六六）	三三歳	○九月、秀吉に墨股城の築城を命じ、**斎藤龍興を破る。**		八月、義昭、朝倉義景を頼る。一一月、毛利元就、尼子義久の月山富田城を落とす。	ロンドン取引所の開始。ポルトガル人、マカオ市建設。
永禄一〇年（一五六七）	三四歳	○この春、滝川一益に北伊勢を攻略させる。六月、徳姫、家康の嫡男信康に嫁ぐ。○八月、稲葉山城を陥れ、斎藤龍興は伊勢長島に逃れる。九月、北加納の百姓を還住させる。一〇月、加納の市場を「楽市」とする。この年、妹お市を浅井長政に嫁がせる。	美濃を攻略し、井の口を岐阜と改称。	八月、伊達政宗生まれる。	
永禄一一年（一五六八）	三五歳	○二月、北伊勢を攻略、三男信孝を神戸友盛の嗣子とする。○九月、**六万の軍を率い、義昭を奉じて上洛する。** 途中、六角承禎父子を破る。石山本願寺や堺に矢銭を要求。在京中に分国の関所を廃止する。一〇月、近江の国で指出検地を行う。	上洛。自治都市を直轄地とする。	二月、足利義栄、一四代将軍となる。一二月、信玄駿府に侵攻し、今川氏真を追放する。	オランダ独立運動起こる。スコットランドでメアリー・スチュアート敗れ、イングランドに逃れる。
永禄一二年（一五六九）	三六歳	○一月、三好三人衆が義昭を囲むが、三好義継らが撃退。堺に矢銭二万貫を課す。「仁和寺文書」を制定する。二月、二条城を造営。三月、撰銭令を制定。四月、宣教師ルイス・フロイスに布教許可を与える。○八月、北伊勢に出兵。九月、北畠具教を破る。	伊勢を支配する。		
元亀元年（一五七〇）	三七歳	一月、義昭に「五カ条の条書」を贈る。●朝倉を攻めるが、浅井の離反で戻る。○六月、柴田・佐久間が、六角承禎を破る。○**織田・徳川軍、姉川で浅井・朝倉軍を破る。** 八月、△三好三人衆の砦を攻める。一一月、尾張小木江城を攻められ信興切腹。一二月、正親町天皇の勅命を受け、浅井・朝倉と講和。		九月、石山本願寺顕如、全国の門徒に信長への挙兵を命じる。	
元亀二年（一五七一）	三八歳	一月、秀吉に姉川の封鎖を命じる。○五月、浅井長政が横山城を攻めるが、秀吉の防戦で小谷に戻る。●伊勢長島に一向一揆討伐の兵を送るが、柴田勝家らが負傷して失敗に終わる。九月、**比叡山延暦寺を焼き打ち。** この年から、判枡を通用させる。		六月、毛利元就没する。	レパントの海戦。イスパニア、ベネチア、教皇の艦隊が連合してトルコ海軍を破る。イスパニア人、マニラ市建設。
元亀三年（一五七二）	三九歳	四月、命に背いた三好義継・松永久秀が河内交野城を攻める。兵二万を派遣して救援。○七月、父子で近江に遠征。九月、義昭に「異見一七カ条」をつきつける。金ヶ森を楽市・楽座と定める。●一二月、信玄の家臣秋山信友、織田方の岩村城を落とす。●**織田・徳川連合軍、三方ヶ原で武田軍二万五千と戦って大敗。**		一二月、武田信玄、西上を始める。	
天正元年（一五七三）	四〇歳	○二月、光浄院暹慶が反旗を翻すが、明智光秀らが鎮圧。三月、義昭と絶縁状態。○四月、二条城を囲むが、和議成立。○近江百済寺を焼く。七月、上京の地子銭・諸役などを免除する。○宇治の槙島城を攻め義昭を追放。年号を「天正」と改める。○八月、近江で朝倉軍二万を破り、**朝倉氏滅ぶ。** ○小谷城で**浅井氏を滅ぼす。**	室町幕府を滅ぼす。越前、近江を支配。	二月、信玄、野田城を攻略して長篠城に入る。四月、信玄、伊那で没する。八月、上杉謙信、越中一向一揆を平定する。	
天正二年（一五七四）	四一歳	六月、武田勝頼に苦戦する家康のために救援を送るが、高天神落城のため兵を戻す。○九月、**伊勢長島一向一揆を破り、信徒二万を焼き殺す。** 一二月、分国の道路を整備する。		一月、越前一向一揆起こる。武田勝頼、美濃明智城を攻略。五月、勝頼、遠江の高天神城を包囲し、家康が信長に援軍を要請する。	
天正三年（一五七五）	四二歳	三月、徳政令を出す。○四月、高屋城の三好笑岩を降伏させる。五月、**織田・徳川連合軍、長篠で武田勝頼を破る。** ○八月、越前一向一揆を鎮圧。一〇月、石山本願寺が和睦を求め、これを承諾する。尾張国中に架橋を命じ、道路に並木を植えさせる。一一月、従三位権大納言、右大将になる。嫡男信忠に家督を譲る。		四月、勝頼、三河の長篠城を囲む。	

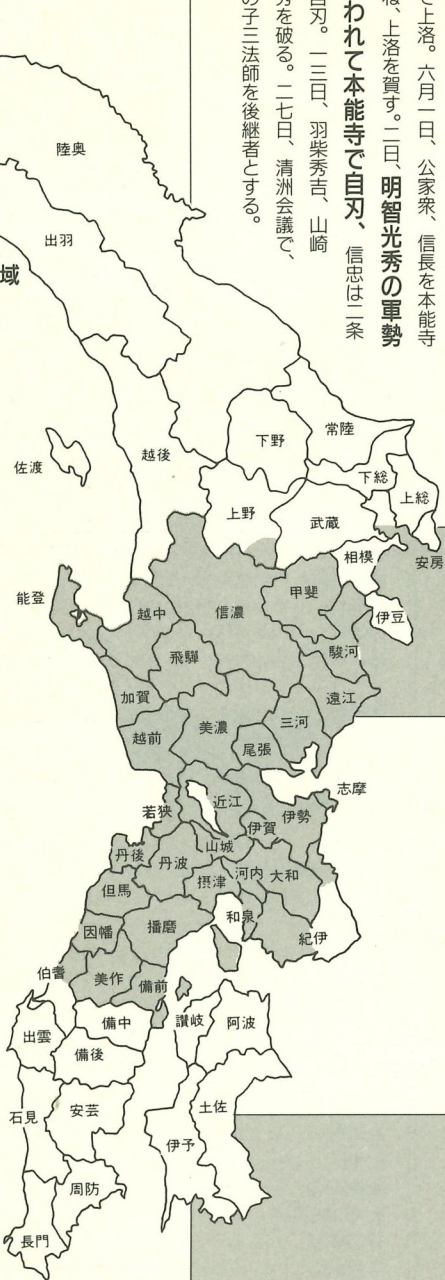
信長勢力図2

永禄8年〜天正3年

信長が統一した地域

永禄2年　尾張
永禄10年　美濃
永禄12年　伊勢
元亀元年　若狭
天正元年　越前
　　　　　近江
天正3年　河内

信長の主な合戦成績（天正3年時点）

28戦・24勝2敗2分

年	年齢	信長の合戦・経済戦略	天下統一プロセス	他の武将・幕府などの動き	世界の動き
天正四年（一五七六）	四三歳	一月、安土築城に着手。二月、安土城に移る。五月、再び反抗した本願寺を討伐するため、京を発つ。●七月、毛利水軍、織田水軍を破り、本願寺に兵糧を入れる。一一月、内大臣に任ぜられる。北畠具教を殺し、一〇年におよぶ北畠氏との争いが終わる。		二月、足利義昭、毛利輝元に幕府再興を依頼。 五月、上杉謙信、本願寺と和睦する。 六月、義昭、上杉・武田に京の回復を説く。	
天正五年（一五七七）	四四歳	○二月、根来・雑賀討伐のため京を発つ。雑賀を攻撃して鎮圧。三月、降伏した鈴木孫一らを赦免し安土に戻る。六月、安土の城下に一三ヵ条の掟書を発し、「楽市楽座」を宣言。閏七月、上洛して二条新第に入る。八月、上杉謙信に備え、柴田勝家らを加賀に派遣。本願寺包囲網の拠点、天王寺の守備についていた松永久秀父子が謀叛を起こし、大和の信貴山城に籠城。●九月、七尾城を落とした謙信が、手取川で柴田勝家らを撃破する。○一〇月、松永久秀を攻略。一一月、右大臣に任ぜられる。		九月、謙信、能登七尾城を攻略する。	英、ドレーク世界周航（～一五八〇）
天正六年（一五七八）	四五歳	一月、家臣の妻子を岐阜から安土に移す。四月、信忠・信雄らに本願寺を攻めさせる。●六月、上月城下で、毛利軍が羽柴秀吉を破る。○織田水軍、雑賀・淡輪軍の水軍を破る。一〇月、摂津の荒木村重が、足利義昭・本願寺・毛利と通じて謀叛。一一月、**織田水軍、木津川河口で毛利水軍を破る。**本願寺を孤立させる。		三月、謙信没する。 一一月、島津義久、耳川で大友宗麟を破る。 この年、武田勝頼、美濃片倉で検地を行う。	
天正七年（一五七九）	四六歳	四月、播磨の秀吉に援軍送る。五月、安土城天守閣完成。浄土僧と法華宗徒の間で「安土宗論」。○六月、明智光秀が攻略した丹波八上城の波多野秀治・秀尚兄弟を磔にする。七月、家康の長男信康に切腹を命じる。一〇月、備前の宇喜多直家が信長麾下となる。一二月、尼崎で荒木村重とその家臣の妻子五〇〇人余りを殺す。	丹波・丹後を平定。	六月、秀吉の軍師竹中半兵衛、没す。	イギリス人、初めてインドに来る。
天正八年（一五八〇）	四七歳	○一月、羽柴秀吉、包囲していた播磨の三木城を陥落させる。閏三月、本願寺と講和。宣教師に、安土城下の埋め立て地を与える。四月、本願寺門跡の顕如、大坂を退去。八月、顕如の子教如、退去して**本願寺焼滅。**筒井順慶に大和の諸城の破却を命ず。本願寺攻めの責任者だった佐久間信盛父子を追放。林通勝・安藤範俊父子を追放。村重討伐の功を賞して、摂津一国の大半を池田恒興父子に与える。九月、滝川一益・明智光秀に命じて、大和一国の検地を行う。	本願寺と講和する。 加賀を制圧。	三月、正親町天皇、信長の要請で勅使を本願寺に下す。	イスパニア、ポルトガルを併合。 モンテーニュ『随想録』
天正九年（一五八一）	四八歳	一月、武田勝頼が高天神城に入るとの報せを聞き、信忠を清洲に派遣する。二月、宣教師ヴァリニャーノ、黒人を連れ信長に謁見。三月、佐々成政・神保長住に上杉景勝の攻撃を命じる。細川藤孝に丹後一国の指出検地を命じる。四月、検地を拒んだ和泉国槇尾寺を焼き払う。八月、荒木村重らをかくまったみせしめに、高野山聖数百人を殺害。九月、織田信雄・信包、伊賀を平定する。○一〇月、羽柴秀吉、因幡鳥取城を陥落させる。一一月、秀吉、淡路を平定する。	伊賀平定。因幡平定 淡路平定。	三月、徳川家康、武田勝頼の将・岡部長教の守る高天神城を攻略する。 一一月、勝頼、父信玄の養子勝長を信長に送り返す。 一二月、勝頼、新府城を築く。この年、小田原北条氏、湯本・三島間の箱根街道を修築する。	オランダ独立宣言。
天正一〇年（一五八二）	四九歳	二月、木曽義昌、武田勝頼に背いて信長に内通。甲斐攻めのために信忠を派遣。○三月、信忠、高遠城を落とす。武田勝頼父子、自刃。**武田氏、滅亡。**甲斐・信濃両国の関所を撤廃する。四月、北条氏政と絶交。恵林寺を焼く。五月、安土を発って上洛。六月一日、公家衆、信長を本能寺に訪ね、上洛を賀す。二日、**明智光秀の軍勢に襲われて本能寺で自刃、**信忠は二条城で自刃。一三日、羽柴秀吉、山崎で光秀を破る。二七日、清洲会議で、信忠の子三法師を後継者とする。	甲斐・信濃を制圧。	一月、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信のキリシタン大名たちがローマ教皇に少年使節を派遣する。 五月、朝廷の勅使が安土に下向する。	教皇グレゴリウス一三世が暦法を改正グレゴリオ暦を採用する。 マテオ＝リッチ、マカオに上陸。

信長勢力図3

天正4年～天正10年

信長が統一した地域

永禄2年	尾張
永禄10年	美濃
永禄12年	伊勢
元亀元年	若狭
天正元年	越前
	近江
天正3年	河内
天正5年	大和
	和泉
	紀伊
天正7年	摂津
	丹後
	丹波
天正8年	但馬
	播磨
	備前
	加賀
天正9年	越中
	能登
	伊賀
	因幡
	淡路
天正10年	甲斐
	飛驒
	信濃
	上野
	備中
	美作
	伯耆

信長の主な合戦成績（天正10年時点）

42戦・35勝5敗2分

織田信長「独創と奇行」

INDEX

「信長」と関連の人物・事象・地名……
どんなキーワードからでも
テレビを見ながら引ける便利な索引。

人物 信長に関わった人物について知りたい人は……

事象 信長関連の戦について知りたい人は……

事象 信長の類まれな才能について知りたい人は……

地名 信長と城・砦について知りたい人は……

地名 信長ゆかりの地について知りたい人は……

筆者一覧・略歴

(五十音順)

井沢元彦(いざわ・もとひこ)
昭和二十九年愛知県生まれ。早稲田大学卒業後、東京放送勤務。五十五年『猿丸幻視行』で江戸川乱歩賞を受賞。作品に『義経はここにいる』『卑弥呼伝説』など。現在『ザ・ビッグマン』に『信長秘録』を連載中。

石井謙治(いしい・けんじ)
大正六年東京都生まれ。東京府立工芸学校卒業。水産庁漁船研究室主任研究官などをへて、現在日本海事史学会会長。和船研究の第一人者。おもな著書に『日本の船』『日本海海運史の研究』『海の日本史再発見』など。

遠藤周作(えんどう・しゅうさく)
大正十二年東京都生まれ。慶應義塾大学仏文科卒業。昭和三十年『白い人』で芥川賞受賞。三十三年『海と毒薬』で毎日出版文化賞受賞。信長の登場する小説に『反逆』『決戦の時』がある。

小和田哲男(おわだ・てつお)
昭和十九年静岡県生まれ。早稲田大学卒業。現在、静岡大学教育学部教授。おもな著作に『戦国武将』『豊臣秀吉』『伊達政宗』『織田信長・男の魅力』『桶狭間の戦い』などがある。

加来耕三(かく・こうぞう)
昭和三十三年大阪府生まれ。奈良大学文学部卒業。学究生活に入る。現在、著作・講演活動を精力的に行う。おもな著作に『大久保利通と官僚機構』『千利休・その生と死』『織田信長』『武道初心集』など多数。

邦光史郎(くにみつ・しろう)
大正十一年東京都生まれ。高輪学園卒業。放送作家をへて、『社外極秘』などの産業ミステリーに新境地を開く。時代小説、財界史でも活躍。『地下銀行』『近江商人』『小説トヨタ王国』『まぼろしの女王卑弥呼』など。

熊倉功夫(くまくら・いさお)
昭和十八年東京都生まれ。東京教育大学(現筑波大)卒業。現在、筑波大学教授。専攻日本文化史。著書に『茶の湯』『千利休』『民芸の発見』『近代茶道史の研究』などがある。

小林久三(こばやし・きゅうぞう)
昭和十年茨城県生まれ。松竹助監督をへて映画プロデューサー。昭和四十五年に『零号試写室』で作家に。四十九年に『暗黒告知』で江戸川乱歩賞受賞。作家として活躍する一方、社会、歴史にも大胆な推理を行う。

早乙女貢(さおとめ・みつぐ)
大正十五年ハルピン生まれ。慶應義塾大学中退。昭和四十三年『僑人の檻』で直木賞受賞。忍法物でも注目を集める。おもな作品に『北条早雲』『若き獅子たち』『明智光秀』。六十三年に大作『會津士魂』完成。

志茂田景樹(しもだ・かげき)
昭和十五年静岡県生まれ。中央大学法学部卒業。不動産会社や探偵社をへて『やっとこ探偵』でデビュー。五十五年『黄色い牙』で直木賞受賞。最近は、歴史 i f 小説で新境地を開く。

津本 陽(つもと・よう)
昭和四年和歌山県生まれ。東北大学卒業。昭和五十三年、『深重の海』で直木賞を受賞。その後、剣豪小説、時代小説でも活躍する。作品に『薩南示現流』『千葉周作』など。信長を描いた『下天は夢か』がある。

戸部新十郎(とべ・しんじゅうろう)
大正十五年石川県生まれ。早稲田大学中退。北国新聞の記者をへて、文筆生活に入る。作品に『安見隠岐の罪状』『蜂須賀小六』『服部半蔵』『考証 宮本武蔵』『戦国史譚』など多数。

童門冬二(どうもん・ふゆじ)
昭和二年生まれ。立正大学中退。東京都庁に勤務。政策室長などを歴任。在職中より時代小説を発表。作品に、『宮本武蔵の人生訓』『近江商人魂』『勝海舟』『上杉鷹山』など多数。

内藤 昌(ないとう・あきら)
昭和七年長野県生まれ。東京工業大学大学院卒業。東京工業大学教授、名古屋工業大学教授。建築史・都市史専攻。おもな著作に『江戸と江戸城』『安土城の研究』『城の日本史』など多数。

檜山良昭(ひやま・よしあき)
昭和十八年茨城県生まれ。早稲田大学卒業後、京都大学大学院中退。『スターリン暗殺計画』で日本推理作家協会賞を受賞。その構想力は高い評価を受ける。作品に『黒い国境』『アメリカ本土決戦』などがある。

広瀬仁紀(ひろせ・にき)
昭和六年東京都生まれ。成城大学卒業。雑誌編集者、ルポライターをへて、『適塾の維新』で注目される。歴史、経済小説に活躍する。作品に『社長失墜』『平将門殺人事件』『天正十年、本能寺炎上』など多数。

二木謙一(ふたき・けんいち)
昭和十五年東京都生まれ。国学院大学卒業。同大助教授をへて、現在教授。おもな著作に『合戦の裏舞台』『日本史こぼれ話』『大坂の陣』『関ヶ原合戦』『長篠の戦い』『中世武家儀礼の研究』など。

松田毅一(まつだ・きいち)
大正十年香川県生まれ。上智大学卒業。現在、京都外国語大学教授。日欧交渉史専攻。ルイス・フロイスの『日本史』全訳を完成させる。おもな著作に『南蛮資料の研究』、編訳に『回想の織田信長』。

光瀬 龍(みつせ・りゅう)
昭和三年東京都生まれ。東京教育大学卒業。女子高で教鞭をとった後、SF作家としてデビュー。『百億の昼と千億の夜』『ロン先生の虫眼鏡』など。また時代小説でも活躍。『新宮本武蔵』『平家物語』がある。

百瀬明治(ももせ・めいじ)
昭和十六年長野県生まれ。京都大学文学部卒業。『季刊歴史と文学』の編集長をへて、歴史作家として活躍。おもな著作に、『日蓮の謎』『軍師の研究』『暗殺の歴史』『信玄と信長 天下への戦略』など。

脇田 修(わきた・おさむ)
昭和六年大阪府生まれ。京都大学文学部卒業。現在、大阪大学教授。おもな著作に『近世封建社会の経済構造』『織田政権の基礎構造』『元禄の社会』『織田信長』『秀吉の経済感覚』など。

ビッグマン・スペシャル
歴史人物シリーズ①
織田信長
その独創と奇行の謎

発行日 1991年12月25日
定価 1200円(本体1165円)
発行 株式会社世界文化社
〒102 東京都千代田区
九段北4-2-29
編集兼発行人 鈴木 勤
印刷 共同印刷株式会社
製本 大観社製本株式会社

編集 ヒューマン・プレス
大平裕之
末田幸夫
ザ・ビッグマン編集部
東谷 暁
高林祐志
編集協力 信長本陣
撮影 木内 博
櫻井 寛
岡本真澄
藤井和実
製作 秋山 勝
アートディレクション 中曾根孝善
レイアウト 中曾根デザイン
細谷直子
矢部政人
高木デザイン事務所
高木美穂
CG技術 味香勝秀
安部 卓
お問い合わせ 03-3262-5118(編集)
03-3262-5111(代表)